江戸遊侠伝

八切止夫

報知新聞社

江戸遊俠伝

八切止夫

報知新聞社

江戸遊俠伝

八切止夫

報知新聞社

江戸遊俠伝

八切止夫

400円

江戸遊俠伝

八切止夫

江戸遊俠伝

八切止夫

報知新聞社

江戸遊俠伝

八切止夫

もくじ

幡随院長兵衛　3
刺青おかく　37
花川戸助六　71
金看板甚九郎　84
夢の市郎兵衛　97
腕の喜三郎　110

江戸の相政　121
だるま吉五郎　178
任侠一代男　197
桑港国定一家　226
関東遊侠伝　286

■カバー・とびら装丁　柳原良平

幡随院長兵衛

落花ろうぜき

「た、助けてえ……」と若い女の声。

はてと長兵衛が足をとめ見渡すと、

「だ、誰か……」と商家の小僧が泣きじゃくりながら駈けおりてくる。

今でこそ道灌山は名ばかりだが、その頃は昼なお暗い程に大木が茂った山。野狐がでるの、山犬が住みついているのといわれた物騒な所。処が王子権現へお詣りするのには、この山を抜けて参ると御霊験あらたかといわれ、近道にもなるから結構日中は通る者もいる。

長兵衛も滝野川田端村正念院へ行っての、帰り途だが、

「どうした、悪い四つ足でも出たか」

小僧の側へ行って尋ねてやると、

「嬢はんが……」と上を指さし、泣き叫ぶ。いわれて藪畳とよばれる竹林の方を見上げると、かさかさ揺れて人間の集っている気配がする。そこで、

「よっしゃ」とばかり長兵衛が裾を大きくたくしあげ、坂になっているのを駈け上ってゆくと、ひいひい聞こえてくる女の忍び泣き。近よって覗きこむと、むごい話だが若い娘を寄ってたかって丸裸にむき、着ていた物を褥代りに敷き、その上に仰向けに寝かせての念仏講のまっさい中。

「この野郎ッ」とびこんでゆきざま、

「昼日中になんて真似をしてやあがる」

と、丁度いまその最中の男の髷先を力まかせにつかみあげ、これを引張ってひっくり返すと、順番を待って娘の手足を前後から引張っていた連中が、

「邪魔しゃあがるなッ」

「いらざる節介すると叩っ殺すぞ」

その場においてあった草かり鎌や鋤をふりかぶって、長兵衛めがけて掛ってくる。しかし山者の四人や五人に囲れても、それで尻込みするような男ではなく、

「盗人たけだけしいというが、向ってきやあがるとは天をも恐れぬ輩である」

腰にさしていた長脇差を鞘ごと抜くと、これで向ってくる鎌や鋤を叩き落し頭や肩を次々と滅多打ちにしてから、

「おれは幡随院に厄介になっている寺男の元締めで、長兵衛というものだ……今日のところは仏さまの慈悲で命だけは助けてやる。が、この次また馬鹿しやあがったら、てめえらの下の鎌首をもぎ取り牝犬にでもくわせてやるぞ」

と、山裾めがけ投げ落したり蹴転してしまい、長兵衛は手についた泥を払って戻りかけたが、振り返

ると娘は、初体験だったらしくまだ丸裸のまま放心状態で伸びている有様。

それをその儘見棄てて立去りもできず熊笹の茂みをかき分け近よってゆくと、哀れや拡げられた個所に豆汁のような白いものをつけたまま、歯をくいしばり眼をとじて転っている。

仕方がないから腰の下になっている着物を引っ張って、柏餅の葉っぱのように覆ってやりながら、

「確かりなさいまし、悪い奴らは逃げました」と耳許へ口をつけ、吹きこむように喋舌って居ると、脇から、

「もう大丈夫でございます」

泣きべそに砂塵がついて黄粉餅のような顔になった小僧も、叢の中から飛び出して娘にかじりついた。

梅の蕾みたいな桃色のぽっちが、胸のところでぴくっと動いたかと思うと、娘はやっと気づいた。が、のぞきこむ長兵衛と顔の合いざま、周章ててくるっと背をむけるよう俯伏せになり、わあわあ泣きだしてしまった。

おろおろした小僧は着物を娘の肩にかけ、繩でくくるように帯をまきつけ、

「麓までおりたら駕が拾えます。どうかこの勘助につかまって歩いて下さいまし」というのだが、まだ前髪だちの十一二の小僧に背負ってゆけるわけがない。

見かねた長兵衛が、その場へつくなって背をむけ、

「この儘で放って行っては、仏を作って魂入れずという事になる」

恥かしがる娘に肩をかして山をおり、

「神田須田町の万屋嘉右衛門の娘」

というので駕にのせてからも、上野広小路まで送っていった。

さて、この儘ですめば天下も泰平だったが、長兵衛に散々に痛めつけられた道灌山の山者たちは、

「ひとの縄張りを荒しやがるとは、ふてえ野郎だ」寄り集まってからが憤慨し、

「道灌山はおらたちの権益だ」「同感だ、同感だ」と、王子の長吏頭で十手持ちの権平の許へ、

「なんとか仇をとっておくんなせえ」

一同が揃って頼みこみにいった。

寺院ガードマン

「親方、表に、どうも目明しの下っ引きみたいな、うろんくさい奴が……」

と、小仏小兵衛が知らせにくると、

「そういやあ此の処、この幡随院の山門の花屋へ、やはり下っ引きがきて張っているそうな。親方、なんぞ奴らに狙われるような事をしなすったのか」

念仏佐平も気にして横合いから、心配そうに口を入れた。しかし長兵衛は、

「弱きを助け強きをくじく男伊達、まさか曲った事を、この俺がする訳けはなかろう」と笑い飛ばしてしまった。

「だが用心が肝要だ……なんせ奴らと此方とらとは宗旨違い、いたぶる気になったら何をしでかすか判りやしねえ」

放駒の四郎兵衛は年かさだけに、気難しい表情でそれをたしなめた。

というのも元禄年間の神仏混合政策からは、お寺と神社が一緒くたにされ、

「この世の中に神も仏もないものか」

心中天の網島にでてくる台辞のように、神仏が同じに扱われてくるが、まだこの時代は昔からの伝統で、

「坊主憎けりゃ、けさまで憎い」

と河原者や山者や十手取縄を預る町方の目明し共は、寺を目の仇にしていた。

そこで寺側を守るため寛永十二年からは、寺社奉行というのが置かれたが、それでも仏嫌いの者が集団でおしかけ乱暴を働いた。だから田舎では、どこの寺でも山門近くへ鐘楼をもうけ、襲われるとガンガン乱打して、その非常警報をききつけ駈け集る寺百姓によって防いだり、大きな寺では僧兵や寺侍を置いた。

しかし江戸ではそうもゆかないので、幡随院の住職良積が腕っ節の強そうなのを選んで、境内に長屋を建て住まわせていたのが、長兵衛らの一統である。

というのは幡随院は初め神田駿河台、それが、元和三年から下谷池の端に移ったが、上野寛永寺から屏風坂を下った坂本二丁目迄は、寺町といわれる位に寺院の多い処。そしてそれらの外廓に当る山崎一丁目に、十米四方の本堂を建立している良積上人としては、

「山崎町は川向う浅草新地弾左衛門の飛地。いつ何時やつらに押しこまれるやも知れぬ」と自衛上、今でいえばジムのような物をこしらえて居たのである。

しかし、あえて事を起したくないから、つね日頃、長兵衛初め子分達へ、

「振りかかる火の粉は払わねばならぬが、此方から手出しはいかぬ。われらが尊き法衣墨染めの衣をさして、黒とよび居る彼らは事さらに反対色の白衣を纏うなど致して居るが、なにしろ目明し獄吏の面々は弾左衛門の支配下の者らゆえ、決して云い掛りをつけられるような事はするでない」

と上人は口ぐせのように、あけくれ一同をいましめていた。

だからして放駒の四郎兵衛や、念仏佐平達も心配したのだが、

「いくら無法な奴らにしろ、罪とがもない者を捕え、黒を白と自儘にゃできまい」

大胆な男だけに気にもとめず、集めた若者に相撲や柔術をしこみ、いっぱし役立つようになった者から順ぐりに、これを依頼されている寺へ廻していた。

さて、元禄以降になって寺が襲われなくなってからは、寺男というのは墓場掃除ぐらいが仕事だから、よぼよぼの老爺でもよくなったが、まだその頃はガードマンみたいなお役だからすこぶる威勢がよい。

下谷広小路本正寺へ廻されていた湯かん場五郎というのが、

「どうもお寺勤めというのは、抹香くさくっていけねえ。たまにゃ精進落しに」

と三橋を渡った仁王門前町、坊さん相手のかげま茶屋の並んでいる裏通りの、煮しめ屋へ入って、銭をあるだけはたいて呑んだが、どうもまだ物たらない。

「誰ぞ、お布施を恵んでくれる奴は居なかろうか」外へでてから、きょろきょろして居ると、

「おい、おめえ」横柄な声が掛ってきた。普段なら、へえと振返りもしたろうが、なにしろ呑みたりなくていらすかしている。だから五郎は、つっけんどんに、

「なんでえ、うるせえやあ」

振返りざまに肘で、寄ってきた相手の脇腹を突きあげた。すると、はずみをくって尻餅をついたものの、すぐ立ち上り、

「てめえ、おかみの十手もちに何んて真似をしやあがる。さあこい伝馬町の御牢へ放りこんでやる」

背後からねじ伏せるように躍り掛ってきた。五郎は周章ててそれをふりほどき、

「とんでもねえ野郎と掛り合いになった」すっかり酒の酔いもさめはて、青々とした不忍池の廻りをとっとと駈けだした。が十手もちは逃すものかと、

「十手をみて恐がるのは、おおかた悪いことをしやあがっているせいだろう」

と息きせき切って追いかけ、

「ピイピイ」呼子笛を吹いて、下っ引き仲間をよび集めつつ走ってくる。

だから黒門町から須田町まで駈けこんだが、追い詰められた五郎は逃げ場を失ってしまい、何処かの大店の裏口らしい所へ飛びこんでしまった。

目明し下っ引き

「てまえが寺男の口入れの元締をして居ります幡随院の長兵衛……このたびは身内の一人が飛んだ危うい所を、お匿い下さいまして有難うさんにござんす」

礼をのべに出かけたところ、

「あの若い衆が幡随院の親方のお身内衆とは、これはまた奇しき御縁……ここは端ぢか、まあひとつ奥

へお通り下さいまし」と座敷へ案内され、
『……その節は娘のお清を道灌山で救って頂き、本来なら此方からすぐ御挨拶に伺うべきところを、どうも外聞をはばかってつい遅れ、申しわけとてありませぬ」
主人夫婦から深々と頭を下げられ、
「ああさいでござんすか……ここは万屋さんの御店でござりましたのか」
長兵衛は思い出したようにうなずき、
『あれは通り掛ったゆえ、山下までおぶって差しあげたきりのこと……改まって御礼などいわれては、いたみ入ります」
席を立とうとしたところ、
「実は娘があれから親方さまのことを忘れかね、寝ては夢、起きてはうつつ幻の……といった有様でございます」
いい憎そうに嘉右衛門がうちあけ、
「跡とりには下に倅が居りますゆえ、どうせ他へ嫁に出さねばならぬ娘……もし親方に貰って頂けるものなら、こんな有難い話はありませぬ」娘可愛さに拝まんばかりに手を合せてきた。
「さあ、そうおっしゃられても、わっちの稼業は荒っぽい人入れ稼業。こちらさまのような御大家の、おんば日傘でお育ちになったお嬢さまでは、そりゃお気の毒でお迎えはできませぬ」
長兵衛は面喰って辞退したが、
『手鍋さげてもいとやせぬと、そないいじらしい事もいって居ります。ひとつその心根をくんでやって

下さいまし」
嘉右衛門の内儀も涙声で脇から、かきくどく有様。そこで長兵衛も腰をあげかね、もじもじして居ると、店の方から番頭が青ざめ顔で駈けこんできて、
「大変でござります、神田お玉ガ池の番太郎、仁平の案内で、田端の目明し衆が御用のむきだと、店先へこられ大声で怒鳴って居られます」と訴えた。
「おおかた五郎が此処へ逃げこみ、匿うて頂いたのに因縁をつけ、銭にしようとやって来たんでござんしょう」
長兵衛が長脇差をつかんで立ち上り、番頭に案内されて店先へ姿を現わすと、目明し達はびっくりしたが、
「てめえは……幡随院の長兵衛。寺の口入れ屋が、いつから商家の用心棒になりやあがった」まず番太郎が毒づくのに、
「ここに居合せるとは……さては池の端でお上御用にたてをつき、暴れやがった狼籍者は……おめえんとこの寺男だったのか」
田端の目明しも十手をつきつけ、
「そこの番所まで一緒に来やあがれ」
顎をしゃくって凄みをきかせた。
長兵衛は万屋の店先で、騒ぎを起してはまずかろうと承知して、その儘一緒に外へは出たが、曲り角までくると、

「京知恩院幡随院和尚が、わざわざ東下りして開山した関東十八壇林の一つ、幡随院御抱えと知って、それでおめえっちら、この俺をしょっぴこうってえのかい。ふざけるねえ不浄役人めが……」

いきなり拳固をかためてまず番太郎を張り倒した。そこで目明しが、

「やる気かッ」と十手で肩先を叩いてきたが、長兵衛は眼にもとまらぬ早業で、

「舐めやあがるな」その手首をねじあげ、眼よりも高く差上げると、ずってんどうと岩石落しに放りだした。

しかし目と鼻の旅籠町の、自身番に詰めていた下っ引き連中がそれを見つけ、

「ふてえ野郎だ……田端の親方に狼籍してやあがる」てんでに雨戸をはずして、

「神妙にしやあがれ」楯のように桟をつかんで寄ってきて、これの水平打ちで長兵衛に掛ってくる。

するとお玉ガ池の番太郎の仲間も、刺股やからみ棒をもって駈けつけ、

「おかみへ楯つくと、どんな目に逢うか教えてやろうかい」と向ってくる。

戸板の楯に四方から囲まれ身動きできぬ処へ、その隙間から鉄の尖った棒やフォークを大きくしたような物で、めちゃくちゃに突かれては堪らない。

ざんばら髪になって応戦したが、さすがの長兵衛も危なくなってきた。

するとこの時、万屋の小僧か手代が急を知らせたとみえ、同朋町の方角から、「わあっ」と、ときの声をあげ、放駒の四郎兵衛、唐犬権兵衛、念仏佐平、小仏小兵衛、読経の吾平といった幡随院ジムよりぬきの、腕っこきが手に手に丸太や大太刀の類を振回し、「それッ」とばかりに飛びこんできた。

こうなると長兵衛一人でさえ持て余していたのが、とても敵いっこはない。

「いまいましいが仕様がない」

「後で覚えとれ」それぞれ捨てぜりふを残し、番太郎や下っ引きは逃げ去った。

平井権八鈴ガ森

さて長兵衛が後世有名になったのは、芝居からで、まず一七四四年正月の中村座に、浄土宗から金主がでて興行された時、

「法難に殉じた信者中の信者」

といった扱いで「さざれ石末広の源氏」の芸題で上演されたのが皮きりだが、

「長兵衛ものを演ずると、お寺さんや壇家の総見があって、興行上間違いない」

というので次々と芝居にされ、四十年後の天明四年七月に大坂角座で、並木五瓶が脚本をこしらえるに当って、

「大坂は町人の都だから、抹香臭い寺奴の扱いよりも、町の者の味方、町奴にした方がよくはないか」

と考え、

「思花街容性」として、今日の原型を作り、その十九年後の享和三年には江戸の中村座で桜田治助が、

「幡随院長兵衛精進俎板」

をかき、大きな俎板の上へ長兵衛がねて、切るなと突くなと勝手にしなせえと大見得をきるものに変えた。しかし、

「湯殿の長兵衛」というのは、明治以降の芝居である。何故かといえば一人用五右衛門風呂の釜はでき

たが、今のような浴槽の釜は江戸時代の鍛工技術では無理で、慶応三年までは蒸し風呂しかなく、ざくろ口から潜って入る型のだった。だから槍を持ちこんでの立ち廻りなど、とても出来る筈がなかったからである。

また芝居に曳ずられた形で、幕末に刊行されたものが、大正二年博文館から、「文芸叢書」の中の一冊として入っているが、それは、塚原渋柿校訂で、

「肥前島原城主寺沢兵庫頭広高の家臣、塚本伊織の一子伊太郎が後の長兵衛で、塚本伊織は島原の乱で主家が断絶し、やむなく伊太郎を伴い関東へ移った」となっているが、これとても間違いである。

というのは島原城主は松倉勝家で、寺沢は唐津十二万石、しかも島原の乱当時は広高はとうに死んでいて、伜堅高の代だし、断絶などしていない。なのに誤られたままで、

「男の中の男一匹」とおおいにうたわれ、

「弱きをくじき強きにへこたれる」のがこの世の習いなのに、彼だけは反対に、「弱い相手なら下から出るが、強い奴なら向うつらを張り飛ばして」といった台辞をはき、大向うの喝采を博しているのは何でだろうかといえば、それは、

「白対黒」つまり原住系と仏教をもちこんだ渡来系との、相克の日本歴史が秘密にされ、ずっと匿された儘になっている所為によるものであるらしい。

さて話変って、

因州鳥取藩主池田光仲の小姓で、平井権八というのが居たが、これが生まれついての麗質、玉をあざむくばかりの若衆ぶり。そこでその美しさに家中の者が騒ぎ、中でも執拗だったのが本庄助太夫。

拒まれた処、かえって助太夫は、せかるればなおつのる恋心と、

「かくなる上は実力行使あるのみ」

月の出ない晩を選んで、権八の寝ている所へ押しこみに入った。

ぐっすり熟睡していたが、普段は出すだけに使っている一方通行の口から、いきなり押しこまれたのに権八は仰天。

「あれッ何をなされます」とはね起き、男の貞操を守ろうと揉みあう内、誤って助太夫のさしてきた脇差で相手を突き刺してしまった。権八も青ざめ狼狽して、「しまった」と思ったが、人をひとり害してしまっては唯では済まぬと、暗夜にまぎれて逐電。ひとまず京へと志したが路用の銀もない。そこで仕方がないから、「切り取り強盗も武士の慣い」と通り掛りの金を持って居そうなのに目をつけ、

「あいや暫く……」と手をあげて招く。

すると、なにしろ鳥取一といわれた程の美しさだから、疑う者もなく呼ばれた者は側へよってくる。それをいきなり抜きうちに、ばっさりとやって胴巻の金を頂いてしまう。

当今の言葉でいうとヒッチハイクの類だろうが、こういう物騒なアルバイトをしていては、せっかく京へ辿りついたが長居もできない。そこで権八は、

「かくなる上は、諸国の人が集っている江戸へ行ってみよう」と東海道五十三次は、又しても金がなくなると辻斬りをしてまかない、神奈川まできたところ、

「うろん臭い」と睨まれてしまったのだろう。

この当時、廻国者という名で呼ばれていた街道目付の者が、権八の後になり先になりずっとつけてき

たが、ご府内へ入る一歩手前で、
「てっきり、こいつに間違いない」
と目串を立てたのだろう。ひと足先に鈴ガ森の刑場へゆき、そこに小屋掛けしている弾左衛門輩下の非人たちを集め、
「御用弁にする奴が来るから手を貸せ」
いいつけて手ぐすねひいて待ち構えて居た。するとそこへ何も知らぬ平井権八がすたすたと通り掛ったので、左右から、「おのれ神妙に致せ」待ち伏せしていたのが杖や竹竿を振りかぶってきた。
「何を致す」権八も刀を抜いたが、
「手向いするか」「お上に刃向うか」
非人共は廻国目付と共に勢こんで掛ってくるから、見る間に手負い死人の山。
これまで道中で散々に辻斬りをしてきた権八だけに、これを片っ端から斬り倒し刀の血のりを拭い悠々と立ち去りかけた時、
「お若えの……」といきなり声がした。
はっと権八が立ち止り、
「お呼びなされしは、てまえがことか」
振返ったところ提灯を前へつき出し、
「あたりに人が居なけりゃあ、お若いのおおかた貴方が事でございやしょう」
にゅうっとばかり、そこへ姿を現したのが、相州鎌倉長谷寺へ用達しに行って、帰り途の幡随院長兵

衛ということになる。

三浦屋小紫

さて、目明しや下っ引きの非人を、眼にも止らぬ早や業で斬り伏せた腕前に舌をまき、幡随院へつれ戻ってきたが、その美少年ぶりに長兵衛も感嘆し、
「うむ……」はたと唸ってしまった。
さて権八も、江戸へ入る処でお上御用の者を手掛けてしまった後ろめたさに、寄らば大樹の蔭、なんとかして長兵衛に守って貰おうと思う下心があるからして、しきりと、
「ねえ親方……」魚心あれば水心といった具合いに甘える。
こうなると長兵衛も、その美しさに圧倒されているから、
「お寺の釣り鐘じゃねえが、それじゃ一と突きさせて貰うとしようかい」という事になって、つい深間になってしまった。
こうなると困ったのが神田須田町の万屋嘉右衛門。娘お清に泣きつかれ、
「持参金はいくらでも出しますから」
湯かん場の五郎や、唐犬権兵衛を仲へ入れて、しきりに長兵衛へ掛け合うのだが、なにしろ権八と出来てしまってホモの熱い仲だから、いくら周囲がやいのやいのと騒いでも、あっけらかんとして話を聞こうともしない。
しかし当人のお清の耳へは、

「実はかくしかじかで」と本当の事を教える者もなかったから、世間知らずの十八娘は、てっきり自分が嫌われて居るものと思いこみ、世をはかなんで、

「さだめし道灌山で悪者にいたずらされたのを見て居られるゆえ、それで厭うていなされるのでしょう」が……女ごの身体というは、二度や三度なんしたところで、どう変っているものではなし」と、盥に水をくんで、じかには覗きこめぬ処ゆえ水鏡に映して観察した事まで、書き添えた遺書を残し首をくくって死んでしまった。

そこで、これには長兵衛も眼がさめ、

「可哀そうなことをしてしまった」

すっかり前非をくい、権八に向い、

「俺とお前が今の儘では、お清さんがあの世で、とても成仏できまい」と二人の仲を清算するようにいい渡した。

さて権八にしてみると、こうなっては何処へ尻をもってゆく処もない。

くさくさして閉じこもっていると、

「今宵は十三日の月見の道中、うさ晴らしに吉原へ御案内しましょう」

五郎や小平が権八を連れだした。

明暦の大火の後は今の浅草新吉原へ移転したが、この当時は葺屋町から後に堺町となった弥宜町、現在のかきがら町から明治座までの葭草がおい茂った一廓。

それでも女は、京町一丁目は京六条、二丁目は大和の木辻からと、諸国の美女が集められていた。だ

から、おいらん道中をする女達も粒よりの美女揃い。

中でも、ひときわ目立つのは、三浦屋四郎左衛門抱えの小紫太夫。絵にかいたような絶世の美しさに、思わず知らず見とれていると、向うも男とは想えぬ権八の美貌にはっとし、互いに見交す眼と眼の結びつき。暫くすると、

「もうし旦那、失礼でございますが、三浦屋の小紫太夫がお招きにございます」

と若い衆が権八を迎えにきた。

「太夫の方から口を掛けられるとは、こりゃ前代未聞の話」あてられた五郎や小平は戻って、この旨を長兵衛に話した。

「そうかい、そいつは良かった」

権八を放りっぱなしにしていたのを気にしていた長兵衛は、この小紫がもとで水野十郎左衛門に自分が殺されようなどとは、神ならぬ身の仏派ゆえ知る由もなく、にこにこしてそれにうなずいた。

旗本白柄組

さて、長兵衛に可愛がられていた習慣で、ついつい平井権八はいつものように腰を向けてしまった。すると小紫は襟筋に熱い息を吐きかけ、しなだれ掛るようにして、

「まあ、うぶな、ぬし恥しいのかえ」

ねっとりした声をかけてきた。そこで権八は周章てて御意の儘にと俯伏せに拡げたところ、

「わちきが嫌いでありんすのか」

怨ずるように肩を抱えられ、そのままくるりと上向きにされた。
しかし権八にしてみれば、そうされたとてどうしようもない。唯はげしく息づかいだけはずませた。
なのに小紫ときたら、
「亀の子が仰向けに引っくり返えされたみたいに、何していなさんす。早うに床をつけてくんなまし」
ぴったり寄り添いかぶさってきたが、権八はとまどった。なにしろ、いつも攻められる側で、これまで己れからどうした事もない。そこで、
「……如何になすやら判りませぬ」
小紫の頬を顔にすりつけられたまま、権八は当惑しきって訴えた。
「まあ、ほんとに今宵が初おろし……まんだ何んしたことはなかったの……」
小紫はますます上気してしまい、
「すこし陽やけはして居やしんすが、まだ前髪の角額……経験なしといわしゃるも本当のことで、ありんしょう」
身につけていた緋色の長襦袢を肩からずらし、雪のように白い肌をさらけだすなり、ぐっと権八を抱きしめ、
「すべてわちきに、まかしゃんせ」
惚れ惚れと行燈の灯で権八を見直し見据え見詰めあげ、夢みるように、
「主さんのような良き殿御の筆おろしが出来るとは、三千世界のこの世の中でわちき程、果報者は居りませぬ」

口にしながら涙ぐみ、まだ始めもせぬ先から泣声をしくしくたてた。
さて、このとき。
同じ揚屋梅鉢の二階座敷の大広間で呑めや唄えと、だだら遊びをしていたのが旗本神祇組の一統。
「近頃は黒の坊主共が、民百姓の供養など放りっぱなしに致し、大奥の女共をたらし込み寄進の金をまきあげ、上野池の端から浅草にかけては、京も同然の寺町と化し居るではないか」
「如何にも怪しからぬ仕儀、われら神を信ずるの徒は、黒衣坊主共の跳梁を看過しできぬ。断固今にして征伐せねば御府内も京と同じ仏都になってしまうは、こりゃ火をみるよりも明らかなこと、寺など片っ端しから叩っこわすしか道はあるまい」
肩いからせて唾をとばすは、遠州白須賀別所まむし塚出身の、久世三四郎に加賀爪甚十郎の両名。
「黒に対する白、よって吾らは揃いで白衣など引っかけるか」
「いかにも左様、刀の柄に白革でも巻くか」
悲憤慷慨するは、同じく遠州の横須賀出の、坂部三十郎に渥美源五郎。
彼らは家康在世中の天正二年五月、武田勝頼が大軍を率いて遠州へ攻めこみ、高天神城を落してしまったとき、そこから浜松城へ向ってこられたら、ひと溜りもないと馬伏塚に砦をきずき、決死隊として白須賀横須賀より募った者たちが防いだが、彼らはその二世で、今では旗本御番組に入っていた。
そして、天ツ神、国ツ神を総称する「神祇」を組の名にしていたのは、彼らのような別所出身は昔から寺とはまるで無縁で、白山神や土俗八幡信仰だったから、仏に対抗する為のものだった。
また元禄の神仏混合同祀の時から、朝には神主として白衣でのりとをあげ、夕には墨染の衣を上へま

とって、なんまいだをやった関係上、今では僧侶も白衣を着て上に黒衣といった白黒重ね着をするが、旗本神祇組の頃はまだ画然と仏派は黒、神派は白という区別があった。さて、

「……処で」

大久保彦六が唇をへの字にまげ、

「三浦屋の小紫は如何したるぞ」

いきなり堪りかねたように喚いた。

「向うをでて此方へきたというのに、まんだ座敷へ姿を見せぬのは、おおかた何処ぞに入りこんで居るに相違あるまい」

大刀片手にすっくと立ち上った。

「まあ、お待ちなされて下さいませ」

周章てた揚屋の若衆が引き止めようとしたが、彦六はそれをはねのけ、

「ええ何処じゃ……」と二階を一部屋ずつ見て歩き、けやきの段梯子をおり、

「小紫はいずこ、小紫はいずこ」

階下の小部屋を次々と調べていったが、とっつきの奥の間の唐紙をあけるなり、思わず眼を見張り鎌髭をふるわせ、

「おのれッ」とばかり怒声をあげた。

しかし平井権八は丁度その真最中。

「馬上に乗りうちの儘にて御免」

仕方なく首をまげ、挨拶をした。

水野の家系

坂部三十郎たちの白装束の提案に一同が賛成したのか、「我衣」というその頃の随筆には、

「夏は純白な湯かたびら、冬は紺の綿入れをきるが裏は純白。袖口も白で大巾にくけ裾には重しに鉛を三匁入れ歩くたびに、はね上って白裏地が見えるのを伊達とし、馬にのる時は白馬を選び白革の馬のり袴をつけ、馬具も白一式。もちろん手でつかめる巾ぎりぎりにした元取にまくのも白元結。刀は大小ともに白柄、よって諸人この神祇組のことを白柄組ともいう」と出ているし、

「春の日の弦遊び、柳腰のたをやめを折るは誰ぞや、そは白き馬めす殿御ばら」という当時の流行歌「今様」が残っている処をみると、相当彼らは当時の女にもてていたものらしい。

しかしである。

なのに、もてる筈のが振られてしまい、小紫太夫が平井権八を優先扱いしたという事は、大久保彦六をして、

「おのれ武士の面目まるつぶれだ」

切歯扼腕させる結果となった。

もちろん小紫も浮川竹の流れの身。本人は好き好んでではないが、そこは苦界の勤め。その時も権八と別れ難いのを堪えて起きだし、すぐ髪をなぜあげ大久保を迎えた。しかし彦六にしてみれば、厠で用をたすのではあるまいし、

「おまっとうさん、あきましたえ」
と云われても、まさか、
「左様か、持ちかねたぞ」と、戸を開けられても入りこめるものではない。
「なあ、もうし、ぬしさんえ……」
いくら開張したのを小紫から見せつけられても、彦六の瞼には前髪だちの権八の顔が、提灯みたいにぶら下っていて、とてもその気にはなれない。
「青臭さ……」ぶうすかいったが、要は気分の問題である。そこでその日は、その儘ひきあげた。
しかし月見道中の紋日だというので、通しで玉代をつけてやり、そのくせ何もしてこなかったのは損したようなもので、帰ってからも、
「阿呆くさ」いまいましかった。立腹をした。
そこでかの前髪だちの若者は何者なるかと、前の南町奉行が加賀爪甚十郎の伯父加賀爪民部少輔なので、その手蔓で調べさせてみると、その素性が判ってきた。
「年端もゆかぬ小童ふぜいに、眼前で己れの買った女を先に馭され、黙って引っこんで居られるものか」
怒髪天をつく勢で彦六は、左右になまずのごとく髭を震わせ、神田駿河台水野十郎左衛門邸へと押しかけた。
さてこの水野十郎左衛門というのは備後福山十万石水野勝成の五男成貞の子だが、その勝成は家康の生母於大の方の弟忠重の倅である。

この忠重は関ヶ原合戦の始まる前に、三河刈屋城主だったが、美濃加賀井城主重望のために不意に酒宴で斬り殺されてしまい、その父と仲違いして浪人中だった藤十郎勝成が、家康によび出され明智光秀遺愛の朱槍を手ずから渡されて、
「汝よく光秀にあやかれよ」と訓されたのは有名な話。もし当今のように光秀が信長殺しとされていたものなら、
（あやかれ）と云われたのだから、その槍で家康をぶすっとやってもよいのだが、勝成はその槍を担いで美濃大垣城の一番槍。ついで大坂合戦では、家康の命令で二万五千石の身分なのに、大和方面の総司令官となって三万の兵を率いて奮戦。そして、
後藤又兵衛、薄田隼人ら大坂方の重鎮をうちとるという抜群の働きを示した。
この功で福山十万石の大名になると、家康の意をくんで三河の八とよばれる原住系の者を三八として率いて乗りこみ、彼らに司法断罪の一切をゆだねた。
これらの者が権力をふるいすぎ、余りにデッチあげばかりしたので、
「嘘の三八」とか「嘘っぱち」
といった彼ら役人への蔭口が、幕末の詩人菅茶山の「福山志料」の著に出ているが、これは今でも用いられている。

寺奴勢揃い

さて水野勝成が徳川創業の功臣で、三河の八部衆を西国へ伴って行った関係上、外孫の水野十郎左衛

門も羽ぶりがよく、やはり東国の八部共を束ねる御役の、「廻国目付」をかね、本知三千石にその加扶持二千石で、計五千石の大身の旗本だった。そこで十郎左衛門は己れを昔の白のホープである源氏の源の頼光にみたて気に入りの近習を、

「渡辺の綱助」「坂田金時」「碓井定光」「卜部季武」の四天王になぞらえ、駿河台の屋敷であけくれ呑めや唄えの気ままな暮しをしていた。そして、

「白柄組といえば泣く子も黙り草木もなびく。まこと、めでたやのう」

いつものごとく泰平楽を並べていると、そこへ泣きっ面で駈けこんできたのが大久保彦六。十郎左衛門は話をきくなり烈火のごとく憤慨して、

「聞き棄てならぬ。すぐさま女を此処へ曳きたてるようにしてくれる。煮るなと焼くなと存分にするがよい」といい渡した。

しかし、そう云われると、女を庇いたくなるのが男の気持。彦六は手をふり、

「いえ悪い奴は、平井権八とか申す不敵な若年者……そやつを取っつかまえ締めあげませぬ事には、この胸のもやもやが晴れませぬ」と訴えた。

「ふん。そない青二才に、わが白柄組が軽く扱れては、大小神祇やよろずの神々に申しわけない……そやつ、もしかすると寺方の廻し者ではないか」

「ご賢察まことに恐れ入ります。仰せのごとく浄土宗幡随院の寺地にて口入れ稼業をなす長兵衛の居候との由」

「よし、よめた。われらの権勢をそねんだ寺方の策略であろう。廻国手代の八部の者や目明し、長吏の

者にいいつけて召捕らせい」と十郎左は命じたが、

「恐れながら……」庭先へ廻ってきて平身叩頭した廻国八部衆の者は、

「実はそれなる若輩者は因州鳥取出奔以来、京から東海道、道中で追はぎの仕放題。ご府内へ入れてはと鈴ガ森で待ち受けましたが、向った者が召捕る処か、みな斬り払われてしまった稀代な刀術使い……とても吾らの手にはおえませぬ」

「そうか、ならば寄宿先の長兵衛に差紙をだし、権八を突き出すよう計らえ」

不機嫌そうに十郎左衛門が怒鳴りつけたところ、神田お玉ガ池の目明しと田端の長吏が、後方から庭石近くまでいざりでてきて、これまた頭を下げた儘、

「その長兵衛めは何んともなりませぬ。最近は日蓮宗とも組み、その方の法華の久平、お題目の甚太らの寺奴と兄弟分の盟いを結び、『法難粉砕』『仏敵退散』を叫び、吾らに楯つく有様」

と万屋嘉左衛門宅で湯かん場五郎を御用弁にしそこねた一件を話した。

これには水野十郎左衛門もますます激怒してしまい、すぐさま金時ら四人へ、

「其方らが肩入れし白柄組の名においても、寺奴ふぜいに負けぬよう手伝って取らせい」と命じた。

「かしこまって候」

渡辺の綱助と坂田の金時は、すぐさま厩から馬をひきだし、これに打跨ると白柄組の面々の屋敷を一軒ずつ、

「水野さま御用、みな馬のりにてすぐさま御参集を」とふれ廻った。

目明し、番太郎、廻国八部の面々も、

「わしらもこの際やる気でやらないかん」
みな新しい繩襷に白鉢巻をしめ、すぐさま番屋備えつけの刺股、からみ棒を担ぎだしての勢揃い。
さて新坂本から山崎町へかけては、弾左衛門小屋があって、人別帖から名を抜かれ放り出されてきた前坊主や、心中仕損いといった人非人（略して非人）の群れが住まっていたが、これらの者も、
「寺攻め」と話が伝わってくると、
「けったくその悪い坊主め、死んだら極楽へやったると瞞くらかし、銭ばかり取っとる奴へ日頃の恨みを、いざはらしたろ」
てんでに川原から石を、もっこへ入れて運んできて、これも押し出してきた。
「えらいこっちゃ」
竜円寺、永照寺、宗源寺、西連寺、宗運寺、連常寺、泰宗寺、善立寺に、日蓮宗の法養寺、宗延寺まで、新寺町の和尚はみな幡随院へ集まってきた。
「ご心配はいりやせん。わっちらには御仏の御加護、法力というものが授って居ります。まあ大船にのった気でおまかせなせえやし」
各寺へ送りこんでいた手下の寺男を集めた長兵衛が、長老寺口へは唐犬権兵衛、天竜寺口には放駒の四郎兵衛と、各自が手分けして待ち構えていると、
「御用だ」「神妙にせい」
ご府内の目明し、下っ引、番太郎に八部が、それぞれ血相かえて詰め寄ってくる背後から、かねての遺恨をはらそうと、「やっちまえ」山崎町の非人集団が、雨あられと山門めがけて石を投げてくる。

しかも車坂方面からは、
「ヒヒイン、ヒンヒン」馬のいななきが聴え、釣鐘堂の屋根で見張っていた念仏小平が、悲壮な声で、
「白柄組が馬にのって助っ人に来る。騎動隊だぞ」と喚いている。
さすが剛気の幡随院長兵衛も、もはやこれ迄かと覚悟をつけ、大脇差をぎらりと引き抜き、大上段にふりかぶって、
「おのれ不浄役人め、いざ死人の山を築いてくれん」と飛び出そうとした。
すると、そのとき、
「あいや暫らく」そこへ駈けだしてきたのは平井権八。
すでに覚悟はつけているらしく、一人で石段をすたすた降り、
「事の起りはこの身一つ、いざ縄うって、みなの衆はお引取り下されえ」手を前に重ねて叫んだ。
「神妙にせい」捕方は駈けより縛りあげた。が、こうなっては引きあげしかない。
せっかく応援に馬首を揃え出動した白柄組も、むなしく踵を返し立ち去った。

芝居の喧嘩

平井権八が自訴して出て、下谷界隈が大騒動になる処を鎮めたと、江戸中の大評判になったのが、大久保彦六には面白くなかった。処がその上、
（権八の処刑後、長兵衛が秘かに遺骸を盗み出し、それを人里離れた目黒行人坂の虚無僧寺へ葬ったところ、三浦屋の小紫が、これも誰ゆえ、みなわちきの為でありんしょう。おうそうじゃ現世で添えいで

も、来世は蓮のうてなの上でもろ共に……と墓前で後追い心中した）とまで噂がきこえてきたのには、

「なんたることか」ますます腹をたて、

「おもえば小紫が初見世に出た日から、足繁く通い詰めたは拙者ではないか。それより馴染みの三年越し、重ねた枕の数々も昨日や今日、江戸へでてきた権八づれとは比べようもなかろう」

指折り数え比較研究をなし、

「馴染の拙者に一言の挨拶もせんと、勝手に心中などしくさるとは不届きな女め」

いまいましがって唸ったが、相手が二人とも死んでいるのでは文句のつけようもない。そこで彦六が、くさりきってしまい、

「えい、こない理不尽な事があるか」

酒浸りで屋敷に閉じこもっていると、

「春芝居が評判でござります、気散じにたまには外出なされませ」見るに見かねた妻女が心配して外へ送りだした。

処が芝居小屋へ入って何気なく東の桟敷に眼をやると、幡随院の長兵衛が唐犬権兵衛の外、念仏小平や石塔三次といった寺奴の一統を率いて見物している。

むかむかしてきた彦六が大音声で、

「臭え、臭え、まっ香臭せえ……死人を扱う寺男と一緒じゃ芝居は見られぬ」

聞こえよがしに喚くと、

「うるせえ、静かにしやがれ」

石塔の三次がすぐ怒鳴り返してきた。

「おのれ、天下の旗本に楯をつくのか」

彦六が思わず刀の柄に手をやると、

「そういうおめえは、三浦屋の小紫を平井権八に取られなすった殿様か……」

よせばよいのに念仏小平が、いきなり素っ頓狂な声をはりあげた。

小紫と権八の心中話が評判だったから、場内の観客は一斉に彦六の方をむき、

「この悪旗本めッ……」「人殺し……」

まるで二人の死んだのが彦六の所為みたいに、罵声を浴びせかけ、蜜柑を投げたり煙草盆まで放りつけてくる始末。

「勘弁ならぬ。不届きな輩、みんなぶった斬ってくれんず」

堪りかねて彦六は大刀を振り回した。

驚いたのは舞台で見得をきっていた座主の河原崎権之助。すぐに駈けおり、

「てまえに免じてひとつ御容赦の程」

扮装のままで撫め、座方一同もでてきて米つきばったのように詫びて、彦六を駕にのせて屋敷まで送ってきた。

だから止むなく戻ってはきたものの、満座の中で恥をかいてきたのは、

「おのれ無念千万、口惜しや」

いくら酒をのんでも納らなかった。

「こういう時に、伯父御が御存命でいてくれたなれば」
と思うが、彦六の父の兄大久保彦左衛門は去る寛永十六年に死去。跡目の彦之助では相談相手にもならぬ。
いまいましいから腹を切る事にしたが、仕度をさせるには妻や家来に事情を話さねばならぬ。しかも妻女に、
(実は事の起りは吉原へ女をかいにいって、小紫に振られたのが発端じゃ)
とは打ちあけかねた。そこで彦六は、
「馬ひけッ」と命ずると駿河台の水野十郎左衛門邸へとおもむいた。そして、
「友達甲斐じゃ、腹を割るから庭先を貸してくれ」と申しこんだ。
いわれて十郎左は、髭だるまのような彦六の顔をしげしげと眺め、
「小紫の後を追ってお前が死ねば三角関係になるが、いくら遊女でもあの世では、もう客はとるまいから、また振られるぞ」
といましめて、首を大きく振ってから、
「よさっせ」と諫めた。そこで彦六は、
「そうではないわえ」と、河原崎座で寺奴の面々に辱しめられた一件を話し、
「はらわたが煮えくりかえりそうじゃから、そこへ切先をぶすっと突きこみ掻き廻す。早うに落命せんようなら、友達甲斐に首でも叩っ斬り仕末してくれろ」
ともちかけた。十郎左はそれに、

「物騒な相談じゃな……」と微笑し、
「これというのも大奥の春日局が一切の権力を握り、仏徒の家門ゆえ坊主びいきばかりしくさるから、寺方や寺奴めが吾物顔にのさばるのじゃ。よしよし、彦六の無念はわれら白柄組一統の遺恨。かまえて仇はとってやろうぞ」と慰めた。

まな板長兵衛

「振袖火事」と後に伝えられる明暦三年正月十八日の大火は、本郷丸山本妙寺を火元に各地へ飛び火。折からの空っ風に火の粉が夜空に舞って、いつ鎮まるともなく火の手は拡がった。
そして下谷へまで火は移ってきて、翌十九日には幡随院の大伽藍も焼け落ちた。こうなると殺気だった寺奴の面々、
「火元が寺だという事は、おおかた河原崎座の一件を根にもった白柄組のやつらが、神祇さまのため仏閣を一掃せんと、非人や八部の手先にいいつけ、つけ火をさせたのであろうが」と勘ぐり、
「では此方も水野十郎左衛門の屋敷に放火しよう。この火の手では、つけ火か貰い火か区別など、とてもつくまい」
血の気の多い放駒四郎兵衛や唐犬権兵衛を先登に、寺奴の面々は、
「それッ」とばかり駿河台の山へ向ってきた。が火事騒ぎに混雑していても、江戸八百八町は辻々に町木戸がある。
その木戸口を守っているのは、廻国目付八部衆と同じ宗旨の番太郎達だから、

「寺奴の連中が押しかけて行く先は、駿河台であろう」と素早く木戸口を締めにかかったが、普段とは違って北東の風に吹きまくられての大火事の最中。それゆえ、

「開けてくんな、焼殺しにする気か」

飛鳥おろしに追われ、退避してくる者が殺到していて、木戸はとても締められもしない。そこで、てんでに駿河台へ、

「押し寄せて参ります」と注進した。

そこで、火事装束に身をかためた近習の四天王を従えた十郎左は、神保小路と小川町の角になる台地まで馬をすすめ、

「不届きなる寺奴のやつばら、旗本を愚弄する分には片っ端から斬り棄てい」

自分も五米の大槍の鞘をはらって、きな臭い茶っぽい煙の渦を睨みすえた。

大久保彦六も今日こそ晴れの死出の門出と心得て、白地の着物に白上下、白鉢巻に白柄の槍をかまえ必死の覚悟で、

「来たらば来れ、死人の山を築いてくれん」と猿楽町までのりだした。

しかし火の手が御代官町から桜田門に近づき、大目付が馬を走らせて、

「此処で何を致し居る。早うお城へ詰めぬか」と呼ばわってきたので、やむなく水野十郎左以下彦六らも坂下御門口から西の丸警備のために入城した。

が、この大火で幡随院が焼け落ちただけでなく、他の寺院も次々と罹災したので寺奴達も押しかける処の騒ぎではなく、そのまま襲撃は沙汰やみになった。

しかし大火がおさまると、

「この儘では放っておけぬ」

水野十郎左は幡随院の長兵衛を、己が焼け残った屋敷へ呼びだした。

しかし長兵衛も、うかつに行けば、どんな目にあうか判らないから、なんの返事もしてよこさない。

それ処か、寛永十九年からずっと空白になっていた寺社奉行の役が、類焼した寺院再興のため下総関宿板倉重郷に定ると、すぐさま、そちらへ良積上人を通して何かと訴えている様子。だから大久保彦六は腹をすえかね、

「もはや辛抱なりませぬ。浅草神吉町へ移転新築した幡随院へ、拙者一人で乗りこんでかたをつけまする」

とまで意気ごんだ。しかし彦六一人を斬りこませる訳にもゆかぬから、北町奉行村越吉勝と相談の上、その差紙で十郎左は長兵衛を改めて呼びだした。

もちろん役高とも五千石の身分だから、たかが寺男の口入元締で、割り元とよばれる長兵衛ごときと、十郎左は会見する気などなく、大久保彦六へ詫びをさせ、それで許して帰す肚だった。

処が長兵衛の方は、町奉行のお声掛りゆえ仕方なく出てはきたものの、

(何がお旗本だ、俺一人を殺すのに大仰な)といった肚があるから、縁側まで案内されると、そこの戸板をひっぱがし大の字になって引っくり返り、

「さあ殺せ、こうなったら、まな板の鯉だ。早いとこ引導を渡しゃあがれ」

と毒づいた。だから大久保彦六は、

「水野殿は、おまえが詫びにくるゆえ許してつかわせ……といわしゃるで堪えていたが、人もなげなるその振舞い」

大刀を鞘走らせ滅多斬りにした。

さて、こうなると幡随院良碩より寺社奉行を通じ、大目付へ訴えられたから、

「身持よろしからず」の名目で、水野は大久保彦六と共に謹慎扱いとなった。が、

「寺奴」という存在が神仏混合後判らなくなったので、大正デモクラシー以降、「町奴と旗本奴」といった扱いに今はされている。

なお水野十郎左が賜死となったのは、この件とは別で、その六年後である。次々と寺側から色々と訴えられて、奥方の実家の蜂須賀侯江戸屋敷へ預けられていたが、そこで死罪となったのである。

刺青おかく

本所界隈

柳は春になると、しだれた枝が継ぎたしたみたいに、新しい芽をのばし薄緑の若葉をつける。まだ燕は飛び交わないが、雀がちゅんちゅん柔かな新芽を啄むように、揺れる葉先の間をくぐり抜けて舞って居る。

「おい、ねえちゃん……」

雀に眼をやり足をとめていた背後から、いきなり熟柿臭い息が掛ったと思うと、汗くさく酢っぱい匂いのする古手拭が、口の中へ捻じるように押しこまれ、

「じたばたしやあがると、この細い首っ玉を締めあげ、おろくじにしちまうぜ」

耳朶のところへどすのきいた声で凄まれた。そして、かみつくように、

「おとなしくするんだぜ……」

横抱きにかかえあげられるなり、もやってあった苫舟の中へ曳きずるように連れこまれるなり仰向けに寝転がされ黄と茜の合せ帯を、力まかせにむしり取られた。

「な、何すんのさ……」
咽喉もとまで突きこまれた古手拭を、やっと引っ張りだし、べっべと唾を吐き散らし、
「くいつくよ」と身体を起そうとすれば、
「気の強い小娘だ。じっとして居やあがれ」
熊みたいな黒い毛のはえた手で、その口をふさがれてしまい、肩を船板に押しつけられてからが、情け容赦もあらばこそ青い静脈の浮く太腿をむき出しにされた。
「やめて……やめとくれ」
必死になっておかくは、それでも肘を突張り脚を烈しく揺さぶって暴れた。だが沢庵石のように、どしりと上から押しかぶさっている大の男を、いくら跼いても跳ね返しようもなかった。

気を失ったように倒れて居るおかくを、男はにやにや覗きこみながら、
「暴れやあがって手を焼かせたが……これだけの上玉とありゃあ余程のお宝にならな」
はずしてあった下帯をしめ直し、舟先に出るなり竿をとって今戸の方へと漕ぎだした。
おかくは眼をとじた儘じっとしていたが、浅茅が原のあたりまできて舟が岸すれすれになったのを苫の隙間から見てとると水際の葭草の茂みへ身を躍らせて飛びこんだ。
「しまった……逃すもんか」
泡をくった男は竿で葭草を滅多やたらに、舟べりから叩いたが、おかくは水中へ潜ったまま息を堪えて舟の下を泳ぎ抜けた。

が、下腹の女の急所が水にしみ、錐で刺れるような烈しい激痛だったが、見つかったら何処かへ連れて行かれ、売り飛ばされるのは判っていたから、夢中で反対側にと泳いで逃げ渡った。
このとき、おかくは十五歳。天明八年の春の出来事だった。
さて、本所北割下水お歯黒溝に近い荒井町裏に、その頃、名人とよばれた宇之吉こと、「彫宇」の住居が木戸から二軒目にあった。
「ご、御免下さいまし……」
色白の細っそりした娘が、おずおずと訪れてきたのに、
「なんだね」いぶかしそうに宇之吉が、爪先から頭までじろじろ見廻しながら尋ねると、
「お願いが……」娘は上り框に手をついた。
「ほう、なんだか判らねえが立ち話もなるめえ、二間っきりの家だが、まあ上へあがりなってことよ」
と顎をしゃくった。
「はい……」頭を下げ腰を屈めて履物はぬいだが、さて四角に坐ったまま何も云わない。
これには宇之吉も持て余して、
「おう、おめえ、まさか睨めっこしに、わざわざ来たんじゃあるめえ」
笑いかけてみたが、それでも貝が殻をとじたみたいに、伏眼がちに一言も発しない。
だから気の短かい宇之吉が、
「こちとらあ、おめえさんに付き合い、のんべんだらりとして居られるような暇人じゃねえんだ……もう好いから、とっとと帰ってくんな」

両手で煽ぐみたいにせきたて、追い帰そうとした。すると娘は初めて口を開き、
「親方……紋々を入れておくんなさい」
両手を前につき頭を下げた。そこで、
「なんでえ、なら、おめえさんはお客じゃねえかよ……だったらお辞儀なんかしっこなしだ。それで、阿父つぁんの用かい、それとも兄さんから頼まれてきなすったのか……なんせ当人が来てくれて肌を見せてくれなくちゃ、図柄の相談もできやしないじゃねえか」
ぶつくさ気難しく並べたてると、
「――あたし、なんです」
蚊どころか羽虫みたいな、かすれた声で娘はおどおどといった。
「えッ、おめえが針を刺すのかい」
これには宇之吉も口をあんぐりさせ、
「肩あげも取れたばっかしで、縫いこみをといた痕の糸目の残ってるのが、そんな無茶は云わねえこった……なあ、ばかあよしねえ」
眼玉をむいて叱りつけたが、
「いいんです、思い詰め勘考の末に伺ったんですから」と娘はいいはった。
そこで宇之吉も、色白な娘の顔を掬いあげるように覗きこみつつ、
「親に死なれ、その戒名でも刻みつけ、孝養したいって云うんかい」
と聞けば、微かに首をふって、

「いいえ」畳の上に、のの字をかいた。
「それじゃあ、まさかと想うが、いい交しあった男の名でも……」
「違います……」今度は顔をあげぶすっと答え、
「……男除けに彫って頂きたいんです」
きりっとした眼の光をみせた。
「へえ……男を寄せつけない呪いかね」
「はい、女の隠し所へ」娘はずばりといってのけた。
そして腰を浮かすと締めて居る物をとき、羞しそうに脚をそっと前へ出し、のけぞるように顔を両手で覆って横たわった。
裾のこぼれから覗く白い脚に、
「ぬめりがある」思わず上までめくりあげ、
「……隠し所とは、ここのことかね」
桃色の割れ目が覗いている個所へ指を延ばすと、さすがに、ぴくりと身体を縮め、しめつけるように脚をすぼめた。そこで、
「なんでえ、まだろくすっぽ生えていないのが、怖気づくんじゃねえ」
人さし指のはらで膨らみを押しつつ、
「まだ、新ばちかい」と尋ねた。
しかし娘はそれに答えず、喘ぐようなうめき声で、

「そこん所へ、男がみたら恐っかなくなるようなのを……」
と注文をだした。そこで宇之吉は、
「うん……」唸りながら、娘の両脚をまるで車の梶棒でも引っ張るように、てまえの方へ手繰りよせ、
「羞しがらんと、奥の院まで見せなせえ。そうしなくっちゃ図柄の思案もつきゃあしねえよ」
腰の下へ掌をあて持ちあげ気味に浮かせ、
「見るだけで何もしねえやね……」
照れかくしみたいな口のきき方をした。
しかし娘は両手で顔を覆ったまま、指と指の間から、
「親方……彫って頂く手間賃に……」
訴えるみたいなかぼそい声を聞かせた。
「えッ、おめえ、お宝を持ってこなくて、この俺に仕事をさせようとしたのかい」
呆れ気味に拡げた処を掌で、ぽんと叩きのめして突き放すみたいに、
「女道楽は遊びの内だが、針を刺すのは此方とらの仕事。おまんまの種をそれに融通したんじゃあ、お天道さまに申し訳けが立たなくならあな、いけねえ帰ってくんな」
と、ひろげた裾を合せてやり、
「あんまり眺めて居ちゃあ、男のおいらにゃ目の毒だ。さっさとしまって去んでくれ」
ぴしっとした口のきき方で、宇之吉は剣つくをくわせた。

鐘鬼の口

「なんてえ小娘だ……おめえ坐った儘で、とうとう夜明しをしちまったんか。本所は下水が多いから藪っ蚊の多い土地。さぞかし散々にくわれたろうになあ」
いたわるより呆れ気味に声をかけた処、
「痛い針を刺して貰う気できた身ですもの、蚊の針先ぐらいは……」と微笑んではみせたが、ぼりぼり手足をかきだした。
しかし宇之吉が起きだすと、柏餅に巻いた煎餅蒲団をかたずけ、
「親方はお一人ぐらし、さぞ御不自由でしょうね」と話かけてきた。
「気のきいたふうな御託を並べやあがるな」
とは口にしたものの、
「おめえ昨日の暮れすぎに来やあがったんで、西日と行燈の灯で拝んだきりだが、こうして朝日で見ると滅法いい肌らしい。もう一遍見せてみな、どうだ」と持ちかけた。
断られたのに帰りもせず、上り框の二畳で壁にはりついたまま屋守みたいに夜明しした娘は、「あい……」うなずくなり大の字に寝転んで股倉をひろげかけた。
が宇之吉は手をふって、
「夜ひらくって……そこは暗がりで御開張する処よ。俺がみてえのは、おめえの丸のまんまの裸だよ」
と眼を釣りあげた。

いわれた娘は身体を起すなり手早く、着ていた物を蟬の脱殻みたいに下へすっぽり落したが、さすがに前向きは恥しいのか、つるつるした背の方をむけた。

「うん」うなずきながら側へ寄っていった宇之吉は、うっすら汗をかいた肌を、まるで白壁を塗る左官のように両手で撫ぜ廻し、

「こいつは良い。すこし脂がのってきた処でぬめりがある。まるで練絹だね」

感触をたのしむように髯つらの頬まで押しつけ、くすぐったげに娘が肩をすぼめると、

「動いちゃいけねえよ。背柱の脇に皺がよるじゃねえか」

たしなめるよう叱りつけてからが、

「どうでえ、ここに男よけなら勇ましい処で、唐獅子と牡丹でも絵にさせねえか……なら銭はいらねえ。俺が好きで針を入れる」

娘の背を抱えこむようにしながら、すこし上わずった声をかけた。だが娘は背中では不承知なのか、それに返事をせず、くるっと宇之吉の腕の中で身体を前へ廻すと、

「やっぱし、隠し所……」顎を下げて訴えた。

「てやあがんでえ……いくら一人者で貧乏たらしい暮しをしていても、彫宇といやあ名の通ったいっぱしの職人だア、女のめめっちょに伜は入れても、商売物の針が刺せるかい。悪いことは云わねえよ。いう通りにこの背中を貸しな。そうすりゃ彫宇が一世一代の腕をふるって、どんな野郎でも縮み上ってしまうようなお獅子を彫ってやる……なんなら図柄は羅漢さんでも鐘鬼さまだって好いんだよ」

かきくどくように、しきりにいうのだが、

「……いや」の、一点ばり。

「どうして、そんなに強情をはりやあがるんだ……」

くらいつきそうに耳朶へ怒鳴りつけると、

「――だって、なんする時、男の人って背中からは掛ってこないでしょう」

ようやくのことで頬を染めながら、口の中でもごもごと訳けを話した。宇之吉もいわれてみて、

「犬がつがうのは背中から、おっかぶせで掛って行くが、やっぱし人間は前むきか……」

と考えこみ、舌打ちしながら、

「前向きの姿勢で考えるしか……ねえか」唸りながらそれでもまだ未練たらしく、

「この背中に牡丹がなんなら、桜吹雪でもぱあっと散らし彫りにしたら、この抜けるような白い肩に、そりゃ見事なものが出来上るんだが……」諦めきれぬ口調でこぼした。

さて、宇之吉は、転がりこんできた恰好の娘の注文が、とんでもない個所へ男よけのものというのだから当惑してしまい、

「冠さる両側へ左右の仁王さまを彫って、まん中の観音さまを守るって趣向も浅草寺の真似みたいで巧くあるめえ」とか、

「いっそ右大臣と左大臣をいかめしく彫ってみようか」

すっかり腕組みして考えこみ、

「当分、こうなったら他の仕事は休みだ」

たてつけの良くない板戸を無理やりに閉め切りにしてしまうと、内側から釘付けにしてしまい、丸裸にした娘の股をひろげさせ、

「あまり有りふれたものじゃ、こんな滅多に彫れねえ所に針をさす冥利にそむくってもんだ。何かよい図柄はねえものか」

立たせてはそこを撫ぜあげ、寝かせては掌でこすりながら思案したが、さて、これといって膝を叩きたくなるような才覚も浮ばない。

「くすぐったかろうが我慢しな……」

矢立をもってきて宇之吉は、筆の穂先をかみしめかみしめあれこれ下絵を、こんもり持ち上った白い股の膨みにかいてみたが、場所が特殊なだけに余りさまにならない。そこで、

「もり上りを生かして、桃の実か何かにすりゃ、さまにゃなるが……」

したり顔で舌打ちすれば、この処そこをいじり廻されるのに、馴れっこになってしまったのか、かくと名のる若い娘は、

「いやですよ親方……桃太郎じゃあるまいし」と含み笑いをした。

「うん、だが、おめえがその内に身籠って、ここん処から男の児でもひり出しゃあ、それこそ紛れもない日本一の桃太郎だよな」

苦が笑いしながら合槌をうった処、娘は、

「からかいなすっちゃ厭やですよ親方……そこは、おしもをするとこで、嬰児はお腹が割れて出てくるんですよ」

円まっちい己れの小さな臍の辺を撫ぜながら、男は仕様がないと云わんばかりにたしなめた。

これには宇之吉も、

「そうかい……おめえもここんとこに鐘鬼さまみたいに髯が、もさもさ生えるようになったら、色んな事がもっと判らあな」

と口にしかけたが、はっとしたように拍手をぽんと打ち、

「こいつは良いや……おめえの此処に冠をかむった恐っかねえ顔の鐘鬼さまを彫ってやろう。そうすりゃ毛が生えてきて、それが顎髭になって房々してくりゃあ立派になる……なあ、凄じい形相の鐘鬼さまの口許へ、己が大切な一物を突きこもうって奴はあるまい。どうだ、こりゃ巧い思いつきじゃねえかよ――」

生身の肌にじかでは書きにくいから宇之吉が、反古紙の裏へ墨でかいたのを見せると、

「まあ恐い……こんなのを彫ったら、あたいだって怖くて、おしもも出なくなるよ」

気丈でもそこは小娘のこと。すっかり怯えてしまって泣きそうになった。だから宇之吉も匙を投げ、

「せっかく無い知恵を搾って考えてやったのに……恐いってのは何んて云い草だ。だいたい、おめえが俺んとこへ来たのは、男がおっかながって近寄らない彫物をって話だったんじゃなかったのかい……それを、てめえの方が先に恐がってりゃあ世話はねえ」

すっかりむくれてしまった。そして、

「どうすりゃ良いんだ」

娘の手から鐘鬼の絵をもぎとるなり、すっかり苦りきってしまい、

「ここんところ、蜆貝みてえなすべすべしたおめえのめめっちょばかり、明け暮れ眺めて小便くさくなった……何処かへ行って精進落しに浴びる位に酒をのみ、白首でも抱きに行くわさ——おめえも俺んとこにしがみつくのは止めにし、とっととてめえん所へ今からでも早々に帰りやあがれ」

云い残すと表戸は締め切りの儘だから裏口を、がたぴしあけ、

「いいか、消えてなくなりやあがれよ」喚めきながら出て行った。

口入れ屋政吉

「なんでえ彫宇の親方じゃねえか……」

行きつけの芳村で面白くも可笑しくもない顔で、宇之吉が盃を舐めていると、番場町の政吉とよぶ人足の口入れ屋が、

「——どうしなさった」と側へよってきて、

「この処すっかり表戸まで締めきっての、お仕事だそうでやすが……いったい、そんなに心血を注いで何を彫っていなさるんで」

自分も宇之吉に彫ってもらっているだけに興味があるのか、指先ではさんだ徳利で宇之吉の盃をみたしながら尋ねかけてきた。

しかし訊かれても、答えようもない。

そこで宇之吉は口中へ放りこむみたいに、酒を呷ってからが、

「やけに難しい注文をつける小娘で箸にも棒にも掛りゃしねえ」と愚痴をこぼした。処が政吉の方は、

「へえ、女の子で、もんもんを彫ろうなんざァ嬉しい心意気だ」

すっかり話に釣りこまれた恰好で、

「石原町の万吉親分の処の一人娘のお花さんが、暮の風邪っぴきをこじらせ、あっけなく亡ってからというもの……お内儀さんが気が違ったみたいになってしまって誰か似通った養女をと親分は云いなさるのだが、稼業が稼業だから普通の娘さんじゃ荒っぽすぎて駄目だが、そんな娘っ子だったら良いかも知れねえ」

のり気になった政吉は、宇之吉の肩へ手をかけ、

「万吉親分に忠義するにゃあ、お誂えむきのよい話じゃねえか。どうでえ、どんな娘か逢わせてくれろ」

気ぜわしく勘定を台に並べ、まるで外へ押し出すようにつれだした。

しかし当人の宇之吉は、まだ呑みたらないのか、それとも話が気に入らないのか、ふくれつらを夜風になぶらせたまま、

「……とっとと出て失せろと頭ごなしに険突くらわせて出てきて居ます。もう今頃は、なんぼなんでも居りますまい」と首どころか肩までふった。

しかし政吉は、

「なあに良いってことよ……居なけりゃそれ迄、もしまだ間に合って、どんな娘か顔さえ拝めりゃそれで、おんの字だ」

まるで厭がる牛の鼻っらを曳っぱるみたいに、宇之吉の袖口をひっぱり、長屋の木戸口までくると、

「それ見ねえ、親方んとこの雨戸は節穴が空きっぱなしだから、灯がこぼれて居やあがるぜ」指さし

た。しかし、

「明りが残っていたって、当人がまだ居るとは限らねえ。散々っぱら脅して出てきたんだから……」

宇之吉は自分の男が立たないと云わんばかりに、まだ云い張ったが、裏口から廻ると、なんのことはない。おかくは逃げ出して居る処か、結綿の上に煮しめのような手拭で姐さん冠りをし、二た間きりの家の中を、こまめに拭き掃除していた。

「女だてらに刺青の一つも彫ろうというからにゃ、どんな阿婆ずれか、お引きずりかと思ったが、こりゃ働き者の娘さんじゃねえかよ」

すっかり感心したように政吉は唸り、冠った物をとって挨拶する顔をみると、

「えれえ上玉だ……色が白くて痘もねえ。これじゃあ万吉親分の養女に納めても、ちゃんと貫目があらあな」すっかり歓んでしまった。

しかし、出て行けよと云ったのに、まだ根を生やしたように居坐ったままの娘に宇之吉が立腹し、ろくに口もきかない有様だから、飛びこんできた形の政吉も当惑してしまい、

「何か彫る図柄のことで……おめえさんと親方は意見がくい違っていざこざになってるそうだが……いってえぜんてえ、おめえさんは何を彫って貰いたいんだね」

おかくの前に腰をおろし胡座をかいた政吉が、顔のまん中を見据えるようにして尋ねかけた。

すると、おかくは羞しそうに、

「かに……」低く口ごもって答えた。

だから政吉が聞き違え、

「まだ若いから男除けに、渋柿か青柿でも彫って貰いたいんだろうが、そりゃあ悪い了簡だ。いったん墨を入れちまったら、おめえさんが女盛りになっても、熟柿とは変りゃあしねえし、それに、ばばあになったら枯露柿になっちまうなんざあ、悪い趣向っていうもんだ」

頭ごなしに反対した。そこで宇之吉も、

「ほれみねえ……誰の考えも一緒だ。そんな見栄えの悪いもんを、この彫宇がやれるかってんだ。なあ、せっかく割れ目が入って左右にふっくらしてる所なんだ。桃にしねえ。桃の実だったら、ぴったり巧く納まるよう針をさしてやらあ」

脇からここぞとばかり説得にかかった。

しかし、おかくは唇をとがらせ、

「柿じゃありません」と訂正して、

「ほら海べなんかで横に這う蟹なんです……あたいが云うのは」

と、両手を横にふってみせた。

「えッ、蟹……あの猿と握飯をとりあいするあれかい……ねんねだから、話っていやあ、お伽噺しか知らねえらしいが、彫物ってのは八犬伝とか三国志といった勇しい物語から絵柄をとるもので、カチカチ山じゃいけねえよ……なんなら、もさもさいつかは黒い縮れ毛の生える所だろうから、それなら薪を背負った狸はどうだろ。両側に目玉を入れて丸く持ち上った顔なんか面白いし、なんなら円味をいかして文福茶釜にしてやろうかい」

宇之吉も政吉のてまえ、小娘に手をやく処など見せたくないのか、仏頂面をした儘だがそれでも束ね

た反古紙の裏に、狸の絵などかいて手渡した。しかし、おかくは、くすくす可笑しがるだけ、あくまでも、

「かに、かに……」といいはり、宇之吉では話にならぬとみてか、政吉に向い、

「おじさん……うちの親方に、蟹が鋏をふりあげて居る図にしてくれるよう、頼んでおくんなさいよ。ねえ、男の人があれを近づけてきたら、そこをチョン切ってしまうぞ、と脅かせる威勢のよい蟹の絵にしておくんなさいまし」

と膝に取り縋らんばかりにくどいてきた。そこで、

「成程ねえ……」

政吉も唸ってしまい、宇之吉の方に向き直ると、

「背負うた子に浅瀬を教えられる譬もあるが……男除けに彫るからには、チョン切るぞと脅かすのが、こりゃ何より効き目があるかも知れねえ……どうだろう。この気っぷなら石原町の万吉親分やお内儀さんの気に入る事は受け合える。俺が手間代はそちらからたんまり貰って届けるから、ここは娘の云うように好きな物を彫ってやっちゃくれまいか」

相談するように話をもっていった。

寛政二年夏

「へえ……この娘っこかい。可愛いじゃあねえか――」

石原町の万吉親分は、おかくを一目みるなりに気に入って、

「幼ない時に親を失くし、柳島の親類の処で厄介になって居るというのなら、別にいざこざは有るめえ、これまでの養育料だと小判の一枚を持ってゆき、向うの寺の人別を此方のだんな寺へ移してしまえばよい」と、仲に入った口入れ屋の政吉に、

「厄介ついでだ、やってくれろ」と、足代を包んでいいつけた。

さて、蟹の刺青が彫りあがって、万吉の家へ引取られたが、まだ身体がすこし針の後の熱をもっていて、すこし気だるそうにして居るおかくを、

「もう此処が、おまえさんの家なんだからね……何も遠慮気兼ねなんか、することはないんだよ」

と、お内儀さんのお六は、まるで死んだ娘が生き返ってきたような喜びようで、箪笥や長持に蔵ってあった娘の形身の衣裳を出してきて、

「これも皆、おまえにあげるから、ひとつ着て見ておくれでないか……」と、取りかえ引っかえ、まるで着せ変え人形みたいに身につけさせ、

「年恰好が同じだったから、とてもよく似合うじゃないかえ」

涙を浮かべて手放しの喜びよう。そこで万吉親分も、

「もう一、二年もたったら、身内の若い奴らの中から、しかるべき婿を探して跡目をとらせりゃあ……俺も楽隠居ができようって寸法だ。良い娘が見つかってくれたもんだ」

すっかり相恰をくずして満足した。そして、

「かく、かく」と、まるで実の娘のように親身になって夫婦して可愛がり、当人も、

「阿父つぁん、阿母さん」と、まめまめしく万吉夫婦に仕えた。

だから、この儘でゆけば、おかくは何んの為に蟹の刺青など彫ったのか、まるで徒労のような形で終る処だったが、一年おいて寛政二年（一七九〇）の夏。

七月の中旬から連日降ったりやんだりの天候だったが、八月一日の夜明けからは沛然（はいぜん）たる豪雨。まるで天と地が引っくり返るような、車軸をも流すような大雨に、南東から凄じい台風が荒れ狂うよう吹き渡ってきた。

このため墨田川の水面は溢れ、吾妻橋の七十六間の橋が水中に浸って怒濤のような激流が枕桁を押し流してしまう有様。

石原町も対岸が御厩河岸（おうまや）の浅草御米蔵なので、石垣積みですこし高くなっている関係からか、まるで盥を傾げたように石原下水の濠割へ流れこんできた濁水が、角の久須美六郎左衛門邸の塀を押し倒し、黒っぽい泡をたてて碩雲寺の山門を水浸しにした。

万吉親分は若い者たちを集め、

「戸板でもなんでも水に浮かぶ物をもちだし、それで女子供や病人を、なにがなんでも救い出せ」

すでに腰まで水かさを増してきた濁水の中で、梯子の上にのって指図をした。

「へえ合点で……」下帯一本の若い者達は一人残らず出払っていたので、

「阿母さん、あたいの背につかまっておくんなさい」

かくも晒木綿の腰巻一つになって、万吉の女房を肩にし、

「御竹蔵の台地が高くなってますから、ひとまず彼処へ」

板片れや笊（ざる）や汚物の漂う逆まく水の中へ、甲斐々々しく出て行こうとした。そこで万吉も心配し、

『若いやつの一人か二人は残して置けば良かった……』

と案じ顔で止めにかかったが、

『いいえ阿父っさん。私は女でも、まだ若いんですから……』

にこにこしながら、まるで濁水をかき分けるように、胸の隆起をぶるぶるさせながら青竹を杖に出ていった。

そこで万吉は、

「気をつけて行くんだよ」と声をかけてやりながら、眼を細くして、

「実の子でも、ああまで孝行はしてくれねえもんだが、有難いこった……」と、その後姿を見送って居ると、家の戸口から竿の先が、ぬうっと入ってきた。

はて、おかくが出かけたものの、進むに進めずまた戻ってきたのかと、梯子にぶら下りながら万吉が首を下へ廻したところ、

「……おらあ川向うの儀助だよ」

舟のへさきを戸口から入れてきて、両国で同業をしている男が呼ばわってきた。そこで万吉は喜び、

「ふだんは稼業の上で、とやかくの事もあったが、よく見舞いにきてくれた……俺は一人っきりだが大丈夫だ。それより娘のかくが女房を背負ってたった今、出かけて行ったのが気に掛る……おまはんその舟で俺が処の女共を救ってやっちゃくれまいか」

頭を下げんばかりにして、気になる母娘のことを頼んだ。すると、

「へえ万吉親分ともいわれなすった御方が、この大雨風の中で、たった一人で居なさるのかい」と、儀

助は口を開きにやっとした。
「本所は、ちょっとの雨でもすぐ水浸りのする処だ。だからこの嵐で怪我人や死人など出したら大変だと、若い奴らは手分けさせて皆だしてあるんだよ」
万吉がそれに答えると、
「……そうかい。一人っきりで居なさったとは、これぞ天の助けってとこか」儀助は手にしていた竿をつきだしてきた。
「俺を舟にのっけてくれるより、母娘の方をみてくれろと頼んだばかりじゃねえか」
いぶかしそうに差し延べてきた竿をつかんで押し戻そうとすると、
「じたばたしたら、危ねえじゃないか」
竿の先をしっかり握った処で儀助は思いきり引っ張った。
だから身体を浮かした万吉が、思わず梯子から手を離して、濁水の中へ突んのめるように水音高く落ちこむと、
「誰がてめえなんか助けに……この嵐の中をわざわざ出向いてくるもんか……臭え水の中だが我慢して往生しやあがれ」
立とうとする肩先を竿で滅多打ちにし、
「何をしやあがる……」と舟板へつかみ掛るのへ、
「てめえって老いぼれが本所深川を押え、一切を取り仕切って居ちゃあ……この儀助が羽を延そうにもその余地がねえ……汚ねえ水葬れんで悪いが、どうせ老い先き短かい命だろう。ここは諦め器用に死んでくれろ」
と足で、その手を力まかせに踏みにじり、
「泥水のんでここで仏になってしまえば、それこそ誰が見たって水死で通り……怪しむこっちゃねえ。まあ恨みてえんなら、こんな大雨をふらした空でも、あの世から呪やあがれ」
「畜生ッ、ふいを突きやあがって、こんな没義道をしくさり、それでも汝は男か。やい尋常に話をつけやあがれ」
呑んだ泥水を吐きつつ、ざんばら髪の万吉は吠えたてたが、
「何を世迷いごとを云ってやあがる。それよか念仏でも唱えやがれ」
儀助は唾をはきかけた。そして襟筋へ竿の先を突きこむなり、
「早く冥途へ行けるよう、たんと泥水をすすりやあがれ」
と搦みつけた竿をねじって力まかせに水中へ押しこみ、泡ぶくの浮くのを、
「三つ、四つ」と数をかぞえ、
「よっしゃ、もうぼつぼつ良かろうかい」
とは口にしたが、それでもまだ用心して、舟のへさきを泡ぶくの上へ、沈んだ万吉へ重しを掛るようにのせ、
「……何年に一遍もねえこの嵐の大水で、とんと俺にも運が向いてきたものだ。雨ふって地かたまるというが、これで雨風がおさまりゃあ、川向うの此方も俺が縄張りか……花も嵐も踏みこえて生きるが渡世の男の道——とはいうものの、万吉の老いぼれた白髪頭をこうして舟板で踏んずけてる心地は、まる

で天下を取ったようなもんだわさ――」すっかり悦に入ってほくそ笑んだ。

妙な噂が

さて、この寛政二年八月一日の江戸の台風洪水は、流失家屋三千に死者も万近くでての災害で、石原町万吉の死も、

「不慮の災難」という事で済まされてしまい、だんな寺の大徳院で八月十五日に葬式がいとなまれた。

しかし不意の椿事なので、遺言とてもない。

お内儀さんの方は、おかくが背負って御竹蔵の方へ避難していたので、幸い一命には別条なかったが、四十年近くも連れ添ってきた万吉親分の俄かな死に、がっかり気落ちしてしまい、さながら病人のような有様。

そこでやむなく、おかくが喪主となって葬式はいとなんだが、さてその後の事は、別に誰とめ合せるといったような話も、決ってはいなかったから取りあえず、女手で取りしきって行くこととなった。

はたから見れば、まだ十八になったばかりの、番茶も出花といった器量良しのおかくが、帳場に坐りこんで大の男を顎先で使うのは、大儀そうな感じも与えたが、万吉子飼いの清次、常助といったのが付いて居たから、おかくはそれ程までに煩わされる事もなかった。

そこで暇さえあれば奥の間へ引っこみ、あれ以来寝たっきりの万吉の後家に寄り添って、

「阿母さん案配はどうでございます。おみ脚でも揉みましょうか」

自分も幼い時に親をなくしているので、さながら生みの親に仕えるように重湯を作って口へ入れるの

を手伝ったり、痒い所へ手が届くような看護をしていた。そこで一家の者はもとより近所の者からも、

「幼い時から貰い子をしたのでもないのに、よくまあ、あすこまで孝養を尽せるもんだ。うちも実子は他所へやってしまって、改めてどこからか貰い子でもしたいもんだ」とまでいわれるようになった。

さて、こうした具合に近所の賞められ者になると、お節介というのか、外へでた処をそっと寄ってきて、辺りをはばかりつつ、

「あのね、おかくさん……おたくの若い衆には云いにくくて黙っていたが、実は、あの嵐の時に、川向うの両国の儀助って親方が一人で小舟を漕いで、あの嵐の中をおたくへ来たのを見かけた者が有りますのさ」

袖を引っぱって耳打ちしてきた者がいる。

これには、おかくも驚いて、

「あたいが阿母さんを背負って出かける迄は、誰も来てなかったから……じゃあ、その後からかしら」

といぶかって、家の中へ戻ってくると、清次と常助の二人へ、

「変な事を耳にしてきたけど……儀助の奴が何しに此処へ来たんだろうね。同業の誼みで阿父つぁんを助けに来てくれたものの、もう手遅れで間に合わなかったのかしら……」

すぐさま尋ねてみた。すると二人も互いに顔を見合せ、

「そいつは初耳だが可笑しな話でございますねえ……あの野郎、それが本当なら、その事を云いに来ても良いのに、葬れんの時だって面も出しやあがらねえし、妙ちりんだ」

「うん。舟まで持って来たというからには、もし、うちの親分が梯子から足を滑らせていて、打ち所が

悪くて潜っていなすったとしても……まだ、もがいて居る処だろうから助けられた筈だ」
「それに、わざわざ漕ぎだして舟で来たもんなら、彼方此方と声をかけ探し廻ってもいい。なら近くに俺達が素っ裸でも居たんだから、そのとき儀助を見かけて居る筈だ」
「だが吾々二人だけでなく、うちの若いやつらで儀助を見たのが一人も居ないって事は、やつがあの嵐に紛れてそっと忍びこんで来たんじゃなかろうか」となった。そして、
「そう云やあ……うちの親分が亡くなってからというもの、まるで待ちかねて居たように、儀助のやつめ此方とらの縄張りへ平気で、ちょっかいを掛けて居やあがる。こりゃ姐さん、臭えやァ……」
と清次は息まいた。そこで、おかくも思わず溜息をもらし、
「あの嵐の中で人助けの為に皆を出してやり、一人っきりで残っていた阿父つぁんへ、理不尽な事をしたとあっては許しておけないわ。ねえ、みんなを集め両国へ殴りこみをかけようじゃないか」
眼に涙を浮かべて切りだした。しかし常助も、
「まあ待っておくんなせえ、いくら怪しいといっても、はっきり証拠をつかんでいない話だから、此方の当て推量だけで、まさか両国へ討入りも出来ますまい……」と止めにかかった。
「そうかい……」と、おかくは答えたものの、眼に口惜し涙を一杯に浮かべ、ちりちりした顔つきになって、
「――あたいはこれまで掛け違って、その儀助とか云う奴とは逢ってもいない。だから顔を知られていないのを、もっけの幸いに、たとえ身体を賭けても、きっとその手証とやらを摑んでやろうじゃないか。どうだろう……」とまでいいだした。

「まあ、ちゃんとした証拠か、本人の口裏でもとれたら、ふてえ野郎は叩っ殺して、亡き親分の仇討ちは致しますが、あの悪賢い儀助のやつ巧く尻っぽを出しますでしょうか」
二人は互いにまた顔を見合せ、自信が持てないようないかたをした。がそれでも、おかくは、(こうと心を決めたからには……)といったような、悲壮な決意を眉宇にしめし、
「でも、あたい、やってみる」きっぱり云ってのけた。

江戸の湯屋

風呂といっても幕末までは、何人もが肩までどっぷり浸かるような浴槽は、まだ鍛工技術の関係で、大きな釜が鋳造できぬからなかった。
関西へゆくと美濃の関の鋳物師部落で、一斗釜を拵えていたから、その底に浮板を入れ湯をわかす五右衛門風呂があったが、街道筋では夏場に限って天水桶にためた雨水を、陽ざしに温めて汗流しに旅人に使わせ、これを「水風呂」とよんでいた位のもの。
だから寛政の頃の江戸の湯といえば、閉め切った湯室の中で、むんむんと湯気をたてる今でいう蒸し風呂。だから男は下帯をしめ、女は湯巻をして狭い石榴口から潜って入り、そこで身体を蒸して垢をこするといった具合。
だから入口こそは、
「おとこ」「おんな」と文字はでているものの石榴口を腰を下げて入ってしまえば、男も女も混浴。
といって当節のような生れた儘の姿ではないから、女も胸のあたりを屈みこむようにしているだけ。

なにしろ湯気が濛々としているから、余程の好き者が眼を皿にしても、混浴とはいえ朧気にしか女の上半身さえ霞んで視えぬ。

だから湯へ通ったにしても、あまり眼の保養にはならないのだが、両国の儀助は二日に一度は湯屋の暖簾をくぐる。

「昔は湯女とかいう、仇っぽい女がこういう処にはいて、背中の垢をかいてくれたり出ると酒の酌もしてくれ……ろくすっぽ拝めもしない女の裸に、もやもやしたものを昂ぶらせている野郎には、裾を開いて用をたさせていたというが……近頃はご政令とやらで湯女はご停止の野暮ったさ……だから、こうして湯気にむされにくるのは暇な御隠居か、俺がような疝気もちだけだろうじゃねえか」

と、この処、二の腕から肘の関節にかけ鈍痛のする辺りを、指先でもみほぐしつつ眼をとじ、ぶつくさ独り語を洩して居ると、柔かな物が倒れてきて、

「あら御免なさいな……」

鼻先にいきなり黄色い声。

はっとして眼をあけると、こんもり丸まっちい物が儀助の頬から離れたが、まだ眼の前にぶら下っている。

いくら濛々と湯気が立ちこめた中でも、こう眼串につき刺ったように近くにあっては、乳房の先の桃色のとんがりまでが視えた。

だから儀助も周章て気味に、

「なあに、足を滑らせるのはよく有ること。此方は大丈夫だ何んともないが、おめえさん脚でもすりむ

きやあしなかったか……」

己の娘ぐらいの若い相手だが、腕は痛んでも根っからの女好きの儀助のこと。そこは別人のように優しく声をかけてやり、

「……風呂なんていうと背中へお灸の痕を並べた婆しか入りに来ないものなのに、おめえがような若い別嬪が湯にくるなんてのは珍しい。何処か温めなくちゃならねえ病持ちかえ」

親切そうに話かけた。そして、にやにやしながら、

「こうして一つの湯室へ入りわせるのも、多少の縁というもの……裸ん坊で云うのは気取ってるみたいでなんだが、おいらは両国で儀助といやあ知らねえ者もない男だ。なんでも相談にのってやるし力にもなってやろうじゃないか」

と声をかけた処、娘は羞しそうに白木綿の湯巻に包んだ腰をくねらせながら、ほっほと笑いだしてしまい、さて恥しそうに、

「私めは昨年より既に嫁入りした身ですが……嬰児を身ごもらねば晴れて披露して頂けない足入れ婚——よって、こうして身体を蒸し温め子宝を納めやすいようにと、ひとさまに教わり、初めて湯へ来ました身……いくらご高名な親分さんでも、こればっかりは、お力になって頂くわけにもゆきますまい」

胸の降起を両の掌で覆いながら、はっきり云いきった。

しかし儀助は、

「ああ、そうかい」とは、にこにこして口にしたものの、

「おめえ、子宝が入りやあ良いんだろう」

と手を伸ばし、むっちりした白い肩をつかみ、
「誰が子種でも、おめえの身体の中へ入っちまやあ、それで良いってものじゃあねえかよ……」
耳朶へ湯気よりも熱い息を吹きかけてきた。
そこで女も、軽くうなずきはしたものの、
「……ですが、いくら身籠ったとしても、うちの人の子種じゃない、あなたからの貰い物と判ったら、わたしは追ん出されてしまいますよ」思案顔でためらってみせた。
すると儀助は、もうひと押しとみてとったか、声も荒々しく、
「おめえの亭主が、そんな無法なことを云やあがったら、この儀助が承知しねえ。襟首つかんで詫びさせてやろう……なあ、だったら良いだろうが」
と、かきくどきにかかった。が、女は首をふり、
「親分がどんなに腕っ節が強いか知りませんが……指で己れの腕を按摩してるようじゃ心細くって」
湯気で濡れているのをよい事に、儀助の掌から丸まっちい肩を抜いてしまい、しなをつくって恨めしそうに唇をとがらせた。
だから儀助もこれには苦が笑いをして、
「そうか。よしよし、じゃ明日もこの時分にここへ来るがいいぜ……そうすりゃ俺が子分子方の強そうなのを十人位は、ちゃんと連れてきて見せてやる。なら良かろうが……」
と口にした。すると女は気まり悪そうに、
「あなたはご自分の子分衆の前だから、それで良いかも知れませんが、あたしは牝馬じゃあるまいし、

みんなの見て居る前での種つけは厭やですよ」と睨む真似をした。
「違いねえ、ありゃ見世物にするもんじゃねえ」
とは合点したものの、その気になって居るから意馬心猿。
「じゃあ……どうすりゃ良いんでえ」
絡みつくよう話をもってきた。すると女は仏頂面をしたまま、
「今時分の午下りはすいてますから、来いとおっしゃるなら明日もこの時刻に、ここへは参りますが……」
と口にしてから笑くぼを下頬に作り、
「このあたしにだって、ああそうかと判るような、何んぞ強そうな自慢話でも明日は聞かせておくんなさいましよ」
云い残すと、水を手桶にくんで、熱くなった身体に浴び、円い腰の割れ目をくっきり晒木綿に浮かせた身体を、
「はい御免なさいよ」さっさと先に石榴口から四つ這いになるようにして出て行ってしまった。
白洲吟味
「おめえもこの辺の者なら石原町の万吉は、名ぐれえ知って居よう」
翌日、午下りの人気のない湯室の中で、汗をたらして待ちかねていた儀助は、石榴口から這うようにして入ってきた昨日の女を見かけると、浴びせかけるように声をかけ、近よってくると湯巻に手をか

け、ぐっと引き寄せてから、
「あれを、たった一人で眠らせてしまったのは、この俺さ……」
というなり、ぐっと腰のくびれを抱えこみ、そのまま寝かしつけるように床へ身体を横たわらせ、
「どうだ聞いて驚ろいたか……それ位に強い男の子種なら、おめえも仕込み甲斐があるってもんだろう……なあ、それに俺は義理固いから責任はもってやる。子が腹に入るまでは何度でもしてやるから安心しろよ」
と、白晒の湯巻をめくりあげたが、その途端、
「なんでえ、こりゃあ……」
たちこめた湯気を払うように手をふって、穴があく位に屈みこんだまま覗きこんで、たまげた声で、
「い、いれずみ、しかも、蟹じゃねえかよ」
喘ぐみたいに吃ってからが、
「こ、こりゃなんでえ、何て真似だい」
しゃがれ声をあげ、横這いしている蟹の刺青へ薄気味悪そうに手を伸ばした時、
「……蟹は挟んでちょん斬ってしまうんだ……さあ入れてみな」
まるで別人のように言葉づきまで、がらりと変えた女は、股倉を大きくひろげ儀助の腕をぐっと抱えこむように挟みこみ、脚を縄のようにねじりあげた。
これには儀助も仰天し、せっかく外しかけた下帯もそのまま、脇から首をだしていた物も縮って引っこんでしまい、

「よ、よしやあがれ……悪ふざけも大概にしやあがれ」
なんとか振りほどいて逃げようとしたが、下になって居る女は左手をのばして、縮こまった物を無理やりに引っ張りだし、
「さあ、ちょん斬ってやるから何んしてみな」と喚めきたてた。そこで、
「まあ待ってくれ、夫のあるおめえに横恋慕して、道ならぬことを仕掛けたのは俺が悪かった」
儀助は腰をしめつけられて蒼くなり、引張られながら、
「そ、そこには男の急所……頼むからそんな無茶して、引張らないでくれ……銭を出しておまえがご亭主にも詫びはするから」
泣かんばかりにあやまったが、
「何をちんつん……たわごとをおいいだね。わたしは、まだこう見えたって嫁入り前の一人者なんだよ」
といいざま、右手で湯巻の端に結びつけ隠してきたらしい剃刀を抜きだすと、それで左手で引張って居る物を、
「石原町万吉の娘おかく……とは私のこと。阿父つぁんの仇、覚悟をおしよ」と午蒡でも輪切りにするよう切り落してしまった。
これには儀助も何条もって堪るべきと、眼を白黒させ、
「ふむ」とふんぞり返って、切られた所から赤黒い血を迸らせてのたうった。
おかくは女の身だしなみで、反り血を浴びた湯巻を、掛け水をくんで手桶で洗い、用意して石榴口の

外においてあった新しいのを、すぐさま腰にまきつけるなり湯室を出て着物を纏った。
さて、清次と常助の二人は、おかくの云いつけで湯屋の外で待って居ると、
「お待っとうさん……」と、そこへ現れたおかくは、濡れ手拭の間から、
「ほら、阿父つぁんの敵の首だよ」
赤黒く縮んだ物の先を覗かせた。
「なんですかい」と不思議がると、
「これが両国の儀助の首じゃないか……」
おかくは流石に烈しい息使いでいい、
「でっかい頭の方の首は、石榴口から小娘のあたいが引っ張ってこられっこないじゃないか……これは雁首だけど、いいだろ」
初めて羞しそうにいい、その内に張りつめていたものが、がたついてきたのか、清次に押しつけるように手拭にくるんだまま手渡し、貧血しそうに、
「おまえ、もって行っておくれよ」
歯の根を震わせ脅えたようにおののいた。

まさか万吉親分の跡目のおかくを縄付きでも出せまいと、清次が、儀助殺しを背負って月番の南町奉行へ、
「恐れながら」と自訴してでた。しかし屍体は男の一物が斬り取られて居る。そこで町奉行池田筑後守

の差紙で、おかくが石原町から引っ立てられた。すると当人は初めから覚悟の事ゆえ、
「清次ではありませぬ。この私が阿父つぁんの仇をとったのです」
きっぱりと白状してのけた。しかし、池田筑後守が不審がって、
「儀助程の悪賢い奴が、いくら湯気に蒸され上気して居たとは申せ、其方ごとき小娘に男の急所を摑れ切断されるとは解せぬ。何んぞ仔細が有るのであろう。神妙にせい」と問い詰められると、
「恐れながら……」断ってから、おかく胯間をひろげ、
「ご吟味の程を」恭々しく申しのべた。覗きこんだ奉行は、
「うむ」と唸ったが、やや暫く眺めてから、
「養女の身でありながら孝行せんとする汝の健気なる志に、天もうたれたまい刺青の蟹が、鋏をふりあげちょん切ったものであろう」
昔の事ゆえ粋な裁きで、おかくも清次もお構いなしの放免となった。
しかし、風呂場での人殺しというのは穏やかではないと云うのか、翌寛政三年（一七九一）正月十一日付けをもって、蒸し風呂とはいえ、「男女混浴の禁止」というのが発布された。
さて、これでますます、
「養女の身でありながら、万吉親分の仇討ちをした女の中の、女一匹」と、すっかり、おかくは評判になって俠名を謳れたが、
「あの女のお裾の蟹は、本当に入りこもうとするのを筒切りするそうだ」といった噂も、まことしやかに伝わってしまった。

それを耳にした荒井町裏の宇之吉は、

「……だから云わねえこっちゃあねえ。俺が云うように桃の図柄か、五月節句の鐘鬼さまにしておけば、五月の鯉の吹き流しで、すらすら入って、ゆうゆう揺れると縁起が良かったろうに」

と、己れが彫った蟹の刺青を、いまいましそうに後悔したが、今さら消して彫り変えられるものではない。後の祭りだった。

さて清次と常助は、いつまでも女のおかくに、荒い稼業を取仕切らせるのも可哀想だと、まだ独り身の若者を、あれこれと物色してみたが、どれも顔色を変え、

「姐さんは別嬪で良い女だが、女房となりゃあ眺めてばかりも居られませんで……」とか、

「いくら器量よしでも、男のあすこをちょん切られてしまっては」

みな尻込みしてしまった。そこで仕方なく、おかくは女の身ながら石原町万吉の跡目をつぎ、一人で切り盛りしていたから、

「蟹のおかく」と、その名をうたわれたが、三十、四十になると刺青も、若い時のような水々しさがなくなったのか、それとも毛深かったのかは知らないが、「毛蟹の、おかく」とも異名をとった。

押上の常照寺という寺に、昭和二十年三月の戦災で焼けるまで、「孝養院毛角大姉」と彫られた墓がちゃんとあったそうである。

花川戸助六

吉原ぞめき

吉原は見るも法楽、してみて極楽。

なにをするのかよく判りませんが、大変結構な所だったそうで、大門を入りますと左右に綺麗なお店が並び、着飾った天女みたいな女の人が口を揃え、たとえ見ず知らずでも親しそうに、

「ちょっと、ねえってば、いらっしゃいましな」

「よっておくんなまし……」

と声をかけよんでくれます。だから俗にぞめきとかひやかしと申すてあいは、別に登楼する気はなくてもご婦人からこう呼ばれたいばっかりに、なかへくりこんだそうでございます。さて普通は、

「ちょっと姿のいい方」とか、「ねえ旦那」

ぐらいのものですが、突如としてパトカーの集ってきてサイレンのごとく、「……スケさん」「スケさまえ……」とけたたましい呼声。

と申しましてもスケといってスケベエというのではありません。なにしろこういう所へお越しになる

殿方で、そうでない方はあまり居らっしゃいません。だから助は助でもそうではなく、呼ばれたのは花川戸の助六。「人間手を真黒にして働かなくっちゃいけねえよ」と、つね日頃、馬方やその取締りにあたる子分衆にも口癖にいっていましたから、人よんで黒手組ともいわれるシンジケートのボス。背に尺八をさし子分を従えて入ってくるのを見かけると、オイラン達は失神しそうにシビれてしまって、「スケさん」「スケソウダラ」などと感激の言葉を投げかけ手にしている長煙管を、みな連子窓からさしだし、

「ぬしさん一服つけていってくんなまし」

しきりと間接キッスを求める有様。

これはフロイトさんとおっしゃる方の学説によりますと、女性がロングなものを異性の肉体の一部へ挿入させたがるのは、自分自身がそうして欲しい願望の現れだそうでございますが、これが一本や二本ではない。長煙管の雨がふるようだというんですから、相当やにくさかったことでございましょう。

しかし助六は、そうした女達には目もくれず三浦屋めざして一直線。すると若衆がとんで出迎えるようにして、

「これは親分さん、いらっしゃいまし、揚巻さんえ」と声をかけますと、やり婆とよばれるのが

「おいらんがお待ちかねですよ」いそいそ迎える。すると助六は懐から金をだし、ついてきた子分達にも気前よく、

「おめえらも何処かでしっぽり濡れてきな」

と渡します。しかし子分達には煙管の雨もふってきませんから、なかなか濡れよう筈はありません。

しかしそういっても場所が場所です。

「どうせ遊ぶんなら気に入ったのを、選ぼうじゃないか」

ぞろぞろと連れだって、ひやかして歩きますが、なかなか眼うつりして、さてどの女ともきめかね、やれ丸顔がいいの長いのが好きだのと、みんなで御託を並べるもんですからきまりません。

そこで行きつ戻りつ、戻りつ行きつして居りますと、

「みて見ねえ。まるで野良犬みたいにほっつき廻っているのは花川戸の助六の所の子分どもじゃねえか。助六が三浦屋へあがって温っていやがるってえのに、あいつらめきょろきょろ何か落っこっちゃあいねのかと、ほっつき廻っていやあがる」

と、聞えよがしに悪口をつかれ、

「なにをいってやあがんでえ。てめらみたいに女ならどんなんでも結構だと、胯倉急ぎしゃあがる唐変木とは、こっちとらあは違うんだ。まず顔を吟味、下の具合もとっくり観相の上であがろうと、それで悠々としてるんだあ」とやり返しますと、先方の一団は、

「きいた風なことを抜かしゃあがるな。われら神田紺屋町で刀術を教えていなさる鳥居忠左衛門先生の高弟で、人にも知られた狐の勘次」「おりゃあ一刀流免許の狸の太郎」それぞれ口々に喚きまして、

「おれたちに楯をつきゃあがると、どんな目にあうか、てめらだって知っていようが」

と、くってかかる有様。そうしておいて、

「やい、申し訳ありません済んませんと土下座してあやまりゃあがれ」といいたい放題。

「ううん」とこれには助六の子分一同、相手が悪いと互いに顔を見合せました。

と申しますのは幕末まで町道場などが、さもあちらこちらに有ったように伝わっていますが、あれはみな作り話で、そうしたものは小唄や踊りの稽古場みたいに、やたらに有った、というものではございません。

なにしろお上が十手に六尺棒だけで治安を取締ろうというのに、民間の者がヤアヤアお面お小手などという斬り合いの物騒な稽古など、お膝許の江戸では許される筈などありません。これは当今でも何処かでゲバ棒道場や、火焔瓶投擲練習場など民間人の手で作れないのと同じことでございましょう。つまり道場と名のれるのは、地方では、御関所や代官所の御用を託されているのか、ご府内にあっては南北町奉行所の御用をうけたまわって捕方に棒術を教えるところと決っていました。

それゆえ、そこの門弟といがみあっては（背后には町奉行所の目があるから、どんな仕返しをされるか判らない）後の祟りがうるさかろうと、ふだんは喧嘩っ早い花川戸の子分たちも、うんうん困って居りますと、このとき天の助けか、

「尺八を背にさしたあんしゃんたち……この前、おまえたちのを尺八してあげんしたは、わちきたちでありんせんかえ。店を忘れなんして、まごまごしていなしたのかえ」と、てまえの店から女郎たちがとんで出てきて引張りこんだ。これにはあっけにとられ、狐の勘次も、

「まんまと、とんびに油あげをさらわれた」

「これを汐に花川戸の一家を叩き潰そうと思うたに、とんだところへ邪魔が入った」と鳥居忠左衛門の他の門弟共は口惜しがりました。

でっちあげ召捕

「これはこれは市郎平親分とこの姐さんじゃござんせんか。なんで又こんなに早うお出でなすった。お使いでも頂ければ、この助六がお伺いしましたものを」とびっくりするのに、

「わたしゃ、うちの人と連れ添って四十年あまり、もう六十の本罫返りだというのに……お前のおかげで三下り半をもたされ、出されてきたんだよ。どうしておくれだえ」

かみつかんばかりに歯のもげた口で、もごもごいわれて助六もびっくり仰天。まだ吉原の三浦屋から朝帰りして戻ってきたばかりのところだから、なま欠伸をかみしめつつ、

「いってえぜんてえ何んのことでござります」ときいたところ、

「助六さん、おまえは男を売る稼業に女房は禁物と、子分衆にも妻帯を禁じていなさるだろ。そこで昨日なかま内の寄合いが橋善であってね。花川戸助六みたいな男の中の男になるにゃあ、やっぱし女房は足手纏いだと、わたしゃ離縁されてきましたのさ。どうしておくんなさいます」と強談判。

「といっておたくの市郎平親分はたしか七十。いまさら男を売るのなんのと……」と苦が笑いしてますと、そこへ、子分の一人が、

「新川の吉五郎親分の姐さんと東両国仁吉親分の姐さんがみえやした」という注進。

血相かえて乗りこんできた姐さん達は、子分の取り次ぎを待っているのも戻かしそうに、さっさと履物をぬぎ奥へ通ってきてしまい、そこで二人の女房も口を揃えて、

「助六さん、おまえが女房をもたないばっかりに、私たちまで男を売る稼業に女はいらないと出されて

きたんですよ。一体この仕末どうしておくれだい」と、初めの内にこそ畳叩いて文句をいっていたが、しまいには、武者ぶりついての大騒動。それだけでも助六が往生しきっているのに、

「次々と親分衆の姐さん達が押しかけてみえて、とても入りきれないから表で行列をつくって待って貰ってますが、中には〈女性の敵〉とか〈助六よ揚巻をひかして女房にしろ〉〈女房をいやがる男が増えたら女はどうなるか〉大きなしゃもじに字をかいたり、雨戸にかいて心張り棒でおっ立ててきたのもいて、わっしょいわっしょいやっとります」との泡をくった子分どもの話。

助六も立っていって表をのぞくと、これは大変。長年つれ添う亭主から三下り半をもたされ、出されてきた女達は血相をかえ、

「われわれから女房業をとりあげたら、何になれというのか。失対方策はあるのか」とアジ演説をするのも居るし、

「三食ひる寝つきの女房業を、われらから奪うな」目の色までかえてたいへんな騒ぎ。

いくら男を売る助六もこれでは堪らない。

「まあ、まあ待っておくんなさい……女がひとつ家に居るのは、うるさくてやり切れない。どうせ入用なのはあの時だけだ……とたかをくくって、その気になった時だけ用いに行っていた、わっしの独身主義が、他の親分衆に羨しがられ、こんな騒ぎになるとは、ちいとも知りませんでした」

そこで女房を持たず必要な時だけ吉原へ行っていた生活をやめ、三浦屋の揚巻太夫を落籍して妻帯。子分達にも尺八をふいてくれた春巻や信田巻、ごぼう巻といった女郎衆をそれぞれ当てがってやって、助六一家も今でいうマイホーム主義となりました。

もちろん後になれば喧嘩でもしあうようになるのでしょうが、なにしろ初めの内は、

「前みたいに、一回いくらと、やり手婆に揚げ銭の他に、祝儀まで取られなくても致せるんだから、これは有難やまのほととぎす」

「女房にしてからは、前のように廻しをとられ、ちょっと出て行ったきりで、朝まで戻ってこねえような事もなく、口をあけて朝まで一緒に寝ていやがって、甚すけすることもなくなって嬉しいわい」

と子分たちも皆すっかり喜んで花川戸一家は泰平となりました。

処がある日のこと、身うけされ助六の妻となった揚巻が、そっと、

「……実は、わちきの父親新兵衛というのが鍛冶橋御門外で、おでんかん酒の屋台をやっていますが、何といってもよる年波……」いいにくそうに打ちあけてきました。

「ふうん。そうか、そいつは知らなんだ。が、おまえの父つぁんならこの助六にも親爺さま」と、そこは気のよい男なので花川戸へ引取ることを承知しました。そこで使いをやりますと、

「有難いこっちゃ、これも娘を吉原へ売っておいたからの事じゃ。こんなことなら女の子をもっと沢山つくって片っ端からみなお女郎にしておけば、遊びにゆく世間の男も助かったろうがわしも助かった」

などと喜び、それまでの屋台道具一式を古道具屋へ叩き売り、その銭でこざっぱりした物を身につけ、新兵衛は花川戸へ参りますと、

「この爺さまのおかげで、おれたちも女房が貰えたようなものだ」と、みなが、ご隠居さまご隠居さまと新兵衛を大切にする。助六も出来た男ですから、

「阿父(おとっ)つぁん、阿父つぁん……」

と奉ってくれます。そこで新兵衛も喜んでいますと、月にむら雲、花に風のたとえもありますが、役人がやってきて、

「御用だッ。新兵衛というのは居るか。去年の暮の二十九日。神田三河町の質屋伊勢屋重兵衛へ押入った強盗の疑いで召捕るぞ」と新兵衛を高手小手に縛りあげつれて行きました。

助六は仕事で留守をしたが戻って驚き、「あの父つぁんに限り、そんな馬鹿なことはない」と奉行所へとんでゆきますと、鳥居忠左衛門の門弟の狐の勘次と狸の太郎の両名が、すぐさま役人に、

「助六というのは三浦屋の揚巻を自分が身請けしただけでなく、子分共にもそれぞれ落籍させ配給しましたはこれは合計しますると実に莫大な金……こりゃ伊勢屋へ押し入った大泥棒の本星は爺の新兵衛ではなく助六らしゅうござる」と耳うちした。

「そうか、それならば助六を召捕って牢へ入れてしまえ」ということになりまして、新兵衛は戻されましたが助六が代って捕えられ入牢ということになってしまい、

「私というものがここへ嫁にきたばっかりに、助六さんには無実の罪でえらい災難。さて、どうしたものだろう」起きては泣き、寝てもさめざめ泣くという揚巻の悲嘆のくれよう。しまいには、

「いっそ、死んでお詫びするしかない……」

と花戸川の家をそっと抜け出し、身投げするつもりで大川端へと向いました。

仁俠小伝次

青い十三夜の月の浮びます川の流れを見詰めながら、袂へ石を入れて重しになし、揚巻が、

「なむあみだぶつ……」と身を投じようとしましたところ、

「早まっちゃいけねえ」と柳の木蔭からとんできた男が抱きとめ、淡い月の光で顔をすかし眺め、

「おやっ、おいらんじゃねえか」と声をかけ、

「おめえは浮川竹の勤めの身だったゆえ、日に何人と客をとっているのだから、一々男の顔など覚えもなかろうが、おれも抱かせて貰ったことのある咎な野郎で、奥州伊達生れの牛若小伝次って小悪党だ」

と名のり、それから優しく、

「いってえ、どうしたわけか話してみねえ」親切に声をかけてきました。

さて、女というのは、勝手なもので、いくら肌身を許しても好きな男の外は、まるで竹輪ぶでも口ん中へ入れて頬ばりしゃぶった位にしか、思わないものである。

牛若小伝次なんかもその口でそうしてなんした覚えさえ碌すっぽない相手だが、男というのは、たとえ一度でも抱いた女は忘れないもので、まるでてめえの女のような錯覚まで起しがちのものである。だから小伝次も同じことで、助六入牢の件をききますと、すぐさま勇みたち、

「よっしゃ、蛇の道は蛇ってこともあらあ。ひとつおいらが本星を見つけてやろうじゃないか……が、おまはんも吉原へ行って昔の朋輩衆に助っとして貰いなせえ」

と、すっかり親身になって花川戸まで送ってくれました。そこでこれには揚巻も気を強く持ち直し、

「……考えてみれば吉原にいた間、日に五人はなんしていたから、年に千八百人の数。それに十七の年から身を沈めての六年越しゆえ、このわちきには延べ一万からの相手がいたことになる筈」

と指おり算え、まず住所の判っている男たちの許へ、去年の暮れの伊勢屋の強盗の心当りや聞いた話

はなかったかと、上が紅で染めてある艶っぽい巻紙に文をかいて差出し、今でいう公開捜査に踏みきりました。

さて、これを受取った男たちはみな已惚れ気から、

「揚巻太夫からとは懐しいねえ。おれにまだ気があったのか。さりとは喜ばしい」とか、「一ぺんこっきりの俺を覚えていてくれるなんざあ、嬉しいねえ。頼まれりゃ越後から米つきにだって出てくるってじゃねえか」

といったあんばいで、それぞれ神田三河町へ集って、どんな野郎が押しこみに入ったか聞きまわっての大騒ぎ。やがて、

(三人組で親玉は先生)とよばれていたってな事も花川戸の揚巻のところへ、昔のご親類すじの男が、次々と捜索し知らせて参りました。

牛若の小伝次も一晩だけだった仲ですが、それでも引き受けたからには、あちらこちらへ潜りこんで調べての結果を、猫のように屋根伝いに忍んできては、

「おいらん、こりゃあ、どうもやっとう使いの神田紺屋町の鳥居忠左衛門ってのが、臭いやねえ」

と教えにきました。そこで揚巻も、はっと思い当り、

「私も忘れていんしたが、そういえば鳥居というお侍は、わちきを落籍そうとしていたことを、後できんしたえ」と訴えました。

「そうかい話の筋はよめた。かなわぬ恋の意趣ばらしに役人と組み、でっちあげで御牢へ入れやあがったんだ。まごまごしていると助六さんは殺されるよ」「ええ、それは一大事……おうそうじゃ、これからなりと、わちきは御奉行所へ駈け込み訴えに行きんす」

と立ち上りかけるのを、屋根の上で腹ばったままの小伝次は、

「待ちねえ、奉行所の役人もぐるでやってる事だ。それより証拠をまず先に揃えなせえ。せいては事を仕損じる」と、いい残し闇の中へ吸いこまれるよう消えました。

さて、手証を揃えてといわれても、これは花川戸に坐って居ては何んともなるものではありません。そこで駕籠をよんで吉原へ行きますと、鳥居忠左衛門の門弟たちがよく登楼する松葉屋へゆき、

「なんとか、うちの宿六ならぬ助六さんを助け出さないでは、この身が立ちませぬ」と頼んだところ、女は女どうし、やつれはてた揚巻の風情にすっかり同情したその店の女郎たちは、

「まあ、わちきらに委せて居ておくんなまし」と請合ってくれました。

さて、そうとは知らず鳥居忠左衛門の伴をして、又も吉原へくりこんできた狐の勘次に狸の太郎は、いつものように松葉屋へ登楼。

「間夫は引けすぎというが、早うに来てやった、嬉しかろ」

「あちらこちらでもてもてで仕様がないが、馴染の其方の許へ来てやったんだぞ」

二人ともいろいろと恩にきせ、さて、いよいよ行動開始をしようと致しますと、敵娼の女はいずれも大根より太い脚をより合せた儘。押せども引けどもセメダインでくっつけたように開こうとはしない。

「おいおい、好い加減にせぬか……」

「いやでありんす」

「何がいやじゃ、導入反対とは怪しからぬではないか……これさ、まじめにやれ」

「いえ、オフリミットでありんす」
どうしても、いつものように迎え入れようとは致しません。これには、ほとほと手をやき足をやき、くさらされてしまい、
「こういう時に、どうしてひろげるかは一刀流の免許の中に入っとらん」
「神蔭流の極意に、押さば押せ、引かば引けというのがあるそうだから、待っていようか」
と仕方なく待機の姿勢でいますと、やがて聞えてくるは吉原田圃からのコケッココと一番鶏の鳴声。すっかり、じらされてしまった二人は、眠さは眠し、まだの事は致したし、ほとほと困惑しきってしまい、
「われらが他の女ごにもてるは、男っぷりが良いゆえ。そう悋気を起さんと頼む」
などと尖った狐づらを畳にすりつければ、隣室でも、
「なんでもいうことを聞いてやるから、此方のこれを……」と、現物をつき出して見せているようなそんな有様。
さて、こうなると二人の敵娼はここぞとばかり、
「去年の暮にぬしさんは、神田三河町伊勢屋の仕事をすれば、たんまりお宝が入るから、正月の晴着を作ってやるといいなましたが、あれっきりではありませんか」と双方の部屋できびしく責めたてました。そこで、
「そげえな約束をしていたは忘れとったが……伊勢屋へ押込んだ稼ぎは、みんな先生が懐ろへ入れてしまわれたのだ」

それぞれ二人ともやむなく本当の処をつい白状してしまったのを、そっと廊下で聞いていてくれました松葉屋のお内儀が証人となり、すぐさま恐れながらと訴え出ましたので、奉行所の役人と組んで悪い事をしていた鳥居忠左衛門も、ここに悪運つきてついにお召捕り。
新兵衛の身代りに入牢していた助六は無罪放免となりまして、揚巻の働きと共にますます江戸市中に、花川戸助六の名をあげましたというお話……もちろんデフォルメです。

金看板甚九郎

め組の喧嘩

〽水茶屋の女くどくは二十文〽というのが有ります。料亭へあがって妓をよぶにしろ、吉原や千住の遊廓で遊ぶにも、それ相当な掛りが致します。ところが出がらしの渋茶を、一杯もってくるきりの水茶屋娘は、齢も若くすれて居ませんうえ、茶代を二十文もはずめばニコッとして手を握らせ安直でございます。

まあ当今で申しますなら、酒場やナイトクラブの類でお高い洋酒を飲むより、純喫茶の看板のお店でコーヒー一杯でねばって、そこの女の子を引っかけてしまうのと同じ趣向。

クイック・アンド・イージーってのが色ごとにも持てはやされるのは、今も昔も変りありませんから、芝神明社の境内にも、「黒猫」の「タンゴ」のといった看板はありませんけれど、あんこをべったりつけた「黒ねり団子」の店の脇に、水茶屋が軒を並べております。

さてその一軒よしやへ入ってきましたのが土地の町火消し、め組の袢天をひっかけた富士松。よしやと看板のでて居る店ですから、よしゃ良いのにこの男、女房持ちの癖して、

「なあ、お花、使ってへるもんじゃなし、浮気をしねえか」

やぼなくどき方をしております処へ、入ってきましたのが同じめ組だが纏持の弥助。苦みばしったいなせな男ぶり。これが見るにみかね、

「見りゃアまだおぼこい生娘じゃねえか。よしねえ」

と叱りつけますと、富士松も照れてしまってそれからは来ても尻をさすることもなくなりました。そこで、お花は、弥助に対し、

「……なんて頼もしい男だろう」

と想ったのが始まり、さてそれからというものは、寝ては夢起きてはうつつ幻のといった具合になり、また弥助も若い男のことゆえ、そのお花の気持が嬉しくて通ってきます。

だからお花はますます胸の高鳴りを覚え弥助のきた日は、暗くなっても夢いまださめやらぬ想いで、

「月が鏡であったなら、いとし貴方の面影を……」などと口ずさんで居ります内に、若い男と女のことゆえ何処の深みにはまったか判りませんが、二人とも深い仲となってしまいまして、

「ねえ、忘れちゃあいやよ、忘れないで……」

といえば弥助とて憎かろう筈もなく、固く抱きしめて、

「誰よりも誰よりも、おめえを愛す……」と人目忍んで逢瀬をもつようになりました。

ところが、水茶屋のことゆえ千客万来。

神明社の境内に勧進相撲が開催されますと、そこの連中も参ります。横綱は信州小県郡大屋村出身の雷電為右衛門ですが、大関は四つ車の大八。さて当今はテレビ時代でお相撲さんも、見てくれのよい好男子ばかりですが、昔は鬼瓦みたいな恐いのばかりで、

「……おす」

彼らのような巨大漢にのしのし入って来られますと、お花のような若い娘は盆をもつ手が震えて落しかける有様。

が、なにしろ相撲取りといいましても、雷電は出雲の松江侯のお抱え。四つ車は四国の蜂須賀侯お出入り。その下の連中もめいめい御ヒイキ筋が有りまして、そのため金廻りはきわめて良ろしく十文の茶代に銀の小粒一つも放りだし、

「ごっつぁんです……」

と戻ってゆくから、水茶屋にとっては大切な上得意。

ですからお花も貰うお宝のてまえニコニコ愛想をよくしていますと、四つ車の弟子で水引清五郎、という前頭三枚目をとる獅子っ鼻のどんぐり眼が、

「おりゃアおめえが好きだぜえ」

ともちかけてきました。そして日に何度も通ってきては、こ当りに、

「どうでえ。どうでえ」とつつきます。

向うは何も力を入れてというわけではなく、撫ぜられるだけですが、突かれると飛び上る位に痛い。

それにこれが、当今のはしたないスタンドや、キャバレーあたりの女の子でございますと、

「好きなひとならいいけれど、貴方なんか百万円くれたっていやあよ」と千円位でも恐れいる御面相のがタンカをきりますが、昔の娘さんはそんな具合には男に恥をかかせません。唯もう恥ずかしそうにお花もうつむき、縁台にのの字をかいては風になびく枝垂柳の風情。

そこで通ってくる水引清五郎も、

「ありゃア俺に満ざらでもねえらしい。女ってのは強い男にひかれるッてえがどうやら俺にホの字らしいなあ」

ものは取りようで一人で意気がってしまい、稽古の合間、勝負の後先に、お花のいる茶店へ通い詰め、しかも根気よくねばりますから一日に何十杯もの出がらしの茶を呑みます。

「これ清五郎や、おめえの腹は近頃ガボンガボン鳴っているが、まさか腹の中で金魚をかってる訳でもあるめえ」

と師匠の四つ車大八に意見されましても恋に狂った男心の一念で、

「相撲は身体を大きくしなくちゃと、師匠にいわれ腹の皮をひろげ延そうと、中から拡張工事をして居りますんで」

いい逃れまして又もやりこりもせず茶店通い。その内に、

「ここの勧進相撲も後二日で打ち止め。すぐどさ廻りの花相撲の興行に出なくちゃならないに、なかなか首尾できぬがどうしようか」あせりが出て参りまして、

「よっしゃ、こうなったら相撲四十八手も、あっちの裏表四十八手も絡み合う分にゃ同じこった」

よからぬことを決心してしまい、その日の夜。お花が店先へ葭簀を張りめぐらし、住居へ戻ってゆくあとをつけてゆき、人影のない所を見計いまして、むんずとばかり四つに取っ組んで、

「まってえ……」とお花が悲鳴をあげるのに、

「立ち会ってしもうたからには、待ったなしじゃ」無理やりに脚で脚をこじあけ、浴びせ倒しに転して

とうとう上へのってしまいました。

甚助・甚九郎

土橋丸屋町に住って居りまする口入れ稼業の甚助とよぶ男。なんでこういう名になったかと申しますと、これにはわけが有ります。

吉原から身請して嫁にしましたのが、お職まで張っていた器量よしで馴染も多く、せっかく親許身請の恰好で値切ったにしろ、たいまい三十両という資を出していますのに、どうも前の男から呼び出しをかけられると、いそいそ出ていきまして何かをしてくる気配。

これでは亭主としては気になってなりません。

あちら立てれば此方が立たず嫁の見張りにかまけて、稼業の方はつい放ったらかし。そこで当時はジェラシーのことはジンスケと申しましたので、これが呼名となってしまったという次第。

さて五年たって、苦界勤めをした女には珍しく女房が身重になりまして、丸々とした男の子をうみ落しました。

隣り近所の者や、子分方の者達が打ち揃って口々に、

「おめでとうごぜえやす」と祝いにきましたが当人は喜んでいいのか悲しいのか、てんで自信がなく、皆が立ち戻った後、

「これさ女房。われが産んだ児は俺が種か」と寝ている処へ尋ねにゆきますと、

「なにをいってんだい。私ゃお前の女房だろ。その女房がうんだ児は亭主の子と決ってるじゃないか」

てんで相手にしません。しかし人間の子を一人養ってゆくのは大変なことなので、念には念を入れ、

「おれはときたま出かけてゆくおめえの後をつけ、何も彼も知ってるんだ」と睨みつけましたところ、女房はうるさそうに、

「そんな事は時たまだが、亭主のおまえとはしょっちゅうじゃないか。数からいっても多数決、文句をおいいでないよ」とあしらわれました。そこで甚助は、

「廓に居た頃は、ありんす言葉で色っぽかったが、がきをうんでからのガラッパチぶり。女とはこうも変るもんか……」

すっかり立腹しましたが、身請けする時に掛った三十両を思い出すと、

「あんな女にゃ未練はないが、出した小判が惜しくてならぬ」と何事も辛抱し、その子を吾児として育てあげましたが、名前だけはどうしても意地をはり通して、

「甚が苦労したんだから甚九郎……」と命名をした。

やがてその子が十六歳になった寛政八年。女房に浮気をさせまいと一人で何人分も気張りすぎたのが、どうやら過労の原因であわれ死去。

そこでまだ若い甚九郎が二代目となって稼業をつぎましたが、

(散々、女に苦労して死んで行った親爺のことを、仇やおろそかにしてはいけない……おれは金輪際女になんか迷うこっちゃあない)と、脇眼もふらずに仕事に精を出しました。

さて、男というものは女に煩わされないと仕事の能率もあがるもので、

「土橋の甚九郎に頼めば、間違いなく人手は揃えてよこす」

とあちらこちらで評判になり、甚助の頃は、しがない桂庵みたいな口入れ屋だったのが、甚九郎の代になると、やがて次第に大きくなり、現在の飯田橋職業安定所なみの規模にまで拡張。子分の数も増えてきまして、

「お大名の口は此方へ一列に並ぶ。阿波の蜂須賀さま御国入りの行列の供揃いの欠員補充だよ。踊る阿呆に見る阿呆。えらいやっちゃと、四国へ行くと向うの女ごに凄くもてるよ」とか、

「町方へ奉公したいのは、此方へ順に並ぶ。火事の好きなのはいないか。め組の町火消で六人の口がある。いなせな恰好で、子守っ子の阿魔なら直ぐ引っかけられるよ」

「女は柱の向側へ並ぶ。三食昼寝つきお手かけさんの口があるよ。相手はさる大身のお旗本だが、もう七十歳だから女の道具はあまり痛まず、貰うだけの物をためこんだら、新品同様で何処へでも嫁にゆけ直せるお徳用の口だ」

まるで喧嘩でもしてるように喚きあって、働き口を求める男女を子分の者がさばきますのを、甚九郎も大福帳と矢立を手に指図して居ります。するとそこへ、富士松がやってきて、

「親方、お手がすいたら話をきいてやっておくんなせえ」声をかけてきました。

そこで甚九郎が何事かと、

「ここは騒々しい、裏から廻ってきな」と川べりの住居の方へつれてゆきますと、

「喧嘩をする頭数を世話してやっちゃア貰えませんか」いきなり切り出してきました。だから面喰って、これには甚九郎も眼をむき、

「いくら人の口入れ稼業が商売にしろ、喧嘩の助っとの世話なんか出来るもんかい」と一喝しました

が、どうも唯ならぬ様子。そこで、

「まあどんな事情か……話してみねえ」

いわれて富士松は口惜しそうに噴き出る涙を拳固でこすりながら、

「まあひとつ聞いて下せえ親方さん……わっちの兄いの弥助のレコが神明の水茶屋で働いてましたが、昨夜店をしめての戻り道。まるで車力にひき潰された蛙みてえに、白い跨倉ひろげての最期。余っ程重たい物に押しつぶされたらしいと、あたりを見渡し調べた処、落ちていましたのが相撲の使う大判の膏薬のひっぺえ剝し。そこですぐさま神明の勧進相撲にかけつけ、終りかけの相撲を眼を皿にして見ていると、膏薬のはがれたのが土俵へ上ってきた、行司の名のりでは、シコ名を水引清五郎とよぶ雲をつくような大男……てっきり、お花にしつこく云いよってきていたこの男こそ、押し潰してしまった犯人に違いねえんで――」と訴えてきました。

「そうかい。弥助とやらにしてみれば、てめえの女の仇討ちなので、公私混合して組の者の手は借りられねえ。そこで、ここへ申しこめばすぐ人手が間にあうと評判のわっちの処へ来なすったのか」

いわれて富士松は手を合せ、助けてやっておくんなせえと拝む仕草をくり返し、

「親方なんとか、ひと肌脱いでやっておくんなせえ」

と頼みましたが、甚九郎は首をふって、

「人殺しってえのはお上のご威光で、町方のお役人にしょっぴいて貰え、ちゃんとしたお裁きもして頂ける。てめらどうしで勝手な真似なんぞしちゃあいけねえよ」年は若いが貫録をみせて懇々といいきかせました。

神明の大喧嘩

見るにみかねて出かけて行った弟分の富士松が戻ってきて、
「甚九郎親方が委せな」というので、その日はひとまず待って居りましたが、翌日になっても何処からも改って沙汰はありません。いらいらしきった弥助が堪りかねてしまい、
「勧進相撲は今日が千秋楽。この儘じゃあ、やつらは風をくらって旅興行へ出てしまうじゃねえか」
と、やきもきしてますと、
「町方へお願いしても、神明社境内で興行している相撲とりは寺社奉行さまのお係り、それでもたついて居るんじゃござんせんか」
富士松も慰めてはみましたが、やはり気が気でなく、弥助の眼玉は真っ赤に血走って居ります。
なにしろ当今とは違いその頃は、百姓は勘定奉行、町人は町奉行。神社やお寺関係は寺社奉行と分れていましたので、町方の月番の南町奉行所へ届けでても、おいそれとゆくわけが有りません。が、そうは承知していても、
「こうなったら、おいら落着いて待っては居られねえ」すっくと立ち上った弥助は豆しぼりの藍の香が、ぷうんと匂う手拭で向う鉢巻。長い鳶口を背中に挟んで尻端折り。たったっと一人で神明社境内めざし駈けだしました。
こうなりますと富士松も放ってはおけませんから、
「おうい……待ってくれ」六尺棒の長鳶を担いで後を追いかけました。

すると、仲間内のことなので薄々事情は察して居ります連中が、
「それッ、二人だけでやっちゃ危ない。俺たちもついて行かざあなるまい」というので、てんでに手鳶をひっ摑んで走りだしました。
さて相撲の方は今日が千秋楽のことゆえ、いつものような時間稼ぎの仕切り直しも繰り返さず、とんとん勝負をかたづけてゆき、羽後秋田在五十目村出身の大関四つ車大八と、日の出の勢いの雷電為右衛門の結びの一番となっていました。
「双方見合せて、はっけよい残った」行司が紫房の采配をふりあげて、うまく立ち会わせますと共に二メートルに近い巨体をぶっつけあって、火花の散るような取組み。
なにしろ四つ車は、かつての横綱小野川喜三郎に土をつけ、引退させてしまった程の怪力ゆえ、雷電の猛攻をぐっと堪えて揉みあっている最中。
そのときワアッと聞える木戸口の喚声。
その内に蓆で張ってある相撲小屋の外壁が、鳶口を引っ掛けてむしられてゆく有様。これには場内立錐の余地なく詰っていた観衆も、風がすうすう入ってくるから、
「これは大変だ。今日が打ち止めとは知っていたが、もう小屋を畳んでしまうとは気が早い」
と外を覗きますと、め組の纏がみえ、火消しの連中の怒鳴る声がきこえてきます。だから場内の客はますますびっくり仰天。
「こりゃいけねえ火事らしい」てんでに外へ飛び出し泡をくって、クモの子を散らすように一目散に居なくなりました。

そこで、これには土俵の上の二人も、がっちり四つに組んだままだが、顔と顔がくっついているからして、互に額をすりよせ、

「こりゃあ、いったい何んじゃ」

「うん、お客が一人もいなくなっては取組んでもおられんのう……」

といっている処へ、め組の連中の引張ってきた龍吐水の筒口からシャアと浴びせられました。

「……水が入った」と四つ車の大八が勝負をやめ外へでますと已れの弟子の水引清五郎が、まわし一本の姿で丸太をふり廻し、暴れて居るところ。

そこで大関の四つ車は、義をみてせざるは勇なきなりと、

「事情はわからねえが、弟子の清五郎を庇ってやらざあなンめえ」席をめくり取られ裸で立っている丸太を、左右の手に一本ずつ引き抜き、これを水車のようにぶん廻しました。

だから富士松は弥助と一緒に、もうひと息で清五郎の脳天へ鳶口を叩きこめるという処を邪魔されてしまい、

「この水ぶくれめ……」憤然と掛っていきましたが相手は怪力の四つ車。やっつける積りがやっつけられガアンと頭へ一発。

「ううん」と一声。まるでザクロみたいに頭を叩き割られて、その場で即死。

こうなるとめ組の連中も、人数がすくないのに気づき近くの火見櫓へとんでゆくと、カアンカンカンすりばん叩きに半鐘をうちならす。すると界隈の火消し連中がそれを聞きつけて、

「それッ神明さまで火が出たらしい」

てんでに火事装束で集ってきましたのが三百六十と五人。

これに対し相撲の方は横綱雷電以下フンドシ担ぎまで入れ六十と三人。これが入り乱れ、血しぶきをあげ、共に引けない男の意地と、各所に分れあっては互いに一歩も引かずに血塗れになっての対決。

「この泥さらいめ、くたばりゃあがれ」

「生れ損いのでぶ野郎め、覚悟しろいッ」

互いに鳶口と丸太をふるっての大乱闘。

弥助は、けんか屋の金八や、こいさみ勇次らの力をかりて、ようやくのことで清五郎の土手っ腹に、鳶口を叩きこみ、ひるむところを寄ってたかって、顔から肩へ穴をあけて仕止め、

「お花みてくれ、仇はとったぞ」怒鳴りましたところ、これを聞きつけた四つ車が、おのれ弟子の敵をとらんと駈けこんで参り、

「フンサイ。フンサイ」とばかり左右の手に握った長い松丸太で金八と勇次の二人を叩きのばし、ぐにゃぐにゃにしてしまうと、

「今度はうぬだ……」弥助めがけて殴りつけてきました。

が、このとき、旅へ出ていました小天狗の長吉とよぶ弥助の舎弟が、半鐘の乱打に駈けつけて参り、この場の危急をみてとると、見上げる程の巨漢の四つ車の大八をものともせず、

「同じ血をひく兄弟よりも固い契りの……」といいざま四つ車に掛ってゆき、脳天に鳶口を叩きこみますと、ふらふらしながらも四つ車は、

「やりやあがったなッ」四つ輪の荷車をもちあげ殴り返し、長吉は眼の玉をとび出させて即死。

修羅八荒。もはや手もつけられぬ屍山血河の有様となったところへ、神明下の当時名代の生薬屋万金丹本舗の二メートル余の金色大看板を担いできたのが、その暴れ廻る中へ飛びこみ、

「待った、待った。この喧嘩、土橋の甚九郎にまかせなせえ」と割って入りました。

あまりの勇ましさに双方びっくりし眼をやりますと、これへ夕陽にはえる金看板の光がピカピカして、さながら矢でも射込れるよう。そこで双方ともに額に手をやり、

「夕陽のガンマンは……」とうとう我慢できかね、眩しそうに額に手をかざして、喧嘩はひとまず中止。

双方とも仲裁人に委せて落着し、金看板の甚九郎とよばれるようになった当人も、文化十三年まで長生しまして墓は麻布宮村町長安寺に今も有りますが、さてこの喧嘩の手打式の当日のこと。

折詰を神田の志乃田寿司から運ばせましたところ、め組の土地のせいでしょうか、同じ折詰なのに相撲側へ配られたのは、当時は安価だった海苔巻ばっかり。高価な稲荷ずしは火消しの方へ詰っていました。これには仲裁人の甚九郎も往生し、このとき口にしましたのが、かの有名な「鳶に油揚げさらわれた……」の、名ぜりふだそうでございます。

夢の市郎兵衛

糸屋の娘

「惚れるなら相撲は明石で、男は夢の市郎兵衛」

寛永年間の江戸八百八町にその名を謳われましたこの二人は、のち日本最初の横綱となった明石志賀之助と、固い契りの義兄弟の盃をかわしあったる人入れ稼業の夢の市郎兵衛。

これが二人とも恰幅が良く頗る男前ときています。そこで連れだって歩きでもしようものなら、これまた大変とんでもない大騒ぎ。

「ちょっと見てごらんな好いじゃないか」

「ほんに堪らないねえ、むずむずするよ」

「あんな男に一度でよいから抱かれたい」

岡惚れといいますか群集心理と申しますのか。女という女は、鍋やお釜を火に掛けているのも忘れ、ふっとぶように表へ駈け出しまして溜息吐息。気の早くゆく女は二人の腰の辺りに眼をやっただけで、もう堪らなくなってしまうのか、

「ああゆくゆく……」後姿を未練たっぷり見送りながら失神してしまいます。

当時の事ゆえ救急車などありませんから、明石の弟子や市郎兵衛の子分が戸板をもって後からついてゆき、道端にぶっ倒れた失神女を次々と収容し担いで、ゆくといった有様。

なにしろテレビやショッピングセンターもなかった江戸時代なので、若い女は他に気を紛らすこともなく、褌一つの明石志賀之助の一枚絵を今日のピンナップのごとく壁に張りつけ、

「このお方のこの下はどんなであろうか」と褌の所を指で撫ぜさすって妄想を逞しくしているような好きものの女も多うございますから、実物をみて引っくり返るのが続出しても不思議はありません。

さて日本橋本町一丁目糸屋庄助といいますのは、江戸でも指折りの豪商で奉公人だけでも百を越そうという大店。ここに娘が二人おりまして、これまた結構な美形。いずれが菖蒲か杜若といいたい絶世の器量よし。

ですから十四五の頃から引く手あまたで、

「どうかてまえの倅めにお輿入れ願いたい」と申込んでくるのが引き切らず、

「私どもの店の嫁になにとぞ頂きたいもの」と進物まで持って頼みに参ります。

さて、いろんな商家より貰いにきますが庄助にすれば、どちらかの娘に婿をとって糸屋の跡目をつがせねばなりませんし、それに掌中の珠のような美しい娘を、おいそれと他家へやる気も致しません。

また姉妹も親の家ぐらい居心地の良い所はありませんから、降るように縁談がきてもさっぱり嫁ごうとは致しません。そこで飴売りなどが、この評判姉妹のことを、

「本町一丁目の糸屋の娘、姉は二十一妹は二十、妹ほしさに御所願かけて伊勢に七度熊野にゃ三度……」

などと太鼓を叩いては唄い歩きます。が、流行歌にまでなるというのも良しあしのもので、嫁に欲しいと申し込んで断られた若者たちのやっかみでしょうが、

「あの齢になっても嫁入りしないのは、小野小町と一緒であすこに穴がないからだ」

「穴なしでしょんべんするたびに火吹き竹の細いのをさしこみ、それを下女がスウスウ吸い出してとってやっているって噂だぜ」

「まるっきりの穴なしではないが筆の軸がやっと入る位だから、親の庄助が姉妹を並べて寝かせ細い笹竹を入れては、大きくなれ大きくなれと掻き廻しているそうだ」

まるで穴掘りのボーリングでもしているみたいな風評がたち、これが面白いから次第に江戸中にひろまり、やがて庄助の耳へも入るようになりました。

「人の口に戸は立てられぬというが、丹精して育てた姉妹に片輪よばわりの蔭口がとんでは、こりゃ店の暖簾にも傷がつく。さてどうしたらよいものであろうか」

すっかり胸を痛めましたが、まさか年頃の姉妹をよんで、変な噂が出廻って心配だから、確めるため覗かせてくれぬかともいえません。そこで妻をよびよせ、

「そなたにはちゃんと有るのに何故娘らには無いと蔭口がたつのか。何か心当りはないか」と尋ねました処、

「さあ、大きくなってからは私も覗きこんだことは有りませぬが、赤児の頃は襁褓をかえるとき両脚もちあげ、開げた口をよう見ております。決して穴なしではありませぬ」

「成人するにつれ土砂崩れのような事があり、その穴がふさがったという事はないか」

焼野の雉夜の鶴と申しますが、子をもつ親心はいたましいもので額をすり寄せんばかりに、夫婦して心配致しましたが、なにしろ性教育を学校やテレビで教えなかった頃のこと。とても当人の姉妹をよんで露骨にあれこれ尋ねたり、間違いないか指でも入れて見せてくれぬかとは、いくら親子の仲でもいえません。

御前試合

さて低級講談などになりますと、寛永年間に、大久保彦左衛門が審判役を相い勤め、三代将軍家光の御前にて天下の剣豪がずらりと、きら星のごとく並び互いに技を競うというのが有りますが、これも誠は真赤な嘘。

元和元年大坂夏の陣で豊臣家を滅し天下平定致しました徳川家では、すぐさま治安維持に武家法度をだしましたが、追っかけ寛永六年十二年と続けざまに、

「鯉口三寸抜いたならお家は断絶身は死罪」の取締条令が強化されました。ですから、そんな御時世の寛永年間に将軍家みずからが、武術試合など見物なさる筈はありません。

ではまったくの出鱈目かと云えばそうでもなく、寛永十七年に御前試合のあった事が左大臣藤原教平卿の書にございます。

が場所は江戸ではなく京、御前といっても将軍さまでなく天子さま御上覧で、やはり武術の一種で有りますが角力の大試合でした。

「どうしたえ明石関。この頃とんと訪ねてくれねえじゃないか」両国相撲部屋へ市郎兵衛が心配して

顔を出しますと、

「うん。実は来る七月七日に京で御前試合があるが、これまでは東の大関がわっち、西の大関は京の仁王太夫と二本立てだったのを取組ませ、勝った方に肥後の吉田司家から、横綱という新しい位が出るんだそうな……」との話。

「そうかい。おりゃ仁王なんて野郎は知らねえが、お前ほどの怪力なら負けるこっちゃねえ。勇んで行ってきなせえ目出てえ事だ」

市郎兵衛が励ました処、明石ははらはら落涙し首をふります。そこで、

「どうしたんでえ、まさか怯気づいたとも見えないが」不審がって尋ねますと、

「京が地元の仁王はびた一文いるまいが、江戸から向うへ弟子共をつれてゆくとなりゃ、おれには百両って金がいるんだぜえ」

口惜しそうに肩震わせての打ちあけ話。これには腕には自信のある市郎兵衛も、なんともならず、

「えッ、そんなに金が掛るのか」聞いてびっくり夢の市郎兵衛も青菜に塩。口では、

「親の血をひく兄弟よりも固い契りの義兄弟じゃねえか、まかせてくんな」と、両国薬研堀を出ましたが、五両や十両ならいざしらず百両となっては借りにゆく当てもありません。

とぼとぼと一石橋を渡って北鞘町へぬけ、本町一丁目までさし掛りますと眼についたのが、糸屋の看板。そこで市郎兵衛は飴屋の唄を思い出し、そこで当ってくだけろと覚悟をつけ、

「まっぴらごめんなせえ」と入って行くと、番頭が、

「いらっしゃいまし。こりゃあ親方さん」と迎えますのに、

「折り入って旦那にお目に掛りたいんで、よろしゅうお頼み申しやす」と奥座敷へ通され庄助に逢いますると すぐさま、

「おたくの娘さんに縁談をもってめえりやした」と切りだしました。しかし庄助は手をふって、

「ご親切は有難うございますが、高望みして嫁にゆきそびれている娘ゆえ、せっかくのお申し出ではありますが」と、すぐ断りをいった。そこで、

「お嫁にお貰いしたいというのは実は明石関で……」

と名をだしますとこれには庄助もびっくりし、内儀をよんで、すぐ姉妹の意向をきかせますと、

「もう大喜びで是非ともゆきたいと、そない申して居ります」まるで自分が嫁入りするみたいに、内儀が真っ赤になって知らせにきました。

「そうですかい」

これには切羽詰って金策のつかぬ儘に飛びこんできてしまった市郎兵衛も、ほっとしたように合点はしましたが、

(なにも、俺は嫁入りの仲人口できたのではない。こうして此処へやって来たのは、もともと金ぐりをつける為だったのだ)

と思い直し、すこし厚かましい話だから次の機会にとも考えたが、なにしろ急場の入用で、延引もできぬから、

「御得心下さったものならば婿引出物に、百両がとこ貸してやっちゃあ頂けませんか」手を出しますと、

「うちの娘は穴なしだなどと噂が立っています。まさかとは思いますが金だけ取って、後になって肝腎な当人をやにが詰った煙管みたいに、通らない使えないと返してよこされちゃ堪りません」

そこは糸屋も商人のことゆえ、もしもの用心にと駄目押しをしてきます。

百両といえば大金ですから無理もありませんが、ここでもたついて居ては、せっかくできかけた話も水泡にきすと周章てまして、

「まあ何をいいなさる。明石関の得意は相撲四十八手の内でも突き落しに突っこみ、あれだけの力で捻じこめば穴はなくとも明きましょう」

「そういやあ、あの大きな身体で打ちこめば、掛矢で樽の栓口をあけるより楽なこと」

すっかり話が纏りまして百両を受取り、これで明石関の一行を出発させました。

処が二日程たちますと糸屋からの使い。

何事かと市郎兵衛が顔を出しますと、

「明石関は尊い天覧の場所前に女は禁物と、盃はあげたが肝腎な方は覗きもせずに、お弟子衆をつれて御発足。そこで娘や女房はとても気にやんで、それ以来ろくに食事も致しませぬ。親分あなたが仲人なんだから、娘をつれてゆき立会いで何んとか口明けをしてやって下さらん事には困ります」とのたっての相談。

旅費の百金捻出のためとはいえ、当人の明石関に一言の相談もせず、勝手に縁組をとりきめてしまったゆえ、

(それで彼奴め臍をまげ、祝言はあげたが……その晩なにもせんと出立してしまったのか。それとも穴

なしの世間の噂をまともにきいて、無理やりに、こじあける事もなかろうと、その儘で一夜を過したか、どちらかであろう）

と考えたが、市郎兵衛は糸屋に対しては約束してあるところゆえ、

「へえ場所が済みしだい明石関に、巌をも通す一念で頑張らせましょう」

そこでやむなく京上りを承知したところ、内儀は足弱だからと、その代りに妹娘がついてゆくことに話がなりました。

そこで市郎兵衛は、

「へえ大切なお娘ごを御預りしてゆくからには、道中で蚤一疋くわせるこっちゃあ有りません。ご心配なく」とその翌朝お江戸日本橋七つだち行列揃えてという程でもないが、三梃の駕でエッサホイホイと品川から川崎。

やがて箱根八里をこえて大井川を渡り、江戸から八十八里遠ざかった尾張の宮へで、そこから桑名へ海上七里の船にのりました処、

「見てみな。えらく器量良しじゃねえか」

「あんな別嬪を両手に花とは悪い野郎だ」

陸の上は駕で通してきたので人目にふれずでしたが、乗合船ではいくら市郎兵衛が隠そうとしてもそうはゆきません。唄にまでうたわれた姉妹の美貌は人目をひき、それを見せまいとする市郎兵衛が悪者扱いにされる有様。

ですから心配し桑名へつくなり名物の焼蛤にも眼もくれず、すぐさま駕を傭い京までの二十九里二十

町の道のりを、急げや急げと三日で乗りつぎ、粟田口から三条大橋までついた時はもう陽あしも落ちていました。

橋の袂の草州庵で京名物の普茶料理を食したのち、江戸相撲一行の宿を探しましたが、市郎兵衛も姉妹も京へ来たのは初めてゆえ、てんで地理が不案内。そこで道に迷ってあちらこちら尋ね歩いて居る内に、次第に夜もふけわたり東山三十六峰草木も眠る頃合いとなってしまいました。

「なんとか今夜の内にと足を棒にして探し廻ったが、こりゃ何処ぞで泊めて貰うて明朝のことにしましょうかい」と五条大橋の近くまで参りますと、いきなり闇を破って突如きこえる剣戟の響き。

「はて牛若丸と弁慶の立ち廻りにしては騒々しい」

びっくりした市郎兵衛が娘達を、柳の木蔭にひそませて近よってゆきますと、

「京所司代板倉重宗さま御手つきの者じゃ」と取り囲む役人に対し蓬髪の浪人の群れが、

「われら豊家恩顧の大坂浪人だ。天に一つの日があるごとくこの世に義理がなくてはならぬ」互いに丁々発止と斬り合っています。

そこで市郎兵衛は、

「あいやお待ちなせえ」両手をひろげてそこへ駈けこみ、

「わっちゃあ江戸からきた夢の市郎兵衛という吝な野郎だが、天子さまのお膝許でチャンバラはいけませんぜえ」とばかり双方をぐっと睨みつけました。すると、

「そういえば明日は女の天子さまが、男の裸のもつれ合いを御覧遊されるための天覧御前試合がある。その仕度もあるゆえ浮浪の輩など構うて居られぬわい」と引きあげまして、残った浪人共も、

「危ういところを千万忝けない」みな最敬礼して散ってゆきました。

日の下開山

さて話変ってその翌日。ときの帝明正さまは二代将軍徳川秀忠の娘和子姫が中宮として御所へ入られ生み奉った女一宮さまで、七歳の御即位にして、この時十九歳の麗しき女王陛下であらせられます。男のストリップなどお好みともみえませんが、関東より供してきています女官共が是非ともと御願い申しあげて開かれましたのが、この御前試合。

御会御殿に御簾をたれたもうて御座所。御鞠場にしつらえた土俵をかこんで御所内の女官、それに拝観を許された町の者たちは、行司が、

「東イ輪島」とやれば、わじまわじまと声援。行司が、

「西イ角島」と軍配を返しますれば、かくじまかくじまと声をからしての声援。

やがて最後の結びの一番に、行司が、

「西イ大関仁王太夫」と呼びだし奴の声で土俵の上へあがってきましたのは、その名の通り仁王さまそっくりな巨漢。身体中に針金のような剛毛がびっしりはえ、唇はクッションのごとく厚く眼はらんらんと燃え、さながらキングコングそっくりな有様。ところがこれに対し行司が、

「東イ大関、明石志賀之助」と名のりをあげましたのは、江戸八百八町の娘どもを悩殺させただけあって、肌は雪よりも白く顔は可愛く当今ならさしずめ佐良直美かピンキーかピーターかといったおもむきの美しい偉丈夫。

ですから正面の御簾の中からも、左右の女官も思わず溜息を、ヒヒインと馬の嘶きのごとく洩してしまい、これが交響楽のごとくに響きわたります。しかし控えの吉田司家は、天下泰平の文字の入った軍配をもったまま無念無想。処が明石に力水をつける弟子の一人が心配そうに、

「関取、相手の仁王は所司代さま御抱え力士ゆえ、これをぶち負かしたら、わしらは無事にとても江戸へは戻れぬ、という噂はまことでごんすか」明石に向って囁いてきました。

「うん」うなずき便殿脇の幕前を見渡しますと、それと一目で判る所司代の家来達が、肩怒らせじっと此方を見守っています。

そこで明石志賀之助も、噂というがさては本当の事だったかと気がつき、せっかく兄弟分の市郎兵衛が百両作って出してくれたのに、こりゃ申訳けないとは想いましたが、伴ってきた弟子達にまで飛ばっちりはかけたくない。次の機会に横綱のチャンピオンベルトは奪還すればよい。今日のところは負けてやるべえかと涙をのんで覚悟致しました。

が土俵で四肢をふんで向き合いますと、仁王太夫はもう勝負はついたも同様と獅子鼻をひくひくさせ、嘲るような薄笑い。これには我慢する気でいたのが辛抱しきれず、そこで、

「八百長反対」とばかり、まるで黒い霧をふっ飛ばすように、掛ってくる仁王をぶちかまし向う脛に蹴たぐりを掛け、よろめくところを持ち上げ、ずってんどうと砂をかませました。

「勝負あった」と行司から、勝名のりをうけた明石はその場で、注連縄はった横綱を拝領。ついで、

「日の下開山、日本一」の薄墨の女房奉書を賜るの栄に浴し、感激して弟子共と御所を退出。

さて、酔ったような気分で坊城小路まで出て参りますと、いきなり、

「御用だ」「神妙にさっせ」と捕方の群れ。これには愕き、
「何をしゃあがる」傍にあった牛車をエイッとばかりに持ちあげ、これを水車のごとく振り廻せば、そこへ負けた仁王太夫が弟子共を引きつれ、
「先刻の遺恨思い知ったか」手に手に大脇差をもって斬り掛ってきます。
これには素手で戦っていた明石の弟子共も追い散らされ、今や牛車を振り廻す明石関のみが取巻かれた恰好で、すでに風前の灯。
この時かけつけました夢の市郎兵衛が、姉妹は怪我をさせぬよう遠くへ残し自分一人が道中差をひき抜き、駆けこんでくるなり、
「やいやい多勢かかって何んて汚ねえ真似をしやがる」当るを幸いバッタバッタと斬りまくりますと、それまで樹蔭に匿れていた板倉の家臣団が、
「王城の地を汚す不届き者め叩っ斬れ」と押寄せてきます。
味方は二人なのに、敵は多勢で黒山のような有様。
「こいつはなんともなるめえ」
さすがの明石志賀之助も力つきて、牛車を向って来る連中に投げつけ、後は落ちていた丸太ん棒を振りかぶって、息を荒くしますと、夢の市郎兵衛も、
「……うん」がっくりしてしまい、もはやこれまでかと諦めかけました時、人垣をおしわけ、
「御助勢に参ったぞ」と飛びこんできましたのは前夜、五条大橋で救った浪人の群れ。
「川べりに吾らがのって参った舟がござる。この場はまかされて落ちのびられよ」

てんでに刀や槍をもって現れてきた思いもかけぬ助勢の面々。
これには力つきはてていた両人も、地獄で仏にめぐり合ったように喜び勇み、明石志賀之助と夢の市郎兵衛は、真っ青になって震えている糸屋の姉妹へ、
「さあ早うお出でなさいやし」急がせまして河岸の小舟で三条まで下り、そこから草津まで駕をはしらせました。そして、
「もう此処まで落ちのびてくりゃあ、所司代役人も追ってはくるめえが、散々な目にあったものだ」
宿へついてほっとしますと身体中の節々が痛みだし、食事を済ませた後も市郎兵衛がうんうん唸っていますと、見かねたのか宿の女中が、
「これは土地名物じゃ。やいとすえんかね」灸にともぐさを山にもってきました。
「済まねえこいつは有難えや」喜んで受けとるなり自分の脚に盛りあげ点火しましたが、想い出したように市郎兵衛は、
「おう大変な頼まれ事があった。おめえの腰にも灸をすえさせろ」側へ寄りましたので、
「おりゃあ大丈夫だ。何をする」周章て明石がよけかけますと、
「おめえ盃事だけで肝腎なことはまだしてねえんだろう。これさえやれば巧くゆく。ほら、きゅうすれば通ずだよ」

腕の喜三郎

数寄屋橋河岸

「こりゃあ変てこな風むきだ」
指を立てた若い衆がべろりとしゃぶって、
「てへえッ汐からい。まんだ時季はずれだが海からの辰巳ッ風だ」
あわて気味に小屋の方へ向かい、
「おおい皆な、材木が流されちゃいけねえ。今の内に縄のかけ直しをして固くしとかなくちゃあ」
と叫んだ。木場というと深川だけに限るように想われているが、この文化三年（一八〇六）の頃には、今の銀座の数寄屋橋の下の流れにも、筏にくんできた材木が溜めてあった。
さて若い衆に声をかけられた伝政の親方は居合わせた頭数をすばやくよんでからが、
「これだけじゃ人手不足だ。ひとっ走りいって棟梁んとこの、若い者をかりてきな」
どすのきいた声で呼ばわった。
さて、河岸につながった弥左衛門町。

当今では読売新聞や東映パラス座の並んだ賑やかな一角だが、その頃は、しじみやとか叩き大工の棟梁長屋があった。そこの一軒の左官屋の娘で花というのが、この長屋では飛び抜けての器量よし。界隈の若い者から目をつけられ、なんやかんやと言いよられていたが、同じ長屋の大工喜三郎と幼な馴染みでもう出来ていた。そこで、
「風がおかしいから川が溢れるかも知れねえな」と覗きにきた喜三郎に、花はびっくりしてしまい、
「阿父っつぁんが、まだ戻ってこないんだよ。どうしよう」
泣きそうな顔で甘えてみせた。
「いいって事よ。おれが見てやらあな」
ここぞとばかり喜三郎が、よい所をみせていると、そこへ棟梁の使いがふっとんできて、
「おお、喜三は居ねえか」
吹きすさぶ風にたてつけの悪い板戸が、がたぴし鳴り通す中で喚めくのが聴こえてくる。そこで、
「おう、なんでえ」と花の家から顔をだすと、
「伝政さんとこの材木が危ないから、すけにゆけって棟梁のいいつけだ」
といわれた。しかし、たった今、花に約束をしたばかりの喜三郎は、
「おりゃあ手が放せねえんだ」
ぶっちょうづらをしたが、
「てめえ棟梁のいいつけが聞けねえのか。ろくすっぽ腕も上らねえ半ちくのくせしやがって……」
怒鳴りつけられると、ぐうの音もでない。片手拝みに花にあやまり、裾をからげて駈けだした。

が、数寄屋橋河岸へとんでゆき、材木問屋の若い衆に指図されるまま、肩に繩束をかけ忙しく働らいている内に、辰巳の風向きが急に真東からのに変わってきた。

時候からいえば東風でもよいのだが、これが飛鳥山あたりから突きこむように吹き荒れて、そこへ、ジャンジャンすりばん叩きに半鐘がなってきた。

「火事だッ」

こうなると昔の大工は大変である。自分らが普請した家を守らなければならぬ。そこで喜三郎をはじめ狩り出されてきた面々は、「それッ」とばかり棟梁の許へ駈け戻り、名入りの絆天にきかえ、

「茅場町の伊勢屋さんの近くだ」

まっ先にかけだす棟梁の後に従って、眼もあけられない向かい風の中へ一団となってかけだした。

しかし現在の鎧橋。その頃の鎧の渡しの見える所までくると、提灯掛け横町と細川越中守下屋敷の前に、今でいえば非常線。い組の提灯をもった町火消しが繩を張って通せんぼうをしている。

「済まねえ兄い方、お出入りのお店へ行くんだ。通しておくんなせえ」と、ここは抜けられたが、

「駄目だ」と次の角では、ろ組の小頭に剣つくをくわされた。

すぐ眼と鼻の薬師堂に上同町からの火の手が迫っていて、黒い煙が渦をまき火の粉もとんでいる。

だから、ろ組の町火消しが殺気だつのも判るが、道路向こうの伊勢屋へ梯子をかけて、長い鳶口で叩きこわそうとしているところ。

「冗談じゃねえ。おれっちが柱一本だって心根こめて削った家だ」

びっくりして止めようとしたが、ろ組の連中は相手にしない。

燃えてくる火の手をくいとめる為に家をこわす、破壊消防だとは判っていても手塩にかけた建物を無惨にたたき壊わされるのを、黙って見ては居られない。

「ちくしょう……」棟梁が喚めいたとき、伊勢屋の主人が裸足のまま表へとび出してきて、

「おう良い時にきてくれた」

助けを求めるよう手をふった。

お出入り先の主人に呼ばれては、いくら火消しに止められても、飛び出さぬわけにいかぬから、

「おう野郎どもッ」

さえぎる火消しを振り払って梁棟が、店先めがけて駈けこむと喜三郎は掛けてある竹梯子をよじ登り、纏をふっているのを、

「よしゃあがれ」下から足を引っ張った。

神田明神

神田明神に天野屋とよぶ甘酒屋がある。現在は大祭の時の他は、こうじしか売っていないが、その頃は赤毛せんの縁台をだし、ごとごと煮たった甘酒の大釜から、一杯十文で売っていた。

弥左衛門町の長屋から、ここへ通いで花は働らきにでているが、なにしろ目につく器量。そこで余り神信心には縁のなさそうな、ろ組の火消し連中も、花を目当てに参詣にきたり、甘酒を呑みにくる。

もともと花には、幼な馴染みの喜三郎がいるのだが、いなせな火消し連中は叩き大工と違って、あぶく銭のみいりが多いから、甘酒代に十倍もの値打ちの天保銭を、

「つりは取っときな」
と置いてゆく。だから、それにつられて花もにこにこ愛嬌をみせる。
ろ組の纏持ちで半次というのが色も白く、彫りの深い顔をしているので花も満更いやでなく、誘われると両国あたりへも出かけた。
「近頃、時々帰りが遅いようだが」
これを気にした喜三郎が、
「嫁に早くしたい女がいますから、かまどが持てるよう、給金をあげてやっちゃ頂けませんか」
もみ手をしながら申しでた。
しかし棟梁は鼻で笑って、
「腕をあげたら、日当も上げてやろう。まだ半人足みたいな仕事っぷりで、嫁をもちたいなどと生意気なことをほざきゃがるな」
てんで相手にしてくれない。しかし時たま戻りが遅いだけでなく、花が見覚えのない半襟をかけたり、変わったかんざしを差していたりする。そこで気になって湯島二丁目の仕事の帰りに、そっと明神さまをのぞきに行くと、
「あっ……」喜三郎は眼の色をかえた。なにしろ、ろ組の絆天をひっかけた火消しの若いのと花は人目を忍んで帰ろうとしている処。もう、こうなると喜三郎も若いから前後の見境はない。
「よくも、おれの女を……」
道具箱の中から、ちょうなを取り出し、これをふりかぶって、

「野郎ッ覚悟しやあがれ」
掛かっていった。すると向こうも、
「なんでい」花をかばって大手をひろげたが、互いに正面から顔を見合わすと、びっくり仰天。
「うぬは茅場町の火事のとき、伊勢屋の棟に上って纏をふっていた俺の足を、下から引っ張りゃあがったあの時の叩き大工じゃねえか」
きっとして睨みつけてから、
「飛んで火に入る夏の虫というが、お誂えむきに手前の方から顔をつき出してくるとは、こりゃ明神さまのご利益か」と首にさげていた竹笛をピイッと吹くと、
「わあッ」と集まってきたのが、明神下御台所町に溜り場をもつ、い組の若い者。
組こそ違え同じ仲間だからして、
「なんでえ、この野郎ッ」よってたかって喜三郎に掛ってくる。
惚れたいとしい花の見ているてまえ、
「なにおッ」と喜三郎も暴れに暴れた。
しかし多勢に味方は一人きり。
しまいには袋叩きにされてしまった。こうなっては、いくら意気がっても仕方がない。
「殺しゃあがれ」喚めいて強がっていたが、しまいに気を失った。
さて茅場町の火事は二月の初めだったが、この年は気圧の関係か引き続き空っ風が烈しく、この日、三月四日も辺りが薄暗くなると共に「ビュウン、ビュウン」凄い唸りをたててきた。これが有名な、

「文化三年江戸の桃祭大火」

となるのだが、ぶん殴られ引っくり返っていた喜三郎は知る筈もない。しかしガーンガン打ちならされる半鐘は耳に入ってきた。

「……火事だッ」ようやく正気づいて眼をあけたが、殴られ蹴られているから足腰が痛くて動けない。

しかし、ぼやけた頭の中で、

(先刻の纏持の野郎め、さぞ向こう鉢巻かなんかしゃあがって、良い恰好をお花に見せているのか)

と想うと男の妬情はえらいもので、ふらふらしながらも立ち上れた。

「ちくしょう。惚れた女の前で寄ってたかって、ぶざまな目に逢わせてくれるとは……情け容赦もない男の風上にもおけない野郎だ」

喜三郎は柄の長いちょうなを杖につき風下の方へ探しに行った。

一本どっこ

火の手が何カ所からも起き、それが星空を朱色に染め、やがて不動さまの紅蓮の焔のごとく深紅にかえてしまい、火の粉が赤い流星さながら宙にはねだした。

熱気がこもって息苦しくて歩けもしない。そこで落ちている莚を用水桶に浸し、これを冠ったがジュウジュウ音を立て直ぐ乾いてくる。

「とても野郎なんか追っかけて行けねえや」とあきらめてしまい、

(こりゃ、てめえの長屋へ戻らねえと、弥左衛門横町も危ねえや)

煙にむせてゴボゴボ咳をしながら、三十間堀までたどりつくと、

「いけねえ」喜三郎は驚いた。

紀伊国橋から銀座通りが、真っ赤に見えたからである。

しかし他にどう行く所もない。

そこでゴオゴオ唸って強風の吹いてくる地面は進めないから、

「よいしょ」と両替町へ曲り、丸太新道から北久尼橋へ出、そこで今はカジバシ座という地下映画館のあるあたりから、お濠割りの土留めの石垣を腰を屈め、口に濡れ手拭いを当てがって進んだ。すると数寄屋橋河岸の方から伝政の筏がきて、

「おう喜三郎じゃねえか。飛び火で槍屋町が燃えているから危ないぞ」顔見知りの若い衆が呼びかけてくれた。が、そういわれても引き返しようもない。だから、

「ありがとうよ」怒鳴り返したが、そのまま進んでゆくとなるほど、夜目にも灰色に煙に包まれているが、槍屋町の火は南へ移ったらしく、

「おおい、大丈夫か……」

がなりたてると、聞き覚えのある長屋の連中の声が、

「火がつきゃ前のお堀へとびこむ気でいるがまだ大丈夫だぞお」

と返ってきた。そこで良かったと木戸口から息を切らせて飛びこみ、自分の家へ入って手探りで汲みおきの水を飲んでいると、

「……喜三さあん」背中に抱きついてこられワアッと泣かれた。

「どうしたい、お花ッ」
振り返って抱きしめると、
「阿父っつぁんは、お出入りのお店の土蔵の塗りごめに行って、煙にまかれて死んじまったよお」
ヒイヒイ声をたて号泣した。
「こて一挺の左官がやたらに死ぬもんけえ。朝まで待ってみな」
慰めていると、濠割りを舟で下ってきたのか、足音がして、
「お花ッ……」よぶ声がした。そこで喜三郎もほっとして、
「ほれみねえ。阿父っつぁんは無事だったろう」
と表へつれ出した。
が、出逢いがしらに眼に入ったのは、夜目にも白いろ組の纏。
これには喜三郎も仰天して、
「てめえらは、さっきの野郎共……うぬらが女のけつばかり追っかけ、火消しに身をいれねえから見てみねえ。お江戸八百八町あらかた焼っ原じゃねえか」
と睨みすえると、纏持ちの方も暗い家の中から、まるで抱くようにして花をつれ出してきた喜三郎に、
「この野郎ッ、とんでもねえ時に、女を引っ張りこんでいちゃついて居やあがって……」やきもちをやき、
「こんな晩だ。一人位い叩っ殺したって燃えてる所へもって行って放りこみゃ判りゃあしめえ」

いきなり鳶口で脳天めがけて打ちこんできた。他の火消しも手のつけられない業火に、かっかとしているところだから、一緒に、
「てめえ、きいた風なことをぬかしゃあがったな」と、脇差しをおびているのが抜いてきた。
「うぬらは火消しのくせに火事は放ったらかしで……おれを殺そうってのか」喜三郎も刃を潜って、
「ふさけるねえ」と大工道具のちょうなで渡りあった。しかし昼間散々に痛めつけられているから、どうも思うように立ち回われない。
「あッ」と声をあげた時は左手を二の腕からバッサリやられ、
「しまった」その場にひっくり返った。血のふきだしがひどく、火消しの連中は、それであわててまた舟にのって逃げていった。
が、困ったのは喜三郎である。
きれいに、まっ二つにされたものなら、傷口に芋焼酎でもかけて布で縛れもするが、皮と肉がすこし残ってぶらぶらしている。
もちろん、くっつけても貼り合わせがきくわけがない。といって鋸（のこぎり）を探してひくにしても暗くて手加減ができぬ。そこで下帯をとって入口の鴨居へひっかけ、
「よいしょ」と空箱にのっかって手首をかけぽんと箱をけとばすと、手の首吊りの恰好でぶらついていたのがもぎとれた。
「どうした……」急をきいて棟梁が駈けつけてくると喜三郎は喘ぎながらも、
「腕が上った」と鴨居に残っている左手首を顎でしゃくり、

「花と世帯をもてるよう、おれの給金あげてくれ」と喚めいた。
「うん……」これには棟梁も、呆気にとられてしまって、
「それより破傷風にでもなったら大変だ……」
すぐ手当をしてから、おろおろしているお花に、
「おめえも、ここまで男に惚れられたら、女としては本望だろ、大切にして仲良く添いとげろよ」といった。
しかし、右手だけになった喜三郎への落とし前に、ろ組の火消一同が、数寄屋橋河岸一帯の口入れの元締にと立ててくれたので、
「一本どっこの喜三郎」又の名を「腕の喜三郎」と呼ばれる貸元に出世をした。今でも地下鉄南千住駅前の回向院に、鼠小僧次郎吉と並んで片腕型の小さな墓が残っている。

江戸の相政

惣嫁のいる土手

「五文渡しの舟が出るぞお……」
船頭が掌を筒にして呼びかう鎧の渡しは、今は証券街中央の兜橋の所だが日暮れ時になると、小網町行きの客でごった返す。
「早くゆかぬと間に合わぬ」武家奉公の折助仲間や、お店者がひしめき合うせいである。
というのは対岸の裏河岸は千葉から蛤や浅利を運んでくる行徳河岸だが、その先の稲荷堀の酒井雅楽頭中屋敷の黒板塀にそったかきがら河岸の土手に、上総あたりの娘たちが、その頃の天井知らずの物価高には、とても普通の稼ぎでは追いつかぬのか、秘かにこの辺りまで舟できだして、
「惣嫁」とよばれる客引きをしだした。
すると、これがまだ素人同様ですれっからしていないから、「ありゃ良い……」とすっかり人気をよんで渡し舟で先を争い、男たちがわれ先にと集ってくるのである。
が、いくら男が詰めかけてきても娘達は嬌声をかけ呼ぶわけではなく、客がつくと叢の茂みの中へ、

かき分け入ってゆくだけだから静かなものである。
だからそれに眼をつけた政五郎は、ここの土手へ隣町新右ヱ門町小間物屋の娘美代を、なにくわぬ顔で連れだしてきてからが、
「いい月だよなあ」といいつつ、土手の叢に転っている一組ずつの組み合せを、恥しがる娘に指さし覗かせ見せ、
「郷に入ったら郷に従えってことがあらあ、ここへ来たら皆さまと同じようにしなくちゃあ、いけねえんだよ。いいね」
いってきかせて押し倒そうとしたが、
「こわい……」と美代はおびえてしまい、
「盃事をあげるまでは」と腕を突ぱって政五郎をよけ、身体を起すと海老みたいに丸まって震えだした。そして泣き声たてて、
「いやん、帰る」といいだした。
のち新門辰五郎と並んで、大江戸最後の仁侠と謳われた相模屋政五郎も、この時はまだ十九才。だから止むにやまれぬ血気の盛り。
「とても祝言するまで、お預けくった犬みたいにチンチンして、いや出しっ放しで待って居られるかい」と突き出した物をもて余し、
「いいよ、美代ちゃんがそんなに冷いんなら……おいらにだって覚悟があるよ。惣嫁というのは誰の嫁にもみんななってくれるんだ。銭を結納にもってゆきさえすりゃあ、すぐその場であしして寝てくれる

んだ」
客と別れ一人になった女を見つけ立ち上りだした。これには美代も周章てて、
「いやん……」すねるように裾をつかんだ。
「なら、こっちで間に合せてくれるかい」
「だって、そんな……おそがい、怖いわ」
「大丈夫だってことよ、なあ、おいらのことを美代ちゃんが好きだって証拠くらい、見せてくれたって良いじゃないか」
ようやく云いくるめ捻じ伏せてしまい、のけぞる美代の上へ覆いかぶさったとき、
「……かりこみだ」と突然の叫びがした。
「お手入れだあ」女たちの悲鳴が聴えた。
ぞめきの素見に化けた下っ引連中が、永久橋の本多肥後守上屋敷脇から甚左ヱ門横町まで、地引き網みたいに張っていたらしく、土手っぷちの下から、
「わあッ」と狩りの勢子よろしく、ときの声をあげて這い登ってくるなり、
「御用だ、神妙にしゃあがれ」
口々に喚いて逃げ惑う女や男の肩口へ、情け容赦もあらばこそ十手を叩きこんだり、抱えた六尺棒で滅多打ちをくれだした。
「なんで、こんな大捕物になりゃあがった。この土手に天下を狙う大伴の黒主でも匿んでいやがったんか？」泡をくった政五郎は、

「起きるんだ。早く逃げちまおう」
と美代の手をひっぱった。処が、
「痛い……竹箒の柄でも身体に刺っているみたいで動けなんぞできゃしない」
地べたへ釘づけに貼りつけられでもしたような、憐れっぽい声をだして美代は、
「良いから貴方だけ逃げて……」
自分でも起きようと腰を浮かしはしたがそれもならず、掌で土手の草をむしるようにして突張りつ、悲壮な叫びかたをした。
が、そういわれても、ではお先にと逃げ出しもならず政五郎は、
「確りしなお美代坊、おいらがおぶって行ってやろう。背を貸すよ」
あべこべに向って己が腰を屈めたとき、
「助けておくれよう」と土手下から逃げてくる女達が、横から突き当ってきた。
だから身体を浮かした恰好の政五郎は、もろに弾みをくって転がり落ちた。
しかも悪いことに土手の下積み石の角に、いやという程脾腹をうってしまった。
そこで、美代のことが気になっても今度は自分が立てぬことになって、
「うんうん」蹲ったまま唸っていると、ガタピシ軋む木輪の音が地響きみたいに伝ってくる。痛む下腹を押さえ伸び上ってみれば、荷車に何人もの女が縛りつけられてゆく処。
「そうかあ……女狩りだったのか。ここら辺りに出る上総女は泳ぎが巧いから、水の中へ逃げられないよう、ああしてくくってゆくんだな」政五郎は泣き叫ぶ声をききつつ考えた。

そして、
（夜鷹狩りなら、れっきとした新右ヱ門町の小間物屋の娘の美代には係り合いもなかろ）
ほっとして夜空を仰ぎみたが、
「まだ、あの儘で寝転ってるんじゃあ、夜露に当って毒だろ」
すこし痛みがおさまると、もとの場所までよじ登っていってみた。
が、何処を探しても一向に見当らない。
「美代ときたら十七にもなるのに、からっきしねんねで甘えん坊だ。さっきだって女ならうちの阿袋さんにしろ、平気でいつも自分からやりたがってることをしてやっただけなのに……まるで死にそうに暴れやあがった。しかしあの騒ぎには仰天し泡くって、てめえでさっさと家へ帰ったんだろう」
と、また鎧の渡しから政五郎もひとりで戻った。

櫺に入られた女達

口入れ屋といっても、日本橋界隈の丁稚小僧の年期奉公だけを扱っている相模屋は、暗くなると表の大戸をしめてしまう。
そこで裏木戸から潜りこんで勝手口で、泥塗れの手足を洗いでいると、
「どうした。喧嘩でもしてきおったか」
物音をききつけた父親の貞右エ門が姿をみせ、気難かしく叱言を浴びせかけた。
「そんなんじゃねえ、捕物の巻き添えをくったんだよ」と、むくれていい返したところ、

「こっちへ早く上ってきなさい」
恐い顔をして自分の居間までつれこみ、
「喧嘩口論なら大事はないが捕物の見物などし巻き添えにされ、もし間違えられて御縄を頂戴し牢へ連れてゆかれでもしてみい。この相模屋ののれんに傷がつくではないか」
頭ごなしにがみがみ文句をつけられた。
そこで政五郎が閉口して手をふり、
「阿父つぁん。巻き添えといっても土手から滑り落ちて、ちょっぴり手足をすりむいただけだが、女狩りなんだから間違ってもおいらがしょっぴかれるわけはねえ」
いい返したところ、文句をつける継穂がなくなって、貞右エ門はしょうことなしに横を向き、父子の間だが座が白けた。そこで、
「なあ阿父つぁん。なんで目明しってのは、あんなに精だして女なんか捕えるんだろ」
首をすこし曲げて尋ねかけてみると、
「そいつは、おまえ……」と貞右エ門は、
「……目明しや下っ引というのは、南北町奉行所へ出入りを許されているが、『同心何某様御知り』といった門札を貰う程度の扱いで、びた一文のお手当も頂いちゃいねえ。やつらの給金や盆暮節季の銭も出所は一切、新吉原からなんだ。だから吉原の商売の邪魔になる無許可の岡場所は放ってもおけんから、やつらは嗅ぎ廻って岡場所を根絶しにしようと、見つけ次第に踏みこんではしょっ引く。そこで『岡っ引』ともいうだろうが……」

訊かれたのに気をよくしたような口調で、
「捕った女たちは吉原会所が各女郎屋へくばられ、そこで年季なしの生涯只働きの勤めをさせられる……まあ世の中に仕込みが掛らぬこんなぼろい話もない。そこで会所では月決めの手当の他に、捕えてきた女一人にいくらと奨励金をやるらしい。元手いらずに儲るから下っ引は仲間でくんで、夜鷹まで網にかけて御用弁にするんだ」と教えた。
口入れ屋稼業で時には身売りの相談をもちこまれ、女衒を通じて吉原へ世話をする貞右エ門にとっては、岡っ引のそうした捕物は、いわば商売の邪魔。だから口から唾をとばして侏にしゃべっている最中。
「旦那。新右エ門町の小間物屋さんから……此方の若旦那は戻っていなさるか？とのお使いがみえてますが」と番頭が知らせにきた。
「えッ、お前は小間物屋の娘を連れ出していたのか」びっくりした貞右エ門にどなられ、
「美代ちゃんは堅気なお店の娘……間違って連れてゆかれたとしても大丈夫でしょう」
父親のてまえ照れ隠しに頭をかくと、
「この馬鹿ったれめが……そうならそうと何故すぐ小間物屋さんに教えに行かなんだ」
泡をくった貞右エ門は店へ駈けてゆくと、大戸の潜りから入ってきて、提灯片手に土間に立っている使いの手代に、
「わしが一緒に伺ってお話しましょう」
あたふた出かけていった。政五郎も気になったが、一緒について行けば向うの親爺にも怒鳴しつけら

れそうなので、自分の部屋にひっこんでその儘蒲団をかぶって寝てしまった。

朝になってみると父親の貞右エ門は小間物屋へ行ったまま、まだ戻っていないという。

「事の起りはお前じゃないか。男らしくしゃんとして行っておいで」

心配して一晩中起きていたのか赤い眼をした阿袋に、追いたてられるように新右エ門町へゆくと、そこの主人と一緒に父親は弾正橋を渡った八丁堀の宗印屋敷前の囲地へ出かけているとの話。朝飯前のかったるい腹をかかえ、福島町から橋を渡り、恐い顔をした門番が立っている松平越中守上屋敷の、白壁について松屋町まで出て、教わった囲地へつくと、

「わいわい」心配そうな顔をしたのが人垣を作って、しきりと中を覗きこんでいる。

が見廻したところ、貞右エ門も小間物屋の主人の姿も混っていない。そこで番人の目を盗んで中へ入りこむと、構内にはいくつもの建物がある。薄暗くてはっきりとしないが、

「てえッ……」眼がきくようになると政五郎は、己が目を疑うような叫びをあげた。

皮つきの丸太で組んだ檻が並んでいて、女がかためてそこへ放りこまれている。

柵の間から手を出し救いを求めている恰好のもいるが、あらかた泣きつくし喚きすぎ精根つきはてた様子で、放心したように重り合って坐りこみぼんやりした儘である。

が、夜鷹でも抱主というか親方がいるらしく、それが下っ引の云うなりの銭を払って檻までくると、迎えにこられた女は狂喜せんばかりに出口へ這ってゆく。

女衒とみえる人買いや、近在の街道筋の女郎屋や飯盛女を仕入れにきたのが、顔を丸太格子にくっつけんばかりに覗きこんで、

「手足の小さな女が道具が良い」とか、「見掛けさえよければ客がよくつく」などと勝手なことをいっては吟味し、下っ引に銭をつかませると、てんでに女を連れ出してゆく。だから政五郎は、

（うちの阿父つぁんは知ったかぶりをして、吉原へ納める為に女狩りをするんだといってたが……これじゃあ、下っ引の連中の自儘な商売じゃないか。こんな儲け口ばかりに憂身をやつしていやぁがるから、泥棒も捕まらねえんだ）呆れ返っていると、その肩を背後から、

「こら何をしとるか」貞右エ門に突かれ、

「美代さんを乗せてゆくんだ。近間だから町駕をよんでこい」

振返るなり耳が痛くなる位に怒鳴られた。

腕に桜の刺青

天保四年（一八三三）、政五郎が二十三歳になった春。

風邪をこじらせて貞右エ門が亡くなり、

「相模屋」の跡目をつぐ事になった。

だがあれから女房にした美代は、どうも相い変らずの蒼い顔で寝たり起きたりの暮しだった。

なにしろ四年前。素人娘を承知で、惣嫁と一緒くたに荷車へ縛りつけていった岡っ引は、親許から纏ったものを引き出し、それから戻そうとする魂胆だったが、囲地へ放りこんで家へ戻ってしまった後。

張り番に残った下っ引連中は、そうとは気づかず、

「一人おぼこい小娘がいたじゃねえか」
「どうせ明日になりゃあ吉原のちょんちょん格子か、何処かの地獄宿へやられる娘だ」
「構ったこたぁねえから慰んでやろうかい」
といった具合で引張り出され寄ってたかって、多勢の者に丸裸にされ弄ばれたらしい。
もちろん貞右エ門と美代の親が囲地を教って、その頃には引取り方に銭をもって迎えにゆき充分に間にあってはいた。だが、いくら戸を叩いても、美代に交る交る挑んでいた連中の耳へ届くはずもない。
ようやく朝になって入口の貫木のとれた頃には、美代はもう死んだようになっていた。
駕でつれ戻って本道をよび煎じ薬を呑ませたが、そんなことで本復するわけがない。

「もとはといえば、うちの倅の政五郎が、飛んだ所へ連れだしたばっかりの災難ゆえ」
昔気質の貞右エ門が嫁に貰いにいったが、
「ひどい傷物になってしまった娘。今さら貰って頂けるものではありません」
小間物屋も義理固く突っぱね断ってきた。しかし当人の政五郎にしてみれば、
「こんな事はなんでもないよ」と口説いてしまったてまえ、今になって、
(何人もに悪戯された後では真平御免)
ともいえぬので、自分で是非にと頼みにいった。小間物屋も口では、強いことをいっても可愛い娘のことゆえ涙をこぼして喜び、
「それではお言葉に甘えさして頂いて」

と相模屋へ嫁によこした。が政五郎一人でさえ痛がって腰を抜かした程の美代の事なので、同じ晩に続けざま何人にも朝まで輪番制に突かれてしまっては、腰の蝶番がもろに外れてしまったものか、嫁にきてからも殆んど寝たり起きたりで半病人の有様。
しかも、その時の怖しさが骨の髄まで身にしみこんでいるらしく、今だに、
「恐いよお」と夜中にうなされる事がある。
それも時たまなら仕方がないが、ひどい時にはそれが毎晩のように続く。
これでは政五郎も堪ったものではない。
といって美代が可哀想だから、女遊びをしにゆく気にもなれない。そこで通り三丁目の大通りを越した呉服橋よりの樽新道の、「丸定」という賭場へ手慰みに通いだした。
すると時たま隣り合せに坐る御家人くずれらしい男が、賭場の帰り道で、
「貴公の所は口入れ屋だそうだが、わしのような者の奉公口はないか」
改った調子で話かけてきた。そこで、
「さあ今いわれて直ぐに御返答もできません。が、何んとか心当りを当ってみましょう」
と、その場は別れたが、なにしろ両腕から桜の刺青が覗いている侍くずれでは、お旗本の用人の口があっても世話はできない。
が刺青が有るからといって、まだ固苦しい武家言葉が唇の端ばしから洩れるのを、町火消や材木屋へも話は持ってゆけない。
そこでその儘にして放っておくと、次に逢った時には、

「先日依頼した件、なんとか早急に計ってくれぬか。実は屋敷から持ち出してきた物も、どうやら底をついてきたのだが……」

切羽詰ったように頼みこまれた。

「仕方がねえ。じゃ、いっそのこと今夜からでも汚ない所だが、わっちの家へ来なすったら如何さまで……そうすりゃ人探しにくるのも多いこったから、相対ずくの相談で、とんとん拍子に巧く口が決るかも知れません」

刺青などしている割りにはすれてもいないし、人品骨柄いやしくない育ちとみて、政五郎は侍言葉の若者を家へ連れ戻った。

処が、この金四とよぶ若者は見掛けによらず、四角い文字も達者ですらすら書ける。

その上、二一天作の五と政五郎には何度やっても、数が合わない算盤がパチパチとこれまた器用にこなせる。そこで、

「口入れ屋といっても年季奉公のお店者だけの周旋では面白味がない。武家屋敷の供揃えが臨時仕事ゆえ儲るが、請求書や受書の計算を勘定して出すのが大変だったが……こりゃ良い。他所へ世話するより此方が使いたい」

と政五郎は帳面つけをさせて感心し、

「どうだい金さん、おめえさん俺が処の帳つけをみちゃあくれないか」ときりだした。

もちろん落着き先を探していた処だから、金四の方とて否やのあろう筈もなく、

「では、よろしく」と箔屋町へ一緒に寝泊りする事となった。が、十日、半月とたつと、

「つかぬ事を伺うが、ご妻女は嫁にこられた時から、あないに具合がお悪いとか……」

どうして半病人の女をよりによって貰ったのか、といわんばかりな顔をしてみせた。

そこで政五郎は、丁度さし向いで盃を交しあい、酔っていた時でもあったから、

「これまで他の者にゃあ、女房の恥だし俺にとっても聞えの悪いことゆえ、これっぽっちも口外した事はなかったんだが……」

と愚痴まじりに四年前の、かきがら河岸の捕物で美代が災難にあった話を洩らし、

「なあ金さん、お上御政道ってのは正しくなくっちゃあいけねえのに、その裾の方の木っ葉役人ってのは利得に眼がくらみ、罪とがもねえ者に、とんだ阿漕をしやぁがるよな」

盃の端をがりがり噛りそうに怒りをぶちまけ、口惜しがってくだをまいた。

「そうかい。ちいとも知らなかったが御上御用の岡っ引ってのは、そんな非道を致して居るものか」金四も若いだけに、すぐかっかとしてきて眼をすえっ放しに、

「仇を討とう」と、これまたいきり立った。

身代り仇討

「大丈夫ですかい、金さん。おめえさん、あんまり危ないこたぁしねえがいい」

さすがに政五郎は心配して止めたが、

「まかせておけ」と金四の方は、髷をといた上へ手拭を冠り、落ちないように鬢止めにした頭をふってみせ、両手を突張り、

「似合うかい」
美代の普段着をつけた女姿を見せてから、
「今日の捕物が亀島河岸だってのは間違いなかろうな。もし違っていたら事だぞ……」
夜鷹の莫蓙みたいに長刀を菰にくるくる包んで、小脇に抱えこみにやっと金四は歯をみせた。
「そこは金さん抜かりはない。よい上玉が捕えられたら註文先があるゆえ、銭はたんまりはずもうと巧く持ちかけ、まんまと今夜の捕物の話は番頭に聞き出させたんだ」
にっこり政五郎も受けあうと、
「この恰好じゃ歩いてもゆけまい、紺屋町まで駕を呼んで貰おうか」
「呼んでありやすからおっつけ迎えにはきましょうが、お一人で大丈夫ですかい」
しきりに政五郎は気を揉んだが、
「茶番にひと暴れしてくるぞ……」
駕がくるなり、さっさと乗込んで、いまの神田鍛冶橋に当る地蔵橋までゆき、そこから岡崎町の御組屋敷の並んだ通りを、与作屋敷の坂になっている河岸へでた。
まさか今夜手入れがあるとは知る由もない女たちが、湊町の御船手奉行のお止め場からぞろぞろ川口町へ渉ってくる艀人足共へ、
「ちょッちょッ」鼠鳴きで客引していて、月明りでも三十人の余は立ち姿がみえる。
そこで金四が、
(こりゃ横になっているのも加えたら、五十の余にもなろうが)と目算している処へ、

「御用だあッ」という声が響いてきて、
「かりこみだァ」
橋をふさがれ水谷町の方から、袋の口が締められるように下っ引の群れに追れた女達が悲鳴をあげて逃げてくる。
がすぐに六尺棒で背後から足を払われ、情け容赦もなく後手に縛られてしまう。
「まるで獣を追いこんで捕えるみたいだ」
初めて眼にする狩りこみに金四が茫然としていると、下っ引連中が側へ寄ってきて、
「今晩は俺達が可愛がってやり、明日からは野っ原でなく家根のついた所で商売させてやる。さあとっとと来やぁがれ」
夜鷹の一人と思いつかみ掛ってきた。
が金四は肩を沈め、相手をすってんどうと投げ飛ばしてしまうと、六尺棒で足を払ってくるのには、ひょいと飛び上り、ついでに爪先で向うの胸倉を蹴りあげた。これには、
「手向いしゃあがるのか?」
びっくりした下っ引の面々も後へ退り、
「神妙にしゃあがれ」遠巻きにして囲んだ。
しかし金四は菰包みの儘の刀を振り回し、
「どけ」と下っ引を蹴散らし、縛られた女達の処へ駈けこんでゆくなり、
「さあ早く逃げろ。ここは食い止めてやる」

片っ端から縄をきりほどいて助けてやり、抜き放った大刀を振りかぶった。すると、
「てへえッ」驚いた下っ引連中は、どぎもを抜かれてか一人も掛ってはこなかった。
そこで金四は着ていた女物を丸めて肩に担ぐと、繻絆一枚の恰好で相模屋の裏口から、
「おう、巧くいったぞ」と、ざんばら髪で帰ってきた。そこで政五郎も話をきき、
「ああたって、おひとはたいしたお方だ」すっかり舌をまいて感心した。
処が二月あまりたった頃合い。番頭が、
「お酉さまで吉原も忙しくなるから人手増やしでしょう、今晩あたり大掛りな女狩りをやるって、また、下っ引がいってました」
八丁堀へ奉公人の目見得をつれてゆき耳にしてきたのを教えた。だが金四に知らせ、
(また女装して出かけられ怪我でもさせてはいかぬ)と気遣った政五郎は、
「そうかい。じゃあ今夜は騒々しくなるだろうから、早仕舞にしな」
何くわぬ顔でいってのけ店の大戸も早くおろさせた。しかし、むしゃくしゃしていた。
「おまえさん、縁側で一杯おやりなさいな」
この処また時候の変り目で元気のない美代だったが、気を使って酒の仕度をしてきた。
「いいって事よ。それよりおめえは寝てな」
床をとってやると政五郎は美代の身を案じて、むりやりに寝かしつけた。
すると庭から金四が帳面をもって、
「本日の付け合せを……」と姿をみせた。

「こりゃあ」と政五郎は困った顔をしたが、
「まあ一杯」手にしていた猪口をだした。
「これは恐れいる」と金四は、酒の相手ほしさなのかと縁側へそのまま腰をおろした。
が、くみかわしている内に、つい、
「実は今晩またなんですぜ」洩すともなく、政五郎はしまったと想ったが口にした。
「そうか。やろう。だが助けるなら囲地の中まで入って皆かためて面倒みたいな」
金四がはりきったので政五郎も引き込まれ、
「金さん。彼処にゃ下っ引が役得代りに、ただで檻の女に悪さが出来るから、夜でも十人近くはとぐろをまいてる。もし檻破りをしなさるんならわっちも今度は行きやす」
生き残りの藪蚊が飛んでくるのを、ぴしゃりとやりながら政五郎も口にした。
と云うのも、美代の仇をとりたい一心もさる事ながら、三年前に自分の眼で視てきた檻の有様が、あまりにも哀れにすぎたので、
「まるっきりの地獄図絵だ。あんなむごい事は許しておけるもんじゃねえ」
酔いも手伝ったが、しまいには肩を怒らせ政五郎は、自分一人ででも出かけそうに腰を浮かせかけた。
そこで金四も、
「うん……」自分でいいだしたものの、
「大公儀北町奉行所御用の囲地とあっては、まさか女に化けても潜りこめまい。なんとか思案や手だて

を先に練って行かねば、ひとつ間違うと飛びこむはよいが袋の鼠だ」

盃を含みながら首をひねった。

しかし囲地を襲って仕返しをと思いこむと、若いだけに政五郎は矢も楯も堪らない。

「よっしゃ人手がいるなら賭場へでも行き、助っ人を集めてこよう」立ち上りかけた。

処が美代が唯ならぬ気配に襖をあけ、

「おまえさん私いとしさに仇をとってくれよう志は嬉しいが、あんな所へ入りこもうとは飛んで火に入る夏の虫……」

寝ながら話を洩れ聞いたとみえ、這い出してきて政五郎の着物の裾をひっぱった。

「うん」困っていると脇から金四も、

「他聞を憚る事に、知らぬ者を集めるのは……」

これも頭ごなしに反対した。そこで、

「どうすりゃいい」むくれて政五郎が顔を歪めると、金四は事もなげに、

「ここへよく出入りする神田め組の辰吉に、そっと訳を話し、竹梯子を担いで、ついてきて貰えばそれで済もうが――」自信があるのか、僅か三人での討入りの手筈を決めた。が、美代は心配して、

「行かないで」とあくまでも繰り返してとめた。

め組の辰吉

秋の月というのは黄色いようでも青く透けている。

その光を浴びて政五郎は尻っ端折りをした上に、辰吉から借りた刺子半天。

金四もうすら寒いのに、両腕の桜の刺青をことさらにだした腹掛け一つ。そして器用に鳶口を大刀の柄口に結びつけ、長鳶の恰好でそれを背にくくりつけている。

辰吉は本職の鳶だけに、さも火消しの戻りのように、わざと煤けた顔をして竹梯子を、曳きずる恰好で担ぎ後からついてゆく。

「これなら町方の定廻りに行きあっても、見咎められはすまい」

という心安さから大手をふって、どんどん常盤町から橋を渡った。

しかし囲地の正面から、まさか運んできた梯子を勝手に掛けられはしない。

そこで白魚橋に面した川っぷちの白土塀に、長く尾を曳いた影のみえる柳の木をみつけ、それに匿れるような恰好で青竹の梯子をたてかけ、塀の上によじ登ると梯子も引きあげ地面へ逆に降した。そして辰吉に、

「済まねえ、これで助かった。後は表の木戸口なり裏口なりを叩っ壊して帰るから、おめえはもう戻ってくんな」

礼をいって引揚げさせようとしたところ、

「ふざけちゃいけねえ。駕屋じゃあるまいし目的地へ送ってきたからって、はいさようならと戻ってゆけるもんか。友達甲斐のねえ事をいやぁがるな」頑として帰ろうとしない。

そこで前に来たことがある政五郎が先登になり三人揃って建物内に入りこむと、鼻をつく汚臭のむんむんする檻が並んでいる。

「こうなると女も色気がなくなるもんだ」
突き当りに一つだけともっている松仕手たいまつの明りで、辰吉がおっかなびっくり覗きこんでいるのに、政五郎は小声だが、
「ぐずついちゃあ居られねえんだ」
と背中をつついて腰にさしてきた鋸の一つを手渡し、早く丸太格子をとせっついた。
濡した方が音がしないというので竹筒をもってきた政五郎は、辰吉がごしごしやっているのに水をかけ、どうにか一本切り放し、
「下の一本をやれば中から出てこられよう」
代って政五郎が鋸をひいて居ると、
「ちょッとってば……」
向いの檻の女が目ざとく見つけ声をかけてきた。そこで手をあかした辰吉が、
「待ってな、そっちも順にあけて逃してやるからな」といってやったのだが、
「きえッ」
脅え切っている処だから、すぐ辰吉が巻き舌で答えたのに驚いたのか悲鳴をあげた。すると誘れたように他の檻からも、
「ひえッ」笛を吹くような叫び。そのうち、
「た、助けてえ」と泣き喚めく大騒ぎとなってきた。だから辰吉が舌打ちして、
「女ってのは悋気の深いもの……此方の檻から手掛けたので、てっきり情夫か何かが助けにきたもんと

勘ぐりゃあがって……」
いまいましがって居ると、丸太の切れ目から這い出してくる女達へ金四が手を貸して引っ張ってやりながら、
「早くこれだけでも囲外へ逃してやれ」
一喝するように背後から浴びせかけた。
というのは、騒ぎを聞きつけた下っ引連中が、手に手に樫の棒をふり廻し、
「檻破りとはふてえ事をしゃあがる」
「叩っ殺しちまえ」駈けてきたからである。
政五郎はかねて覚悟はしていたから、
「よっしゃ」と鋸でひき切りにした皮丸太を抜きだし、これを構えて一足進みでて、
「来やぁがるか」とばかり怒鳴り返した。
しかし金四は、その前へ出て己の体で遮り、
「俺は宿なしで貴公の厄介者だが……おぬしにゃ店もあるし女房どのも居る。ここは勇み足をせんと、辰吉をすけ女達を逃してやったがよい」身代りをかって出ようといいだした。しかし、
「そう云われたって……」
政五郎は力味かえって拒もうとしたが、
「駄目だ」頭ごなしに一喝された。
相模屋の店にいる時は主人と帳づけの間柄のうえに、金四は転りこんできた居候だが、やはり武家出

というのは違うもので、こう云う時ぴしっとやられると、
「うん」政五郎は丸太を放りだし裏へ抜け、まごまごしている女達を塀の上の辰吉の処まで、押し上げるように登らせてから、又これを一人ずつ地面へ逃してやった。そして、
「みんな思い思いに散らばれ。いいか、いくら食う為とはいえ、金輪際もう夜の商売なんかするこっちゃねえ。ひとつ捕えられたら骨になるまで舐ぶられるんだ」
いって聞かせて、また塀の上へ駈け戻り、
「組の竹梯子だから放ってもおけまい。済まねえが持ち戻ってくれろ」
と辰吉の方へ梯子を押そうとしていると、
「そっちじゃねえ」と下からの声。
振返ると、巧く逃げだしてこられた金四が土塀内から手を出して呼ばわっている。
そこで梯子を引っぱりあげて旧へ戻し、追われてきた金四を塀の上にあげ、
「いいですかい」と、また竹梯子を一回転させて地面へおろすと、
「それっ」とばかりに滑り降り、辰吉ひとりに担せていては足が遅くなるから、政五郎や金四も梯子の後先に首をつきこんで、
「わっしょい、わっしょ」お祭りのみこしのように逃げだした。

江戸の洪水

しかし一度なんなくやってのけ、たとえ何人でも女を救い出し、岡っ引の鼻をあかしたとなるとやめ

られる事ではない。
天保五年の春は、二月七日から月半まで三回も続けて大火があったから、その火事騒ぎにまぎれて、め組の辰吉の手引きで囲地を二度も襲って捕えられている女達を助けた。
が、こうなると町方でも、
(相模屋の政五郎がくさい)目星をつけてきたらしい。うろん臭い奴らが様子を探りに、
「ひとつ働き口をお願いしやす」
殊勝ったらしい口調で入れ代り立ち替り家の中を覗きにくる。しかし相模屋は店の者の食事も弁当屋の仕出しをとっているから、女っ気は蒼い顔をした美代一人しかいない。
いくら嗅ぎ廻っても、囲地にいたような白粉臭い女なんか影も形もないから、すごすごと戻ってゆく。そこで政五郎が、(ざまあみろ)内心ほくそえんでいると、
「おう政五郎ってのはお前さんかい」
十手の先で暖簾の端をもちあげ、ぬうっと入ってきたのが居る。誰かとみると、町木戸の番太郎上りだが今では、「堀留の弥平」とよばれるところの岡っ引。
「こりゃ親方、滅法このところ陽気もよくなっていいお日よりで……」
当らずさわらず受想よく迎えると、
「そんなことを聞きに来たんじゃねえ」
仏頂面で十手の先で己れの顎をもちあげ、
「おめえ親代々の結構な稼業をしていながら、夜遊びがすぎるんじゃねえかい」

三白眼でぐっと睨みすえてきた。

「へえ、このことで……」

政五郎が壺をふる手真似をしてみせると、

「そんな手慰みじゃねえや、とぼけるな」

嚙みつきそうな顔をしてみせたが、相模屋は箔屋町で代々の家作持ち。町内の顔というものがあるから、流れ者が根をはやした岡っ引風勢では、おいそれとは手が出せぬのか、

「おう邪魔したな」

いやみたっぷりに唇をまげて出ていった。

話はそれだけだったが、

(岡っ引の弥平と相模屋が張り合っている)

と噂が弘まったらしく、岡っ引に苛められたり狙われている連中が、それを伝えきき、

「ひとつ、お盃をやっておくんなせえ」

陸続という程でもないが日に二人三人とやってきた。丁度、春さきの参勤交代の時節。お供揃えの人手が不足して猫の手を借りたい程ゆえ、政五郎は片っ端から、

「働いてくれるなら良かろう」

と子分にした。そこで、翌天保六年には、その頭数が三百にもなる大世帯となった。

もちろん遊ばせておくわけではなく、仕事には出しているが、これだけの数になると一割位はいつも残ることになる。

「美代を貰って頂く時に何かしようと思ったが、それではおまけを付けるようで本人も辛かろうと見送ったが……ああごろごろされて居ちゃあ、塩梅の悪い日でも美代は横にもなれなかろ」と新右ヱ門町の小間物屋が大工をよこして、若者部屋の増築を二棟もしてくれた。

そこで去る者は追わず来る者は拒まずをしている内、夏には五百からに頭数が増えた。

さて六月に入ると、一日から休みなしに雨が降り続き、とうとう二十七日には、

「溢れてくるぞ」という騒ぎになった。

そこで江戸橋から一石橋までの、日本橋の高札場を挟んで並ぶ蔵屋敷から、

「河岸縁りに土嚢を積んでくれ」

という註文がきて、蓑笠つけた政五郎が、

「日本橋の此方岸には得意先の青物市場もある。それに御高札の立て棒に水などかぶらせたら、日本橋っ子の名折れになるぞ」

居合せた七、八十人の若者をひきつれ、蔵屋敷から出して貰った古俵や叺に泥をつめ、

「いいかい。隙間なく積み上げるんだぜ」

自分も縄を引張って結びつけていると、

「やい相模屋ここに居やぁがったか。天網恢々疎にして漏らさずというが、おめえが囲地破りして逃がした女の中で、恐れながらと訴人してきたのが居るんだ」

現われた堀留の弥平が背後から怒鳴りつけ、

「それッ召捕ってしまえ」

伴ってきた捕方にいいつけた。
これには政五郎も呆れ、土嚢の上から、
「何をいってやぁがる。この連日の雨で小石川新堀が溢れ、こっちへも水が及んでこようと大騒ぎしているってのに、馬鹿も休み休みいやぁがれ」と罵り返した。しかし、
「ちゃんとした証人が出た以上、いくら土地者のおめえでも、お上御威光にかけて見逃しなんぞ出来るもんか。神妙にしゃあがれ」
弥平は十手を振って土嚢に登ってきた。
「よしゃあがれ。仕事の邪魔だ。どかねえと泥俵の中へ突こんで川ん中へ放りこむぞ」
政五郎も樫棒をかまえ仁王立ちになった。
すると、ふりしきる豪雨の中から、
「わあッ」雨をはね返すような喚声が近よってくる。そこで何んだろうと耳を澄せば、
「親方……捕的(とりてき)の加勢だぁ」
脇で身構えていた棒頭が大声で怒鳴った。
ここ二年ごし、しばしば松屋町宗印屋敷の囲地を荒され、せっかく銭にしようと集めてきた女達を逃され、面白く思っていない下っ引連中が、相模屋召捕りときいて駈けつけ、
「堀留の……合力(ごうりき)にきやした」
翁稲荷(おきないなり)や通一丁目の聖天稲荷の方角から、それぞれ五人十人、雨の中を鉄砲玉のように飛びこんできたのである。

驚いたのは蔵屋敷の役人達で、吹きぶりの中へ飛び出してきて、てんでに声を嗄(か)らし、
「まあ待て、待て」
「ここに並ぶ四十棟の御蔵には、ご府内旗本八万騎の御扶持米が入って居て、これを流されては吾らは詰腹ものじゃ。頼む、鎮まれ」
両手をひろげて捕方を押えようとしたが、
「人数を揃えなくちゃぁ捕えられない相手。ここで見逃すってことあねえ」
頑として聞き入れようとはしない。
青物町、呉服町、平松町の町内年寄家主もそれぞれ集ってきて、
「ここで溢水されたら、御蔵米だけでなく吾ら町内も流され、女子供の溺れ死も出よう」
「土嚢積みに手を貸しなさるのならまだしものこと……邪魔しようとは何んたる了簡(りょうけん)」
よってたかって捕方に文句をつけたが、
「何をいってやぁがる、お上の御用すじに文句をつけるんか」
普段はぺこぺこして銭貰いに歩く奴が、いたけ高になって十手を振り廻しては脅す。
処が、そこへ政五郎召捕りの噂をききつけ子分共も、これまた篠つく雨をつき、
「親分の大事」とばかり、次々に駈けつけてくる。
こうなると政五郎のいいつけで懸命に、泥俵を黙々と作っていた連中も、
「棒頭、もう我慢がならねえ許してくんな」
堪りかね奮担(もっこ)ぎの天びん棒を握って、次々と集ってくる。そこで兄い株の棒頭も、

（もし弥平が側へよってきたら叩きのめす）気でいた処ゆえ、大きく合点して、
「よっしゃ」と一同の指揮をとろうと、土嚢の山から駈け降りようとすると、
「てめえら喧嘩しに……此処へ来たんじゃあるめえ」割れ鐘のような政五郎の声。
その一喝に子分共が縮まっていると、政五郎は自分が代って弥平の立っている処まで、ひとりでとっと進んでゆき、
「どうでえ親方ものは相談だが、この俺一人さえ縛られたら、この儘で土嚢積みはさせてくれるのかい」と声をかけた。
「あた棒だ。てめえさえ神妙にしゃあがるなら、他の半端人足なんかにゃ用はねえ」
「そうかい。なら縛れ」
政五郎は両手を前へぐっと突きだし、
「おいみんな、仕事の邪魔にならねえよう、俺はこの姿で引き立てられて行くんだ。てめえらは日本橋一帯を守るために築く土堤だ、息ひとつ抜くこともならねえぞ」
駈け集ってきた後からの連中にも、きっとして云い渡した。

調度よい話

この天保六年六月二十七日の江戸大洪水の被害はひどく、本郷、飯田橋から本所深川まで、すっかり水に浸って流された人家二千、溺死者千六百、馬匹二百という惨状だった。
が日本橋界隈だけは相模屋一家の死者狂いの土堤づくりで、殆んど被害を受けずに済んだから、町会

所へ集った各町の肝煎や家主が連名で、月番南町奉行筒井和泉守あて、
「相模屋政五郎放免方」を願いでた。
日本橋の高札場を冠水から救った上に、公儀蔵米を浸水から救った手柄もある事ゆえ、奉行じきじきに調べてみると、政五郎が両三度松屋町囲地へ忍びこんだのも、もとはといえば、物盗りに入ったわけではない。
吉原会所から云いつけられて、岡っ引が、只働きさせよう為に集めてあった女達を逃したのは、いわば彼ら目明しのアルバイトの邪魔をしただけで、公儀には係り合いのない話。
そこで即日放免のうえ、
「洪水の節の相模屋の働き神妙なりと、小普請奉行どのよりも、御褒めの言葉があった」
青ざし一貫文の下され物まで出た。
奉行所の門まで送られて出てくると、日本橋三十二町の名代がずらりと出迎え、町内の鳶の頭が木やりをうなって箔屋町まで行列をたて、鞘町と塗師町の角までくると、
「相政」の白文字を浮かした揃いのはっぴ姿の子分一同が、ずらりと町の両側に並び、
「お帰りなさいやし」挨拶する声が打ちあげ花火のように響く。

これを人垣の後から覗きみしたのが、いまの人形町の先の源氏店、芝居では、「玄冶店」の名になっている傾斜の巷で、小料理屋をやっている芳野という器量の良い女。これが政五郎の牢やつれした青い顔を、じっと穴のあく程見詰めて居たが、人ごみに揉まれ当人は気づく筈もなかった。

さて芳野は、かねて話のつけてある修験者正一法印という者の、拝み堂へすぐその足でおもむき、加持の護摩をたいてる最中だったが、

「政五郎が出てきましたよ。早くなんしておくんなさいまし」とせかした。

「そうか、今日が出所であったか」

法印も周章てたが、すぐ御弊を担いで相模屋へと出かけた。

「せっかくですが法印さん、いま親分は町内の年寄連中の祝宴につかまっていなさるが、おっつけ此方へ戻ってこられる取りこみの処、ひとつ御用は明日にして頂けませんか」

と子分が出てきて迷惑がるのに、

「何をいう、ここの内儀さんの加持祈禱にいつもくる正一じゃが、今日はすぐにもお祓いせんと命にかかる事柄が起きたゆえ、それで取る物もとりあえずかくは急いで参上したのじゃ。すぐ取次がっしゃい」と怒鳴った。

こと人命に関するというのでは放っておけない。そこで法印を奥の間へ通したところ、

「これは御内儀、てまえ拝み堂で護摩をたいていた処、御験示があり案じて駈けつけて参ったが、やはり兇相がでている、こりゃ今夜の内にも御寿命がつきてしまおう……」

じっと美代の顔を見据えたまま、白紙をつり下げた榊でお祓いしつつ口をつぐんだ。

これには美代も、びっくり仰天。

「え、今夜にも死んでしまいまするのか……せっかく夫が戻ってくるというに」と泣きくずれた。法印は鹿爪らしい顔をして、

「戻ってこられるゆえ、それで、お命が危ないのじゃ」

と、はっきりいってのけ不審がる美代に、

「夫どのが戻ってござらっしゃったら、何をされまするぞ」大数珠をまさぐりつきいた。

「はい、いま町内のおよばれで寄り道してますけど、戻れば私のつけておいた漬物で、お茶づけなど食べまするが」

「その後は……」

「はい、寝ます」

「横になられてからは……」畳みこまれ、

「そりゃ御牢にずっと入ってました事ゆえ……久しぶりに」と顔を赤らめた。

「そうじゃ。それが命とりになるのじゃ」

法印はきめつけるようにずばり一言。

そして、おろおろする美代に優しく、

「幸い、わしの加持している女ごに、困った人をお助けしたいと申す奇特な女ごが居る。如何であろう身代りをさせなすったら……」

やんわりした口調で有難そうに話した。

「ほんとうでございますか」ほっとしたように美代も愁眉をひらいた。そこで、

「まこと有難いことで……」

と礼金を包んで法印を帰すと、戻ってきた政五郎が、何も知らずに寝間へ入ろうとするのを、周章て

で押し止め、

「わたしは半病人みたいな具合で嫁にきて、おまえさんには行き届かぬことばかりで済まなく思ってますが、ものはついで、これからなさろうことも、なんとか他所で間に合せておくんなさいまし」両手を合さんばかりにして頼んだ。

これには政五郎も呆気にとられ、

「馬鹿も休み休みいえ、おまえという女房がありながら、別に隠し女なんか作れるかよ」

むきになっていいはったが、

「初め悪ければ後悪しで私のあすこが、今もやむのはおまえとてよく知ってもいよう……助けると思っていうことをきいておくれ」

法印にいわれたお告げまで洗いざらい口にした。しかし政五郎にすれば、逢った事も見た事もない女の話ゆえ渋い顔をして、

「今から行けったって、おらあいやだ」

と断った。そこで困った美代は、

「向うは待っていなさるんですよ。せめて行くだけでも顔をみせに行っておくれな」

拝まんばかりにかきくどいた。だが、

「浮気は男の甲斐性というが、なにも女房にすすめられてまで……」政五郎はごねて首をふった。

そこで美代は色白な蒼い顔をくもらせ、

「これからはおまえも何かと付き合いが多くなろうが、わたしがこの有様では客人の持てなしどころか

……着換えて挨拶に出るのもおっくうな話。処が小料理屋をもっているひとがそうなったら、何かにつけて利便ではないのかえ」といいだした。

「うん」そこまでいわれては仕方もなく、

「では、どんな女か逢うだけでも逢ってみよう。もし反吐の出そうな女なら、いくらおめえにいわれても願い下げだ」

ふくれっつらで駕にのせられ、仕方なく芳野のやっている小料理まで行ってみると、

「……まあ来て下さいましたか」

涙ぐんで迎えられる有様。それに客商売とはいいながら、これまで男苦労を重ねてきた女らしく、扱いのこつを知っているから、

「煙草」といえば「煙草盆」よく気がつく。

政五郎が酔ったふりをして絡んだり、文句をつけて厭味をずけずけ口にしても、

「すみません」と詫びっぷりにもそつがなく、すこしも逆おうとはしない風情。

今も昔も、男はえてしてこういう女に弱い。

すっかり情が移ってしまって、その晩泊ることになったが、美代と違って自分からは注文もつけない。されるが儘になってはいるが、それで締めるところは固くしめてくる。

そして頃合を見計ったように、堪らなさそうな声をはりあげ、やがて恥しそうに床から出て両手をつき、かしこまって、「申わけありません」と神妙に詫びをいう。

「なにも謝まることはあるめえ」

と政五郎はいぶかしがると芳野は長襦絆の袖口をくわえたまま、消え入りそうな声で、
「お道具がぴったり調度に合いましたのか、こんな天にも昇るような心地になりましたのは……恥しながら生れて初めてのこと。とんだ取り乱した処をお目にかけ勘忍して、おくんなさいまし」と涙声を出す有様。
「道具とか調度とか建具屋のような話をされても判らないが、丁度良いのは俺にも判る。そうかい俺の持物がお前にはぴったりか」
「はい、世の中には浜の真砂のように男も女も多うございますのに、まるで貝合せのようぴったりした御方に、逢えるなんて女冥利」
両手を前についたまま泣き崩れるのに、
「そうかい、合縁奇縁ってのはこの事か……なにも大きな声を発したから聞き苦しいと、それで随徳寺をきめこむような俺は野莫天でもねえ」と政五郎も唸りながら慰めた。

吹けよ川風

さて自分の持物がぴったりだというようなのが現れてきては、政五郎とて男の端くれ。口で、嬉しいとか良いとはいわぬが、箔屋町の店にいるよりは芳野の許ですごすことが多くなった。しかし子分が何百とふえた政五郎が、そう気儘な事もできない。時には、
「親分どうぞお戻りなすって」と迎えにこられる事もある。
もちろん、よくせきの事で呼びに来るのだから、店へ帰ると二日や三日は鼬の道。

すると入れ換って頬冠りしたのが、裏口からすいと帳場へやってきてあがりこみ、
「だいぶ熱ツ熱ツだそうだが、まさか本気で惚れちまったんじゃなかろうな」
「まさか親方……いやですよ」
芳野がすねてぶつ真似をしても、
「てめえ枕を重ねている内に本惚れしたんと違うのかい……此方は今日か明日かと上首尾の知せを待ってるってのに、寝首をかくの締め殺すのといった初めの広言は何処へやら……てんでだらしがないじゃねえか」
「だって、もうすこし安心させてからでなくちっゃ、なんともなりませんのサ」
「聞いたふうな口をききゃあがるな……」
「そうあせらずに待っておくんなさいまし」
頬冠りはむしりとったが渋い顔をみせる相手に、芳野が口答えしたところ、
「この前の洪水騒ぎのごたごたで十手取縄は返上し、日本橋界隈にも居られん事になって今は他所へ逼塞中だが、これでも俺は、堀留の弥平とよばれた男。あんまり軽く見ちゃあいけねえよ」凄い顔をした。そして、
「ここ二、三日は来てねえようだが、明日の晩あたりは政五郎め来やあがるだろう。女のおめえの手を借りようとしたのが此方の誤り。こうなったらやっぱり下っ引をくびになり、彼奴に遺恨を含んでいる奴らをつれてきて、俺が仕末はつけてやる。いいか泊りにきたら手練手管でたらしこみ、骨抜きにしちまって寝かしとけ」いい残して、さあっと消えていった。

さて政五郎は、そんな事とは知らず翌日。
「また、おまえさん泊りにゆくのかえ」
自分からすすめた事なので文句もいえぬ立場だが、そこは美代とて女の身、やはり怨めしそうにして見送る眼差しを背に、いそいそと出かけて行って、
「あら、よく来ておくれだね。待ち焦れあたしゃ螢(はたる)みたいに身を焦していたんですよ」
「ちえッ嬉しがらせをいやぁがるな」
さしつさされつ盃をかさね、いよいよ店もしめ、二人きりの床入りとなると、
「三日ぶりだから、その分なんしておくれな……」
はりついた芳野は、これでもかこれでもかと政五郎をせめるから、さすがに疲れはて、
「もう、おれは駄目だあ」
のびてしまって背を丸めての高鼾(いびき)。
どさっと蚊帳の釣り手を切られ、投網を掛けられた恰好になっても、まだ白河夜船。
「……ここで殺されちゃあ後が困る。何処ぞへ担いで行って重石をつけ沈めちまいな」
と聴える芳野の声もうつらうつらの夢見心地。
外へ三人掛りで運び出され、夜風が蚊帳の網目から当ってきて、初めて、
「なんでえ、何をしやがる」
寝呆け声で喚めいたが、もう後の祭り。
「騒ぎやぁがるなッ、もう直ぐだ」

肩を抱込んでいるのが政五郎の頭を突く。
だから何が直ぐかと網目から覗くが、俯伏(うつぶ)さったまま担れているので地面しかみえぬ。
が匂ってくる風は塩っぽい感じがする。
そこで政五郎は鼻をひくひくさせ、
(吹けよ川風っていうが、こりゃあ浜町河岸へ持ってゆき、水ん中へ沈めやがる気か)
はっとして身体を動かそうとしたが、
「じたばたしゃあがるな……」ぐるぐる巻きの蚊帳の上から、拳固で殴られるだけの話。
いくらもがいても埒(らち)があかぬ。政五郎も、これにはすっかり酔いもさめはてて、
「えい、どうしようか」と、あせるのだが、なんとしても身体の自由がきかない。
川風が次第に迫るように吹きつけてくるのに、担れていてはなんともならぬ。
「もう川の流れが聴えてきゃあがる」
さすがに政五郎も男らしく覚悟はつけたが、最後の気力をふりしぼって、
「た、助けてくれ」むだと思ったが叫んだ。
すると気のせいか、ぴたぴた叩きつけるような音をさせ草履裏が響いてきた。そこで政五郎は、おやっと想った。が次の瞬間。
「あッ」という間もなく政五郎はどしんと、川端の柳の根方へ放り出された。
だから巻きついた蚊帳を両手でかきむしって引き裂(さ)き、やっと立ち上って、三人を相手に立ち廻っている侍の背中に、

「こりゃ危い処をお助け下すって済ンません……手足さえ動かせるようになったら、この政五郎、二人や三人の相手にゃ、びくともするこっちゃござんせん」

と礼をいいながら声をかけたところ、

「おう相模屋の親分か……」

はね返ってきた声と振返った顔は金四。これには、あけた口がふさがらず、

「なんだ。えれえ処でえれえおひとに逢ったもんだ……あの洪水の前から姿がぷつり消えてしまわれたので、こりゃ手入れがあると早耳で仕入れ、それで行方知れずかと思ったらば、お侍姿とはこりゃ又どうして……」

「うん面目ない。世話になりながら無断で退散したような恰好で、合せる顔もない話だが——異母弟に家督を継がせようと両腕へ痛い想いで刺青までほり、市井無頼の徒に混って賭場通いに身をもち崩していたのだが、父の病死のため親類縁者に、無理やりに家へ戻されてしまい、小普請奉行公事方という目付のような御役を拝命。忍びで見廻りに出ているところでのこの奇遇。逢いたかったぞ」

と金四こと遠山金四郎は、懐しそうに側へ寄ってきたが、にやっとすると、

「親分どうしなすった。下帯もはずしっ放しで前がとがっていなさる」と指さした。

「えッ……」あわてた政五郎は素っ裸なのに初めて気づき、落ちている蚊帳を腰へまきつけたが、思い出したように辺りを見廻し、

「喋っている内に野郎共、早いとこ消えやぁがって、らちもねえ影もみえねえ」とむくれきった。

南町奉行遠山左ヱ門尉

弘化三年（一八四六）五月。土佐高知の山内侯は、江戸留守居役の広瀬源之進、吉川喜四郎の両名の者をよび、さて改った調子で、

「従来当山内家の鍛冶橋屋敷には、神田白壁町仙台屋与五郎が五十名の人足を入れて、出火の節は相勤め居るが、町火消の中に浅草を組の新門辰五郎という者がいて、彼ら勇み肌の者は、山内家の火消し『置き消』つまり恰好ばかりで役立たずと罵笑し居るとかきく。まことに残念であり不快である。よって辰五郎に匹敵するような仁侠を見つけて参れ」

土佐二十四万石の貫禄にかけても、即日出入りの火消しを取換えろとの厳令がでた。

だが、当時江戸八百八町に名を知られたのは近くでは、「鍛冶橋外の栄吉」「鉄砲洲の伝蔵」「大川端の和吉」「新場の小安」「品川の阿波安」

それに日本橋魚河岸の元締をしている佃の吉、内藤新宿で貫目所仕切りをしている八幡屋万吉。数え出せば十指にあまるが、

「土佐山内侯のお達しだから」といって、「へえ」と有難がって入れ替るのが、はたして居るかどうか

これは判らない。

それに、いま売出しの新門辰五郎の組以下いろは四十八組の町火消の向うをはって、大名火消と対抗するとなると、それ相当の貫目もいる。いくら殿様が、「即刻致せ」といっても何んともなるものではない。

そこで留守居の二人は切羽詰って、
「これは南町奉行遠山左衛門尉さまにお伺いをたてるしかあるまい」
「あの方は小普請奉行公事方から勘定奉行公事方を歴任され、天保十一年より北町奉行になられたが、桜の刺青があるとかないとか南町奉行の鳥居耀蔵に告げ口され、三年で大目付に飛ばされなすったが、又ぞろ昨年より今度は南町奉行に返り咲れた御方……市井にはお詳しいそうじゃから御教示頂こう」
すぐさま同道して役宅を訪ね相談をした。すると遠山金四郎は即座に膝を叩き、
「新門辰五郎に匹敵する男伊達は、天保大洪水のとき日本橋河岸を、しかと守り抜いた相模屋政五郎しかあるまい」と答えた。
そこで、その当時から、ずっと江戸勤めだった広瀬源之進は思い出したように、
「その節、政五郎に対し小普請奉行より青ざし一貫文の御褒美が出ました由ですが、あれは遠山さまがそちらに御在職中でありましたゆえの、ご配慮にござりましたか」
と口にしたが遠山金四郎はそれに答えず、
「政五郎というはお上とか大名などは屁とも思っとらん骨太な男じゃ……一貫文のことなど口に滑らしてみい。いくら土佐二十四万石を鼻にかけて使者にたっても、浪の花をぶっつけられて戻ってくるのが関の山じゃろ」
呵々大笑してのけた。そこで両名は、
「なんとしてでも政五郎を引張り出しませぬと、われらは主命にそむく事とあいなりまするで、なにとぞ御知恵を拝借したく……」

青くなって平身叩頭した。そこで、
「うむ」と暫く金四郎も考えこんでいたが、
「聞く処によると政五郎は前の妻女に死に別れたあと、京橋白魚屋敷元締幸右ェ門の娘のお照に惚れられ、それを後添えにしているが、死んだ新右ェ門町小間物屋の娘美代という先妻への愛慕はきつい由。だが、今の嫁に気兼ね致し墓もまだじゃとき居る。土佐二十四万石をもってすれば青山の石勝に交渉し、一日で戒名位は手分けして彫らせられよう」
と、いい放った。両名は喜んで、
「これは良い事をうけたまわりました」
厚く礼をのべ、すぐ石屋へ駈けつけ、他からの注文で磨きをかけている大きな石塔を譲りうけ、これに美代の戒名俗名を前後左右から一字ずつ手分けして刻ませ、これを芝増上寺にある山内家の菩提所に建ててしまった。
そして翌日。
今では箔屋町を引払って広い白魚屋敷に、「相政」の高張り提灯を出している政五郎の許へ、駕を仕立てた山内家の両名の者が迎えに行き、
「芝増上寺へご参詣を」とつれだした。このとき政五郎は三十六才の男ざかり。
(何故おれが芝へなどお詣りにゆくのか)
不審には想ったが太っ腹な男のことゆえ、
「そうですかい」と何もいわずに芝へきた。

しかし増上寺の塔頭の山内家の御墓の横に死んだ美代の墓をみた時には、はあっと膝まずいて、
「ううん」と両眼をとじ、さっと手を合せ、
「俺は初手からお前にいやな想いや、辛い目ばかりに会せ……死んでも卒塔婆だけのまんまで今日まできた。許してくれろ」
しまいには墓石に抱きつかんばかりにして、声は殺していたが眼を真っ赤に腫らしていた。
案内してきた両名の留守居役は、
(この男にも、こうした泣き所があったのか……さすが遠山金四郎は何んでも見通しだ)
すっかり感心しながら、さておもむろに、
「ひとつ、おてまえに頼れてほしい事があるのだが」と一部始終を物語った。
すると政五郎は拳固で頬をこすり、
「わっちはたとえ千両箱をつまれても、金持やお大名に頭を下げるのは大嫌えな男で、虫けらや雑草なみにしか扱われねえ町の者の味方のつもりで居やしたが……死んだ美代の墓を山内の殿さんの側へ、こんなに立派に建てられちゃあ、土ん中に何も入ってなくとも、忠義をしなくちゃあいけますまい」
まるで墓石に話しかけるように、その場で直ちに承諾した。
しかし鍛冶橋の山内家上屋敷へつれてゆかれ、殿様にお目見得のときは、
「大名火消といっても近間の出火なら町家も救いにゆきます。ようございますか……だから弱い町の者のために、土佐二十四万石の御権勢をお借りしやす」
はっきりと念を押すような口のききかたをした。

「うん。いいたい事をいい居る。が、まあ、それ位でなくば物の役にはたつまい」
なんとかして、いろはの町火消を打ち負したい一心の山内侯は、言葉咎めもせず、
「仕度金じゃ」と千両箱を下げ渡した。
すると政五郎はその金で百人分の法被と鳶口。
竜吐水五台を作らせたはよいが、三百両近い余りが出ると、それを呑み食いに当てず、洲崎、板橋の安女郎で借金十両以下の女を、三十人そっくり身受けして田舎へ戻した。

この噂をきいた遠山金四郎は、
「やつならやりそうなことだ。おおかた死んだ前の嫁の追善供養のつもりだろうが、古今東西、てめえが抱いたことも顔をみたこともねえ女郎の、証文をまいて里帰ししてやるような素っ頓狂な奴も他にはあるまい」すっかり呆れもし感心もして、忍びの恰好で尋ねてゆき、
「昔、帳づけに拾って貰い厄介になった礼もある。いくらでも町奉行を利用してくれろ」
と、ざっくばらんに申し出たが、
「そいつはいけねえ。昔の金さんだったら、手に余ることはみなおっかぶせられたし頼みもしたが……南町奉行の遠山さまじゃ駄目だ」
大きく手をふって政五郎は辞退した。
「気兼ねや遠慮はいるまいが……」
心外な顔をされると政五郎は舌をだし、

「おれが町方役人を大嫌いなのは、ああた先刻ご承知でいやしょう。なのに町奉行ってのは、それの元締さんじゃござんせんか」と笑いとばした。

そして遠山金四郎が嘉永五年三月二十四日に南町奉行をやめるまで、政五郎は一度たりと頼みごとには行かなかった。

が、安政二年十月二日の江戸大地震の際。

政五郎は子分をつれて倒壊した遠山家へ駈けつけ、圧死した金四郎を掘り起し、「ワンワン」屍に取りすがって、辺りかまわず男泣きをしたと伝わっている。

浪人組くずれ

「なに自警団だって？」

政五郎が妙ちきりんな顔をすると、

「へえ五人組から二人っつ棒をもって出るんですが、相手がなにしろ気違い同然の輩で火つけでもしでかしそうな浪人共で放っておけねえ。ひとつお身内衆をとのお申し越しで……」

取次いできた若者頭が頭を下げた。が、「うん」と、政五郎は唸ったままだった。

というのは、市村座木戸番が新門一家と喧嘩し小屋が叩き壊され、新町の弾左ェ門党と町火消が血の雨を降らそうとしたとき。

「そんなことをしちゃあ町の者の迷惑だ」

と政五郎が、弾左ェ門家出入り柔術師で骨つぎの名倉堂勝助と、双方の間に割って入って穏便に事を

済ませたことがあるので、

（町の者の迷惑だ）と解散浪人のことで、町内から頼みにきたのも、よく判るが、

「なにも町方の手伝いをしに、棒を持ってって自警なんかすることもなかろ。火をつけたの悪をしたってのなら、ぶん殴るも仕方ねえが、するかも知れねえ位で他人さまを痛めつけたり、町方へ渡すなんざぁ江戸ッ子のするこっちゃねえ」

と、暫くしてから大声でいい放ち、

「政五郎は吝な野郎だが、弱きを助け強きをくじくてえ天の邪鬼……せっかくだが若い者は一人もお貸しできませんと断っちめえな」

若者頭にぴしっと口上を叩きつけて帰してしまった。

が、気になるのか皮革羽織をひっかけ、

「馬喰町界隈を見廻ってくる」いいだした。

「お伴を……」と若い者達がついてこようとするのを、政五郎は振返って、

「何様のお出かけだと思ってやぁがる」一人でお福草履をひっかけ外へ出た。

しかし若者頭の平助だけは、そういわれても政五郎の身を案じ見え隠れについてきた。

「おいおい、下っ引みたいな真似はよせ」

気づいていたらしく政五郎は、一石橋を渡って伝馬町の角までくると立ち止まり、

「早くこい」と手招きしてよびよせた。

叱られるのかと平助は首を縮めて寄ってきたが、政五郎はそっちの文句はいわず、
「小石川伝通院大信寮に勢揃いした浪士組三百が、公方さま上洛の先乗りとして京へ向ったは、確か梅の花の頃。その時は、さきの駿河町奉行鵜殿民部さまがおん大将で意気暢々たるもんだったが、行って一と月でお払いばこ……戻ってくりゃ厄介扱い。哀れなもんだよなあ」と眼頭をしばたたかせた。
「なんでも京へ水戸のご浪士や、牛込試誠館の近藤勇という人らは残ったそうですが、御公儀のお指図通りに江戸へ戻ってきた者は、貧乏くじで野良犬扱い、正直者が馬鹿ぁみる非道い御治世でございますね……」
いわれて平助も腰を屈めてうなずいてみせ、
「旧士分の浪人衆は本所三笠町のお旗本小笠原加賀守さまお屋敷で、賄もちゃんとついてるそうですが……哀れなのは人集めに加えられた博徒や町人連中。先ゆき使いものにならないと見くびられたか、馬喰町の大松屋、羽生屋、井筒屋と三軒の旅籠へ放りこまれ、ろくにおかみから雑用の銭のお下げ渡しがないとかで、初めの三日は飯が出たが後は寝るだけとかいってますぜ」と言葉をつづけた。
「そうかい。町ん中へでて五人組の自警団に棍ん棒で追い駈け廻されてるってのは、その手合いなんだね」
「へえ、金魚じゃあるめえし、水ばかり呑んでも居られませんから、物乞いに歩くらしいんだが、なんせ身なりが浪士組のまんま、そんで気味悪がられて追われてるんでしょうね」
話あいながら、伝馬町の牢屋横通りから千代田稲荷の前をぬけ、亀井町河岸の竹森稲荷の鳥居のみえる辺りまでくると、

「助けてくれえ」と両手をあげてくるのを、
「野郎待ちゃあがれ」と追ってきたのが、
「叩っ殺しちまえ」と竿や棒で叩きのめす。
見かねた政五郎が、その浪人くずれを、
「まあ待ってやってくれないか」
中へ入って、平助に庇わせたところ、
「そいつらは徒党をくんで、火つけして押借りしようとしたんだ。町の者の味方の相政の親分さんなら、ぶっ殺しておくんなせえ」
と棒を持ってきて渡しかける者すら居る。
「いってえ何処へ付け火しゃあがった？」
「さあ、はっきりは知らねえが、神田の仙台屋与五郎親分の処の若い衆が拍子木叩いて、新場方面は火の海だと知らせにまいりやした」
「じょ、冗談も休み休みいえ。俺っちは今そっちからやって来たんだぜ」
政五郎が呆れ顔でたしなめて居ると、
「おうみなさん……相政の野郎こそ、浪士組くずれの無法者の黒幕なんだ……枝葉を苅るより元木を倒せということがある。この与五郎がお助太刀を致しますから町内の皆さん、そいつから叩きのめしておくんなせえ」
山内家出入りを政五郎にとられ、かねて怨みに思っていたらしい仙台屋与五郎が、三十人あまりの子

分を従えて、喚めきながら駆けつけてくるなり、
「それッ、やっちまえ」と掛ってくる。
これには平助も面喰って、
「仲裁は時の氏神って譬もあるのに、なんで俺達に向ってきゃあがる」
自警団の樫棒を力まかせに引ったくり、
「来ゃあがるかッ」
と与五郎の子分共が打ちこんでくるのを、左右にばったばったと引っくり返す。
そして長い刀を引き抜き飛び掛ってくる与五郎に、政五郎も着ている皮革羽織をぬぐと、
「さあ斬ってこい。江戸の仇を長崎でというが、とんでもねえ逆か怨みをしゃあがる」
革を棒のようにしごいて立ち向う。すると類は類をもって集るというが、両国広小路の方角から、浪人組を追ってきた白髪頭が、
「おう仙台屋……そいつは相政じゃねえか」
と側へよってくるなり、
「やい政五郎。おりゃ昔の堀留の弥平だ。その節の礼をいわして貰うぜ」
十手をふりあげて脇から打ち掛ってきた。
「遠山さまが町奉行だった頃は、てめえのような悪に、十手など持たせなかったが、おめえ又ぞろ御用ききになりゃあがったか……」
皮革羽織をびしりと頭に叩きつけると、

「あっ……」弥平はもんどりうって転った。
が、その横合いから与五郎が、
「くたばれッ」と烈しく斬りこんでくる。
「何におッ」政五郎は、皮革羽織を鞭のようにしてその太刀先を払いのけたが、刀と違って手先を守る鍔がついていない。
そこで手の甲をかすられ血を吹かせ、
「うむ」と後退さりすると、与五郎はえたりとばかり、大上段に振りかぶって、
「覚悟しゃあがれ」
どさくさ紛れに政五郎を亡き者にしてしまおうと、踏みこんで斬り掛ってくる。
「……親分」びっくりした平助が、手にした樫棒を力まかせに放ってよこしたのが、政五郎の手には届かず、与五郎の脚に当った。
が丁度、躍り掛ろうとしていた時なので、それが与五郎の向う脛にゴキッと音させて当り、前へつんのめって大地に手をついた。
おまけに転ぶとき自分の刀で傷つけたか、あげた顔は血塗れになっていた。
「やりゃあがったな」
眼に流れこむ血のしたたりをこすりあげ、
「おう野郎ども、早くやっちまえ」
子分共を振り返って怒鳴りつけると、腰をしたたかに打った弥平も、やけくそになって、

「御用弁にして曳き立てゆく事はねえ。縄を投げ首っ玉に引っかけ締め殺しちまえ」
身体を起して、下っ引連中にがなりたてる。
政五郎の方は平助と二人きりだが、与五郎や弥平の方は子分だけでなく、地廻りの自警団まで加えると五十人ではきかない。
だから近よってくるのを殴りとばしながら平助が、いらいらしきっていると、
「ワッショイ」「ワッショイ」声がする。振返って、
「纏が、めの字だァ親分……」
ほっとしたように平助が大声をあげると、
「め組の辰吉は政五郎の舎弟分……まずい野郎が駈けつけてきゃあがった」
与五郎が手拭で額の傷口を押さえながら、
「皆なひきゃあがれ」いまいましそうに立ち去ってゆく後から、弥平も下っ引の肩をかり郡代屋敷の白土塀の向うへ消えていった。

御用地騒動

文久三年の浪士組くずれから始って、翌元治元年の歩兵隊解散くずれ。ついで又その翌慶応元年の募兵解隊くずれと、公儀の方針が代るたびにお払い箱になって、止むなくあちらこちらを彷徨する手合いがふえてきた。そこで、
「元公儀歩兵の方にて、府内より旅だたれる衆には、路用の草鞋銭をさしあげる」

京橋白魚屋敷の土地建物を売り払って、又もとの箔屋町へひき移った相政は、その六百両を一分金に換えさせ、江戸から出てゆこうとする者に二分ずつ渡して落してやった。
それでも野良犬のように、町の自警団に撲殺されて、柳原土手や吉原田甫に転っている屍体が、日に二十も三十もあったから、
「町の衆ってのはお上には弱くて云いなり放題だが、弱い者だと酷いことをするもんだね」
政五郎は子分たちに大八車を曳いて廻らせ、引取人のない遺骸を集めてこさせると、麻布宮村町の内田主殿頭空地前の長玄寺の和尚に頼んで、畳四枚分もある大穴を掘って、そこへ次々と積み重ねにして葬った。
さて、慶応四年七月十七日にこれまでの江戸が、「東京」と名をかえた九月八日から、「明治元年」となると、従来の町奉行所は五月限りでなくなっていたし、又それまで、「不浄役人」とよばれていた町方などに、誰もなりてはなかった。そこで、
「常備兵」の名称で解散された歩兵を募り、これを巡羅とした。しかし殆んどが食い詰めた末になった者ばかりだから始末が悪い。
「飯をくわせろ」「酒を呑ませろ」
と無銭飲食から始まって吉原へくりこみ、
「ただで遊ばせろ」刀を抜いて暴れ廻る有様。
楼主の方も扱いに困りはて、あまり売れないのを見たてて、
「使って減ずる物ではないのだから」と、いい含め枕席に出してやると、

「こんなすべたが抱けるもんか。もっと上玉を出せ」と文句をつける。
それではと仕方なく、お職をはっているような器量良しを伴ってゆくと、
「うん気に入った。身受けしてやる。金は屯所で払ってやるから取りにこい」
手をとり足をとって、いやがる者を担いで行ってしまう。それには吉原会所でも困りはて、寄り集って智恵を搾ったあげく、
「旦那方は地理不案内で何かとご不便でございましょうから」
と旧幕時代の岡っ引や下っ引を、「案内人」の名目で屯所へ送りこんだ。
この連中は徳川家が瓦解し町奉行がなくなっても、給金や手当は吉原会所から貰っているから効き目はあって、ぷっつり吉原へ迷惑を及す事はなくなった。が、その代り、
「共同便所みたいな女郎あさりなぞすることはありません。何処そこの町内には、ぽっちゃりした良い娘がいます」とか、
「旧旗本御大身の奥方ですが、まだ若くて二十才前の美しいのが居ますぜ」
などと、自分らが目星をつけておいた家へ、巡羅達を手引きして連れこむ。そして、
「まずは、案内役が、お毒味を……」
下っ引や岡っ引はかねての想いざしをまっ先にとげると、一同が順ぐりに済ませた後は、旧幕時代の馴染の女衒(ぜげん)をよんできて、その場で、
「何処の宿場女郎に叩き売っても構わんで、たんまり値をはずめや」
死んだようになっている女を、駕に入れさせ売り払ってしまう。もちろん家人が、

「これで如何さまで……」と女衒がつけた値より多くの金子を差出せば、
「よし、お上のご慈悲で勘弁してやらあ」
と引きあげもするが、もし手向いしたり邪魔だてしようものなら、後が面倒になる。
何かと難癖をつけ腰縄をうって屯所へつれこみ、何日も仮牢の中へぶちこんで置き、すっかり弱りはてた処で引張りだし、でっちあげの自供書を勝手に書いて署名や捺印をさせてしまう。こうなっては蛇に見込まれた蛙も同然。御一新までは武士だ旗本だと威張っていた者も、からっきし意気地がなくなっているから、町の者と同じことで、
「お上の御憐愍を……」と金を作って歎願にゆくしかない。だから巡羅を使っての目明しや下っ引のやり口は百鬼夜行の有様。
これには政五郎もげっそりして、
「天朝さまの世の中になったというに、何んてこったい」しきりに慨嘆していると、
「ねえ、おまえさん。四年前の浪士組騒ぎのときに金がいると、京橋白魚屋敷の地所を伯父に六百両で買って貰ったけど……そこへ今朝巡羅方がきて『御用地』という立札をたて、伯父が御勘弁をと頼みに行ったら、二千両もってこいと脅され、とっても、そんな大金は工面できないと泣きついて来ました」
二度目の女房お照が訴えにきた。
「そうか。巡羅方は田舎者揃いだが、蔭で糸をひいてる奴らが八百八町をよく知りつくした悪(わる)なんだ……諸々方々で銭の取れそうな土地を狙って御用地の札をたて、脅して地主から金をいたぶっているとは聞いてたが、京橋の土地は手放したとはいえ俺と訳けありと知っていて、そうした真似をしくさると

は、こりゃ俺への挑戦だなあ」

と腕組みした政五郎は、若者頭から元締代理に昇格させてある平助をよびにやり、

「いくら悪い奴らでも巡羅方となりゃ御上ご威光というものがあらァ。とても素手じゃ掛ってゆけねえから三枚葉の山内さまの高張り提灯と、白黒二の字の御紋入りの法被をきた奴を百ほど集ろ」

といいつけ、平助が、

「……火事場へ出るんなら、土佐山内二十四万石の装束や仕度をしても構いますまいが」

心配して意見がましいことを口にすると、

「判ってらい。だが山内さまお出入りといっても此方とらは無官の太夫。別にお扶持を頂いているわけでもねえんだから、そうでも恰好つけにゃあさまんなるめえ」

すぐさま手配をつけさせ、百名の元気のよいのを従え、いまの歌舞伎座裏の真福寺橋を渡って白魚屋敷へ向ってゆくと、

「……来ゃあがったか」

と鉄砲をもって待ち構える巡羅方の後ろから出てきたのは、弥平と与五郎の二人。

「いくら物騒な世の中でも、二千両届けてくるのに百人からの護衛とは大げさな……」

年はとっても慾の皮の突っ張った二人は、憎々しげにいい放つと、

「何処へ積んで持って来ゃあがった。竜吐水の車か」

互いに顔を見合せ、巡羅方のスナイドル銃に守られている気安さから、

「二千両の他に、政五郎てめえには土下座でもして貰おうか」と側へよってきた。

「目明しや下っ引ってのが、だにみてえに執念深いものとは聞いてたが、てめえらは遠い昔の見当違いの逆怨みをまだ持って、おれをいたぶって金にする気かい……いくら死欲をかくとはいえ呆れたもんだ。可笑しくって、びた一文も呉れてやれるもんか」

と政五郎が啖呵をきると、

「この前は邪魔者が入ったから助けてやったに、その恩を忘れやぁがって」

仙台屋与五郎は腰をひねって大刀を抜き、

「野郎ッ……」と頭の上にふりかぶった。

「この処、巡羅方と組みやぁがっての悪業の数々……いつかは懲しめてやろうと思ってた処が、天の与え給うた好機到来だ」

政五郎が下知すると、斬り掛ってくる与五郎目がけて竜吐水を受持った若い衆が、

「それッ」と掛声を揃え、五台のポンプから水を一斉に浴びせかける。

これには与五郎だけでなく、弥平も一緒にひっくり返されてしまい、

「巡羅方の旦那。ぶつ放して撃ち殺しちまっておくんなさい」と悲鳴をあげると、鳶口を構えた百名の者は異口同音に、

「ふざけるな。一発でも撃ってみろ。頭のてっぺんに穴をあけるぞ」と前へ進みでる。

一触即発。今にも巡羅方と相模屋一家が血の雨を降らさんとしたとき。いまの昭和通り、当時の三十間堀越しに走ってきた馬のりの壮漢が、双方の中間にまっしぐらに飛びこみ、

「おれは土佐の板垣退助だ……山内家の者と巡羅方との喧嘩ときいて止めにきたぞ」

と大声でよばわった。維新戦争の各地の戦いで、板垣退助の名は聴えていたし、後年、（板垣死すとも自由は死せず）で有名な演説家である。続けて、

「こらッ巡羅諸公、諸君の中には浪士組くずれや歩兵隊解散で路頭に迷ったとき、二分ずつ貰った者はいないか。その金はこの男がこの土地を手放し調達したもので、千二百名の者がそれで犬のように撲殺されず逃げのびた筈である……もし受取った者が此処にいなくても、話ぐらいは耳にしていようが」

鞍の上からいい渡すと、巡羅たちはみなはっとして、

「済みません」しゅんとしてしまって、政五郎に捧げ銃の礼をすると隊伍を組んで、こそこそ気まり悪げに駈け足で引揚げていった。

翌明治二年、水天宮の川向う箱崎町に、土佐山内家の新邸が普請された際、政五郎は山内容堂によばれ、お庭拝見を許された。

そして翌年正月に年賀に伺候すると、

「板垣退助が、おまえに事あるたびに山内家の紋章ものを持ち出されて暴れられては困るからといいおったゆえ、拾人扶持しかやれんが正式に政五郎其方を家来してとらせる」と沙汰された。

ついでに、山内姓も許すといわれたが、

「勿体ない」とこればっかりは固辞して、「山中」の姓にかえて貰った。のち次男道之助に跡目を譲って新富町へ隠居したが、長女貞の婿の沢村田之助が脱疽で手足を切ると、

「だるまになっても亭主は亭主だ。ちゃんと面倒みるのが女房の勤めってもんだろうぜ」

政五郎は紀の国屋とよぶ芝居茶屋や沢村座まで買い与え、暮しの面倒をみてやり、

「男と女ってものは助けあい庇いあいだぜ」

口癖のように娘の貞にいいきかせていた。最初の女房の美代と、いつも云いあっていた言葉である。

だるま吉五郎

相政一家

力まかせに抱えこんで押し倒してしまわなくちゃア、女って感じのしねえのも居ます。が、お貞さんは違う。肩上げの取れたばっかしの十五六の時から、側を通り抜けられただけで、その気にさせられたものです。

もちろん色白で目許が涼しく器量が良い、といってしまえばそれ迄ですが、顔だけじゃなく、どういい表わしたら良いか判りやしませんが、離れた所から拝むみたいに見ているだけで、胸が一杯になり、ああ女だと、そんな想いが疼き、こみあげてくるお人でした。

わっちが縁あって盃を頂いていました親方は、日本橋箔屋町（今の、通り三丁目丸善の辺り）の相模屋政五郎。人よんで「相政」でございます。

相模屋ですから「さが政」と云うべきなんでしょうが、東海道の神奈川宿に政五郎とよぶ世襲の親分さんが居て、代々そちらが、

「さが政」とよばれていなすったから、それに紛れぬよう区別されていたんでしょう。

ところが名前というのは難かしいもの、佐渡へ流罪で送られてゆく渡世人の面倒を、よくみると評判の相川の政吉親分のことも、「あい政」とよびますから、そこで今では区別するため、「江戸の相政」と云われるおひとの、お貞さんは姉娘。だから子分とはいえ三下奴の此方とらにすれば、高嶺の花。とても側へ行って口をきこうの、手を握って心安くといった相手ではござんせん。唯そっと垣間みては、胸を昂らせ、しがない想いに身を焦がし、

（せめて一遍こっきりで良いから、口をきいて貰いたい、声を掛けて欲しいもの……）

と想う位が、せい一杯といったところでした。

なにしろ身内の数が千人から居て、箔屋町の本宅と、京橋大根河岸（テアトル銀座近く）の白魚屋敷の別宅に、別れて住み込んで居る子分だけでも、双方では百に近い頭数ですから、

「なんとか……」と日々焦れたにしろ、顔ぐらいは見知って貰えたかも知れませんが、とても言葉までは、ない物ねだりというか無理な話でした。ところが、慶応三年の十月。

「大樹公（徳川慶喜）が将軍さまを、近くお止めになるらしい」

上方から噂が伝わってきますと、江戸市中は、まるで蜂の巣を突いたようなえらい騒ぎ。

公儀歩兵隊を馘首された連中が鉄砲をもちだし、肩に担いでおいっちにと練り歩き、金持ちらしい家を見つけますとその入口で、

「膝撃ちの構え方、始めッ」号令をかけ狙撃の真似をしてみせます。そこで泡をくったその家の者が、真っ青になって飛びだし、

「どうぞ、これにて御勘弁を……」

金包みを持ってきて差し出しますと、
「よし撃ち方やめえ」と引揚げてゆきます。
が夜になりますと、先に解散させられました浪士組か薩摩屋敷の連中が、黒頭巾で軒なみ荒す有様ゆえ、こうなっては自身番や番屋も、番人が逃げてしまって空屋同然となりました。そこで、
「何とかして、おくんなさいまし……」
知合いの町内の旦那衆から頼まれ、
「ようがす」の二つ返事で、政五郎親方は五人一組の若い者を何組も作り、浅草下谷方面まで次々と、くり出しましたので、しまいには肝心要の箔屋町の方が手薄になってしまいました。
ところが、かねて土州侯山内家お出入りを、相政一家に持ってゆかれ、恨みを含んでいた神田の仙台屋与五郎という同業の者が、
「この、どさくさ紛れに政五郎へ仇を討つ。首をとるなり、片腕もぐなりして、これまでの怨念をはらしてくれよう」と、三十人余りの手下に縄襷をしめさせ、
「よっしゃ、よっしゃ」掛声かけ、一石橋を渡って呉服町から押し掛けて参ったのです。
飛鳥山からの空っ風が、旋毛をまくみたいに吹き荒れ、戸板ががたぴし鳴る晩でした。
「おい、開けやあがれ」
どんどん表戸を叩かれましても、まさか殴りこみとは気づきようもありません。
ましてその晩は、政五郎親方は白魚町別宅の方で、留守居は本妻のお照さんに上の娘のお貞さん。腕っ節のたつ屈強な若い者は親方の護衛についてゆき、残っているのは三下ばかりです。

「変だね、誰か表を叩いてるみたいだって、阿母さんが云っていなさるよ」
紅柄の入った八王子絣をきりっと着こなしたお貞さんが、土間の方へ顎をしゃくって、
「誰か、見ておいでな……」
わっちへ名指しでいった訳じゃござんせんが、眼を向けられたものですから、
「へえ……」初めて声を掛けて貰えた嬉しさで、もう無我夢中。ぱあっと駆けだし土間の冷飯草履をひっかけた迄はいいが、
(はて……)と戸の叩き方が乱暴なのに、
「こいつは変だ」やっと気がつきました。
そこで二階へ上って連字窓の桟の間から見降ろしたところ、どうも身内の者ではないらしい。
「大変で……押しこみらしゅうござんす。お嬢さんは姐さんと裏の生垣の処から、ひとまず隣の家へ逃げておくんなさいまし」
ふだんは足を踏み入れた事もない奥の間へ駆けこみ、急いで訴えましたところ、
「あたいは大丈夫だが、阿母さんについて行っておくれな」とお貞さんにいわれました。しかし姐さんはそれに手をふって、
「まだ年寄り扱いはして貰いたくないね。それよか、口ばっかりおませでも、お貞はまだ十五……腰でも抜かしちゃいけない。吉さん、おまえ大男だから背負っていっておやり」
「へえ……」すぐ屈みこんで背を向けましたが、この時の嬉しさはいいようもなく、
「確り、おつかまりなさいまし」というのも上の空、背中に覆いかぶさるように掛ってくる柔らかい重

味を、まるで壊れ物のように大切に、そっと持ちあげ、
（この背にお貞さんが貼りついていなさる）
もう目くらみするような心地でした。

仙台屋夜討ち

「お前ッ、吉五郎とかいったな……大男総身に知恵が廻りかね、というが、うぬはよく気転をきかせ、おれが女房子を護ってくれた。礼をいうぜ」と、一分銀をひとつだし、
「吉原へでも行って、これで遊んできな」
褒美を政五郎親分から翌日貰いました。
しかし、お貞さんを背中とはいえ抱いた後で、他の女など滅相もない話なので、
「せっかくですが……何も、こういう物を頂こう為にやったんじゃあござんせん」
叱られるかなとは思いましたが、とても銀粒を受け取る気にはなれず、その儘にして頭を下げ、溜りの六畳へ戻って来ますと、前夜の殴りこみで怪我して唸っていた連中が、
「おう吉、相手が仙台屋と判っちゃあ放っておけねえ……今夜これから仕返しにゆくぜ」
みな殺気だって声をかけてきました。誘われて、わっちも承知をしました。
というのは、政五郎親方が戻ってきなすった故、てっきり神田へ押しかけるものと思っていたところ、案に相違して、
「将軍さまが御役をやめなすって、自分から身を退こうとなさるこの大変なご時世に、てめえどうしの

仇討ちなんて、けつの穴の狭い了簡は起さねえこった。何も死人が出た訳でもねえし、騒ぎゃあがるな……」
政五郎親方の鶴の一声で、お仕舞い。
しかし、押しこまれて散々な目に逢った者達は、手負いだけで死んだ者が居ないから、それで済ませられるというものではなく、
「親方にゃ内緒で、これから仕返しに……」
となりましたが、政五郎一家は旅へ出る時は、道中差に長いのを許されても、普段は厳しく刀など持てない事になっています。
そこで殴りこみの相談は纏まりましたが、手にしてゆく武器がござんせん。
そこでわっちは心張棒を持ってゆく事にしましたが、どうもそれだけでは心許ない。台所へ行って出刃庖丁を探し、棒の先に細紐でぐるぐる巻きつけていますと、
「何してるの……」とお貞さんに見つかり、
（こいつはとんだどじだ、親方に告げ口でもされたら事だ）と泡をくい、
「なあにね、また昨夜みたいな押しこみがあったら……と用心しまして」
頭を下げ愛想笑いでごま化しましたが、
「ちょいとお待ちな……」お貞さんは奥へ、さっさと行ってしまいました。そこで、
（親方には一分銀を突き返し怒らせているのに……又しても、これが露見たら、只じゃ済むまい）すっかりしゅんとしていますと、

「おう、吉か……」
珍しく親方が自分で台所口まで来ました。
(しまった、こりゃどういう事になるのか)
びっくりして床板にぴたりと坐りまして、
「へ、へえッ」と頭を下へすりつけますと、
「……お貞にいま聞いたよ。せっかく銭をやろうとしたのに、遊びに行くどころじゃねえと断わり、また俺が女房や娘を守ろうと、おめえ庖丁を槍に仕込んでいたそうだね……一分の代りにゃ勿体ねえが、その志を賞でて俺が助光をくれてやる。十両はする脇差だよ」
と手ずから渡され、これには、
「うへえッ」と又も三拝九拝の有様でした。
さて、
親方から頂いた刀をさして、親方に禁じられた仕返しに行けよう筈もありません。
といって、それを口実に引っ込んだのでは男が立たず、付き合いが出来かねます。
そこで溜りへ取って返すなり、
「みんな怪我したまんまの恰好で、殴りこみを掛けたんじゃあ、相政一家は人手がないみたいに向うに舐められ、かえって藪蛇にもなりかねまい。ここは一番、この吉五郎に委してくんな」と一同に相談をかけました。
すると台所口まで親分が出てきた事も、手ずから脇差を貰ったらしいのも、薄々一同は察していたと

みえ、何か特別に云いつかっての話かと、一も二もなく承知をなし、
「よしッ、確り仇をとってきておくんな」
と送り出される事になりました。しかし、竜閑橋を渡って今川橋跡の紺屋町まで来ましたものの、どういう策のあろう筈もなく、
「御免よッ」その儘、仙台屋と書かれた腰高障子をあけ、中へ、ずうっと入りますと、向うも仕返しを覚悟した、物々しい喧嘩仕度で、土間には薦冠りの四斗樽の鏡を抜き、竹槍までがずらりと並べ立て掛けてありました。
「なんでえ、おめえさん一人かい……」
与五郎が出てきて、胡散臭そうに表の様子をすぐ見にやりましたが、もちろん此方は誰もついて来ておりません。そこで、
「好い度胸だね」などといっていましたが、
「はて……相政一家はご公儀を憚って、ご府内じゃ帯刀はしない掟と聞いているに、おめえさんは長いのを……変だね。可笑しいやね」
すこし怪訝そうに首を傾げていましたが、
「見せて……おくんなさんすか」
と話をもってきて手を差し出しました。
此方が殴りこみに来ているのなら、せっかくの武器を向うへ渡すなんざあ、とんでもねえ事ですが、なにしろその気で来た訳ではありません。ですから下げ紐をといて、

「へえ、どうぞ」と差し出しましたところ、
「これは……」受取って眺め渡した与五郎は唸り声をあげ、鞘のこじり上の黒漆をすこし削った個所を指さしまして、
「……政と一字ここに書きこみがしてあるからにゃ、こりゃ政五郎さんの差料……するてえッと、それを持たせて寄越しなすったは、お前さんが代理って寸法かい」と合点し、
「たった一人で大手を振って乗り込んでくるたあ、太い野郎だ鰌に刻んで魚の餌にしちまえと思ったが……やっぱし、おめえは政五郎さんの意をくんで、昨夜のことは水に流して仲良くしよう、ってえ心意気でおいでになったものらしい……この江戸が大変な騒ぎの時に、古い事を根にもって昨夜のような馬鹿をした……この与五郎は面目ねえ」崩れるようにその場に手をついてしまいました。

を組の喧嘩

「大変だ、浅草、組新門辰五郎んとこの纏持ちで清次ってのが、市村座へがえんの慣わしで法被にものをいわせ、さあっと入ろうとしたところ、木戸番に居た奴が、ここらは縄張り違いと手を出し清次の胸倉を突いた。だから断わられた腹いせに、を組の火消しを集めた清次が、いま市村座を叩っ壊している最中だ……」
と駆けこんで知らせにきた声をきくなり、
「……市村座には、あたいの贔屓の三代目さんが出ていなさるんだよ」
お貞さんが蒼くなって飛びでてきました。

しかし誰も立とうとはいたしません。
というのは訳があります。日本橋はい組、神田はろ組と、いろは四十八組に町火消しの組割りはされていても、いざ火事ともなれば、浅草を組の者も市村座へと駆けつけます。
まして芝居小屋は、お客の莨の吸殻から火を出す事も多いので、何処の組の者でも手すきの時には、中へ入って見廻りというのは御定法。それを無料入場なみに扱い木戸をついたのは市村座の誤りで、これでは小屋を鳶口で叩き壊されても仕方がありません。
ですから、いくら親方のお嬢さんのいう事でも、おいそれと市村座へ駆けつけ、を組の鳶を止めたり押える事は出来かねたのです。するってえと、
「いいよ、頼まないよ、あたい一人で行く」
お貞さんは目じりを吊りあげ、新しくおろした黄八丈の裾を帯に挟みこみました。
「三代目」というのは、五代目宗十郎の次男で幼名を由次郎。安政六年正月興行から、「三代目沢村田之助」を襲名し、万延元年からは守田座の女立方を勤めていましたが、実の兄の四代目助高屋高助（のち沢村訥升）の狐忠信をすけるため、今月は静御前一役だけ市村座へ客演の形で出ていたのです。
「ま、待っておくんなさい。事の理否判断はどうでも良い事……わっちはお伴します」
を組の火消し連中が暴れているという処へ、まさか十八歳の娘ざかりのお貞さんを、一人でやることはできません。此方も尻端折りをして、すぐその後を追っかけました。
しかし、市村座へついた時は、もう跡形もない位に小屋は叩き潰され、幟旗も竹竿をへし折られ、放

り出されている有様でした。

「紀伊国屋の太夫は……」聞いて廻っても、皆目なにも判りません。ところが、殺気だった火消し共は、お貞さんに眼をつけ集まってきて、

「おめえさんは確か相政さんのお娘ご……紀伊国屋を案じて、ここ迄来なすったところをみると、さては芝居者へ味方して、わっしらに楯をつきに来なすったのか」

長鳶口や引っ掛け鉤を手にして取り巻き、あわよくば酒手でもせしめるつもりなのか、

「おう、そのでっかい野郎、てめえも相政さん御身内なら、まさか騒ぎを見物って事もなかろ」と絡んで、凄みをきかせるのでした。

（この溝さらえめ……）と、むかむかして堪りませんでしたが、お貞さんにとばっちりでも掛けてはと、そこはぐっと辛抱し、

「なあに、ほんの通り掛りでござんすよ」

下げたくもない頭をぺこぺこさせました。

ところがそれだけでは済まず、夕方になって、

「を組新門辰五郎名代として、此方親方さんの御意向を」と革半天をきた世話役が、箔屋町の相政の許へ強談判にやってきました。

ごたごた最中に相政の名入りを着た者が、敵方の役者を探しに無断で入りこむとは、渡世の義理に欠けたやり口だというのです。

云われてみれば尤もな話。そこで親方は、

「これッお貞」と娘をその場へ呼びつけ、

「おめえ、誰を連れてった」尋ねましたが、

「あたいは行きました、だが一人ですよ」

自分ゆえに累を及ぼしたくないと、庇ってくれたのはよろしゅうございますが、それでは、政五郎親方の立つ瀬がございません。

「おめえ云わねえんなら、此処で坊主にし、髪毛を新門の父つぁんに届けて貰おう」

という騒ぎになりました。相政は土佐山内二十万石のお出入りですが、新門の娘お芳さんというのは、十五代慶喜さまの御側室。てんで格が違いますから仕方もありません。

が廊下の端で、それを聞かされては堪りません。びっくりして障子をあけ、

「悪いのは、この吉五郎でございます。どなたかにお断わりしてから、声をかけ探せば良かったものを、とんだぐれ蛤をやりました。科は、このてまえ……どうか馬鹿みてえな阿呆面した首でござんすが、これで話がつくものなら叩っ斬って、お持ち帰り願いやす」

首だけ障子の間から差しだしました。

「ほう、首を切られに出て来なすったか」

新門の名代も、これには呆れたらしく、

「まあ話が通じ他意ない事さえ判りゃ、それで良いようなものだが……せっかく此処まできたついでだ……親方さん、その首だけ出している若い衆に黒札（無条件）で話は預けやしょう。その代り明日一杯で市村座との手打ち（仲直り）にしておくんなさいよ」語調を変えてきました。

「そんな慌しい無茶な」愕きましたところ、
「首をさし出した覚悟なら、それ位は出来やしょう」
あっさり云ってのけられ、思わず、桟に挟まったままで、
「ひでえ、おっしゃりかただ」唸りました。

沢村田之助

政五郎親分の知合いで、日本橋中橋広小路の骨つぎで柔術もやる名倉の勝助師匠に歩き廻って貰い、市村座とを組を五分々々に、その夜の内に亀清で、呑み分けの仲裁をしました。
この儘でゆけば、まあ私も、
「相政一家の吉五郎」といやあ、ちったあ売れた顔にもなりかけたのでしょうが、世の中はそう巧くはゆきません。
というのは、お貞さんが、喧嘩の最中に紀伊国屋を探しに行った話が評判になり、市村座から招待されたのが切っ掛けで、それ迄は見物客と役者だったに過ぎぬお貞さんと沢村田之助との仲が、次第にずるずる深間に入りこみ、
「嫁入り話」が持ち上る迄になったのです。
人気絶頂の三代目沢村田之助でしたが、舞台化粧に使う白粉の鉛毒から、
「脱疽」という悪病にかかり、ヘボンとよぶ紅毛医者の手当をうけても思わしくなく、
「……あたいが、太夫の女房になって面倒みてあげないと、どうにもならないのさ」

色恋だけではなく、必死の権幕で騒ぎたてるものですから、政五郎親方も、
「可哀そうに、おめえも苦労するぜ」
と娘を不憫がって、食してゆくたいにと、猿若町一丁目の芝居茶屋の権利を買いうけ、「紀伊国屋」の屋号で嫁入り仕度につけましたが、それだけでは心許ないと思ったか、日本橋中橋畳町（現在中央公論社辺り）の小さな芝居小屋を求め、これを「沢村座」と命名しました。
さて、その六月から二年余りは田之助も寝たきりでしたが、すこしずつ快方に向いましたので一年おいた次の年の五月、上方へ買われてゆきまして、大阪中の芝居で、
「明烏」の浦里花魁。二の替りで「日高川」の清姫を演じて大当り。その出し物をもって京、名古屋と打って廻り頗る大評判でした。
しかし手足を切断した不自由な身に、旅から旅の過労はきつく倒れてしまいました。
初めはお貞さんも、田之助の身を案じ、付ききりになって大阪へも行っておりました。
だが芝居茶屋と小屋を抱えていては、京、名古屋へまで一緒はできかねます。そこで一足先に戻っていましたが、再発の知らせに、
「阿父つぁん、どうしよう」と箔屋町へ駆けつけました。政五郎親方も、「知らねえ土地へ置いてもおけめえ。すぐ連れ戻るしかなかろうが、迎えに行っても興行先ゆえ、おいそれとは素直に承知しまい……こりゃ腕ずくで背負ってくるしかなかろ」
娘可愛さに腕組みして考えこみ、
「女のおまえだけが行ってもどうなるものでもねえ。吉五郎を連れて行きな、あれなら芝居の男衆と違

って、腕も立つし力もある」とは口にしたものの、
「彼奴も昔のような三下じゃなく、神田松屋町一帯の縄張りを預かり、人から兄貴とか何とか立てられている男……まさか俺が口から名古屋の末広座まで、田之助を背負いに行けとはいい難い、おまえが口から話しな」
「そうですね。今じゃ良い顔だそうですから……ちょっと頼みにくいけど」
といった経緯はあったでしょうが、お貞さんの口から切り出されては、此方とらも否応はありません。すぐさま二つ返事で、
「ようがす、お伴しやしょう」
と引受け、お貞さんの云いつけ通り、嫌がる田之助を確り背負って戻ってきました。
しかし帰ったから直ぐ病気が良くなるものでもなく、当人は却っていらいらして、
「名古屋だったら調子の良い日には板（舞台）も踏めるが、此処じゃ出してくれる小屋もない」と泣き喚き転がり廻って暴れる始末でした。
そこで、
「……吉さん、おまえさん名古屋へ行って貰ったばかりで、またぞろ無理は云い難いけど……すこし猿若町の家へ来ておくれでないかね」
とお貞さんに話をもって来られました。
「どうなさいやした……」
「好きで一緒になった仲……いくら手足がなくなったって、どうって事はないんだけど、あの身体でも

気に入らないことがあって暴れだすと、とても、あたいの女手にゃおえやしないんだ……泊っていて、そんな時は、手を貸して欲しいんだ、助けておくれでないか」
聞かされてみますと、無理もない話。
そこで承諾してその晩から行きますと、
「離れた所で寝ていて貰っては、うちのが暴れだした時、急場の間にゃ合いやしない」
というので、お二人の次の間へ寝かされ、
「何かあったら声をあげる。そしたら構わないから飛込んで来ておくれ」といいつかり、
「へえ承知しやした」受けおった第一夜。
初めの内は張り切って眼をぱちくりさせていましたが、うとうとしだした頃。
「しぬ……駄目だよ、おまえさん……」
首を締めつけられているようなお貞さんの声が聴え、はっとして眼がさめ、云われたように唐紙を開けかけましたが、その途端、
「あっ……」そのまま生唾を呑みました。
曲芸でオットセイの玉乗りというのがありますが、そっくりその儘の恰好で、お貞さんが手足のない田之助さんを、自分の腹の上へ抱えあげ、揺さぶっていなさるのです。
「いけねえ……とんだものを見ちまった」
おこりにかかったみたいに震え、わっちは急いで床の中へまた潜り直しを致しました。

浅草紀伊国屋

「ねえ、手を貸しておくれな。うちの人に行水させるんだからさ」
「へい」云われて、浴衣の中へくるまった恰好の田之助さんを床の中から抱えあげ、葉桜も散りはて杜若の花が垣根の向うに、もう咲き出している裏庭へと運んでゆきますと、
「丁度よい湯加減なんだから、おとなしく入っておくんなさいよ」
裸にした身体へ手拭を巻き、かき廻していた盥の中へ漬けるように沈めましてから、シャボンをつけて手拭でこすりつつ、
「ねえ、良い気持だろ」までは、見てもおれましたが、下がかっていった手が石鹸の泡の中で、しごくように揺れ動き、
「……おまえさん手足のきく内は、あっちこっちの女しゅうとここをよく使っておくれだったが……もう、こうなっちまっちゃあ、あたい一人きりのもんだろうじゃないか」
抓ったのか強く握りしめすぎたのか、そこ迄は判りませんが、
「痛い、止しやあがれ……頼まあな」
身悶えする田之助さんには、背を押えているわっちの方が顔をそむけてしまいました。
なにしろ私はお貞さんという女を、飯はくっても厠へ入ってばば出すような、そんなおひとじゃねえ。黙って眺めているだけで、観音さんを拝んでるみたいに心和むお方……そう想い詰めていましただけに、前々夜に、手足のない田之助さんを寝床で抱きあげていなすったのを覗いてしまっても、

（ありゃア子供をあやすのに上へ持ち上げ、高い高いバア……）をやるのと同じことで、
（きっと、むずかる田之助さんを持て余し、そんな具合にお守していなすったんだ）
と、考えていましただけに、四月の青葉越しの陽ざしに、頬から顎を蒼く染め、きっとして田之助さんのそこを引張っていなさるのには、まるで、凍りついた水でも、だし抜けに浴びせかけられた想いでした。
ですから、その晩から、お羞ずかしい次第でござんすが、どうしても唐紙の向うが気になって、いくら寝つこうとしましても、すぐ眼がさめてしまって何ともなりません。
微かな音でもしようものなら、又こないだみたいにお貞さんが自分の身体の上に、田之助さんを立たせていなさるのか……と、瞼に残っている有様を蘇らせ、狗ころみたいに舌を出し、ぜいぜい喘ぎ通したものです。
その内に、
（なまじ手足が生えているからいけないんだ。俺だって、田之助さんみたいに、あんな恰好になったら……お貞さんに抱えて貰え、可愛がって頂けるかも知れねえ）夜ごとの想いがつのって、そう思いこむようになりました。
そこで西南戦争の翌年七月七日。七夕さまの祝いの晩、鉛毒がとうとう頭へまで廻り、のたうち転げて田之助さんが亡くなったあと。
わっちは思いきって、左手は自分で叩っ斬り、右手は毒蛇に咬まれたと医者を瞞くらかして切断いたしました。ついでに脚もと思いましたが、歩いて帰れねえから止めました。

田之助さんが狂い死にみたいに亡くなって治療代や借材を片づけますと、猿若町の茶屋も中橋の小屋も人手に渡ってしまいました。

「俺の死に金に取ってあったのだが……」

次男の道之助さんに二代目相政の跡目を、譲っていなすった隠居の親方が金を出し、

「これで食ってゆけよ」と浅草の小料理屋を求めてやって、お貞さんは、

「お国」と名を改め、その紀伊国屋の女将に納まりました。

——わっちですか。両手は落しましたが、やっぱしお嬢さんは高嶺の花、とてもじゃねえが可愛がっておくんなせえなんて、いい出せっこありませんや。口で下駄を揃える稽古をし、下足番にして貰っていやすが、

「死んだ紀伊国屋に心中立てをして、両手を自分で斬ったとは見上げたやつだ……」

とか何とかいわれ、浅草じゃ今では売れた良い顔になっています。が、なんといっても不自由でやりきれません。

任侠一代男

青木の弥太郎

「文久二年版吉原細見」の角町の部に、喜里屋という中頃の店がのっているが、そこの上から四番目の序列で、賑という名の局女郎がでて居る。これが、お辰の二年前の源氏名で、今では新徴組の西森蔵に落籍されて居る。

さて、この二月から元治元年と名が改る文久四年（一八六四）の正月。将軍家茂公上洛に先立って、昨年京から戻されてきた新徴組の連中は、改めて随行のお沙汰が出ると思って居たら、それ処か、「身許良しからざる者のお咎め」の内意がでたからして、これはえらい大騒ぎとなった。

西森蔵にしても、吉原の女郎を身請けする位だから、こっそり他の仲間を語らって町家を荒し廻っていた。脛に傷もつ身だから、じっとしては居られず、お辰に、

「なあ、おれと逃げてくれろ」相談した。

「あいな」と、お辰も水商売上りゆえ、そこは聞き分けがよく、すぐ風呂敷包み一つで駿河台紅梅町の、大銀杏が目印になっている旧士屋邸の屯所をぬけでた。

しかし急場のことゆえ二人揃って、転がりこめる当てもない。そこで、
「鍛冶橋の留親分の処へ行こうじゃないか」となった。お辰が吉原にいた頃の馴染である。
そこで森蔵も、すこし塩っぱい顔はしたが、だからといって他に行先もない。
「うん、そうするか」
今でこそ眉根が吊る位にぐっと引張りあげ、武骨に講武所髷を結っているが、もともと森蔵は武家ではなかった。甲府柳町三井楼卯吉のところの下っ端上りである。
祐天仙之助や菱山の佐太郎が石坂周造に誘われて、新徴組の前身である浪士隊へ加わった時、ついでに後から尻にくっついて入った程度の男だから、お辰にくっついて鍛冶橋へ行くと、すっかり侍言葉はやめにして、
「親分ひとつ、よろしゅうに願いやす」
と頭を下げて挨拶した。しかし留吉の方は森蔵の方には眼もくれず、
「おう賑……」と、お辰の吉原時代の名をよんで、さも懐しそうに、にたにたして、
「おめえ、お女郎の時より仇っぽくなりやあがって、女っ振りが良くなったじゃねえか」
昔馴染んだ仲だけに熱っぽい声をかけ、
「おれが処は女房もいねえ野郎暮し……さあ遠慮はいらねえ、気楽にやってくんな」
と口にした。そこで森蔵も、
「へえ、よろしゅうに」と礼をいったが、どうも後がいけなさすぎた。
女房のお辰を留吉が己れの居間へ引張りこんでしまって、朝になっても戻してよこさない。それには

森蔵もくさりきって、
「これじゃあ、まるっきり気楽すぎて間がもてねえ」憮然としてしまった。
しかも一日きりの事なら、厄介になる礼の手土産代りという事もあるが、これがぶっつけで云わば流連の恰好。だから昼も夜も膝小僧を抱きっ放しの森蔵は、むくれてしまい、
「やれ男伊達だの、仁義渡世だの云いやあがって、ひとの女房を抱きづめって事はなかろう」居たたまれなくなって飛び出した。
が、さてかっとなって、外へは出たものの行く処とてない。そこで飛鳥おろしの空っ風に背中をこずかれながら、駿河台紅梅町の古巣へは戻れないから、本所の小笠原加賀守屋敷跡の屯所本部へ様子をみにいった。
表門からは入れないので裏手へ廻ったが、うっかり足を踏みこんだら取っ捕りそうで、もたもたして居ると向い側の南割下水の方角から、青木弥太郎が姿をみせ、
「……おめえ、喜里屋の賑を落籍せやあがった色男じゃねえか」と声をかけてきた。
二百俵どりの歴としたお旗本だが、
「評定所書物役」という今なら裁判所書記官みたいな御役で、百石の役扶持を貰っていたのを、未練気もなく薩っ張りすてて、このところ故の木阿弥の小普請入りで、のんべんだらりとしている男。
「こりゃ……どうも」
森蔵は頸筋に手をあてぺこり頭を下げた。
というのは、お辰がまだ吉原にいた頃。

この青木弥太郎も通っていた一人で、いわば森蔵は横合いから鳶みたいに、さあっと掻払ってしまった恰好だったからである。

「どうしたんだえ、とんと浮かねえ顔だが」

とよってきて、上から下まで見降してから、

「おぬしも紋付羽織に大小をぶちこんでた時にゃあ、ちいとは見られたが……頬被りして尻っ端折りの扮装はさまにもならねえな」

にんまり笑って、唇をへの字にまげた。そこで、

「いやあ……こりゃ面目ない」

森蔵は冠っていた手拭をとって近より、

「わっしを御宅へ匿っちゃ頂けませんか……ただとは申しません。賑をつれてきて宿代にそちらさまへ進上しますが……」

と打診するみたいな口のきき方をした。

本所長崎町

森蔵が鍛冶橋の留吉の許から、無理やりみたいに賑ことお辰を連れ戻してきて、青木の所へ転がりこんできてから、類は類を呼ぶというが、新徴組崩れの芳蔵や杵五郎といった連中まで転がりこんできた。

しかし三人や四人の内は良かったが、こういった手合いが十人を越えると、たとえ二百俵どりでも天下の直参ゆえ、青木弥太郎は隣り近所に気がねして、近くの長崎町へ長屋を借り、そこへ彼らを住まわ

せた。処が日がたつにつれて、大の男がごろごろしていても退屈だから、

「寝る所に飯が有りゃあ、それでオンの字みたいなものだが……ちょっと、これじゃあ物たらねえな」

といいだす者が現れた。

「うん、酒までは、二百俵取りの旦那にゃせがまれないからな」

と集議一決。何かしようという具合に、一同の間で話が纏った。

だが、なにも呑みくいのための酒手欲しさからでもなかった。

なにしろ黒船がいつ何時、隅田川の入口まで近よってきて、毛唐兵が乱入してくるかも知れぬという騒がしさで、

「早半鐘が鳴ったら取るものも取りあえず、まず橋向うへ逃げろ……そうすりゃ、おかみが橋を落して助けてくれる」とか、

「それより黒船が、ご府内目ざしてよってきたら……お浜御殿で三発続けて狼煙をあげるからして、家財や女子供を先に逃せ」

といった伝達が家主や地主を通して、知らされてくる状態なので、すこしでもガタッと音がすれば、誰もが耳を澄し、

(半鐘か、狼煙か)と、ぎくっとするような有様だったせいもある。

それに江戸に近い水戸では、この年の三月二十七日に集った私学党が、四月三日に日光山へ向い、栃木太平山の三光神社に立てこもって、「水戸幕府」の看板を揚げていた。

そして彼らは軍資金集めに、天狗面をかぶって近在の豪農を荒していたので、それを真似て江戸でも、暗くなると、

「われらは水府天狗党の別働隊である」

と集団で八百八町を吾が物顔にのし歩き、

「尽忠報国の軍資金を出せ」とばかり、現金専門に強奪して廻る手合いが多くなった。

だからといって長崎町の梁山泊に集った連中も、それと同じ事をして銭儲けしようとしたのではない。それならば森蔵が、前は自分の女だったお辰を通して、

「姐さんの口から、青木の旦那に、ひとつ隊長になっておくんなさるよう、頼んでやって下さいまし」

などと話をもちこむ筈はない。

また、いくら無役小普請組になっているとはいえ、天下のお旗本を押込み強盗の隊長に担ぎあげることもなく、それなら森蔵らが勝手に自分らでやっていたはずである。

さて、弥太郎はお辰からその話をきくと、

「どうも近頃は、将軍さまお膝元のこの御府内が百鬼夜行の有様。これじゃ天下ご政道の御威光に係ろうてものだ……何とかせねばと、実は、このわしも思っていた処なんだ」

手持ち無沙汰で、退屈していたせいもあるが、すぐに賛成して、

「よし、よし」とばかり、長いのを落し差しに堀割を渡り、長崎町へとおもむいた。

そして、とぐろを巻いていた連中が、膝頭を揃え迎える中を、かき分けるようにして床の間に当る辺りに座をしめ、

「贋天狗退治をするのに、これだけの頭数でたりるのかな」

と一同を見渡した。そしてお辰に、

「久しぶりに俺が来たのだ、皆に一杯呑ませてやれ」皮財布を丸ごと渡した。

だから森蔵以下みな張りきってしまい、

「天狗党の真似をして、押し借り強請をして廻って居るやつらは、見かけは浪士風でも、どいつも無職か職人上り……わっしらと中身はどっこいどっこいですぜ」

胸を叩いて良い恰好をしてみせた。

が弥太郎は、それに首をふり、

「おめえら一人々々はそりゃ強かろうが……なんせ此処に居る十倍も二十倍もの輩らが、てんでに荒して居やあがるんだ。とても、これだけじゃ手が廻るめえ」といいきった。

「……そうか。此方も五人一組にしても、せめて四組か五組は居るから、今の倍は雁首を揃えなくっちゃあ駄目か」

森蔵も指折りしつつ考えこんでしまった。

すると、酒や肴を用意して戻ってきたお辰が、さながら助け舟をだすように、

「本所本瓦町の料理屋小倉庵の若旦那長次郎さんてのは、やっぱり、あたいのお馴染さんだったから、賑に聞いたと尋ねて行きゃあ、腕っ節の強い板前上りかなんか、十人位はすぐ世話してくれますよ」

「そうか、そいつはかたじけねえ……」

森蔵も歓んだが弥太郎も満足そうだった。

任侠隊誕生

青木弥太郎が、集めた連中に新たに、
「任侠隊」という名をつけると、同じ小普請組の旗本の津田小次郎、塚田万次郎といった次男坊たちが、道場の竹胴をつけ手拭で鉢巻をして駈けつけてきた。
小倉庵の長次郎は、板前は自分の店の鉄次しか連れてこなかったが、当時、
「江戸の相政」とよばれていた日本橋箔屋町政五郎の許から、命知らずの強いのを十人ばかり借りてきた。森蔵はそこで、
「よっしゃ」とばかり六人一組の編制で、贋天狗退治に、その晩から取りかかった。
お辰も今でこそ他人にはなって居るが、かつては身請けされて暮した仲。
それに、その身請けの時に算段した金の出所がまずく、森蔵は露見したら危ないと新徴組を棒にふったのゆえ、云わば己れが為にしくじったようなものと、そんな想いで居たものだから、
「しっかり、やってきてお呉んなさいまし」
出かけて行きかけた背後を追って行き、火打石で切り火をして門出を浄めなどした。
「こいつは姐さん、有難とうござえやす」
前には、なあおめえと裸にむいて抱いた女でも、今では自分から進んで青木に献上してしまったお辰ゆえ、森蔵はその心ざしが嬉しくなって、肩をいからせ、
「天狗を追っ払って、たんまり御礼でもせしめて来やしょう」

勇んで五人の隊員をつれ、ぞろぞろ繋がって長崎町を後にした。
そして、入江町から橋を渡って、
「今夜は夜ぴで掛ったって贋物を捕え、初手柄をたてなくっちゃなるめえ」
一晩中歩き廻ってでも、天狗にめぐり逢わねばと意気ごんで、新辻橋の袂を曲ると、
「誰かッ……」叫んで柳原四丁目の方から、小僧が一人泣きながら駈けてくる。
「もう出っくわすとは……縁起がよい」
勇みたって小僧が走ってくる方へ、
「それっ」とばかり飛んでゆくと、古着卸し問屋兼安の表の潜戸が、すこし口をあけ灯影が棒みたいに外へ突き出ている。
「任侠隊だぞ」と、それをこじあけ中を覗いてみると、お決まりの黒装束が、太いだんびらを抜き放ち、差し出された金包みが不足だとごね、しきりに脅しをかけている処。
「ふてえ奴らだ、やっちまえ……」
森蔵を先頭に店の中へ雪崩れこむと、
「なんだ、てめえら……同業か」
「この家はわれらが先口、他へ行け」
と口々に喚めく黒装束の四人の者へ、
「こちとらあ、お旗本青木弥太郎さまを頭とする任侠隊……こうして弱きを助け、おめっちらみたいな悪を征伐するんだわさ」

気持のよい啖呵をきってから、抜く事もあるまいと鞘ごと振りかぶって掛って行くと、
「まあ待ってくれ、分け前は出すから見逃してくれ」と掛合いをしてくる有様。
「……うん」森蔵はいわれて、すこしその気になったが、伴ってきた五人が張り切って居て、向うの云う事など耳にもかさず、
「一人残らず縛ってしまいましょう」
店の土間に積んであった荷作り用の、縄束を引張りだしてくる。
そこで黒装束も縄目に掛っては大変と、
「話の判らねえ唐変木だ」と外へ飛び出し、
「来るならきてみゃあがれっ」
と抜身を大きく振りかぶってみせる。
「なんだ、やる気かッ」
森蔵が抜き放ったから、五人の隊員も、
「生き胴の試し斬りができる」それぞれ大刀を鞘ばしらせて掛って行く。が、向うは唯の脅しだったらしく、
「本当にやる気か」と訊ねてきて、
「そうだ」返事をしてやると四人とも、
「なら、やめだ」と四ツ目橋と南辻橋の方角へ別れて逃げだしてしまった。
そこで森蔵も、新徴組時代の言葉使いで、

「口程にもないやつめが……」
と肩を怒らせ、恐る恐る潜戸の内側から覗いていた兼安の番頭へ、
「われらは南割下水青木弥太郎さま手の者とは、最前も申した通りじゃ。後はよく戸締りしておくがよいぞ」
と云い残し、次は菊川町から西町へでて、舟会所のある猿江橋の大榎の辺りまで、とっとと足を運んでゆくと、又しても、
「ガン、ガン」金盥（かなだらい）を烈しく叩く音。
それを聞きつけ小名木川の向う岸、扇橋の呉服尾伊勢屋へ、急いで駈けつけてみると、今度は浪士風で山岡頭巾を冠ったのが、これまた刀の柄に手をかけての押借り強談の、真最中といった光景。だから、
「……賊は斬り棄て御免なるぞ」
と森蔵が今度は最初から抜刀して掛って行くと、向うの三人は、
「尽忠報国の軍資集めに邪魔だて致すかッ」
喚めき返してきて、
「待て、外へ出る」と店の前へ踊りではしたが、これもまた斬り合う気はないのか、そのまま大久保佐渡守と松平能登守の屋敷の、間に挟まった油掛横丁へ走りこんでしまった。
追いかけても仕方がないから、森蔵らは、そこから森下町へ廻って、襲われていた油屋を助け、明け方近くなって戻ってきた。

そして茶漬けに丸干で飯をすませ、そのまま森蔵らはぐっすり寝てしまった。

が、昼すぎに起きてみると、昨夜それぞれ手分けし、見廻りにでかけて行った他の者も顔が揃っていた。そこで互いに、

「聞きしにまさるひどいものだ。犬も歩けば棒に当るというが、あれじゃあ百組ぐらいの群盗が、てんでに横行しているわけだ」

と、互いに手柄話というより、あまりにもひどい無秩序ぶりに呆れてしまった。

青木弥太郎も、ねぎらいに顔をだして、

「……昔は刀の鯉口三寸抜いたなら、土分の者はその家が断絶。浪人なら所払いと厳しかったから、抜刀なんかする手合いはなく、おかみの捕方も六尺棒で取締れたんだろうが、長州征伐このかた侍でないのまで刀をさすものだから、抜きたくって仕様がないらしくて白刃を振り廻す。そこで捕方も危くって、とても棒では掛ってゆけねえから、放りっぱなしなんだろうよ」と説明をした。

泥水育ちの女

「可笑しいねえ、変じゃないか……」

お辰が南割下水の青木邸からやってきて、

「おまえさん達は何町の何屋と何屋を助けてやったと、毎晩の手柄を殿様に報告しておいでだが、その中の何処からも梨の礫。此方へも礼がきてないらしいし、向うのお屋敷へも一文の謝礼も来ちゃあいないんだよ」

ずけずけした口調で一同を見渡し、

「まさかと思うけど、賊のやつらから落し前をとり、それで夜明けまで、外廻りしていた事にして白首なんか抱いていたんじゃ、なかろうね」ぐっと睨みつけた。

その切れ長の眼許をまぶしそうに、

「姐さん、おまはんは吉原の泥水をくぐって居なさるから、そんな勘ぐりをなさるが、そいつは悪い了簡だ……わっちだって他の奴らだって、礼金がたんまり届いて分け前を貰い、それで遊びに行くのを愉しみに……どいつもこいつも観音さまにゃ御無沙汰だ」

森蔵が一同に代って弁解をした。

が、お辰は立て膝のままで顎をしゃくり、

「だったら可笑しいじゃないか……お旗本青木の殿さまの御名をだしてるんだろ。いくら商人がせち辛くても、押借りが助かったものなら、小判の五枚や十枚は菓子箱の中へでも入れて届けにくるのが当り前だろ」

「そりゃそうだ。最初からその見込みで……人助けして呑み料を稼ごうって考えついたのが、この任侠隊の始まりなんだもんな」

しどろもどろに森蔵が困っているのを、

「姐さん……そんなにお疑いなら……わっちらが女遊びしてるかどうか、はっきり確めてみなすっちゃどうです」小倉庵の長次郎が割って入って口をきいた。

これにはお辰も顔を赤らめてしまい、

「勤めしてる時なら、束になって掛ってきても……おまえさんらの三十人位は瞬く間に済ませもしようが、今は堅気、しかも歴とした御旗本のご新造なんだよ」

きっとして眼じりを吊りあげ叱りつけた。

が長次郎は手をふって、

「姐さん、そうまでは云ってねえよ……俺が口にした確めてみてくれとは、仕方がねえから疑いをはらす為、ここでみんな下帯をとって、ずらりと並んで立ててみせるから、それで確めてほしいと申し上げたんだ」

と、まず自分から立ち上りかけた。

が、気の早い相政一家の若い衆は、

「まっぴら御免なすって……」もう出したままで背をのばし、

「姐さん、ほれこの通り」突立てて見せてしまった。

そこへ青木弥太郎が、

「……何をしておるのか」難しい顔で入ってきたが、話の筋道をきくと、

「おめえら男だから遊んでない証拠を立てて見せられるが、女だったら濡れ衣をはらそうとしたって、立てようがないじゃねえか」

怒鳴りつけはしたものの、破顔一笑。

「あまり生の良いのを並べて、うちのお辰に見せやあがるなッ……昔が昔だ。摘み食いしたくもなるだろうじゃねえか」と、真顔でいった。

これにはお辰も照れてしまって、

「いやですよ……」とばかり部屋から逃げ出した。

さて、青木弥太郎を取り囲んだ一同は、

「わっしらが夜ごと歩き廻って懲らしめているのに……てんで御利益がねえってのは、一体どういう事になって居るんでしょうね」

「いまいましい話だが……まさか今から、礼はどうしたとも聞きにはゆけねえ」

それぞれ、むくれた顔を並べたて数珠みたいにつないだ。

しかし青木弥太郎も当惑気味に、

「礼を持ってくるだろうと高をくくって始めたのは、此方の一存による処だから……まさか挨拶に来ねえからって、此方から呼び出しはかけられまい」と腕組みした。

「とは云うものの、変ですね……陰徳あれば陽報ありで、何処か一ヵ所あたりは礼金はまあまあとしても、角樽の一荷位は此方へ届けに来てもよいのに――」

小倉庵の板前だった鉄次がぼやいた。

「そうだ。どこのお店でも押込みに入られた後は、町方の御用聞きに届けはするだろう。それで気が済んでしまうんだろうか」

相政一家の兄い株連も妙な顔をした。

そこで森蔵が膝を叩いて、

「うっかりしていた、唯おっ払うだけでなく役向きの方へも、こりゃ今夜からは、ちゃんと届けねばな

るまい」ようやく思い当ったように口にした。
「そうだ、違いねえ……」
鉄次も、おでこを叩いてひとつ唸った。
すると唐紙の外から、
「鍛冶橋の留吉親分なら、人入れ稼業の他に南町奉行の御用を拝していなさる……あの方に通しておきゃ間違いないだろうよ」
と、お辰が忠告ぶった声をかけてきた。
青木や他の者は、そうかといった顔でうなずいたが、森蔵だけは、
「あの女……なんでもかんでも、てめえの親類筋で、かたづけようとしてやあがる……」
口の中でぶうすか声にならぬ声をだした。
「徳川小僧」「葵小僧」
森蔵は気が進まず賛成しなかったし、相政から来ている兄い連も、
「お上の御用聞きってのは、昼間は十手を見せびらかして呑み屋の女なんか、あっちこっちでいたぶって居るが……暗くなると、そんじょそこらの泥棒よりは土地かんもあるし手口も巧いから、うぬが手引きして廻り……そこで近頃は、御用聞きがぐるだからと蔭では、御用盗とまで云ってる位だ」
とたしなめはしたのだが、長次郎が、
「そりゃ岡っ引には酷い野郎も多いのは事実だが、姐さんの知り合いの御用聞きなら、まあ間違いなか

ろうって云うもんだ」
と受けあってしまったから、青木弥太郎もその気になったらしい。
それからというもの留吉は、若い者を従えて長崎町へ出入りしだし、森蔵にも、
「俺がような男を売る稼業のもんが、任侠隊って名のつく屯へ知らん顔じゃ罰当りだ」
とかなんとかいっては、
「まあ知らねえ仲じゃなし一つうまく力を合せ、おれ達がお江戸八百八町の、守り神になってやろうじゃねえかよ」
肩を叩かんばかりに馴々しくした。が、時には仇っぽくなったお辰に眼をやって、
「ますます女っぷりが良くなりやあがった」
などと未練気をみせ、そっと小当りにあたって、口説いたりもしてみたらしい。
が、お辰の方には、もうその気はないらしく、てんで相手にはしてないらしかった。
さて、飛鳥山の花見も雨にふられて、あっという間に終ってしまった三月二十二日。
留吉がやってきて青木弥太郎を待ちうけ、顔をみるなり、
「殿様……徳川のお扶持を賜っている金座役人の中に、ひでえ奴が居りやすね」
口惜しそうに腕まくりをした。青木が、
「……どうしたのだ」ときくと、
「天下を引っくり返そうって企んでいる長州の奴に……そっと此方の金を廻して裏切りしようってんだから、ひどい話じゃありませんか」と留吉は息まいた。

「そうか、そうと判っているのなら……何故ふん縛ってしまわねえのだ」
「へえ、出来ればやりやす……しかし金座は御勘定奉行差配下で、町奉行所では手が届きやせん……殿様は評定所書物役から勘定方吟味役にもなろうとした御方、それ位はよく御存じでしょう……駄目でやすぜえ」首をふって顔をしかめた。
が青木弥太郎は、それに、
「管轄違いといっても吟味方へ願い出れば、向うと掛け合って貰えるぞ」といった処、
「そりゃそうですが……まあ三月はたっぷり掛りましょう。なのに金座役人上月小藤次が長州へ廻す金を、本所中の郷の別荘で引渡しするのは、今夜か明朝って云うんですぜ」
頭を抱えこむようにして溜息をついた。
だから青木弥太郎は、にっこりして、
「心配するな……そうしたおかみの手が廻りかねる処へ、乗りこんでゆくのが吾ら任侠隊だわさ」といいきった。
処が留吉はいわれて顔をあげたが、
「殿様は御存じねえが、いま密かにこの江戸表に居残っている長州っぽは、斎藤弥九郎の練兵館で塾頭をしていた桂小五郎とか、錚々たる腕きばかりだ。そこへ此処の連中じゃねえ」と情けなさそうに見渡した。
そこで弥太郎は己れの掌の竹刀胝をみせ、
「おれはこうみえても北辰一刀流の目録だ。今日は自分で行ってやる。なら良かろうが」にたりとして

いってのけた。
「と、殿様が、ご自身でお出まし……ならば間違いなしって処だ」
ほっとしたように留吉は戻っていった。
庭の八ツ手の葉に西日がさしこんでくると、弥太は伸びあがって、
「贋天狗退治じゃなく、本物の長州っぽ征伐だ」と、一人でゆくといいだした。
「……そうはゆきやせん。隊長一人ゆかせては、任侠隊の名がすたりやす」
長次郎が板前の鉄次や相政の若いのを二人選んで、暗くなって出かけてゆく弥太郎の後をついていった。
しかし中の郷へついて、上月小藤次の別荘を四方から手分けして見張っていたが、なかなか目ざす長州っぽは現れてこない。
そこで青木は詰まらなそうに、
「帰る」といいだした。が、長次郎は、
「せっかく隊長がお出ましになったのに、手ぶらでお戻りになるって手はないでしょう……まあ忍びこむだけは入ってみて、様子を探りましょう」と、かきくどいた。
鉄次も側へよってきて、
「ここは別荘だから、事によったら長州っぽの匿れ家になって居るのかも……」と告げた。
「それもそうだ……」
弥太郎もその気になってうなずくと、

「では」と門の処へ駈けていった相政の若い者が、力まかせにどんどん叩き、
「任侠隊のお調べだ。あけなせえ」
と呼ばわって開門させ、
「さあ殿様……」すぐさま中へ案内した。
しかし、邸内くまなく探したが、目ざす長州侍は居らず見つかったのは、油桐紙にくるんだ三百両の金包みだった。
「これが長州へゆく金なんでしょう……」
いまいましそうに長次郎は、鉄次に眼くばせしてからが、
「……これさえ持って行っちまえば、長州っぽが来たって後の祭りだろう」
その金包みを抱えて外へ出てしまった。
処が、この二月後の五月二十七日。
青木弥太郎は根津宮永町の岡場所へ、うっかり足を踏み入れたところで、根津の勘八という下っ引に絡まれ、あげくのはてが月番の南町奉行所へもってゆかれた。しかし、
「直参の御旗本が町方お召捕りって、御法はないから……いくらお取りこみのごたごたの折りでも、間もなく殿様はお戻りだろ」
皆が気にして話合っていたが、二月たった七月三日。お辰が南町奉行所へ呼び出され、そのまま女牢へ放りこまれてしまい、その上小倉庵へ戻っていた長次郎や鉄次までも、御用弁にされてしまった。
処が小倉庵というのはその頃、亀清と並び称される本所本瓦町の大料理屋だったので、これは大評判

になり、西南の役の翌年には、『小倉山青樹栄昔日新話』という題で、当時流行の実録小説本にもなって弘められた。
が、その明治十一年刊の本では、弥太郎は故意に文中では青木栄の名に変えてある。
が、明治二十年になって伯円がこれを種に己が講釈に仕立てた際は、
(御直参旗本が泥棒扱いされたのは古今に例がない)という処からか、武田伊織と、その名を変えて、
「徳川小僧」の名をつけた。だから大正に入って活動写真になった時は「葵小僧」の題名ともなった。
そしてその中で、鬼神のお柳として出てくるのが、お辰なのだが、小説や映画では牢に入っては居らず、外から牢破りするようになっているが、実際は捕われていたのである。

伝馬町揚屋牢

「どうでえお辰……おめえにゃあその気がなくても、此方とらあ大有りだ。魚心ありゃあ水心の譬もあらあな……どうでえ、うんと承知してくれさえすりゃあ、捕り違いってことにして、すぐにも御赦免にしてやろうぜ」
板囲いの土間の折檻部屋へ連れこみ、留吉はここぞとばかりに、くどきにかかったが、
「何をお云いだい……勤めをしてる間は、おまえがような男にも、そりゃ肌身を許したが……今は抱かれてやる義理なんか有りゃあしないんだ」とけんもほろろ。
「ちえッ何を云ってやあがる……森蔵と転がりこんで来やあがった時、ずうっとこの俺に抱かれずめだったは誰だったっけえ」

「よしとくれ……あの時は、弱きを助け強きをくじく男だなんて……おまえの効能書きをまにうけ、うっかり信じこんでいたからさ。だがねえあたいを取り戻したいばっかりに、うちの殿様まで捲き添えにし、まんまと罠にはめるような小汚ない真似するようなのは、面もみたくないよ」

おちょぼ口から唾まで吐きかける始末。

「せっかく、おかみの御慈悲をかけてやろうと、わざわざ呼び出して下吟味してやっているのに、太い阿魔っちょだ」

いくら惚れこんで居ても、こうまで悪態をつかれては、留吉とても可愛さ余って憎さが百倍。そこで後手に縛られているお辰を、六尺棒で滅多打ちにしてから女牢へ戻した。

だが、こうなると留吉は穏やかでなくなった。もしもお辰の口から洩れでもして、上月の別荘へ弥太郎らを差し向けたのが、自分の策略と判ってはまずいと心配した。

そこで、なにがなんでも青木弥太郎を早く服罪させてしまおうと考えた。

そこで留吉はかねて付け届をして眼をかけて貰っている与力の三好善介の許へ頼みに行き、その伝手で町奉行池田播磨守の奥向きへ、小判を底に並べた菓子折をすぐさま届けた。

そして自分は、神田から本所へかけて押込みにやられた商家の主人共の、口書きを急いで集めさせて大福帳のように綴じあげにかかった。

数日たって三好善介の介添で、奉行に面接が許されると留吉は、その分厚い口書き綴りを差し出し、あらゆる押込み強談の一切を青木の所業にしてしまい、恐る恐るに、

「何分とも御直参のお旗本ゆえ、みな町家のものは泣き寝入りでございます」と訴えた。

播磨守は、小判を届けられているてまえもあるから、

「そうか御家の武士の風上にもおけぬやつ、きっと糾明して後難を残さぬように、してくれようぞ」はっきり受けあった。

しかしこの時代は将軍家直臣を、町奉行だけでは断罪できなかった。

それゆえ竜の口の評定所へ身柄を運び、池田播磨守は大目付神保伯耆守、目付一色邦之助の二人と共に取調べに当った。

もちろん神保邸や一色邸へも留吉はすかさず廻り、

「なにしろ青木弥太郎さまは御直参の身分ゆえ、もし御赦免で出所されたら、被害届を出しました商家の主人は、こりゃ無礼討ちになろうと皆すっかり蒼ざめて居りまする」

それぞれ小判をつめた菓子折りを、それら町家の者よりの志と、詐って届けておいた。

だから大目付や目付の二人も、

「弱い町人を脅し廻ったとは、許し難い奴である」初めから悪党扱いして掛ったから、

「いい加減にさっしゃれ、盗賊を追い払ったる身共を……あべこべに賊に仕立てて何の益があろう。もし、将軍家奉公人のてまえに、賊の汚名を冠せられるに及んでは、徳川家は盗人に代々扶持しおかれたと天下の嗤いものになり、おてまえらも賊の同輩となる道理がお判りめされぬのか」

縛られている弥太郎の方が反って叱り飛ばした。

しかし、そう云われたからといって、それもそうだと判るような役人は、いつの世にもいない。

「不届きな奴である……牢問いにかけい」

となった。面目にかけて無理やりにも白状させてしまえとばかり拷問が加えられた。

大きな鎖の環のついた柱を背に動けぬようにくくりつけられ、三角算木を五本並べ三寸釘の先の出た算盤板の上へ坐らされた。

そして上から、長さ一メートル巾三十センチ、厚みも同じの伊豆板を、膝へ一枚ずつのせられるのである。一枚の目方が四十五キロだから、二枚で九十キロもの重量になる。

それでもじっと堪えていると牢屋同心が、

「これッ、早うに申上げぬか」

「さっさと恐れ入って白状しませぬか」

左右から石の端に足をかけて踏みにじる。

だから石の下の膝は皮がさけ肉が切れ、下の算盤板の角が向脛にくいこみ、骨まで釘が突き刺さってくる。ここまで苛まれると、人間は案外に弱いものだから、誰もが、

(どうともなれ)とやけっぱちになるか、まるっきり乱心してしまって正体をなくし、やりもしない事でも、やったろうやったろうと責められると、つい云われる儘に、

(やった)と云わされてしまうものだが、

「……うむ痛い。だが、一向に身に覚えがないぞ」と、青木弥太郎は頑張った。

この間の事情を、明治十一年の実録本は、

「石数五枚を算える程の、伝馬町に牢ができてから前例もないような、ひどい牢問いにかけられたが、それでも青木は屈しなかった」

とするが、五枚では二百二十五キロ。大の男が四人も膝の上にのった事になる。

すこし誇張がすぎるようにも思うが、外部から御用聞きの留吉が、御用盗の手引きをしたり尻拭いしての泡く銭を、せっせと役向きに撒いていたから、その突き上げで弥太郎も女をとられた留吉の怨みから、牢屋では相当以上に酷く扱われたようである。

任侠一代

「十両以上の盗みは打首」といわれるが、奉行所の目明しや下っ引が御用の傍に盗みを働き、人よんで「御用盗」といった時代ゆえ、当時は余り牢の中に盗人などは入っていなかった。

だから青木弥太郎も、すぐ放免される気でいたが、無実なのにそうはゆかなかった。

ますます留吉が意地になって出獄できぬように、外から金をまき、網を張っていたからである。

このため、とうとう慶応四年正月になってしまった。

鳥羽伏見で勝利をえた薩長軍が東下してくる噂が、牢内へも伝わってきた。そこで、この時に当り弥太郎が書いたものが現存する。

「私はご嫌疑の筋にて丑年六月より獄中にあります身ではございますが、さて天下の動静は幽閉中とはいえ旗下士分の者としては傍観できかねます(中略)恐れながら日光(家康)さま御大業をたてなされての、三百年来の御武威も一瞬に滅尽仕るは必定と存じます(中略)ついては、私はこれまで無実の賊罪には伏しがたくあくまでも士道の名分にかけ頑張って参りましたが、薩長軍がやってきての取調べを受けるのは我慢できません。ついてはてまえも御当家(徳川)の武士、如何ような重科にされても差支えあり

ませんから、何卒御家の見事なお仕置によって、御法を下しおかれますよう死を決し筆墨のない獄中ゆえ、ここに血書をもって建言を仕る次第であります。

評定所三手掛御中　慶応四年辰年三月二十一日　御留守居支配　青木弥太郎信光

――といったもので死罪を自分から、全文血書して願い出ている。

しかし既に薩長方が、江戸入り寸前の時である。役人としては、これが公金を持って逃げろというのでもあれば別だが、首を斬ってくれと申し出ても、そうかと儲からぬ話など聞き入れられる訳がない。

新政府引き継ぎの帳面では、伝馬町御牢の収監者は、慶応四年七月二十日の、大赦令発布で市政判事西尾遠江之助が、一斉にみな解き放ち、つまり釈放された事になっているが、実際は五月十四日に、

「上野のお山に旧幕臣有志が立てこもっているから貴方らも加わられたがよい」といった石出帯刀の計いで、青木弥太郎らは出されることになった。処が、その日は大雨だった。

そこで先に出獄していた森蔵らは、景気づけに「江戸任侠隊」の旗を、何本も立てて迎えにゆく筈だったが、

「この降りじゃあ」と一日延ばした。

作ったのが紙旗だったから、雨に当っては破れてしまうからである。

が翌十五日、雨はまだぐずついていたが、上野の方角から砲声が轟いてきたので、

「こいつは大変だ」とばかり、同じ新徴組崩れの芳蔵、杵五郎、半平、蔵之助らと、撃剣の竹皮胴をつけた鉢巻姿で森蔵は、周章てて伝馬町御牢へ駈けつけた。

「よし、ではすぐ赴こう」

青木弥太郎は元気だったが、なにしろ長い牢獄暮しのため、お辰は脚気で足がむくんで歩けなかった。長次郎や鉄次も、すっかり弱っていて這うような恰好でよろめいていた。

「これじゃあ無理だ……上野のお山が三日や四日で落ちるわけもなかろうから……今日の処はひとまず骨休みをなすったら如何で」

見るにみかね芳蔵らが辻駕籠を拾ってきて、お辰や長次郎らをのせ、ひとまず南本所本瓦町の小倉庵へ担ぎこんだ。

処が、そこで粥を作って貰い、それを喰べ終った頃には、急に表通りが騒々しくなり始め、

「上野のお山が落ちた」という噂が聴えてきた。

弥太郎は茶をのんでいたが、

「べら棒め……旗本八万騎がたてこもっているお山が、そう易々と薩摩や長州にやられて堪るもんか……誰かみてこい」

きっとして叫んだ。そこで森蔵が、

「へい合点で……」と、雨で竿にまきついてしまった江戸任侠隊の旗を、担ぎ出そうとしたが、それを弥太郎は眼顔で止めた。

だから森蔵は尻をまくって蓑を頭から冠って出ていったが、すぐ戻ってきて、

「本当だあ……」と情けない顔をして、

「割下水の方へ、山から逃げてきた手負いがどんどん落ちてくる……嘘みたいだが、あっけねえ勝負だ

ったらしいやい」とぼやいた。
「……そうか」
弥太郎もがっかりしたらしく、運ばれてきた酒をみんなに呑ませてやり、
「今さら、じたばたしたって始まらねえ」
と、大の字になってそのまま引っくり返って寝てしまった。

しかし、次の朝。
暗い内に、さあっと飛び起きると、
「足腰の立てるやつは俺について来い。十五代(慶喜)さまは水戸に居られる……彰義隊は潰えても、二百俵とり青木の率いる任侠隊は、まだ健在だ……これから長州薩州を叩っ斬って、また江戸を将軍さまのものにするんだ。さあ水戸街道をつっ走るぞ」
と、ようやく雨のあがった朝の町へ飛び出していった。森蔵、芳蔵、杵五郎と、みなその後を駈けてゆき、相政身内の兄い連も、
「それッ」とばかり、尻端折りをしてついていった。
——その後、この仁侠隊は、伝習隊の公儀歩兵隊と共に常州野州と転戦したというが、戦歴の詳細は伝わっていないから判らない。

しかし、相政が土佐山内容堂侯お抱えだった関係上、仲へ入って巧く纏めたものか。

明治元年の秋には、任侠隊の面々はお咎めなしで、江戸の地へ舞い戻っていた。
弥太郎へ、相政が王子の滝の前の料理店海老屋を譲って、そこを、
「任侠屋」という名に変えさせたという。
河竹黙阿弥の「島衝月白波」の中にでてくる望月輝は、弥太郎の晩年がモデルだったらしいと、三田村鳶魚の随筆にはだからでている。料理屋の主人になっても、まだ任侠ぶりを、最後の江戸っ子として弥太郎は発揮していたようである。

桑港国定一家

一天地六の賽の目

「ハアアまたも出ました三角野郎が、四角四面の櫓の上で……」と、加助が始めれば、
「音頭とるとは恐れながら、国のなまりや言葉の違い……許しなされば文句にかかるが、オオイサネ」
佐市が鉄のたがのはまった樽を叩けば、ピイピイヒャララと加助が横笛をふいた。
ことわるまでもなく言葉が、てんで違うのは眼玉の色や髪毛をみただけでもわかる。
が、わかってもわからなくても、これを始めると、みんな面白がって手を叩いてくれるし、お囃子にあわせて口笛をふくのも出てくるから仕方がない。しかし二節めの、
「ハハア、頃は弘化の三年九月……」
にかかると加助も佐市も湿っぽく、どうしてもなってしまう。なにしろ続く文句が、
「勝負勝負でその日を送る人も羨む大貸元、月にむら雲、花には嵐、とかく浮世は変りがありて、或る日親分国定忠治……」
年号は次の嘉永だが年は同じ三年十二月、からっ風に音させて茶っぽい枯葉が吹きあげられて舞う大

度の関所の入口で、磔刑にされた親分の国定忠治の名前が出てくるから二人とも堪らないのである。
しかしなにしろ御座興代りにこれをやらないと、目色毛色の変った国では、うろん臭がられて食物にもありつけないのだから仕方もないが、
(こんなくどき節をやって、おまんまにしようなんて、まるっきし死んだてめえっちの親分を食いものにしてるみたいじゃねえか)と心咎めで後ろめたくなるときもある。
しかし強気一点ばりで、
「向う牛」などと名をよばれていた佐市は、
「てやあんでい……メリケンにまで忠治親分の名をお弘め申しにきたと思やあ、そんでいいじゃねえか」と加助に囁く。だが、
「まあ、ものは考えようだ。別に亡くなった親分だって草葉の陰で怒ってはいなさるめえが……このくどき節の文句をこしらえなすった日光の円蔵伯父きや、他の兄いたちは今頃どうしていなさるんだろうね」すぐ愚痴っぽく郷里の話など持ち出されてしまうから、佐市だって、つい釣りこまれ、
「みんな苦労してるだろうなあ……」
しゅんとして鼻つらを拳固でこすってしまうような羽目になる。そこで、
「やい、やい、お神楽の……そんな話は止めにしとけ、それッ商売だッ」と両手に握った撥代りの折れたシャベルの柄をかまえれば、
「うん、すまねえ」と加助も笛をくわえ、
「あまた子分の居る中で、腕に自慢の向う牛の佐市。それに頭のよい事じゃア、国定一家で評判の、と

っぽの加助の二人をつれましてえ、さても忠治の親分は……」

ピイヒャラ、ピイヒャララと吹きながら、「オオイサネ……」とはやしを入れて、自分ら二人の名前も持ちだして、親分のお伴に、くっつけてしまう。まあ、こうでもしなくちゃあ淋しくって、やりきれなくて仕様がないせいもあった。

それに珍しいものだから客受けもしているらしい。酒瓶を祝儀のつもりだろうか、

「マグニーフィカ（いいぞ、いいぞ）」と放ってよこす者もいるし、大きなパンを丸ごと持ってきて、

「プレスタード（面白い）」と置いてゆくのもいる。

二人がくどき節をやり終えて、ソンブレロと呼ばれる大きな帽子を逆さにして持って廻ると、銅貨だけでなく銀貨や、時には酔っ払って気前のよいのが、

「エステ（ほれッ）」と小指の頭ぐらいの金塊を放りこんでくれたこともある。

しかし誰もが帽子へ銭を入れるかわりに、もの珍しげに、ついでに二人の頭へ手をやる。

帽子を冠っている間はわからないが、ぬぐとチョンマゲが出てくるからである。

こっちへきてから月代なんか剃っていないから、二人とも芝居へ出てくる石川五右衛門か定九郎みたいな恰好だが、それでも頭のてっぺんは二人で互いに結びあげて、今でも髷はつけている。なかには、

「トウ・ソン・バーハア（あんたらは背が高くない）」

などと背を計るような恰好をして、こっちのチョンマゲをいじる奴もあるが、なにも毒っ気があって触ってるわけでもないから、怒れもしない。そこで此方も、

「なにおッ、このウドの大木め」とか、

「法界坊みてえな頭しやあがって、こっちのハケ先が羨しいのかよ」

と二人でいい返してやるのだが、せっかくの啖呵が日本語だから通じもしない。

「ムイ・ビエン（そうかい、そうかい）」って、あべこべに嬉しがって銭を追加してよこすやつもある。

「ちえッ仕方がねえや」

佐市が苦が笑いして、銭貰いのために此方へきて覚えてしまったスペイン語で、

「ムーチャス・グラシアス」

と舌の先っちょをかんでしまいそうな発音をやってのける。加助も、流して歩く渡世の仁義だと思えば、これを、

「無茶するだらしあねえッ」と覚えこんで、この（お有難とうさんにござんす）をやるのだが、佐市ほどにクソ度胸がないのか照れてしまうのか、どうもいつもスラスラと出てこない。

だから、もっぱら仁義をきるのはそっちにまかせ、加助は頭をペコペコ下げる方に廻っている。そこで赤城山にこもっていた頃は、加助の方が兄い株だったのだが、江戸から此方へきては、どうも順序が逆になってしまっていた。

といって、なんせメリケンくんだりまできてしまって今さら、兄い分とか弟分の区別もいっては居られぬから、それよりここで、

「一日も早く盆ござしいて、二人で力を合せここへ国定一家の縄張を作ろう」

というのが加助の念願である。そこで

「ままよ三度笠、横っちょに冠り、借りのあるとこは、のう千代さん。そっぽむいて知らぬ顔。したこ

とは内緒ないしょ」

国を出る頃に流行しだした内証節を鼻唄に二人で貰い集めた銭勘定をしようと、

「どっこか、ちっとは涼しいとこはなかろうか……こう、かんかん照りじゃあ、目くらやみしちまうぜ」

「まったくだ。こんなに暑くちゃあ、おたまりこぼしもあったもんじゃねえやな」

二人できょろきょろ見廻したあげく、

「おうッ、あの酒場の横手へ行こうじゃねえか」と加助が眼をつければ、

「うん、彼処しかねえな」貰いものの酒瓶やパンの大きな塊を抱えたまま、ふうふういいながら佐市もついてきた。

なにしろ流れる汗に砂粒がくっついているから、眼に入ると脳天まで痛さがじんじん響いた。だから雫を手刀できりながら、

「だけど、こんな滅法もねえ暑い国が、この世にあるとは知らなんだなあ」

寒がりのくせに暑さにも弱い佐市が悲鳴をあげた。すると加助が自分も犬ころみたいに口をあけながら、それでも唇をへの字に曲げ、

「……修業だぜえ」

ここぞとばかりに昔の兄い風を吹かす。だから、

「そりゃ判るけど、こう暑くっちゃ堪らねえやなあ。まったくひでえ所だわさ」

銭やパンの入れ物にしていた帽子を、ちょこんとチョンマゲの上にのっけ、汗っかきの佐市はげんなりして、眉毛の上の、こびりついた砂ばかりこする。

しまいには、せっかく頭へのっけた帽子をとって、これを団扇代りにバタバタ煽いで風をいれる。が、それでも額のはえぎわから、びしょ濡れの手拭をのせてるみたいに垂れてくる。だから塩をふいた襟首をこすりながらフウフウ乾いた唇をつきだし、

「秋に出てきたんだから、もうかれこれ冬の筈なのに滅法こっちゃあバカ陽気すぎるぜ」

鉄のこじりの長脇差をはずし、佐市は胸のところまでさらけ出してむくれてみせた。

「仕様がねえやな……住んでる奴らだって、みんな毛色の違う大入道ばっかしだ。陽気だって、あてれこで狂いじみていたって文句もいえめえ」

と加助も、ここを先登と強がりをいってみるのだが、なにしろ陽でり具合が日本とまるっきり違う。お天道さまが四六時中頭の上みたいに、かっかと燃えきっている。

だから眼を閉じたところで、瞼の裏側まで朱色に透かしてくる。堪ったものではない。

「大変なとこだよなあ」

加助もつい弱音をはいて、べろっと皮をむくみたいに顔の汗を掌でひっぱり拭った。

サンフランシスコ誕生

佐市と加助の両人は連日の陽でりに当てられて、まるで日射病にやられたみたいにうだっているが、ここの土地というのはスペイン人の宣教師が、フランシスコ派のカトリックの信者たちを引きつれ初めて入植してきた時からして、やはり太陽が燃えきっていた。そこで伴ってきた信者に労働奉仕をもとめ、屋根のある処をと、

「なにはともあれ、まず教会を」と工事に掛ったところ、まっ先に神の使いである牧師さんが暑さにのびてしまったから、天にます神より太陽の方が此処では強いからと、それを頭につけ、「サン・フランシスコ聖堂」と命名した位で、地名もそこから付けられた土地柄である。

さて、その教会の建てられた一七七六年というのは、加助や佐市の故国日本では安永五年にあたり、老中田沼意次が賄賂という名の賽銭をどんどん集め、教会の代りに自分の田沼御殿を作らせたりしていた。ところが、それから七十三年たって、日本の嘉永元年に当たる徳川第十二代家慶公の頃。

サンフランシスコに流れこむサクラメント河の水を利用して、水車小屋をつくっていたスイス人サッター大尉の下僕マーシャルが、

「ギッコンギッコン」音させて廻る水車のはね板から、ある日ピカピカする物を見つけた。

「ケ・セ・ソ（はてなんであるか？）」

首をひねって分析所へもちこんでみた。

すると、そこの所員が怪訝な顔をして、

「ドンデ・エスタ（何処にあったか）」ときいた。マーシャルもその顔色をみて、

（ははあん、こりゃなんだな）と、そこは直観した。

だから、何くわぬ顔で手をふって、

「エスタ・ビエン（いやいいんです）」

とぼけてみせ、そそくさ水車小屋へ戻ると、もう、これまでの仕事は放りっぱなしにして、ザルをもってくると川の中へ入りこみ、「あら、えっさサ」とばかりやりだした。

さてギイギイという大廻しの音も、コトコトコットンの小廻しも聞えてこないものだから、サッター大尉が、はてなと水車小屋へ覗きにゆくと、音が全然きこえてこないのも道理。ただ一人の従業員であるマーシャルが、仕事を放棄して、てんで水車番をやっていない。

なにしろ大の男がズボンをまくりあげて、

「めだかの群れは川の中。そっと覗いてみてごらん。そっと覗いてみてごらん」といった有様で、腰をまげて水面すれすれに屈みこんでいる。だから、これには面喰って、

（雨のふる日も風の夜も、森の水車は休みなく粉引き臼の拍子とり……と唱歌にもあるのになんで一人で単独ストライキを決行しとるのか）

サッター大尉も怪しんで抜き足さし足で近よった。

が、マーシャルの横顔を覗きこんでゲゲゲのゲと驚いた。

なにしろ、春の小川はサラサラ流るなどといった暢やかなものではない。

すっかり眼は血走り手もふるえて、それでもセッセと何かをザルであさっている。

そこでサッター大尉は、まず、

（これはマーシャルがいつも口にくわえている粘土のパイプでも落して、それを探そうとして焦っているのか）とそう考えたから、

「おい、おい、わしのパイプをお前にやってもよい。だからなあ……仕事はまじめにやっちょくれ。いいかね……」

背後から働くようにと大声をかけた。
しかしマーシャルときたら馬耳東風。
てんで何も耳に入らぬのか、返事どころか振返りもしない。黙々とザルで水をすくっている。見かねて大尉は、
「水をくむのなら桶を使え。お前のようにザルですくっていては、いくら汲んでも何んともなるまいが。困ったものだ……」と溜息をついた。
大尉にしたところでマーシャルが、もし利口ならいくらでも他に使いみちはある。
ところが、てんで彼がボンクラで無能だからして、水車番をさせているのにすぎない。
だから、しまいには腹をたててしまって、
「この馬鹿者めッ、お前のような横着な傭人はいらん。くびにする」と怒鳴りつけた。
こういえば、いつものようにマーシャルがびっくりして、あわてふためき、
(そればっかりはお許しなされえて下さりませ)と膝まずいて詫びてくると思ったからである。
ところが、てんで、その気ぶりさえない。
(今日のお前は変だわね……如何したか?)
度の強い近眼のサッター大尉は、ポケットから眼鏡をとりだしてかけ直すと、八の字髭をしごきあげ、さてステッキをふりあげ、
「ここな不届き者めッ、いい加減にせい。もう、いくら謝罪したところで許さんぞ」
腹を立てて自分も河のせせらぎの中へ入っていった。

するとマーシャルは初めて気づいたのか、斜めにすくうような表情で振返って、
「なんといわれました」と聞き返してきた。
「とぼけるな。わしはお前の解雇をいい渡したんだ」大尉は殴らんばかりにいった。
ところが仰天すると思ったのにさにあらず。
海老のように腰を曲げっ放しで屈んでいたマーシャルは、それをきくと、やれやれといったように身体を伸ばし、自分で背中をポンポン叩きながら、
「よろしいですとも、大尉どの」
素直にこっくりうなずいて、起立して挙手の礼をみせた。
軍隊時代から自分の従卒をしていた頓馬な男から、あっさり返事をされて余りの事に
「なにをッ……」といったが絶句した。
まるで肩すかしをくったように大尉は、しばらく呆然とした。だが顔面を震わせ、
「よしッ昨日までの給料をとりにこい」
もはやこうなっては、ひくにもひけず怒鳴りつけた。するとマーシャルは、
「金ですか」と肩を揺さぶってみせ、
「いいんです、結構です、いりません」
またくるっと背をむけてしまうと、水面へ顔がつく位に屈みこんだ。
(いつもピイピイして給料の前借りばかりしにきていた男が、こりゃまた如何したんだろうか)
大尉は狐につままれたように、

「おう、なんたる云い草だ」
ステッキをふりまわして喚めいた。しかし彼はもう振返るどころか返事もしなかった。
そこで、自分にわざとむけているようなマーシャルの大きな尻を、立腹のあまり思いきり大尉は、
「この、怠け者めッ」と蹴っとばした。
が、なんといっても足場が悪かった。ぬらぬらした水中の石に滑ってしまった。
「ビジァン」と大きな水飛沫をあげて、つるりと転げた大尉は川の中で尻餅をついた。
そこで起き上ろうと水中に手をついた大尉が、何気なくザラつく川砂をつかんだ。
「ゲエッ」と叫んだ。黄金だったからである。
しかし、近眼だから眼鏡をよく拭いてまた見直した。
「うん間違いない」
あまりの事に欣喜雀躍(きんきじゃくやく)。いま蹴っとばしたマーシャルの尻に今度は抱きつき、
「ブラヴ・ブォー」と感謝の音を響かせた。
なにしろ大尉にしてみれば、自分の地所に流れている小川が単なる水だと思えばこそ、これまで賃びきの粉ひきを水車小屋でマーシャルにやらせていたのである。
ところがアイズバンダイサンではないが、黄金の山ならぬ「黄金の川」とわかっては、もう放っておくてもない。
大尉もザルをもってきてマーシャルと競争のように川砂から金をすくいあげた。
そして二人の男は、

「ササに黄金がエーマタなり下る、
ハ、スッチョイスッチョイ、スッチョイナ」
と、せっせと砂金ひろいに精をだした。
もちろん大尉は、この機密を守るため、
「誰にも口外するなよ」とマーシャルに口止めをした。彼もまた、
「……はい大尉どのッ」
軍隊を除隊したあとも傭ってくれている前上官にして、今も主人であるサッター大尉に、固く誓約した。大尉もそれに安心した。
しかし話変って、教会堂の前の分析所の主人や番頭共は、しきりに、
「この前、森の水車番のマーシャルのやつが来たけど……あれっきりである」
「どうしたんだろう」と噂をしあった。
というのはマーシャルは袋へ入れて持ってきたのを、その儘もち帰ったつもりだったが、番頭たちは分析用に茶匙一杯とって置いた。
そして後でそれを試験してみたところ、「純度八五パーセント」という珍しいくらいな鉱質と判明したので、びっくりして大騒ぎとなり、
「あれは大尉の従卒として戦争へ行っていたとき、敵のポケットからでもくすねてきたものなのか、はたまたこのサンフランシスコで採取したものか」と問題になったのである。
なにしろ、まだ人口がいくらもいなかった頃なので、この噂はすぐ広まってしまった。

そっと森の水車小屋を覗きに行った者の口から、マーシャルと大尉の二人が、川の中へ入って、アラエッサッサと何か掬っているという情報もひろまった。

大尉の地所へは、うっかり入りこむと、「ズドン」と撃たれる恐れがあるので、その上流の方へ行って川床の砂を集めてきた者達は、次々と分析所へそれを持ちこんできた。

どれも純度の高い最優秀の砂金とわかった。そこで、

「サクラメント渓谷には二十億ドルをこす金がある」という噂はすぐ全米に伝わった。

かつては丘の上に、牧師さんを日射病で倒して建てられた教会堂と、それを取りまく一握の小さな村だったサンフランシスコが、この噂でたちまち六千になり一年後には一万の人口となった。

やがて、このサクラメントの、

「黄金狂時代」

のよび声で、一攫千金を夢みる人々がここへ集ってきて、人口は一万より五万、それから二十万人の大都会に、サンフランシスコは変ってしまった。

だが、太陽はやはりサンサンと輝やき、ここは相変らず暑熱のタウンだった。

野州栃木陣屋

さてサンフランシスコが、ゴールドラッシュの波にのって賑やかなタウンになると、諸式すべてが派手になってきた。

それにアメリカ自体に女が僅かしかいなかった頃なので、シスコも例外でなく女性は、ほんのひと握

りしかいなかった。

だから男共はサクラメント渓谷から掘りだしてきた黄金で、女性の歓心をかうべく色々の贈物を求めた。だが、まだカトレアの花を捧げるような時代ではなかったので、実質的な着るもの、つまり布地がおおいに要求された。

この時代のチャイナ・シルクは、阿片戦争で清国を降伏させた英国が一手に販売権を握り、アメリカへはカナダ経由で入っていた。

そこで、もっと安価にシルクを入手しようというので、ペルリが日本へ派遣されて、下田に領事屋敷をもうけ、日本産の絹布の輸入をはかった。しかし幕末までの日本女性というのは、一般に地味だったから、ジャパン・シルクは黒っぽい柄か、そうでなければ友禅柄のような突飛な大柄しかなかった。

いくらゴールドラッシュにわきかえるサンフランシスコの女たちが、

「シルク」「シルク」と叫けんでも、こうした柄物ではふり向けようもなかった。

それに染色が、日本絹布は昔ながらの草木染めときているから、脱色して染め直しという手段もとれなかった。つまり土地の昔からのスペイン女たちでさえ、

「マンティラ」とよぶ頭掛けにさえ用いたがらぬ絹布では、これは致し方もなかった。

そこでサンフランシスコでの自家生産をしようといった案がここにもち上った。

まだ染色していない生糸の束が、どんどん出荷された。しかし、それだけではとても需要に追いつかないから、

「蚕卵紙」とよばれる蚕の卵をつけた紙と桑の木の苗が、野州上州から集められて、これがどんどんサ

ンフランシスコへ送られてきた。

「桑港」

という当て字が今も残っているのは、つまりこのときの名残りである。

さて生糸の束の方はよいが、蚕卵紙というのは、蚕の子が一枚の紙に縦横つけられている生き物である。現代のように空輸できる時代ならよいが、太平洋を三週間から四週間かけ、蒸気船で送る時代だから、どうしても蚕につき添ってゆくエスコートがいる。

もちろん付き添いは蚕をかっている女なら申分ないが、まだ当時の女性は今日のように海外旅行は好きではなかった。それに上州などは、

(かかあ天下にからっ風)とまでいわれている土地柄だが、女が強いのは内弁慶で亭主や子供にガミガミやるだけのことで、メリケンくんだりまで添乗員として行こうなどという、勇気のあるのは当時はいなかった。

それでは男はどうかというと、これもまたメリケン行きとなると、人工衛星にのって他の惑星へ行くような考えをしていたから、

「滅相もない」と、何処の商家の番頭手代もみな蒼ざめて尻ごみをした。しかし、蚕卵紙には誰か此方から人間をつけてやらない事には、悪徳商人が向うにはいて、

「せっかく送荷してきたが、みな死んでいたから海へ放りこんだ」と一文も送ってよこさないような手合いが多い。だから、うっかり出荷もできない。といって儲かる輸出を指をくわえて見逃すてもない。

「何んとかしてくれと云ってこられても…なにしろ板子一枚下は地獄というのに、メリケン国までは遠い。いくら儂(わし)の力をもってしても、そないな人選は、ちと難かしかろ」

この野州栃木陣屋では、よそ土地でいう、「代官」の名称が、ここだけは、

「出頭元締」となっているが、その根岸多十郎は腕をこまぬいて首をかしげた。しかし、

「さあ、そこをなんとか考えて頂きません事には、てまえどもと致しましては……難儀しまする」

栃木上町中町下町の各総代共は、拝まんばかりの口のきき方をした。

元締といっても高が一万石の戸田家の家来だから、ものの百石とは取っていない。

すべて一切合財は、これらの町家からの付け届で賄われている。そこで生糸問屋の総代たちから、よってたかって強く談じこまれては、「うん」と唇をへの字にまげて当惑しきるしかない。すると下役の手代熊倉嘉三が、

「恐れながら」見かねたように入ってきて、多十郎に耳うちした。

「……それはよい」と、やっと愁眉をひらいた元締は、前に居並んだ各町総代共に、

「牢に入っている者を差し向ける事にする」と案をだして聞かせた。しかしこれには、

「せっかくではございますが……御牢に入っているような者では」

総代共は互いに顔を見合せた。しかし脇から手代の熊倉が、

「何を申すか、こそ泥や掏摸(すり)をつけてやるというのではない……長岡の忠次郎の身内だった無職(ぶしょく)の者が、江戸表を散々うろついたあげく、ご当地へまた舞い戻ってきたのを召捕ってあるゆえ、それらを廻そうと元締さまは仰せあるのだぞ」叱りつけるように睨みつけた。

忠次郎というのは上州佐波郡国定村の五右衛門の子で、これを縮めて、「国定忠治」ともいい、野州川越の栄五郎と兄弟分だった関係で、この栃木にも縄張があった。

そして陣屋とは背続きの満願寺境内に鉄火場があったから、忠治は自分も姿をよく見せていた。だから栃木の町の総代共は、まんざら知らなくはないが、それぞれ厭やな顔をした。

というのは赤城の山へたてこもった忠治が大度の関所を破って木曾へ逃れ、戻ってきて名主治右衛門の納屋の穴蔵に匿れていたのを召捕られ、磔刑で殺されたのだが、ひと頃は何千とまでいわれる程、多くの子分や弟分のいた男である。

もちろん日光の円蔵とか、下植木の浅次（板割の浅太郎）といった主だった者は次々と召捕られて獄死したり、首をはねられて始末されているが、ろくすっぽ名前も戒名も貰えそうもない半可打ちの子分が、土地には居られず江戸へ流れこんだが、そこにも住めず、又ぞろ戻ってきて、まだうようよと残っている。

もちろん忠治の跡目は四天王の一人で、上州新田郡綿打村田中の生れの沢吉というのが継いで、これが国定一家という名のりは公儀を憚って出来ないから、「田中一家」の名で、上州佐波郡豊受、茂呂あたりを縄張にしていたが、とても、これ位のしまでは、何千どころか何百もの人間を養ってゆけるものではない。

この沢吉の伜の、田中の啓次郎でさえ、高（荒）神山の殴りこみに助っ人に加わって、槍疵で大怪我をした関東綱五郎を背負って連れ戻ったのが縁で、清水の次郎長の盃をもらってそこにいた位の有様だから、まあ、沢吉の許で厄介になれていた国定の残党は、そういくらもいなかったと想える。

それに忠治の悪名があまり高いので、前に国定一家にいた事がわかると、他の貸元の許へ行っても、三文か五文の草鞋銭だけで追払われ、何処へ行っても良い顔はされず、広い江戸へ流れこんでも、やはりそこでも毛嫌いされる。だからといって無職の人間が、

「仕方がねえから足を洗って百姓の手伝い」にもなれないものだから、二人位ずつ組んでは、在所へまた舞い戻ってきて、笛や鉦をならしては門づけをして廻るのだが、その唸る文句というのが、

「くどき節」

といって、その土地々々に国定一家はこうしてやったぞという昔の恩の押し売りから始って、気にくわない土地の人間の悪口などを即興的に入れてチャカポコピイピイとやる。それに恰好も、陽やけして飴色になった三度笠を前へたれ下げて冠り、長いやつを腰へぶちこんだままだから、こうなると、門づけ物乞いどころではなく、強請じみてくる。

三度笠の下から向う傷をみせられたり、小指のつめたのを突き出されたりしては、まさか、びた銭一文ともゆかず、どこでも天保の当百一枚位はさし出してしまう。

栃木の上町中町下町の商家も、これにはすっかり手をやいてしまい、国定一家とわかると、店の小僧を陣屋へ走らせて次々と召捕らせていたものである。

だからメリケン船に乗組み、蚕卵紙のお守りをしてゆく役目を、その国定の残党にさせるとなると、そこは陣屋へ突きだし牢へぶちこんでいる覚えがあるだけに、やはり後ろめたく想えるものだから、

「あない無頼な者などを、大切な品物につけてやって、なんぞ仇をされましては取り返しもつきませぬ」

みな迷惑そうに首をふったのである。

しかし、そういわれても、まだ国外へ出るのは普通なら御法度の世の中である。

戸田大炊頭一万一千石家中の取締や手代の立場では、他にどうとも人選のしようもない。

「どうじゃ、この熊倉嘉三に委せてもらえんか。もしもの時は、俺が責任をとって、腹をかっさばいてもいい」

表むきは十人扶持しかとっていない軽輩のくせに、麻の上下などつけ威張りかえっている手代が、出ばった下腹を叩いてりきんでみせた。

すると困惑しきっていた多十郎も、

「かたぎの者が国禁の法度をおかしてまで、メリケン船へ乗りこめるわけもない。あやつらは無宿者で、寺の人別帳にも入っても居らぬ者ゆえ、公儀御舟手方に見つかったとて、こちらは知らぬ存ぜぬで通せるというもの、ひとつ、ここは熊倉の云うように委せてほしいものだが……」と口を入れた。

仕方がないから総代どもは互いに顔を見合せて、やむを得ぬといったように、

「では、ひとつ間違えないよう頼みまする」ふだん付け届をしているだけに、そこは大きな顔をして引きあげていった。

生き延びるため

「御用だッ」と捕えられて地面に板もはってない土牢へ放りこまれてから、湿気でぐっしょりした古菰の上で寝たり起きたりだから、身体中に湿疹がふきだし、それがうんであちらこちらに口があいた儘で

ある。だからそれを庇うように丸くなって寝ていると、

「こらッ出ませいッ」牢番に六尺棒で脅かされた。四つん這いになって外へ出た加助は、もろに当っているわけでもないのに久しぶりの陽ざしに眼くらみしてしまった。だが、

「てめえら島送りときまったゾ」

下役に頭ごなしにぴしゃりときめつけられると、佐市の方はまだ若いだけに気丈夫なところもあって、両手で肩をつっぱりながら、

「島と名がつきゃ、どの島も可愛い。まして年増はまだ可愛いって云いやあすが、わっちらの送りの島は……」と強がりをいった。

なにしろ島送りといっても、伊豆の八丈島が無宿者の溜め場とは定っているが、何年に一度かは佐渡の金山の水掘り人足の欠員うめに持ってゆかれる。伊豆の方だったら、ご赦免で戻ってこられるという夢もないではないが、佐渡が島へやられたら死ぬまでこき使われて、こっちは行きはあっても帰りがない片道の船出。

だから一口に島送りといわれても、やられる方の立場では、これは雲泥の違い。そこで強がりをみせても、佐市としては当りをやわらかにするような云い廻しできいてみたのだが、

「何をへらず口を叩いていやあがる。ふざけた野郎だ」

ゴキンと大きな音をさせて棒が佐市の頭へとんできた。

仕方がないから加助が変って、

「ご慈悲でござえやす。どっちへ送って頂けるか、ひとつお洩しなすっちゃ頂けやせんかねえ」米つき

ばったみたいに頭を下げた。すると、
「うん。では教えてやろうかい……はっきり俺も知らねえが、うぬらは大度の関所破りをした忠治の身内だから、おおかた佐渡だろうよ」
まるで突き放すようないいかたをした。
「てえッ、あの金山人足で……そいつァ、あんまり阿漕じゃござんせんか」
頭を殴られた佐市がまた口を尖らせた。
「何にをっ。うぬらのような蛆虫みてえな奴らが、何をいやあがる……生意気な」
と又しても棒の雨がふった。
ふだんなら棍棒で十や二十ぐらい、こづかれたって閉口たれるような向う牛の佐市ではないが、なにしろ土牢へ放りこまれて湿疹だらけ。身体にてんで抵抗力というものがなくなっている。だから
「ううん」前のめりに倒れてしまうと、そのまま気を失ってしまった。まあ放っておけばこの儘で、冷たくなってしまいそうな恰好で白眼をむいてしまっていた。そこで、
「これ以上は勘弁してやっておくんなせいやし……もう、こいつめ精も根もつきはてて居りやすんで」
見かねて加助が自分の身体で庇うように、倒れた佐市においかぶさった時である。
「これッ、下に居れえ」
こぶとりの上下姿の男が、そこへでてきた。
棒をふりあげていた下役は振返ると、
「お情け厚い熊倉さまにお取りなしをして頂くとは……果報なやつめ」と、捨てぜりふをはきながら後

方へひき下った。
「ひとまず退らせ、手当てをしてつかわせ」
という声に送られて陰惨な土牢へ帰されてきた。しかし妙なもので、この檻の中へ入っているぶんには樫の棒も飛んでこないんだと想うと、あべこべに牢へ戻されて、
「ふうっ」加助は吐息をついてほっとした。
牢番が水を汲んできたのを貰って、それで佐市の頭をひやしてやったり、胸のあたりを湿してこすって居ると、やはり若いだけに暫くするうちに、もぞもぞ手を動かし、
「ゴオゴオ」と鼾のような音をたて、小鼻をもごもごさせると正気づき、
「あ、兄い、す、済まねえなあ」
と泣きそうな声を泡ぶくみたいにぼこぼこ吹きだした。加助も涙ぐんできて、
「てやあがんでい……情けねえ声を出しあがるな」
鼻つらを握り拳でこすりあげたとき、
「これこれ正気づいたか」さっき親切にしてくれた熊倉嘉三の姿がみえた。
「これは、これは……」加助がびっくりして坐り直し頭を下げたところ、
「そっちの若いのをわしの許へつれてこい。いま丁度、外道（外科）の竹庵先生が当陣屋へ来てござるで」わざわざいいにきてくれた。
「こりゃ、どうも有難いことで」
思わず加助は手を合せて拝んでしまった。

（こういう所の役人にゃ、その役割が決っていて、敵役になって辛く当るやつと、わざと親切ごかしに近づいては、此方の足をすくう奴との二た通りがあるんだ）位のことは百も承知していたが、

「……済んません」本当に心から頭を下げた。

なにしろ意地も張りも用心する心構えさえ、ずうっと牢に放りこまれていると人間ばかになってしまって、まるで何も判らなくなる。

ただ有難がって云われるままについてゆくと、くわい頭の医者が佐市の殴られた頭に金創膏をはってくれたが、加助の湿疹にも白い油薬をつけてくれた。そして、

「これだけ衰弱していちゃあ、佐渡へ送られて鉄鎖に繋れたんじゃ、まああんまり長くは保つめえな」

熊倉がいうと医者もうなずいてみせ、

「まあ水も違いますし、三日か十日でお陀仏でござりましょうな」と即座に顔をそむけ返事をした。

しかし面と向かって、こんな事を医者にうけあわれては、まるで引導でも渡されてるみたいで、本人としては堪ったものではない。だから、加助は、すっかり色を失って、

「ひとつ、なんとか御慈悲に……」

平蜘蛛のように頭をすりつけた。

すると熊倉はポンと膝を叩いて、思いついたように、

「どうだ……佐渡行きに鎖を曳ずって乗せられるよりは、いっそうメリケン船に混ぎれこんでみたら」

と、にやっとしてみせ、

「こっちなら命の方だけは受けあえるぞ」といいだした。

「へえ、そんな御便法がございますので」

これには加助もびっくりしたが、頭を殴られて眼を廻していた佐市も、ひとごとではないから、ぴくっと顔をもち上げるなり坐り直してからが、

「ひとつ、なんとか、そっちの方へ」

まるで蠅が足をすり合せるみたいに合掌をした。もちろん佐市だって、

（上下をつけて威張ってはいても熊倉が、高だか手代の身分で足軽に毛のはえた男）だ位は百も承知だったが、人間どうしても牢などへ入れられていると、すこしでも、いたわってくれそうな言葉をかけられたが最後、地獄で仏というか、背中から後光がさしてくるみたいに拝めてくるから妙なものである。

この熊倉嘉三というのは、この直後の元治元年六月五日に、水戸天狗党の中の時雍館田中源蔵ら書生隊三百が軍資金を集めにくると、これを瞞討ちにして、田中に逃げるところを背中を斬られ軽傷をおったが、その代り陣屋から焼玉や火矢を放って田中隊を追払った。しかし、そのため野州一といわれた栃木の町を灰燼に帰せしめてしまった。

が、賠償問題が陣屋の責任になっては困るから、元締の根岸多十郎としめし合せ、

「あの放火は田中の仕業である。あれは源蔵火事だ」といいはって五年間も頑張りぬき、官軍が入ってくると、陣屋の有り金を残らずかっ払って逃げてしまった。おかげで廃藩置県のとき県庁をおきたくても栃木の町はまだ焼野原の儘だったから、やむなく宇都宮に決められてしまったという曰くつきの男。

しかし加助も佐市もそんな先のことや、この男の正体までわかりはしない。

「御慈悲でござりまする」

二人で頭をこすりつけた。なにしろ人間の屑の溜り場といわれた江戸へ行っても食えなく戻ってきた二人ゆえ、他に思案もなかったからである。

カンカン踊り

佐市はいける口だから、銭勘定を済ませて二つに分けると、貰い物のでっかいパンを、これまた祝儀に放ってよこされたウイスケという酒で流しこむみたいに嚙っていたが、

「おりゃ下戸だから」加助は水でも貰うつもりで酒場の戸を押した。

見廻すと、入口のところに、空いている卓があったから二人で、

「よいしょ」とそこに尻を落ちつけた。

「まあ考えてみりゃ、よくも無事にここまで保ったもんだ」

牢内でうつった湿疹のあとへ、しょっぱい汗が垂れこんでかゆいものだから、ボリボリ腹から背へ手を入れてかきながら、加助は感慨無量にうなった。

なにしろ栃木陣屋の手代熊倉嘉三に、

「蚕卵紙についてゆく用心棒に振り替えれば、御牢内で病死という扱いにして佐渡送りは免れるが、それには町内総代衆の推せんというか、内々の願い出がなくてはならぬ」と教えられたが、さて二人とも、ここの町内の旦那衆に対しては、

(国定一家の俺っちたちの面は、よも見忘れちゃいまい)と、くどき節を我鳴りたてながら、銭をいたぶって歩いた覚えがある。だから

(ひとつ良しく願います)と頼みに行ったところで、二つ返事で、おいそれ承知してくれそうな家の心当りなど何処もなかった。

そこで当惑して二人で顔を見合せていたら、

「よしッ、うまくメリケン船にのりこめれば命拾いできるが、さもないと取り返しもつかねえお前ら二人だ……ひと肌ぬいでやる」

と熊倉は小柄を放ってくれて、これで指をつついて血をだし、町内の総代衆へ歎願書を書いてみろと知慧をつけてきた。

しかし場合によっちゃ指の二本や三本はつめねばならぬ無職渡世のことゆえ、血を出すのはなんともないが、文字には弱った。

二人とも書くどころか読めもしない。そこで仕方がないから熊倉が、ほれよっと、

「おねがいもうしそろ」という手本をかいて見せてくれた。

だから二人は、せっせこ指の頭に孔をあけて、まあ似たようなものをどうにか書きあげ、仕上げに親指の先を切って拇印をおした。

すると血書までする位ならと町内の旦那衆も、まじめにやるかも知れんというので許しがおりた。

そして、召捕りのときに押収されていた長脇差や三度笠も返してもらえたから、積荷人足に化けてメリケン船へのりこみ、そのまま荷物の間に埋くまって、お舟手方の役人衆の目をごま化し、どうにかサンフランシスコまで来てしまったのである。

しかし船が港へ入った途端、

「おい、ずらかろうじゃあねえか」

ということになった。なにしろこの儘また帰国したら、もとのもくあみだし、それに眼色毛色が変っていても、人間がこんなにうようよしている所なら高市（緑日）でもあるだろうから、なんとか食ってゆけそうだ、と二人でしめしあわせ、積荷をかついで下船するなり、さっさと後は随徳寺をきめこんだ。

そして、教会堂の建っている所が小高いからと、そこへ登っていって港のみえる丘で、自分らの乗ってきた船が出帆してしまうまで、二人はそっと身をひそめていた。

さて、それから半月。なにしろまだ覚えるつもりではいても、ろくずっぽここの言葉が使えないものだから、せっかくの、

「この大陸を国定一家の縄張にしちまおう」

という最初の意気ごみも今のところは、どこへやら。二人はしがない流しみたいに、くどき節のピイピイピィヒャララで投げ銭や食物放って貰っては、それで飢えをしのいでいる有様。情けないが仕方がない。

「おう佐市よ。おめえよく、そんな金魚の麩みてえな物を、鯉みたいにガツガツかじれるねえ」と加助が呆れるのに、

「なあに栃木陣屋の土牢で当てがわれていた臭い稗飯よりは……まだ匂わないだけ増しってものでさあ」力まかせに半分にぺし折ると、加助にも押しつけてきた。

「おらあ御牢内で、すっかり歯茎がガタガタだあ……うっかり固い物にくいついたら歯がとんじゃうぜ」と用心深く尻込みして、パンを手にしたままキョロキョロしていると、

「タラ・タララタッタ・タララタッタ」

ものすごく威勢のよいお囃子が聞えだし、正面の幕があくと、背高のっぽの姐ちゃんが尻をふりながら六人ずらりと現れた。

「お、女だい、なあ兄い」

パンをくって腹ができたせいか、佐市が粘っこい声をはりあげた。

「うん、ずっと女っ気なしだったから無理もねえが……やっぱし髪は鴉の濡羽色ってやつでないと、あんな赤熊や白熊の女じゃ大名行列の御供先の馬印みてえで、とんとこっちとらの倅が土下座しちゃうぜ」

下を指さし加助は首をふったが、佐市の方は、

「おりゃ入るものなら何んだっていい」

かすれたような声で眼玉を光らせたが、

「あッ」と喚めくなり立ち上ってしまった。

加助も、ぎょっとして、

「……お裾をまくって見せるのかい」

唾をごくっとのんで息をつめた。

舞台の六人の女が一斉に裾の端をつかみ、「キイ、キイ」黄色い声でパアッと上まで景気よく、踊りながらまくったからである。

「見えたか」加助は背の高い佐市にきいた。

「ううん」残念そうに首をふり、
「肝心な舟玉さまのところが白かった」
「そうか、日本の女なら彼処は、マックロケの毛だから、よく見えるが、こっちの女は灰色や銀色の毛をしてやあがるからな……」
いまいましそうに唸ったが、
「おれは牢内で眼をいためちまって、霞んでみえるから前へ出らあなあ」と加助は、
「まっぴら御免なすって」と人ごみをかきわけ舞台の側へよっていった。そこで、
「おう兄い待ってくれ」佐市も後を追った。

なにしろ二人のいた上州や野州では、お祭りや高市には、女の屋台が出たものである。やはり五、六人位の器量のよい女が、ずらりと一列に腰かけ三味線の曲びきをしながら、
「それ突け、やれ吹け、十文だぁ」
という呼びこみに銭を払うと、細竹の先に綿の玉をまきつけたたんぽ槍というのを渡される。女たちの腰から下に張りめぐらされている幕の中へ首をつきこむと、左右の忍び返しのがん燈が照明になっていて、六個の舟玉さまの御開帳が手にとるように見える。
それを女を痛がらせないように突いてこすり、うめき声をあげさせてから、また十文払って、火吹竹の長いのに変えさせ、これで、舟玉さまの林を左右にぷうぷうと吹きわけ、覗く弁天さまの左右の扉のどっちが出ばっているか、それを探るという見世物があった。

もちろん見たから覗いたから、どうというものでもないが、これでも結構、気がまぎれるのだから妙なものである。
だからこのとき二人とも、その見世物のつもりで、青竹をかりて、とっくり奥まで拝観しようと前へ出ていったのである。しかし、
「いけねえ……無粋な野郎に本当に突かれて怪我しちまったらしく、どの女もみんな肝心な舟玉さまのところへ晒をまいて、白い繃帯をしてやがんのさ」
がっかりしたように佐市が唸った。
「それで、突く吹くは休業でございと、ああやって揃えて……何遍も皆で一斉にパッパと前をまくるんか」加助も失望の声をだした。
なにしろ二人の知っている日本の、
「娘手踊り」というのは、こんなに足なんかパッパとあげず、肩から指先のしなやかさを見せるものだから、二人とも、これがフレンチカンカンなどとは夢にも知らないから、
「股んとこへ怪我して、あんな脚のつけ根までパッチのように布をまいているのに……パカパカ脚をあげるのは可哀そうだ」
と同情しあっていた時である。
「バカン」轟く銃声一発。
乱暴にも馬にのったまま酒場の中へ入りこんできた三人のあらくれどもが、舞台へ近づきざま、中央で踊っていた金髪の娘を、さあッとかっさらって横抱きに鞍にのせてしまった。

娘の名前は「メリー」というのらしく、酒場にいた男たちも一瞬は呆然としていたが、
「エスペーレ（待て）」とか、
「メ・アン・ロバート・メリ（メリーを持っていかれた）」
口々に喚めきながら追いすがった。
しかし、それを馬蹄で蹴ちらした三人は、
「アディオス（あばよ）」とばかり酒場の外へでて、そこから一斉に威嚇射撃を、
「バカン」「ビシン」「ボイン」当った戸や卓子から音がはね返ってきた。
だから逃すなと追いすがってきた連中も射ちまくられて助けようもなく、柱の蔭からバリバリ応射して自分を守るのがせい一杯だった。

江戸ッ子上州ッ子

「男だ、やろうぜ」「よしきた兄い」
二人は腰の脇差をひねって目釘をぬらし、とんでくる弾丸をものともせず、つかつかと馬の側までゆくとまず加助が日本語で、
「お控えなすって……」
三度笠を地面において仁義をきった。
佐市の方も、近よってゆくなり、すこしは言葉ができるから、
「ノソートロス（俺っち二人は）」と自分たちを指さし、次は訳すのが難しいから、

「国定忠治は鬼より恐い。にこっと笑えば人を斬る……いいか、おれたちゃあ、その子分だぞお」
と、なまの日本語でやってから、
（俺たちも忠治親分と同じだぞ）
ニコニコっとわからせようと笑ってみせた。
なのに相手は血のめぐりが悪いのか。
「ノーエンティエンド（わからん）」
と首をふりつつ、屋根の上から撃ってくるやつは、もんどりうって一発のもとに落下させ、馬柵の蔭から狙ってくるのには、壁へ撃ちこんだ弾丸をはね返らすという器用な真似をやってのけ、右に左に射ちまくって倒していた。
が、その内に馬の繋れていた柵が流れ玉に当ったので、驚いた馬が棒だちになったまま、
「ヒヒイン」と此方へとんできた。
佐市は馬方の伜で子供の時から扱い方に馴れているものだから、両手をひろげ、
「ドオ、ドオ」とよばわって近よると、うまいことその暴れ馬をしずめた。
ところが、此方がニコニコしているのは、
（ニッコリ笑って人を斬る国定一家のＪＩＳマーク）とは知らぬあらくれどもは、それを好意の微笑とでもとったのだろう。そこで佐市が引張ってくる馬に、
（自分が鞍の上で抱えているメリーを移すように）と、手真似で加助に忙しそうに教えた。
「うん」そこでうなずいて近づいた加助は、

「おい、娘さんをそっちの馬へ移し換えるんだとよお…」早口で佐市に合図をすると、
「よいしょ」馬を引張ってくるなり佐市は自分が鞍に跨がり、メリーを抱え移すと、今度はすり抜けるように自分が降りた。
親分の忠治にそっくりな、ずんぐりした身体つきだが、こういう早業をさせると実に素ばしっこい。
遠くから見ていると、パッパと瞬く間にやってのけたようにも視えたらしい。
だからして、
「メリーの運命や如何に……」
と心配して見守っていた酒場から出てきた連中も、口笛をピイピッとならし、あらくれどもの手から離れて一人で馬にのったメリーを手招きした。そこで、
「これからどうする兄い」と佐市はきいた。
「うまいこと馬にのせたんだ。早いとこ、その尻っぺたをぶん殴れ」
「女の、尻をかい……」
「ばかいうねえ、馬のだ」と加助がいうと、そこは馬喰(ばくろう)の伜だけあって、目につくように馬の尻など叩かず、尻っぽの毛を力まかせにひとつかみ抜いてしまいそうにぐんと引張った。
これには馬もびっくり仰天。
背中にメリーをのせたまま、後足で砂を蹴り上げると、もう韋駄天ばしり。タカタッタと蹄の音も高らかに駆けて行ってしまった。
「エ・ベルディア（しまった）」

びっくりしたのは、メリーをかっ払ってきた三人。ここで、せっかくの獲物に勝手に飛んでゆかれては、何んの為に此処へまで押しこんできたのかわからないと、その後を追うべく馬首を転じようとしたときである。
「覚悟しやあがれッ」
先に加助が脇差を抜きざま、いきなり斬りつけた。
国定一家は、馬庭念流(まにわねん)の道場が繩張内だったので、死んだ忠治を初め身内の者は、ここでヤットウの稽古をつんでいる。
だから念流の居合抜きの早業で、さあっと引っこ抜いたはよいが、まさか馬にのっている奴の肩や頭を、真っ向う唐竹割りというわけにはゆかない。長靴から出ている膝頭のあたりを斬り払うと、
「こらしょッ」
と、その上の太腿のところを引張った。
まさか足を切られたり曳きずられたりするとは、思ってもいなかったらしく、身体の重心を失うと、此方へ転り落ちてきた。が、
「ズドン、ドン、ドン」続けざまに三発ばかり撃ってきた。だが落馬しながら射ってくるのでは当る筈もなく、地面に刺さって砂煙をあげるだけだった。だが、
「ふてえ野郎だ。飛び道具なんか使やあがって」加助は自分が先に斬り払ったくせして、地響きうって落ちてきた相手に跨ると、
「止(とど)めだ」と、咽喉ちんぼのところへ、ぶすっと刀の切っ先をつきさした。

しかし加助はそれでもよいが、難儀をしたのは、残りの二人を一度に相手にしなければならぬ佐市の方だった。こうなっては江戸ッ子も上州っ子もない。

いくら「向う牛」と仇名される向う意気の強い奴でも、長銃や短銃をバカスカ射ってくる二人を一度に、長脇差一本であしらえるものではない。そこで蹲(うずくま)っていたが、

「えいッ」と隙をみて、酒場の方へ向いている馬の尻っぽをまたも力まかせに引張った。

ヒヒヒインと馬が酒場の方へ駆けてゆくと、屋根にいた身軽な男が、いきなり頭の上から飛び降りてきて、その鞍の上のあぶれものを転がした。

こうなれば残りは一人である。佐市はずんぐりした身体を、打ちあげ花火みたいにポンと飛び上らせ、拳銃をもっている相手の右手首を、

「ブスッ」と下から突いてでた。

刺さりはしなかったが、血がパアッと散った。そして、ついでみたいに、手にしていた拳銃もドサッと落ちてきた。が、あいにくそれは佐市の足に当った。

「痛え。ひどいことをしやあがる」

いまいましがって、その拳銃を力まかせに蹴飛ばしてしまうと、

「この野郎、降りてこい」

鞍の上から脚を引っぱって引きずりおろすなり、これをケサ掛けに斜めにズバリと叩き斬った。そして、

「おう兄い、おれっちも片づけたぞ」

と肩で息をしてみせたはよいが、酒場の方から、ぞろぞろ寄ってくる毛唐共には、

「しまった。他国者の俺たちが……この土地の人間を二人まで害(あや)めたとあっちゃあ、ただでは済むまい」すっかり蒼ざめてしまった。

加助も、もろに反り血をあびた朱達磨のような顔でそれにうなずき、

「ここで御用弁になったんじゃ……せっかくメリケン三界にまで、長い草鞋(わらじ)をはいてきた甲斐がない。おう。おれを、この馬にのっけてくれろ」と佐市にせがんで尻をむけた。

空になった馬が幸い三頭いる。だから、これに乗って逃げられるだけ遠くへ高飛びしよう、というのだが加助の方は、なにしろ生れが馬喰ではない。だから器用に鞍へ跨れない。

そこで佐市に尻をもち上げて貰ったが、泡をくっているから巧く乗っかれず、もたもたしているところへ、どかどかと酒場から駆けよってきた連中が集ってきて、

「ボール・ケ（どうした）」

と口々に騒わぐ。そして、背後を指さし、

「エーリョス・ラ・ブースカン」

というのだが、これは佐市にも通じないらしく、妙ちきりんな顔をした。

「好かん……というとるで、こりゃ獄門首にさらされると違うか」情けない顔をした。

だからして、せっかく馬の鞍にしがみついたところで、その手綱を廻りの群衆にとられてしまい、逃げるにもう逃げられず、まるで、

（引廻しの上、獄門）といった恰好で曳っぱられてゆく加助も、

「やっぱり、おれっちたちゃ……ついていねえやな」と、こぼすが、わいわい騒ぐ人声に消されてしまって、てんで佐市に届かない。

が酒場の前までくると、

「アーモ」と叫びながら、女がとびだしてきたのには、これは二人ともびっくりした。

その言葉が（惚れちょる）とか（好き）だ位なことは、佐市も加助も知っていたからである。それに自慢じゃないが、日本にいた時だって、こんな台辞は若い女から掛けて貰った覚えのない二人なので、ドキンと胸が高鳴ってしまって目まいまでしそうになった。

だから、その娘がメリーであって、

（佐市にしてみれば馬にのせて反対の遠くへ走らせたつもりが、馬は尻っぽをむしられて立腹したもの、飼主のいるこの酒場へ大廻りしながら戻ってきて、のせられた彼女も危ういところが助かって帰ってこられ、それで感謝しているのだ）

と頭の回転が突嗟にきくわけもなく、

（これから獄門台にのせられるという瀬戸際に、二人を一遍にアーモというは、ちいと殺生じゃ。これでは死んでも未練がでて、成仏できんのと違うか）

心配になってきた。だから恨めしそうな顔で二人とも馬から降されたものの、

「おう佐市。もう観念しろや。こんな土壇場で女から巧いこと云われたって、もはや、どうなるもんでもないじゃなし……」

自分に云って聞かせるみたいな調子で、げっそりしていってのけた。佐市もうなずき、

「それに……肝心かなめな舟玉さまがよお、繃帯でくいこむように包まれている女じゃ、こりや、なんともならねえもんなあ」

いさぎよく諦めをいってるところへ、

「ムーチャス・グラシアス（嬉しいわ）」

とばかりメリーが寄ってきて抱きついてくれた。

「むちゃすんな……寝ている伜を起すような真似はよしちょくれ」

加助が悲痛な声をはりあげているとき、栃木陣屋の熊倉嘉三をふた廻りも大きくしたような巨大漢が、のっしのっし近づいてきた。

てっきり召捕られるものと覚悟をつけ、

「好きだなんていってくれる阿魔っ子の前でよお、互いに未練な真似はよそうぜ」

二人そろって、お縄頂戴と手を出した。するとである。縛られると思った手を、向うの熊みたいな掌が押さえこむように、握ったと思いきやギッチョンギッチョンと振りながら、

「ケ・アレグリーア・デ・ベールレ」

（逢えて嬉しや、国定一家）といった意味のことを口にしだした。

国定一家の旗上げ

「へーイ。丁半、どっちも、どっちも」

盆ござにする七島莫蓙もないから白っぽい毛布をしいて、加助が胴元。佐市は壺ふり。

初めてみると、こういう博奕はこちらでは珍しいものだから、次々と人だかりがして寄ってきては、「コモ（どうするんだ）」と張るやつより覗きにくる者の方が多い。そこで佐市が汗を拭きながら、さいころの目で説明するのは厄介だから、右側に一、三、五、左側には二、四、六とチョークで数字をかいて、

「デメ、デメ（張った、張った）」

汗をふきふき、しきりに客よせをする。

加助も胴元だからと日本の貸元衆のように、どてんと坐っているわけにもゆかず、自分も怪しげなスペイン語で、集った連中に、

「クアール・エス？（へい、どっちで）」

と佐助の手助けをして声をからして呼びこみをする。まあ眼色毛色は変っていても人間の博奕好きは本能みたいなものだから、その内に結構一人はり二人はり毛布の廻りは一杯になった。が初めの内は、小さなサイコロの目が立ったままでは読みにくいからして、

「クァントス（いくつか）頭の上から、次々と賽の目をきいてこられて煩わしすぎる。

「なあ兄い、客人も坐って貰わなくちゃあ、やり憎いことおびただしい」

とはいっても日本人と違って坐りつけていない毛唐を、ぐるっと毛布の廻りに行儀よくは並べられるものでもない。とどのつまりが毛布の方を上にもち上げることにして、下へ古卓子を入れて高くした。そうなると壺ふりも胴元も坐ってはいられない。そこで仕方なく二人とも立ちん棒で、

「クアール・エス（どっち、どっち）」とか、

「ムーチョ・ムーチョ（どんどん賭けな）」

と、やるしかない。しかし馴れてくると格別それでどうという事もない。

また客の方もなにしろ、一から六までの数字の奇数偶数にかける手軽な勝負なので、

「ケ・セ・ソ（そりゃなんだ）」と野暮をきくものもいなくなって、テーブルも一つではたらないくらい満員になり、そこで加助と佐市は別個に場所をかえ、白毛布の盆をしくようになった。

――いまアメリカで博奕場のカード切りやルーレットの玉廻しのことを、ラスベガスあたりでも、「テーラー」とよぶのは、このとき加助と佐市が、勝った方からの一割を、「寺銭」にというので日本語で、

「てら」「てーらー」といったのが言葉の語源だと、ネヴァタァへ行ったときトロピイカァナのボスH・ジェンズから聞いてきた。真偽は判らないが有りそうな話である。

さて、その内に日本人はいないが中国人あたりが、目色毛色も同じで髪毛も黒いから、まんざら他人とも想えないのだろう。

寄ってきては手助けしてくれたり、うるさい客をなんとかあしらったりしてくれた。

「ソン・エーリョス・チーノス（あんひと達、中国人でしょ）」

メリーは時たま顔をみせると眉をしかめ、そんな口のきき方をした。

なにしろ白人の女というのは、どうも肌の色で頭ごなしに人間の区別をしたがる。

当時の中国というのは「清国」とよばれていて、この時から四十年後の日清戦争では負けてしまうのだが、当時は東洋の大国である。

だから昨日や一昨日できたサンフランシスコへなんか来たって、格別遠慮気兼もない筈だが、赤色や亜麻色の毛をはやしたやつは、

「髪が黒いのはインディアンと同じ」

といった解釈をしているものだからして、せっかくゴールドラッシュを当てこんで、ここへ流れこんできた中国人も、

「鉱区入坑許可書」というインヴォイスを下附して貰えない。そこでキューバ人やジャマイカの色の黒い連中と一緒になって、靴磨きや洗濯屋みたいなことをやってしのいでいた。

加助の賭場へきても、大きく銀ダーラーなんか張らない。銅幣などをちびちび張っている。だから時にはみかねて、掃除までしてくれる連中に、加助や佐市も、

「ほらよっ」と時には小遣いをくれてやったりした。すると、その五、六人の若い者がある時、

『アラーポ・ア」と、盆ござ代りの毛布をはたいて片づけをしてから寄ってきた。

「エル・レスベータ」ともいった。

「こいつらあ何をいってるんだ、佐市」

ときくと、暫く考えこんでから、

「まあ、豪いとか、感心してるって意味でしょう」事もなげに答えた。そこで、

「何が尊敬に価するのか聞いてくれ」

佐市をつついたところ、ゆっくり手真似で訳けを彼らからききだすや思わず、にやりと笑って、

『わっちら二人が遠いここまできて、無職渡世で奴らの金をまき上げているのは東洋人の誇だ……と云

っているんでやすよ」と、うちあけた。

「何をいってやあがる……俺っちは、泣く子も黙る国定忠治親分の息のかかった子分子方だってことをよく教えてやんなよ」

加助が嘯いたところ、それを訳した佐市は、

「兄い、どうしやしょう」

当惑したような顔をもってきた。

「なんでい」汗を掌でこすって聞き返すと、

「そんな豪い将軍の輩下なら、自分らも加えてほしいと、やつらが云っているんで……」

頭のびん先をかきながら佐市が訴えた。

「親分の国定忠治が……将軍さまたあ、なんて下手くそな通弁をしやあがった」

これには加助も呆れた。なにしろ日本で将軍さまといえば、千代田城に一人しかいない。が、此方では、ちょっとしたものでもボスになると、すぐ将軍とよばれるようになる。

だが、そこまでは加助には分りようもない。

とはいえ死んだ忠治親分を公方様扱いされて、満更悪い気のするものではない。

「よっしゃ盃をくれてやんな。いくらここで国定一家の縄張をたて直すにしたって、おれとおめえの二人きりじゃあ手がたりねえやな……枯木も山の賑わいともいわあな、雁首を揃えるのも為になるだろうじゃねえか」

「そうか、兄いのいうのが本当かも知れん」

佐市は酒場のメリーに話して、ギヤマンの盃と、ビイドロの酒瓶をかりてきて、
「南京の陳」「当家の朱」を初め「キューバの黒坊」「ジャマイカの熊」といった、こっちから呼びやすい名前をつけてやった連中に、一人ずつ酒をのませてやってから、
「日本のやくざ無職ってのは、なにも盆ござの垢をなめ、一割ずつの寺銭をとって、それで呑みくいしようなんて、あたじけねえもんじゃねえ……一端こうと決ったらてめえらの命をはって、あくまでも世の為人の為に尽すもんだ……それが『赤城の山も今宵限り、てめえらも散りぢりばらばらに山を降りていったって、このことだけは生涯忘れる事じゃねえ』とおっしゃった忠治親分のスピーチだった。それを肝に刻んで渡世に励みやあがれ」
といってきかせたところ、土地のスペイン語で、シイシイと、小便するみたいな、はいといった返事をした者もいたし、清国語で、
「明白、明白」わかると答えた者もいた。
ところが、この五、六人の連中が子分になったのを、すっかり得意になってふれ廻ったせいか。
翌日になると、有色人種どもが、
「俺も」「自分も」次々と名のりでてきた。
みる間に三十人からの頭数になった。
とても二つ位の卓のかすりでは食わしてゆけなくなった。そこで波止場へも、四つぐらいテーブルに毛布掛けの野天の鉄火場をつくった。
「国定一家って高張提灯がほしいところだ。各しょばへ一つずつ出しゃあ恰好がいい」

加助は残念がったが、無いものねだりである。仕方がないから古板に白ペンキで
「La casa es kunisada」
つまり「国定一家」とかいて、その看板を揚げさせた。

メリケン女侠

このままでいってくれたら、まあ国定一家は、おおいに日本の任侠道の途を、ここでひらきもしたろうが、月に村雲のたとえもあって、そうは順調にゆかなかった。
なにしろ当時のサンフランシスコは、ゴールドラッシュで人口は鰻のぼりに増えたものの、南部と北部の対立にあけくれしていたアメリカ合衆国は、準州にも加えず放りっぱなしの状態だった。
だから引き続きスペイン人の治安判事の統治下にあって、赤服のカーニー軍の兵隊が警察がわりにサンフランシスコの巡羅をしていたが、これが一にも賄賂、二にも賄賂である。
加助や佐市の国定一家の盆へも、鉄砲をもった兵隊がきては、さも当り前みたいに、
「デメ（出せ）」と冥加金を取りたてる。
まごまごしようものなら卓の上にある客人の場銭まで、さらえて持ってゆこうとする。
「ノーエス・ミイオ（私んじゃねえから）」
と弁解して断ろうものなら、
「ポール・ケ（何をぬかす）」と卓子にドカンと鉄砲玉を撃ちこんで乱暴をする。
「くそったれ、鉄砲もって賭場荒しなんぞされて……おとなしく引込んでいられるかい」

度かさなる乱暴に、短気な佐市が向っ腹をたてた。加助も腹をすえかねていたから、
「青い目ん玉の奴らに舐められたんじゃ、死んだ忠治親分に申しわけもねえ」
ということになった。そこで佐市は、身なりこそ今では三度笠や一本どっこの旅鴉ごしらえではなく、ちゃんと縞柄の背広をきてはいたが、すぐさま長脇差をもってきて、
「よっしゃ、殴りこみだ」
景気よく我鳴りたてた。加助も、
「うん、やろう」
と二つ返事で承諾はしたものの、カーニー軍の兵隊というのは、アンジェロの兵営に何百といるのである。だからして、
「こっちの身内は中国人共で高だか三十人。どうだろうか」加助は首をひねった。
しかし佐市は、あくまで強気一点ばりで、
「頭数なんか一々よんでいちゃあいけませんやあ、天保七年に忠治親分が前橋のご城下大度の関所破りをしたときだって、向うは何百といたのに、御身内衆で従ったのはたったの三十人きり。それでも偉風堂々と大手をふって、関所役人を尻目にかけ通り抜けなすったという話ではござんせんか……」
すっかり意気がってしまった佐市は、てんでカーニーの軍隊をなめきって昂然としている。
そこで加助は困ってしまって。相い変らず酒場でフレンチカンカンを踊っているメリーのところへ顔をだすなり、
「他人には相談できない話だが、どうしたもんだろう」打ちあけてみた。

すると日本の女なら、こういう話には、
(そんな危ないことは止めておかんしょ)
と首をふり、すぐ佐市のところへ行って意見してくれるところだろうが、こっちの金髪女は血の気が多いのか、あべこべに、
「ムイ・ビエン(好いと想うわ)」
にこにこと、すぐ賛成してみせた。
そこで当てがはずれ、加助がしょげると、
「アユダル(手伝ってあげてよ)」
大きな乳房を掌で下から押さえ、ついでにブラブラふってみせては赤い気焔をあげた。
なにしろ、この前この酒場へ侵入してきて、メリーを掻払って逃げかけた無法者というのも、カーニー軍の軍属みたいなあぶれもの連中だった関係上、それからというものメリーは兵隊嫌いになっていたせいもある。
そこのところは加助だって分からないわけでもなかったが、酒場の姐ちゃんに助っ人して貰ったからといって、できる喧嘩でもなかった。だから戻ってくるなり佐市に、
「メリーは助けてくれるとはいっていたが、たった三十人でカーニーの兵営へ殴りこみをかけるのは、どんなものだろうか」
亀の甲より齢の功で、若い弟分に云ってきかせた。なにしろ腹をたてるという事と斬り込むのとは、どうも一つにしない方が、まあ無難に想えたからである。すると、

「兄いはまんだ此方の言葉に馴れていないから、ただ頭数だけで心配するが……この土地の人間が喋舌っているのを聞いてみなせえ。とうにスペイン人の手を離れていると想っているのに、カトリックのスペインの判事と赤服の兵隊のやつらが、のさばりかえっているからして、誰しもみんなスペイン嫌いだ……だから俺たちが殴りこみさえかけたら、皆が後押しをしてくれる。気にすることはねえんだ」

土地の人間のいまいましがって零す愚痴を、しょっちゅう聞いている佐市は、あべこべに加助を慰めにかかった。そこで、

「そうかなあ……これが日本なら、兄弟分の貸元衆に伝達をつけ、あっちから何人こっちから何人と人集めをして、それから左封じの喧嘩状をもってゆかせ、それッと景気よく繰り出すんだが、此方では、この国定一家の他には御同業盆ござ渡世のおなかまもいねえ。てんで打つ手も何も考えられんのに、いいのかい。そんなに強気で……」と心配したが、佐市は、

「まあ兄い、ひとつ委してやっちゃあ頂けやせんか」胸をはってポンと叩いた。

――スペインとカリフォルニアの摩擦は、ゴールド・ラッシュが始ってからは、土地の人気も荒くなっていたせいもあり、「記録」では西暦一八四九年の嘉永二年の夏に、モンテレーに集った住民がスペイン軍に反抗し自治警察制度を叫ぶ大会をもった。騒動になった。

さて、こうした反目の続いているとき、アメリカ合衆国のポーク大統領が、スペインに対してキューバ島の買収を申込んだものだから、

「われわれはキューバを他へ分割するよりは……むしろ大洋の海底へ島が沈んで行くのを見る方が望ましいのである」と拒否されてしまい、

「それでは実力行使で」とキューバへ渡ったロベスやその一党は、スペイン軍に捕えられ銃殺された。

そこでアメリカはスペインの首都マドリッドに、ルイジアナ出身のソーレ大使を抗議に送った。このため現地スペイン軍は、

「おのれアメリカ野郎め」と、時きたらばカリフォルニアを奪還しようと秘かに兵力を増強していた。

ところが、これに対してロッキー山脈を探検したり、カリフォルニア征服にも功のあったアメリカ人のジョン・C・フレモントは、この形勢を憂え、

「危機である」と叫びアメリカの新聞にも所説を発表した。だが彼は共和党に所属し大統領候補にたったが、民主党のブカナンに負けたから、

「選挙に利用せんための放言だったらしい」と軽視された。

このためカリフォルニアの危機は放っておかれた。そこでサンフランシスコの人間は、

「このままではスペイン側にいつなんどき、どんな目に吾々はあわされるかも知れん」

この当時はまだ合衆国に入っていなかっただけに戦々兢々として自衛策を講じだした。

しかし先だつものは武器弾薬である。

すると当時アメリカ国内にブラウンという過激派がいて、これがヴァージニア州のハーバースにある合衆国の海軍兵器庫を襲う手筈だという情報が入ってきた。

「サンフランシスコ防衛の為である」

と血気にはやったカリフォルニアの連中はそれに合流した。

さてロバート・E・リー海軍少佐の海兵隊と戦って、分捕った火器や弾薬を持ち帰ってきた。

男心に男が……

太平洋岸のサンフランシスコの反対側。

大西洋岸サウスカロライナ州のチャールストンに、ブカナン大統領の命によって、サムター要塞に届ける軍隊と食糧をつんだ汽船が入港してきたときのことである。いきなり、「ダガアン」「ガバアン」と南部同盟政府の軍隊が、これに砲撃を浴びせかけてきた。スペインとサンフランシスコの戦より、アメリカ国内の衝突が先に始ってしまった。

サムター要塞のヤンキー軍も、これには愕き汽船を擁護するために、南部に応射した。

ここに三月四日。ブカナンに代ってリンカーンがワシントンに入って大統領に就任し、要塞のアンダーソン少佐に対し、まず籠城に必要な食糧を陸路から送ることにした。

しかし四月十二日。南軍は総攻撃にでた。

アンダーソン少佐は猛火に包まれた要塞をまる二日にわたって、もちこたえたがついに死傷者が続出して、開城のやむなきに至ってしまった。そこで十四日の昼。

「ヤンキー・ドウドル」のマーチを鼓笛隊に演奏させながら、生き残りの兵をまとめ少佐は要塞を出た。これまでの合衆国政府の、

「星条旗」はおろされた。代って新しい、

「星と横木旗」

南部同盟の国旗がくすぶる要塞にひらめいた。ここにおいて合衆国大統領リンカーンは、

「七万五千の民兵に、三ヵ月の兵役を」

と布告をした。これが南北戦争の始りである。

さて戦火は、こうして大西洋岸でまず始ったが、二十日には太平洋岸のサンフランシスコにも、この国内戦の知らせは入ってきた。

リンカーンでさえ初めは長びくと思わず、三ヵ月の予定とみた南北戦争だが、サンフランシスコではなおさら形勢がはっきり分からない。だから、住民たちの騒ぎは大変なものだった。

すると、この混乱を好機とみて、

(アメリカが国内戦を始めだした。もはやこちらまで手を出してくる気遣いはあるまい)

高をくくったスペインの判事は、すぐさま軍隊を、

「タンタン、タータン、タンタン、ターン」

軍鼓を叩かせサウスアリットから、サンフランシスコの町へ入ってこさせると、ベリケリー街の建物をあけさせ、兵舎としてここへ進駐してきた。

——のち明治三十一年(一八九八年)にアメリカとスペインの戦争が起きて、スペインが敗北しフィリッピンまでアメリカが占領する頃になると、誰も赤服のスペイン兵をみても恐れなくなったが、この三十七年前の文久元年のときは、まだそうではなかった。

「エスパニョール」といえば、赤鬼ぐらいの響きがあって、女子供は馬車に荷物をつんではリチモンドの丘の方へと逃げだした。

「……とうとう土壇場へきましたぜ。ねえ兄い」佐市は背広の腰に繩をまきつけ、そこへ長脇差をぶちこんだ向う鉢巻で現れた。

「こっちから殴りこむのにゃ反対だったが、向うさんから景気よく押しこんでこられたんじゃあ、こりゃあ降りかかる火の粉は、仕方がねえ。払わざあなるまい」

加助もやっと覚悟をつける羽目になった。

「だが、おりゃあ大工や左官のパッチをだぶつかせたような、ズボンってえのじゃ性にあわねえや」

かびくさくなった栃木から身につけてきた盲縞をひっぱりだして着ると、手甲をつけ脚絆をまいた。

そして額に白鉢巻をきりきりとしめると、さて集ってきた子分たちに、

「かねがねスペインの赤服野郎に繩張荒しをされ、いつかは一泡ふかせてやらねえと、盆ござ稼業の男が立つめえと、かねて覚悟はしていたが……向うの方から殴りこみをかけてきゃあがった……俺っち盆のかすりでパンに有りついている無職もんは、こういう時こそ手前の身体をはって、かねて御ひいきの旦那衆のために、ひと肌ぬがなくちゃならねえ。しかしだな、おめえらはおれっち日本人とは違う。だから命の惜しいやつは無理とはいわねえ。今の内にリチモンドの丘へとっとと、ずらかりやあがれ。構ったことじゃねえぜ」

と加助の口からいってきかせた。佐市も、

「おれっち二人は、てめえらは知るまいが、赤城の山でたてこもりなすった国定忠治親分の盃をもらった上州長脇差……死ぬことなんか、これぽっちも気にしてねえ男ん中の男だが、といっておめえらまで無理に巻き添えにしようなんのと、阿漕な真似はしたくねえ……生命の惜しいやつは遠慮なんかしねえで、とっとと消えておくれよ」

ぐるっと見渡していってのけた。

しかし、中国人の南京や、キューバあたりの黒いの、メキシコ野郎といった顔ぶれで、てんで一つに纏っていないみたいな連中だったが、此方のいう事がのみこめると、

「情けねえことを、云わんでほしい」

と口々にいいだした。つまり一緒に斬りこみに行くというのである。

「てえッ泣かせるねい」

佐市は汗をふく恰好で眼をこすった。

(いざとなれば三十人いても、半分も残るまい)と思えばこそ、ずっと反対してきた加助だったが、思いがけぬ若い連中の意気ごみにはたまげてしまい、ううんと唸り、

「男心に男がほれて……血の雨ふらすかサンフランシスコ」と唇をかんだ。

すると、そこへメリーが長いスカートをつまみあげながらやってきて、

「……どうせ酒場もスペイン兵に占領され、ただ呑みされてしまうに決っているから、酒樽はみんな今の内にあげますって、マスターが云ってたわよ」と教えにきた。

「そいつは有難い」と喜んで、三十人の子分をやって運ばせると、樽は十ばかりだったが、度の強いウイスキーの瓶入りの木箱は、山と次々にもちこまれてきた。

「こういうときは、薦かむりの鏡を抜いて、樽の香りのぷんとする柄杓でグイッと冷やで呷って出かけるのが定法だが、こっちの丸樽じゃ愛想もこそもねえやな」

せっかく着物姿に繩だすきをかけた喧嘩仕度で、加助は惜しそうに口ずさんだが、子分どもは、
「ただで酒呑めるのテンホーね」
とかなんとかいっては、樽の方から空にしていた。つられて佐市も、
「酒なんて兄い……呑んで酔っぱらえれば、それでいいんじゃありませんかい」
とかなんとかいいながら、自分も一緒になって呑みだすと、メリーも日本の女なら、
(お酌を……)とでもいうところを、
「デメ・デメ(私ものむわ)」とばかり、ぐいぐい強いのを呑んでは、
「ウイッ、フイッ」とげっぷをはく始末。
「おう、たいがいにしねえか。あんまり酔っ払ったんじゃ足腰が立たなくなるぜ」
見るにみかねて加助が口に出した頃には、みんな好い心地になってしまって、もう巡りの早やいのは、グウグウ鼾をかいていた。
「なんせ禄な修業もしてねえもんだから、こいつら、てんでなっちゃねえ」
加助は慨嘆して、ぶつくさ文句をいっていたが、自分も身体がとろんとしてきて、そのまま眼をつむって寝てしまったらしい。

血と焔の殴りこみ

「あッ」声をだしたのと、耳の中へ、
「ダダン」銃声がしたのと殆ど一緒だった。

「しまった」加助が眼をこすった時には、赤い服の兵隊が廻りをとりかこんでいた。
「おう起きろ」
まだうっ伏さったままの佐市をつつくと、
「カラーイ(あきれた)」
酔ってその下で寝ていたメリーが、もう眼さましてスカートをめくり、下着をひっぱり出しては破っていた。
「何してる」と覗きこむと、メリーはちぎった布を加助に手渡し、ウイスキーの瓶の口へさしこむように手真似でしめした。
佐市も腹ばったままで手を出すと、一緒に瓶の栓をぬいて詰めかえた。
子分の連中も柱の蔭へ入ったり、羽目板の脇へひっこんで、ウイスキーの箱をひっぱってくるなり、片っ端から詰替えをした。
「ムイ・ビエン(もう良くってよ)」
メリーはマッチをとり出してシュッと火をつけるなり、布栓に点火した。
日本の酒と違って此方のウイスキーは度が強いから、みる間に青い焔がボオっとつく。
すると、その焔を次々と箱の瓶に移しおえると、
「シー(いいわよ)」
メリーが合図した。そこで加助も佐市も、子分達も、てんでに焔のもえる瓶をもって、
「ヤーホー」とばかりに飛び出すと、

『エスタ・ビエン（これでもくらえ）」
とばかり投げつけた。瓶は弾けとぶと火の玉になって勢よく転げ廻った。
思いがけない奇襲にあった赤服の兵隊は、
「ヒエイッ」と隊列をくずして逃げだした。
佐市は長脇差をひっこ抜くと大上段にふりかぶり、子分たちには手に手に銃をもたせ、
『それッ」と駆けだしていった。
加助も負けてはいられないから、
『叩っ斬るぞ」「国定一家の腕をみせるぞ」
大声でよばわりながら、くいこむ程にしめつけた脚絆の足先で砂をけりあげつつ、
「こら待て」と追いかけてゆく。
ところが突如として
『ベディール（助けて）」
と悲鳴がする。
はっとして火焔瓶の転がった炎の彼方を透かしてみれば、南京の陳が弁髪をつかまれ、今や赤服兵の鉄砲の台尻で脳天を割られかけんとする寸前。そこで加助は、
「おのれッ」刀をつきだし、そのまま泳ぐようにかけてゆくと、
『フロイビール（やめろ）」
いつも赤服のカーニー軍の兵士から、賭場荒しをされる時に聞かされている一つ覚えのスペイン語で

叫ぶなり、
「たあッ」と、まるで海へ身投げでもする恰好で、刃をたてたまま飛びこんだ。
すると、向うもすかさず身構えるなり、
「トーント（ばかめッ）」
銃をもち直し引金に手をかけようとした。
が一瞬早く、加助の切っ先が向うの肋骨と肋骨の間にグサッと突きたっていた。
だからドカーンと鼓膜を叩き破るくらい轟音はしたが、空へ向けて発射したらしく、
「エスペラール（待て）」とかなんとか、未練たらしく口にしていたが、日本刀を胸へ刺しこんだまま仰向けにひっくり返った。
しかし佐市の方はメリーを庇っているから思うようには進めないとみえ、燃えさかるウイスキーの青い人だまみたいな焔の中で、
「こんな唐変木に負けるこっちゃねえ」
大きな声でまくしたてていたが、仁王だちの恰好で途中で立ち止ってしまい、その儘では、なんともならないと見てとったか、
「おう、おめえら、このメリーさんをリチモンドへ送ってきな」
と周りの子分に云いつけるなり佐市は、
「兄い……国定一家の晴れの殴りこみだ」
と、相手の胸につき刺した刀を、足で踏んづけて引張っている加助に声かけてから、

「てやあ、がんでい」
とびくる弾丸をものともせず、すばあっと駆けより近よってきた赤服の兵隊を、
「二つになれッ」
とばかり肩口からひと息に切りさげた。
が、そのとき。
一緒についてきたジャマイカの熊が、やられたとも云わず、キリキリ舞いをして、ズッテンドウと眼前にぶっ倒れた。
「畜生ッ、さっきは当家の朱が脳天に鉛玉をうちこまれ、石榴みたいになって、ひっくり返って殺されたが、またもやられたか」
二人は顔を見合せ暗然とした。なにしろ不意を襲われ、しかも酔っ払って寝こんでいたところを襲撃されたので、思ったより被害はひどく、振り返ってみたところでは三々五々倒れているのは、どれもこっちの子分ばかりである。だから、
「こん畜生め、目色や毛色は違っていても、盃をやったからにゃ国定一家だ。なのに、むざむざ、やつらに殺られちまっちゃあ、死んだ忠治親分に申訳けもねえ」
「うん、そうとも、撃ち殺された子分どもが成仏できるように、こうなったら死なば諸共つきこむしかあるまい」
きっとして二人ともうなずきあった。
そして手にべったり滲みこんだ血のりをこすって、砂をつけ長脇差を持ち直し、

「兄い、ゆこうか」身体を屈めたまま佐市はいった。加助もうずくまったまま縄襷をきつく引張って締め直すと、
「うん、流れ流れてメリケン三界……えれえところで土になっちまうんだなあ」
思わず愚痴っぽく唸ったが、鼻っつらをこすりあげると、ひとつ、
「えへん」と咳払いして気張ってから、
「じゃあ、生れてきた時や別っこでも、死ぬ時は一つとお云いなすった国定忠治親分のお言葉通り……」
身構えるなりニヤリとした。耳の脇や頭の上をかすめて、ビュンビュン弾丸はとんできたが、二人とも、それをせせら笑って、
「構ったこっちゃねえ」
腰を屈めたままで長脇差を振りまわし、
「ウワアッ」とばかり駆けこんでいった。そして、
「ハハア、又も出ました三角野郎が、四角四面の櫓の上で、音頭とるとは恐れながら国のなまりや言葉の違い、許しなされば文句にかかるが、オオイサネ」の二人の歌声が、つんざく銃声の中へ包みこまれ、そして吸いこまれていった。

——南軍がアポマトックスで降伏して、慶応元年には南北戦争も終った。
かつては準州にも加えられなかったカリフォルニアも、そこでアメリカ合衆国の一州になった。サンフランシスコは西部第一の都会と変った。

「一八六一年の暴動」とよばれるこの事件のときに、無惨にも銃火で倒された死傷者が多かったから、改めてアメリカはマドリッドへ談判の使者を送った。だが埒があかなかった。

ところが一八九八年二月十五日。

ハヴァナへ派遣されていたアメリカ巡洋艦メイン号が爆発。乗組員多数が死亡という惨事がおきた。

そこでアメリカは四月十九日、

「アラモ砦を忘れるな」

「サンフランシスコを忘れるな」とばかり、スペインに宣戦を布告した。ルーズヴェルトの率いる海軍はサンチャゴ湾でスペイン艦隊をたたき、マニラ湾でも海戦に勝った。

陸軍もキューバ島に農園をもっているアメリカ人の利益を守るために、一万七千の派兵をして占領した。スペインは降伏した。

そこで晴れてアメリカ連邦の一州となっていたサンフランシスコも、その戦勝パーティーがリチモンドの丘で催おすことになった。

さて、パーティーの席上でかっての、戦争中に赤服と戦った人々の武勇談の花がさいた。

だからメリーも、去りし日をしのび、

「クニサダ一家というサイチや、カスケという男たちがいて……」と当時のことを話しだした。

彼らが火焔瓶を投げつけながら、群がる敵兵の中へ突進していった勇ましかった最期を、一所懸命にものがたったのである。しかしパーティーに集った人々は、

「へえ……」とか「ほう」ぐらいは、メリーのために相槌をうってくれたが、誰ひとりとして彼らの壮烈な死を覚えている者は、もう一人も居なかった。そこでいくらメリーが、

「ワンダフルだった」口を酸っぱくしても、みんな素知らぬ顔をして、しまいにはメリーの側からも離れていってしまった。

——洋の東西を問わず、やくざの末路というものは何処でもみな同じようなものらしく所詮、むなしくはかないもののようである。

アメリカで刊行されている邦字紙羅府日報のK氏の説では、下の二字が入れかわって（カイチとサスケが正しいというのだが）つまり名さえも今では明らかにはなっていないのである。

関東遊俠伝

やくざの原点

「利根の川風、袂へ入れて」と、かつてうたわれたように、大利根川から上総下総にかけ渡世人が多かったのは、海魚や川魚にしろ生臭ものが多く獲れ、それに米どころだった所為でもあるらしい。と書くと、今では、

（漁師や百姓の懐が豊かなので、それを目当てに盆をしく博徒が多かったからだろう）と思われるが、あながちそうでもない。

なにしろ渡世人だからといって、あけくれ博奕をしているわけはない。自分らで賽ころいじりをしていては、まるっきり共食いになってしまう。

つまり開張するには客を集めて張らせるしかないのだが、祭礼とか市のたつ日でなくては、そうそうは人間が集ってくるものではない。

それでは渡世人は、盆茣蓙ばかり頼って居られなかったとすると、いったい何を飯の種にして居たのか……という事になるが、これは意外や興行だったのである。

しかし当節のごとく流行歌手のようなのはなく、昔は旅廻りの講釈師の席場か相撲興行だった処がである。

余り知られていない話だが、渡世人の世界は幕末の文久二年をもって一線がひかれる。

講談で有名な大岡越前守忠相が八代将軍吉宗の時に、街道を流しの旅遊芸人達へ、朱鞘の公刀と十手を持たせ警察権を与えた。大名領にも街道は通っているから、警察国家体制樹立の為である。

処が、やがて彼らは定着して住みつくようになり、互いの縄張りを決めあった。そこで、いざと云う時の下っ引きや捕子を食させてゆく為、賭場を開いたのが始まりゆえ、

「旅遊芸人」の名残りから「遊び人」とも云うのだが、文久二年に、世間が物騒になり抜刀する者が増えたので、棒では召捕れず、それまでの朱鞘の刀と十手をそっくり公儀へ返上してしまい、

「神農さまを神として祀る香具師稼業」へと彼らは戻ってしまったのである。

とはいえ、それまでは公儀御用を受持たされ、今で云うなら地方警察署長みたいな役割で、ギャンブル資金で人件費や、諸経費を賄っていたのであるから、これまでの通説とは逆に、

「二足草鞋」の親分こそ本まもので、まっとうな本可打ちだった訳けである。

そして香具師は昔から興行をしていたから、彼らが講釈師に一席やらせて儲けても、また相撲の勧進元をつとめ利をあげたとしても、それは当り前の権利だった。

なのに、それらの既得権益者が抜刀の取締りができかね、一切を放棄したのだから、文久三年から元治慶応と各地で強い者勝ちの乱闘沙汰になったのである。

もちろん実際は、文久二年に公刀十手を返納した裏には、天保、弘化　嘉永、安政と三十年位の間

に、飢饉その他で世相が険悪化して浮浪者が多くなり、それらが徒党をくみ兇器をもって、各地を荒し暴れ廻り、「御用ッ」と向って行っても、神妙にせず、「何をッ」と逆襲してこられてしまい、とても真剣の長脇差に小さな十手や棒では防ぎようもなくなって、そこで、

「もう御用は危なっかしくて勤りません」

と切羽詰ってやりきれなくなり放り出してしまったのが真相だから、

「天保水滸伝」といわれるごとく、関東の飯岡対笹川の決戦もその天保あたりの時点から始められる。

飯岡の助五郎

大利根を阪東太郎というが、この水の流れで辺りは五穀豊穣。それに海や川では魚貝も当時は、公害もないので沢山とれた。だから営養をたっぷりとるから女子は早熟となり、男子は体格がよくなる。そこで現代の青年にタレント志望者が多いように、助五郎も、

「おらあも裸一貫で何んとか立身したい」

とあせったが、まだ流行歌手の時代ではなく当時の人気稼業は相撲しかないから、江戸回向院へゆき開運山大五郎へ弟子入りした。

しかし運不運もあるだろうが、入門したからといって、誰もが幕内へ上れたり三役になれるものではない。その内に助五郎は、

「おめえみたいな見込みのない奴は……」

と親方の大五郎に怒鳴られたのを汐に、

「そんなに見込みがねえンなら止めにしよう」

下総の飯岡へ行き漁夫となった。しかし回向院で修業してきたのは、大飯をくう事と力まかせに、相手をぶちかまし張り倒すこと。

だから助五郎は漁師になっても、喧嘩の方で名をあげ、近くの「銚子の五郎蔵」とよばれる男の子分になったが、親分が網元だから、やっぱり漁夫をして居なくてはならぬ。

そこで手土産に十両の金を作ると江戸へ行き、もとの親方の開運山に頼んで、

「近国近在相撲世話人」の鑑札を貰った。

これは天保十一年正月のことで、浦風林右衛門以下連名の証状の写しが現存して居る。

つまり助五郎は賭場稼ぎよりも先に、相撲興行で売り出し、一本立ちになったのである。

さて飯岡から六里先の須賀山村に、利根川の荷積み場である笹川河岸があった。

ここの繁蔵というのが助五郎より十八歳下だが、やはり江戸相撲を志し、天竜山の稽古部屋に居た事があった。そこで、

「相撲の勧進をやれば木戸銭が儲かる。それに旦那衆に取組みに賭けさせておいて、比方が逆張りし八百長をやらせりゃ丸儲けだ」

と考え、やはり手土産代りに金を包んで、天竜山の処へ相談に行った。処がである、

「二年前に目と鼻の先の助五郎へ、親方衆が証状を出して居るのに、それを引きあげお前にとはゆかんそうだよ」と断わられはしたが、

「肩をいため相撲はとれねえが、たいした力持ちだよ」

と、勢力の富五郎という前頭までいった大男を、戻る繁蔵につけてくれた。

さて、なんとしてでも相撲世話人の株をとりたい繁蔵は、天保十三年七月二十七、八日の両日、須賀山村諏訪明神の境内で、

「角力道の始祖野見宿彌の碑を建立」という名目で花会を開いた。これをきき助五郎は

「ふん……御願いしますと頼みにくりゃあ、世話人の俺が勧進相撲を江戸から呼んでやるものを、花会の博奕で碑を建てようとは笑わしやあがる……」と自分では行かず、子分の州崎の政吉を代りに出してやった。

しかし諸国親分衆は、なんといっても相撲興行は最大の収益ゆえ、その始祖の碑を建てる花会とあっては放ってもおかれず、

「上州から、大前田英五郎親分さんご到着」

「同じく佐位郡の国定村の忠治親分おなり」

「奥州から遙々と信夫の常吉親分のおいで」

次々と大看板の貸元衆が集った。そして、

「角力道の御先祖さまの碑を建てる花会だというのに、この下総一国の相撲世話人の助五郎が手助けどころか、顔も出さねえとは、こりゃ何んてこった」といった談義が交わされた。

そこで戻ってきた政吉が口惜しがって、その模様を話すと、みるみる真っ赤になり、

「畜生ッ繁蔵のやつめ、おかげで比方とらはえれえ恥っかきだ」と助五郎は立腹した。

笹川繁蔵叩っ斬り

天保十五年甲辰八月六日の夜明け前。

飯岡の助五郎は、やはり相撲取り上りの博多川に四隻の舟を仕立てさせ、総員二十三名が笹川へ向った。そして一番手が州崎の政吉、二番手を堺屋与助以下各五名、三番手に石渡の孫次郎、四番手は野手の熊五郎以下各四名、後は助五郎が左右に従え、岸へつくと、

「それッ」とばかりに舟から飛び出した。

処が繁蔵方では、留五郎というのが飯岡より前もって知らせていたから、倍の五十名で待ち構えていた。しかも病気で寝ていた平手深喜（平手造酒）という浪人者まで、

「こういう時に役立てねば殻潰しだ」とばかり、葭草茂る河原へ伏せておいた。

これでは押しかけた飯岡方に勝味はない。

昼まで渡り合ったが、助五郎の一の子分の政吉は大小十八カ所の手傷をうけ即死。

永井の利兵衛や木の内の金治は、笹川の身内に囲まれて持ってゆかれて嬲り殺し。

その他、怪我した者は野手の熊五郎以下五名に及ぶ惨澹たる被害に比べ、繁蔵の方で討死したのは、何処の者とも判らぬ浪人者の平手深喜がただ一人きり。後は猫に引掻れた程の手傷で済んだから、勝閧をあげた。

さて助五郎は、この事を関八州代官手付の桑山盛助に届け、木刀と棒だけで乗り込んだ旨を訴えたが、抜刀した疑いがあるとして、

「手鎖り村預け」をいい渡されてしまった。

——映画やテレビではすぐ刀を抜くが、ご維新までは十手持ちの御上御用の者でも、抜刀は禁じられていて犯せば拘留されたのである。

つまり、鯉口三寸抜いたらば御家は断絶身は切腹というが、やたらに刀を抜かれては治安上取締れないので、抜刀罪は正式には厳しくて、御用聞きとはいえ助五郎は江戸伝馬牢送りとなった。

しかし遠山左衛門尉が天保十一年から、北町奉行をしていたので、こういう点は判りが早く、八月九月は牢に入れられていたが十月に釈放された。

さて飯岡一家はこれでようやく愁眉をひらいたものの、なにしろ身内が何人も殺されたり、片割になった上に、助五郎まで臭い飯をくってきたのだから、てんでに一同は、

「笹川一家の野郎共めッ、たとえ何処へ潜りこんで居やあがっても、きっと捕えたるぞ」

と固く誓いあった。中でも助五郎の倅の与助は無念のあまり姿をかえ、笹川へ殆んど毎日張りこんでいた。このため三年たって、

「もうぼつぼつ、ほとぼりもさめたろう」

と秘かに旅から戻ってきた繁蔵を、弘化四年七月四日夜。笹川河岸の葭草の茂みの中で刺し殺し、与助がその首をあげてしまった。

そして、その二年後。

勢力富五郎を東城村金比羅山へ追いこみ、これを村人まで加勢させ五百人で山狩した。

だから一人では富五郎もなんともならず、嘉永二年閏四月二十八日。山頂の崖の上で、

「てめらお上御威光を借りやあがって、薄汚ねえ真似をしやあがるな」と毒ずきつつ、無念そうに睨みつけつつ、持っていた鉄砲の曳金を足指でひいて己れの頸を撃ち、羊歯が絡んだ崖下へ真っ逆さまに転げ落ちて死んでしまった。

ついで翌月。十手持ちどうしは連絡があるから、成田に近い佐倉の新八からの伝達で、

「それッ」と草鞋をはいて出かけて行った飯岡一家は、亡き繁蔵の片腕といわれた清滝の佐吉が、成田不動を参拝して出てくる処を、「この野郎ッ」寄ってたかって取押えた。しかし首を叩っ斬ってしまっては、教えてくれた佐倉の新八への仁義を欠くから、「手柄にしておくんなせえやし」と縄つきで渡した。罪状はどうにでも、役人はでっちあげが出来るから新八は重罪人に仕立て江戸へ送った。

このため佐吉は五月二十三日に、江戸小塚原で張付にされ首を獄門にさらされた。

そして、助五郎は関八州出役関哇四郎より、

「其方儀身銭を切って、悪党共を捕えたは神妙なり」と青さし五貫文の褒美を頂いた。

そこで昭和四年八月に飯岡の人々は、

(おかみから賞められた郷土のえらい人)というので、土地の小学校の校長先生の選文で、大きな助五郎の石碑を、玉崎神社境内に建てて名所にしている。

強きをくじき

さて、これまで三田村鳶魚のものを別にすると、塚原渋柿園の「使客全伝」が、文芸叢書の一冊として大正二年に刊行された後、林和の

「実禄日本侠客伝」が昭和十年に刊行された。しかし、その内容たるや明治時代の「実禄小説」と大同小異であって、

「弱え者なら下手から出るが、強い奴なら向う面を張っ仆せ」といった、強きをくじき弱きを助ける趣向に、侠客なるものは、それらでは作られて書かれて居る。

しかし現実の実生活にあって、弱い者なら苛められるが、強い者へそんな事したら大変である。あべこべに伸されてしまう。が、こんな判り切ったことが、講談とはいえ無視されてしまって居るのか。どうしてそうした架空な物語が一般向けしだしたかといえば、

（一般大衆は常に苛められっ放しの弱者の立場にあったから、よし嘘でもいいからと、そうした救世主のような味方の出現を待ち、そうした心情を託する為に、男の中の男一匹とかスーパーマン式のものに、彼らの満されぬ飢餓感をいやしたのだろう）とも考えられるのである。

だからして広義では、旗本退屈男も水戸黄門もみな侠客という事になりかねない。しかしである。強きに逆らってまで敢然と、弱き大衆の味方をするといった冒険は、いざとなった際に、

「何を隠そう吾れこそは……」と正体をあかせば、相手がへえッと恐れ入るだけの、隠し権威というものが必要になる。そうでなければ三田村随筆にでてくるような、「金で張った侠の道」ともなるだろう。

これは大口屋暁雨が仲裁に入れば、どんな荒れた血を見ねば治まりそうもないような大喧嘩でも、ぴたりと鎮まるので、これが頗る評判になったが、ある人が不思議がって近くでよく眺めたら、「あいや、お待ちなせえ」と大口屋は押えつける時、己が掌へ小判を摑んで居て、向うへ押しつけて渡していた。

「へえッ、恐れ入りやした」と、そこで、どんな奴も小判には敵てぬから退散してしまい、大口屋は評

判になったものの、侠の道に、あまりに金をはりすぎたので、とうとう札差しの大金持だったのが零落してしまったと、それにはあって、

「侠とは、金を如何に綺麗に散ずるかと競い合う心意気だったようなものらしい」と、江戸時代の侠の説明を、三田村鳶魚はして居る。

つまり、強きをくじき弱きを助けるのは、何も自分が暴力を揮って対抗するのではなく、金といった隠れた力を出す事だというのである。

まあ常識的にもこれならば金さえあれば、いくらでも強きもくじけるし、弱きも助けられようというものだろう。

そこで金こそ、侠であるとされていた江戸時代にあっては、鼠小僧、稲妻小僧の類であっても、彼らが施しの為に盗みをなしたと話を作られると、「義侠」「義賊」と扱われたようである。

そして、この傾向は、その后も引き続き幕末にも及び、

「天保の飢饉に際して、国定村の忠次郎は私財を擲うって子前の百姓を救った」と、その点が国定忠次の人気となり、また彼の人間的な魅力にもなる。

だが、それから後の混乱時代には、もはや彼等が私財を投げ出したり、他から盗んできて撒いても追いつかない、悪性インフレ時代となったので、とてもの金では追いつかなくなり、

「侠」とい文字は、とうとうなくなって、唯の渡世人になってしまう。が、それでも享保年間に、朱鞘の公刀や十手を渡された道の者、つまり後世の香具師の元祖みたいな親分衆が、文久二年迄は主流派であったから、興行を主な収入源としつつ、その上に彼らには、「おかみ御威光」とよぶ隠し権威があっ

たからこそ俠もできた。

やくざの語源

また、この時代には各地関所の側に巣くった渡世人は、関所役人と結託していた。

なにしろその当時は軍用になる馬の出入りも厳しく、

「あか」「あお」といった駒札があって、その札さえあれば、馬方と認められ通れたから、道中手形のない無職者はこれを土地の親分の許へ借りにくる。

百文、二百文と、その者の貫目や風采で判断してから、駒札を貸してやれば、馬は引っぱって居なくても、これで関所は通れた。

つまり現金勝負の筈の鉄火場の渡世人を、金融業のごとく貸元とよぶのは、銭を貸すの意味ではなく、道中通行に入用な駒札を廻し貸するからの云いである。

さて夕刻になって関所は締るが、無宿者が持ってきた駒札は、これは貸値の十分の一見当で、関所役人の寝酒代となって戻される。だから二百文で貸しても六枚では一貫文の儲け。月にすれば莫大なもので、これが渡世の最大の収入源となり、そうした関所の縄張りのないのが、やむなく他に収入を求めたのが相撲のような興行だった。

だから天保水滸伝ばかりでなく、次郎長対保下田の久六の殺し合いも原因はこれで、こうした興行権の奪い合いは各地で物凄くあった。現代では取締りに追い詰められた暴力団が資金源に困って、興行に手を出すような見方をするが、これはなんといっても昔からの伝統的なものである。

なのに股旅小説の類にかかると、いつも賭場の縄張り争いばかりして居るようになって居る。が前述したように文久二年迄は世襲制で、その縄張りは決っていたからそういう事はなく、また映画館のように、賭場は定打ちにしていたからといっても、とても儲かる程には客は来なかったものである。

つまり高（荒）神山のように祭礼の何日間かで、千両もの寺銭の上りのあるような所は別だが、一般にはそうそう儲かるような所はなかったらしい。

だから高神山を取り返えそうと神戸の長吉が、吉良の仁吉や大政らと安濃徳へ斬りこんだ例はあるが、他には純粋な縄張りの奪い合いというのは、小説ではあっても実際にはなかったようである。

これも祭礼などの当てこみの高市は、香具師の縄張りゆえ、文久二年前も後も、がっちり彼らに押えられていたから、香具師以外の者では手が出せなかったせいではあるまいか。

なにしろ香具師の一家一門の組織は、全国的な繋りを有するものだから、文久二年以降の新興やくざが、それを個人的にどうこうするのは無理だったのでもあろう。

さて文久二年に、それまでの博徒が香具師に還元した際、彼らが神農さまをお祀りしながら、まず始めた稼業は、御薬草売りとガマの油薬だったが、古式にのっとってしだしたのが、「宝引き」である。

これは目印のついた藁しべを五本か十本の中へ混ぜ、それを引かせて当ったら褒美、とする後年のデンスケの先祖みたいな代物ではあるが、これでなかなか由緒正しいものなのである。

「やくざの語源は八九三」などと今日では誤ってとくが、それはオイチョカブの流行した時点からして考えても判ることだが、幕末から明治の所産であるが、宝引というのは、始ったのがもっと古い。

「毛利家記・吉田籠城覚書」にも、

「陣中の無聊の為ならむか、足軽頭の敷く役座莚の藁しべを引き合いして、その長短に銭をかけ、はては殺傷に及ぶ者あり」とある。

戦国時代の足軽は地べたに直接寝たり、板間の上に寝転ったりしていたらしいが、その頭分にだけは、寝莫莚として莚が支給されていて、それを役座とよんでいたのが、これで判る。

そして役座から藁しべを引っぱり合いをし抜けば、痛みがでるのは日にみえた事ゆえ、「損料」として賭金の何割かを莚の下に入れ、それを役座への付け届、つまり黙認料にしていたらしい。

だから、こうした古文献からすると、やくざはオイチョカブの八九三よりも、戦国時代の、「役座」から出ている方が正しくはなかろうか。なにしろ、この宝引きから、「褒美」という和製漢語が出来たのだし、「三河風土記」をみても、「宝引きにあきたるにや賽ころいじりをす。もとより真物（ほんもの）は入手できざれば、泥つき大根の皮をそぎ、身を四角に刻みて矢立にて墨入れをなし、士卒博奕に余念なし」などとあるし、後になって、つまり現代でも、

「味噌汁の実に大根を賽の目に切りまして……」

とテレビ料理の講師が口にしている処をみると、賽ころ賭博も、役座の頃から始って全国的に広がったものらしい。

遊俠（ゆうきょう）仁俠群像（にんきょうぐんぞう）

さて戦国時代の足軽やその組頭である役座は、天下泰平の江戸期になってから、どうなったであろうか。

外様大名が次々とお取潰しとなって、浪人が巷に溢れたのは有名な話だが、名の通った武士でさえ就職できぬ時代に、足軽や組頭に再雇用の口がおいそれとかかるわけはない。

そこで地方では食えぬから江戸へと、みな集ってきたらしいが、ここでも臨時の勤めはあったろうが、それぞれ定着できるような仕事口の落着先はなかったらしい。

が幸い新しい都市作りをしていた江戸では、日傭人足の需要もあったし、多くの家臣をつれて来ていない大名達の、臨時抱えの仕事口もあった。そこで、かつて役座をしていた者が始めだしたのが、割元とか口入れ屋といった稼業なのである。

そして彼らが単なる私設職業安定所に止らず、自分の処へ人手を揃えておいた関係上、この連中の間から俠客とか仁俠、と呼ばれる手合いが、やがては生れたらしい。

つまり花川戸助六、夢の市郎兵衛、金看板の甚九郎といったような、伝説上の俠客や、幡随院長兵衛のごときは、現在でいうならば、各会社の組合の委員長だったり、又は総評あたりの議長といった処ではあるまいかと想われる。

だが、町奴といった呼び方や考え方は、明治になってルソーの影響によって生れ、大正デモクラシーで育て上げられたものであるらしい。そして、また作られた偶像といえば、芝居で有名な助六もそれに当ろう。新地弾左衛門家六人の手代衆の内で、伝馬町の牢掛りだった山田浅右は、首斬り浅右として有名だが、芝居その他興行を係りにしていたのは代々、屋形助六とよぶ世襲名の者で、これが浅草花川戸に住っていた。

だから文献はないが、座付作者が係りの機嫌とりに、住居と名を結びつけて、儲け役の花川戸助六な

るものを作り、それが芝居で当ったから、講談などで、もっともらしく故事来歴をつけ加えたものを、ひねり出して今日のような虚像ができ上ったものだろう。

しかし、嘘から出たまことというが、夢の市郎兵衛の中にでてくる処の、「寛永御前試合」の話は本当である。俗説のように、千代田城吹上御苑で将軍家光の面前の剣豪刀豪が争ったという方は真っ赤な作り話だが、京の御所で明正女帝の御前で、両大関が相撲をとって、その時から、「日の下開山、横綱」の薄鼠女房奉書が、下し賜われたのは、「皇運紹運録」にも出ている。

が、このとき。明正帝のおつきの女官は、その御生母が徳川秀忠の娘の和子の方ゆえ、みな関東女。だから関東の明石関が横綱になったのを歓んで、三箇の間という処で東下りの相撲取りの慰労会をしたのはよいが、酔いすぎてしまって、多勢の関東女たちが相撲取りのまわしを取らせた。これが遊里のそうした言葉の語因であると、真偽は不明だが、「芳軒閑話」という文政時代の随筆集にはでている。

しかし、それには明石関のマネージャー格をつとめた事になって居る、「夢の市郎兵衛」の名は、それにも現れてこない。

だから花川戸助六と、芝居の「め組の喧嘩」で名をひろめた金看板甚九郎らの三人は、相当に苦労して調べ廻ったが、どうも講談本の類しかなくて、まともな裏付け資料は入手できなかった。

といって有名な三人を脱してしまっては、「江戸遊侠伝」の名にそむく恐れもあるので、フィクション的人物を尤(もっと)もらしく書く愚はさけ、フィクションはフィクションらしい書き方で、この三人だけは非実在人物としての扱いをし別な書き方を故意にしたが、他は曲りなりにも大江戸八百八町に、その名を轟かせた任侠の人々の群像である。

江戸遊侠伝

（検印省略）

定価　400円

昭和46年4月25日　初版

著者　八切止夫

発行者　松山茂

印刷所　凸版印刷株式会社

発行所　報知新聞社

郵便番号　102

東京都千代田区平河町2-29

振替　東京 195845

© T. YAGIRI

落丁・乱丁本はおとりかえします

時代長編 忍びの卍 山田風太郎 300円
時代長編 忍法封印 山田風太郎 350円
時代長編 侍の灯 山手樹一郎 400円
時代長編 浪人八景 山手樹一郎 380円
時代長編 江戸の虹 山手樹一郎 350円
時代長編 さむらい一匹 南條範夫 380円
時代小説 毒婦伝奇 柴田錬三郎 280円
時代長編 武士道地獄 藤原審爾 350円
傑作小説 新宿警察 藤原審爾 380円
時代長編 新宿広場 藤原審爾 350円

傑作小説 女類妻族 藤原審爾 300円
長編小説 恐喝こそわが人生 藤原審爾 380円
長編推理 けものの眠り 菊村到 280円
長編推理 八人目の敵 菊村到 300円
長編推理 風は故郷に向う 三好徹 340円
長編推理 閃光の遺産 三好徹 300円
傑作推理 賭ける 三好徹 280円
長編推理 暗い道 コンサルタント殺人事件 樹下太郎 300円
痛快長編 颯爽 樹下太郎 480円
長編小説 どまぐれ一代 高原弘吉 350円

傑作小説 青い群島 藤島泰輔 300円
長編小説 大安吉日 源氏鶏太 300円
長編小説 かえらざる故郷 丹羽文雄 400円
長編小説 嵐来たり去る 富田常雄 380円
傑作小説 女豹 梶山季之 340円
異色長編 花釵紋 新橋遊吉 300円
長編小説 背徳の勝負師 新橋遊吉 300円
長編小説 叛逆の勝負師 新橋遊吉 350円
痛快長編 競馬部落 新橋遊吉 350円
現代長編 競馬行脚 新橋遊吉 400円

長編小説 白昼堂々 結城昌治 300円
長編推理 みれんな刑事 多岐川恭 280円
長編推理 盗まれた影 佐野洋 300円
長編推理 再婚旅行 佐野洋 300円
長編推理 赤い熱い海 佐野洋 300円
異色小説 牌の魔術師 阿佐田哲也 300円
長編小説 風神雷神 富田常雄 350円
長編推理 蜃気楼の帯 戸川昌子 300円
長編推理 総理大臣秘書 佐賀潜 300円
長編小説 砂漠の太陽 黒岩重吾 480円

長編劇画 モーレツ！巨人 梶原一騎作 石井いさみ画 300円

長編小説 空手風雲録 牧野吉晴 350円

長編小説 空手繚乱 牧野吉晴 350円

長編小説 飛燕合気道 牧野吉晴 330円

時代長編 天保紅小判 山手樹一郎 350円

時代長編 暁の群像 南條範夫 450円

時代長編 武魂絵巻 南條範夫 450円

雀豪列伝 天和無宿 阿佐田哲也 380円

傑作推理 憎悪の鎖 結城昌治 360円

柴錬捕物 岡っ引どぶ 柴田錬三郎 550円

現代長編 競馬番外地 新橋遊吉 450円

時代長編 天狗往来 富田常雄 450円

時代小説 鶴千代血笑 早乙女貢 350円

時代長編 風流使者 五味康祐 450円

時代傑作 江戸遊俠伝 八切止夫 400円